

あさひの鎧

国枝史郎

青空文庫

観世絳りの人馬

「飛天夜叉ひてんやしや、飛天夜叉！」

「若い女だということだね」

「いやいや男だということだ」

「ナーニ一人の名ではなくて、団体の名だということだ」

「飛天夜叉組ってやつか」

「術を使うっていうじゃアないか」

「摩訶まか不思議の妖術をね」

「官方であることには疑がないな」

「武家方をミシミシやつつけている」

「何がいったい目的なんだろう？」

「大盗賊おおどろぼうだということだが」

「馬鹿を云え、勤王の士だよ」

「武家方が宮方を圧迫して、公卿衆や坊様を捕縛しては、拷問をしたり殺したりする。そこで捕縛をされないように、宮方の人々を逃がしてやったり、捕えられた人を取り返したり、いろいろやるということだ」

正中年間から延元年間へかけて飛天夜叉の噂は大変であった。

昭和年間から推算すると、その時代はおよそ六百年前で、後醍醐天皇、大塔宮、竹園生の御方々は、申すもかしこき極みであり、楠木正成、新田義貞、名和長年というような、南朝方の勤王の士や、北条高時、足利尊氏、これら逆臣の者どもが、歴史の上に華やかに、名を連ねていた時代なのである。

そういう時代のある一日——詳しくいえば正中元年八月××日の真昼時に、土岐小次郎という若い武士が、洛外嵯峨の草の上に、ボンヤリとして坐っていた。

近くの丘には櫨の叢が、のように紅葉し、その裾には野菊や竜胆の花が、秋の陽を浴びて咲いていた。

不意に横から声がかかった。

「小次郎様愉快ですか？」

小次郎は吃驚してそつちを見た。

二十三四の美しい女が、いつの間にもどこから来たものか、彼の横に坐っていた。

「愉快でないです」

と小次郎は云った。

「それほどの美貌を持ちながら、愉快でないとは変ですな」

「何を厭なことをおっしゃるんです」

「年はたしか二十歳でしたな」

「どうしてそんなことをご存知なので？」

「妾わたしは何んでも知っているのです」

その女は微妙に笑った。

顔の筋肉は笑っているが、眼だけは決して笑っていないと、そう云ったような笑い方なのである。

「美濃の名族土岐藏くらんど 人頼春、このお方の一族で、学問も武芸もお出来になるが、美貌が崇たつて身がもてない、それに気が弱くて感情ばかり劇はげしい、その上に徹底した放浪性の持ち主、そこで何をしても満足しない。することもなくボンヤリしておられる。——というのがあなたのお身の上でしょうね」

「どうしてそんなことまでご存知なのですか？」

「わたしは何んでも知っていますのです」

またその女は例の笑いを笑った。

「その美貌をわたしに売ってください」

「何んですって！ 何をおっしゃるんです」

「それをわたしに使わせてください」

「……………」

「あなたを仕込んであげましょう」

「あなたはいったい誰なんです」

「一芸のある人間や、特色のある人間を集め、仕込んでやるといふ道楽を持った、そういう女なのでございますの」

「でもどういってお方なのですか？」

「こんなことの出来る人間なのですよ」

云い云いその女は懐中へ手を入れた。

小次郎は思わず首をちぢめた。

何か飛んでもない恐ろしいものでも引っぱり出されはしないだろうか、そう思ったからである。

女の取り出したのは一枚の紙で、引き裂くと観世かんぜよ縊りを縊りだした。

縊りが出来ると器用な手つきで、馬の形をつくり出した。

出来あがったところで草の上へ投げた。

と、どうだろう観世縊りの馬が、四足を動かして駈け出したではないか。

「あれあれ」

と小次郎は頓とんきよう狂に叫んだ。

「観世縊りの馬が走り出した。これは不思議だ、生きて動き廻る！」

女は今度は観世縊りで、人間の形をこしらえた。

そうしてそれを抛ほうりだした。

観世縊りの人間は走る馬を追って、自分も一散に走って行き、追いつくとその背へ飛び

乗った。

「あれあれ」

と小次郎はまた叫んだ。

「観世縫りの人間が動き出した。これは凄い！ 魔法だ！ 幻術だ！」

女は次々に馬と人間とを、無数に観世縫りでこしらえた。

みんな生きて動き出した。

丈たけのびた雑草の緑にまじって、萩だの女郎花おみなえしだの桔梗ききょうだの、秋草の花が咲いてい

る、飛蝗ばつたや蝨きりぎりすや馬追うまおいなどが、花や葉を分けて飛び刎はねている。

そういう地面を戦場にして、その観世縫りの人馬の群れは、やがて合戦をはじめました。

「こつちが宮方京師方で、こつちが武家方鎌倉方ですの。——さあどつちが勝つことやら」
女はそう云って指さした。

観世縫りの人馬は討ちつ討たれつ、斬りつ斬られつ戦いつづけた。

一間四方ほどの戦場で、小人国の武士たちが、音のない戦いをしているのである。

と、女は手を延ばし、無造作に戦場を一撫でした。

すると人馬は仆たおれてしまった。

その人馬を女は片手で集め掌てのひらの中で一握りし、また無造作に地上へ投げた。

一握りほどの紙の束が、草の上のところがついているばかりであった。

「一切空ね」

と女は云つて、小次郎の顔を覗くように見たが、

「こういうことの出来る女なのですよ」

「ド、どなた様でござりまするかな？」

小次郎はしたたか怯おびやかされたので、いくらか顫ふるえを持った声で、そう慇懃いんぎんに問いを發した。

「飛天夜叉なのよ。飛天夜叉の中の一人！ ……さあ名は桂かつらこ子とでも云つて置きましょう」

「……………」

小次郎は刺されたように飛び上がった。

がすぐに膝を揃えて坐り、まぶしそうに桂子の顔を見た。

素晴らしい奇蹟的の飛天夜叉の噂を、以前から彼も聞いていたからであつた。

京都二条の外れにあつて、宏大な古ふる館やかたが立っていた。

その周囲をかこんでいるのは、榎えのきや槻つきや朴ほの巨木で、数百年を閱けみしているらしかった。門はあつたが崩れていた。

築地も荒れて崩れていた。

それは桂子の館であった。

すっかり桂子の家来のようになって、——むしろ寵愛のお小姓のようになって、桂子のお供をして小次郎が、その館へ行つた時には、日が暮れて夜になっていた。

二人が玄関へかかった時、可愛らしい美しい十六ばかりの娘が、屋内から出て来て二人を迎えた。

と、その娘は小次郎を見たが、やにわに桂子へ縋りつき、声を上げて泣き出した。

「浮藻や、どうしたの、え、浮藻や？」

桂子は驚いてその娘へ云つた。

妖怪屋敷

浮藻は顔を桂子の胸へ埋め、しゃくり上げながら呟くように云つた。

「こわいの、妾、あのお方が！」

「こわい？ どうして？ 何故こわいの？」

「お姉様、怖いもの、あのお方が！」

「そんなことはないよ、そんなことはないよ。……あのお方あんなに綺麗きれいじゃアないか」

「ええ、そうですね、お綺麗ですわ。……ですから怖いもの。……綺麗過ぎますわ」

そう云つて浮藻は顔を横にし、額ひたいを姉の胸へ着けたままで、小次郎の方を盗み見た。

「ああなるほど」

と桂子は頷うなずき、改めて小次郎を眺めやった。

玄関に置いてある燈とも火しびに照らされ、少しくテレ、随分当惑し、ぼんやり立っている小

次郎の姿は——わけても容貌の美しさは、何んと形容してよいか、形容を絶したものがあつた。

もちろん多少田舎いなかびていた。

がそれは山から掘り出し、まだ磨きをかけないところの、宝玉のそれに等しいもので、その初うい々ういしさが女人の心を、かえつて強く引くらしかった。

ローズベリー卿夫人が夜会の席で、はじめて詩人バイロン卿に、紹介された時相手の容貌が、あまりに美しく気高かつたので、咽喉のどに瘤こぶでも出来たかのように、物が云えなかつたということである。

周の穆王ぼくおうが美少年慈童じじどうの、紅玉を薄紙で包んだような、玲瓏れいろうとした容貌を眺めた時、後室三千の美姫麗人びきれいじんが、芥あくたのように見えたということである。

小次郎の美貌もそうなのであった。

で、浮藻は泣き出したのであった。

「そうねえ」

と桂子は眉をひそめて云った。

「小次郎は少しばかり綺麗すぎるねえ。……でもそれが取り柄なんだよ。……そんなに小次郎が美しいから、妾わたしは連れて来たのだよ。……役立てることがあろうよ。……でも充分仕込まなけりやアならない。……一磨きも二磨きも磨きをかけなけりやア」

間もなく小次郎は姉妹きょうだいに連れられ、館の奥へ通って行った。

驚くべき光景がそこにあつた。

見霞みかすむばかりの広い部屋で、二十人あまりの男や女が、立ったり坐ったり飛んだり刎ねたり、泣いたり喚わめいたり、笑ったり吼ほえたり、歌ったり舞ったりしているではないか。

眉も眼も口もペロリと下がった、いかにも悲しそうな顔をした、四十あまりのしなびた男が、涙を流し眼を手で蔽おほい、ウロウロと部屋を歩きながら、

「お悲しや何んとしようぞ。ご主人は死なれましてござります。永い永いご病気の果てに、死なれます。……おとおお何んとご生前には、ご親切で情深こうございましたことか！ ……あのご主人様に死なれましては、明日から私はどうしようぞ。……食う事が出来ない。いる所がない。……首でもくくって死ぬとしようか。川へはまって死ぬとしようか。……おとおお、どうしようぞ！」

こう云いながら泣いていた。

と、部屋の中央に、弓の折れを鞭むちのようにひっさげた、五十あまりの逞たくましい、頤あごひげ髯ひげを生やした巨大な男が、両足をふんばり立っていたが、

「おいおい東吾とうご、まずいなアそれじゃアちつとも実感が出ない。泣いているように聞こえないじゃアないか。……お芝居じみていて空々しいや。『お悲しや何んとしようぞ！』この云い出しからゾツとしないなア。こうもう少才し憐れっぽい口調で、しんみりと下から出さなけりやア嘘だ。聞いていなよ、こうやるんだ」

こう云いながらやり出した。

「『おとお、悲アしや、何アんしよオぞオ——』どうだこうやると実感的になる。いかにも本当に悲しそうになる。さてそれからその後だが、どうもこいつもうまくなかった。ざ

つとこんなようにやるんだなア、『ご主人様は——、ア——ア——ア——、死なれましてエ——、エ——エ——エ——、ござりまする——、ウ——ウ——ウ——』こう永アく引つぱるのよ。するといかにも悲しそうになる。さあさあもう一度練習練習！」

そうかと思うと部屋の隅では、二十一、二の小綺麗な女が、鶏とりの啼き声を練習していた。

「コケツコツコ——、コツコツコ——。……トテツコツコ——、コツコツコ——。……」

それから両手で股あたの辺りを、

「パタパタパタ！　パタパタパタ！」

羽搏ばたきのようにひつ叩き、

「コツコツコ——、トテコ——ヨ——ツ」

「おいおい薬くすりこ子、何なんてえ態ごまだ」

と、弓の折れの鞭を持った例の男が、

「それじゃ近所のどんな鶏だつて、騙だまされて関ときなんかつくりやアしないよ。……そいつア

鶏の啼き声じゃアない。人間が鶏の啼き声を真ま似ねて、吼なえているとしか思われやアしない」

「だって小父さんその通りだもの」

と、薬子も負けてはいなかった。

「わたし鶏の真似をしているんですよ」

「鶏の真似には違えねえが、真似になつちやアいけねえんだ」

「だって妾鶏の真似をしているんですもの」

「くだい！」

と男は弓の折れで、薬子の肩をひっぱたいた。

「痛いヨ——、あんあんあん」

「おい泣き男泣き男！」

と、弓の折れの男は振り返つて云つた。

「あんあんあんという薬子の泣き声、こいつこそ本当の泣き声だ、参考にしろ参考にしろ」

「あんあんあん」

と泣き男は、すぐに薬子の泣き声を真似た。

そうかと思うと部屋のひとところで、三十がらみの元気のよい男が、笑い上戸じょうごの練習を

していた。

「アツハツハツ、こりやおかしい。執権しつけん高時ともあろうお方が、田楽でんがくが好きで田楽を

舞い、アツハツハツ、ヘツヘツヘツ、それを天狗にからかわれ、天狗などとは夢にも知ら

ず、新座本座の田楽法師が、伺候したものと思ひ込み、舞つて舞い仆れたそうな。エツヘツヘツ、イツヒツヒツ、クツ、クツクツ、こりやたまらぬ」

この広大な部屋のかなた、三間ほど距てた奥の部屋に、燐火を想わせる蒼い燈火が、細々と一筋ともつていたが、その周囲を廻りながら、胸へ血のように赤い色をつけ、髪を解いて肩へ振りかけ、白衣の裾を床の上に敷いた、幽霊姿の瘦せた女が、

「怨めしや判官殿、わらわに恋のわずらいさせ、想いをつのらせ死なせしを、そなたには何んの苦にもせで、ほかに増す花の女をつくり、わらわの供養も仏事も空に、日夜にお通い遊ばすとは。怨みあるものかないものか、思い知らせしておくべきや、祟るぞえ祟るぞえ！ 怨めしや判官殿！」

と、幽霊の稽古をやっていた。

広大なこの部屋のずつと外れは、縁越しの広庭となっていたが、そこには二人の壮漢がいて、二頭の猛犬の手綱を握り、向かい合つて意気込んでいた。

「相模入道を食い殺せ！」

「ソレ宮方を噛み仆せ！」

二頭の猛犬は猛烈と吼えた。

「ウオ——ッ」

「ウオ——ッ」

「ワ、ワ、ワ、ワ——ッ！」

鬪犬の稽古をしているのであった。

（これはいつたい何んということだ！ 妖怪屋敷だ！ 化物部屋だ！）

小次郎は茫然と佇んで、四辺の光景を悪夢かのように眺めた。

桂子も浮藻も彼を置き去って、奥の部屋の方へ行つたことにさえ、彼は全く気づかなかつた。

かつた。

と、一人の二十八、九の男が、気安そうに彼の側へやつて来たが、

「新米殿、ひと稽古たのむ」

こう云うとドンと衝突した。

その男が肩で小次郎の胸を、正面からドンと突いたのであった。

「あッ、乱暴な何をする！」

少し怒って小次郎は怒鳴った。

「稽古じゃ、アッハッハッ、怒ってはいけない」

「稽古？ 稽古とは？ 何んの稽古？」

「何か紛失物ふんじつものありませぬかな？」

「紛失物ふんじつもの？ 何をつまらない」

そう云つたものの不安になつて、小次郎は懐中ふとこころを探つてみた。

小金を入れた小袋が、懐中からいつか失われていた。

「ない！ 金が！ 金を入れた袋が！」

「すなわちこれでござろうがな」

その男は小次郎の鼻の先で、皮の小袋を振つてみせた。

「それじゃ！ さては……」

「掠すりましたよ」

「はあ」

「我が身掠すりましたよ」

「……………」

「密書があれば密書を掠る。小柄ほしければ小柄を掠る」

「はあ」

「我が身は掏摸すりての係りでしたな」

「はあ」

「ほかにもいろいろ係りの人があります」

「はあ」

「一日に五十里走る男」

「はあ」

「どのような堅牢の錠前であろうと、針一本で開ける男」

「はあ」

「細作かんじやの名手、放火つけびの上手、笛の名人、寝首搔うさきの巧者、熊坂くまさか長範ちやうはん、磨針すりはり太郎たろう、
壬生みぶの小猿うさこに上越うさこすほどの、大泥棒おおいぼろもおりまするじゃ」

「はあ」

「で、我らは飛天夜叉てんやじゃ」

「あッ、飛天夜叉！ おおそうそう！ 飛天夜叉の方々に相違ない。私は同じ飛天夜叉の、
桂子きこ様に召ししつれられて……」

「叱し！」

と男はたしなめるように云った。

「桂子様などと仰せられてはならぬ」

「では、ナ、なんと申しますので？」

「姫君様よ、お解りかな」

「姫様君、はあさようで」

「若君様と仰せられてもよろしい」

「若君様？ では男で？」

「男になれる場合もある」

「はあ」

「老婆おばあさんになられる場合もある」

「老婆に？」

「怨敵おんてき『鬼火の姥うば』などを相手に競争される場合には、老婆姿にもなられるのじや」

「はあ」

「老おじいさん爺おやになられる場合もある」

「やれやれ」

「やれやれとも」

「ばけもの化物のようで」

「さよう」

「で、あのお方様が飛天夜叉の、お頭かしらなのでござりまするかな？」

「疑問じゃ」

「はい？」

「そうらしくもあればそうらしくもない」

「はてね」

「さよう」

「……………」

「万事はてねさ」

小次郎は家へ帰りたくなった。

無礼講

ちようどこの頃のことであつた、洛外栗栖野小野の里の、日野資朝卿の別館で、無礼講の宴が行われるという、そういう噂が立つていた。

噂ばかりでなくて事実であつた。

さてある夜のことであつたが、その夜も無礼講が行われていた。

銀燭台に身を背けて、夜食をベラベラ食べているのは、大原の住職法印良忠で、法衣はつけず白衣ばかりの丸腰、禿げ頭を光からせていた。

ムツチリとした白い素肌へ、編一枚着たばかりの、だから体がまると見えている、そういう白拍子と戯むれているのは、右少弁藤原俊基であり、縁先に立つて庭を見ながら、これも素肌に編一枚の、遊君に何か囁いているのは、多治見ノ四郎二郎国長であり、禿二、三人を相手にして、双六の骰子を振っているのは土岐十郎頼兼であり、茶筌頭に烏帽子も冠らず、胸もとをはだけて汗をかき、なお大盃をあおっているのは、尹大納言師賢であり、それと向かい合つて大口を開き、唐詩らしいものを吟じているのは、四条中納言隆資であり、その横で素肌に編一重の、同じ姿の白拍子や遊君を三人がところ引きつけて、

「太液の芙蓉新たに水を出づ……という文句を知っているかな？ ナニ知らぬ、無学の

奴らじゃ！ 白くて柔らかくて艶つやがあつて、白芙蓉の花のように見える肌、そちたちの肌は白芙蓉じゃ、それが水のように透けている編、それ一枚につつまれている。……そこでそれ太液の芙蓉新たに水を出づさ。アツハハ、わかつたかな」

と、結構な説明をやっているのは、洞院とういん左衛門督さゑもんのかみさねよ実世であつた。

聖護院せいご庁の法眼げん玄基げんきと、伊達だて三位房游雅みぼうゆうがとは、『鬼火の姥』と呼ばれているところの、不思議な女修験者のことで、ひそひそ話を交わしていた。

「八百年生きているということだ」

「百八十年だということだござる」

「一見すると六十歳ぐらいじゃ」

「髪の毛が卵の花のように真っ白でござるな」

「加持かじき祈とつ禱とつがうまいそうじゃな」

「七尺もあろうかと思われるような身長たけの、しかも糸のように痩せている体で、あの道の方は凄すじいということだ」

「美童を好むということじゃな」

「われらが美女を好むようにな」

「お互いあの道の方は凄うござるて」

「眷族けんぞくにも変なやつが多いそうじゃ」

「山伏、修験者、巫女みこ、官主かんなぎ、こういう手合いが従っているそうじゃ」

そうかと思うとこの大広間の、裏庭へ向いた縁の近くで、足助次郎重成あすけ しげなりと、川越播磨守まのかみとが下帯一つで、無粋な相撲すねずもうを取っていた。

この間に狼藉ろうぜきとして取りちらされてあるのは、盃盤であり瓶子へいしであり、楽器であり筆墨であった。

そうして楣間びかんに掲げてあるのは『無礼講』と大書した額であった。

一人憂鬱な顔をして、公卿くけと僧侶と武士と遊女との、乱痴気騒ぎを眺めながら、廊に近い席に坐っているのは、土岐頼兼の一族で、清和源氏の流れを汲んだ、北面の武士の一方の将、土岐蔵人頼春であった。

まだ若く美男であったが、神経質の眼で心おちつかないように、人から人へと眼を移していた。

同族の十郎頼兼や、多治見ノ四郎二郎に口説くどかれて、北条氏調伏、六波羅征ろくはらせめ、関東退治のこの陰謀の中へ、その一員として加わって、無礼講へは出たものの、まだ決心がつい

ていなのであつた。

無礼講の催しを思い立つたのは、日野中納言資朝卿なのであつた。

卿は味方の公卿や僧侶や、武士達の氣心を知ろうとし、そうして一方には六波羅方や、六波羅に心を寄せている諸臣の、猜疑さいぎの眼をたくみに眩ませて、自由に六波羅征伐や、北条氏討伐はかりごとの計を語ろう。——そういう目的から乱痴氣さわぎの、この無礼講を試みたのであつた。

反間苦肉の計なのであり、だから一見あさましく見える乱痴氣さわぎの最中においても、真面目まじめな計画的の秘密話が、とり交わされているのであつた。

錦織にしじりの判官代が、褌すずし一枚の若い白拍子を、横抱きにして躍り出したとたん、瓶子へいしが仆れて土器かわらけを割つた。

「やれ大変、割れたわ割れたわ」

と、不めでたい前徴でも見たかのように、こう云つて判官代は額を叩いた。

と、側にいた赤松則祐のりすけが、

「めでとうござる、めでとうござる、六波羅殿の氏は平氏、平氏は瓶氏に通じます。その瓶子が仆れまして、土器が六つに割れましたわ、六つにかたどる六波羅殿が、割れて亡

びるといふ前徴で」

こう云つてすかさずバツを合わせた。

「いかさまめでたい、これはめでたい」

ドツと人々は声をあげて笑つた。

と、その陽気の席を遁がれて、土岐頼春は庭へ出た。

定まらぬ心を持ちながら、そういう席に連らなつていることが、堪えがたくなつて来たからであつた。

秋の夜風は酔つた頬に涼しく、ほてつた体にさわやかだつた。

桜や松や梧桐ごせうや梅や、そういう植え込みの間々に、泉水、土橋、築山、亭ちん、別殿などが

しつらえてあり、ほそぼそと灯された石燈籠の燈ひに、盛りの萩の白い花が、波頭なみがしらのよ

うにおぼめて見え、いかにも高雅につくられてある後苑こうえん——そこを頼春はさまよつて行つた。

(お味方すべきか、辞退すべきか?)

なお迷つているのであつた。

(道理よりすれば、禁裡方に、お味方すべきが至当ではあるが……妻が……六波羅殿の……)

…齋藤殿の……)

このことを思えば迷うのであつた。

六波羅探題たんだいの奉行職、齋藤太郎左衛門利行の娘が、かれ頼春の妻なのであつた。

添つて三年経つていた。

美女と美男との夫婦めおとであり、人が羨うらやんで噂するほどの、まことに仲のよい夫婦でもあつた。

(禁裡様方にお味方すれば、六波羅方に背かねばならぬ。……舅しゅうとの齋藤太郎左衛門殿にも……)

このことが彼には苦痛なのであつた。

(禁裡様方お勝ちになれば、六波羅殿は亡ぼされ、太郎左衛門殿もお討ち死に……どんなに女房は悲しむだろう。……お味方破れば我が身は死ぬ。……どんなに女房は嘆くだろう。……勝つても負けても辛い身の上だ。いつそこのような計画の中へ、わしを引き入れてくれなかつたら。……)

自分を口説いて厭いや応おうなしに、このような計画の中へ引き入れた、土岐十郎頼兼や、多治見ノ四郎二郎国長が、いまさら怨めしく思われるのであつた。

鹿の鳴き声が聞こえて来た。

露を踏み、萩を分け、妻を恋い、野の中に、鳴いている鹿の声であった。

(寂しいなあ)

とつくづく思った。

と、その時足音がして、

「兄上」

という声がうしろからした。

頼春は驚いて振り返った。

「なんだ、お前か、小次郎ではないか」

うしろに長閑のどかそうに立っていたのは、頼春にとってはまた従兄弟いとこにあたる、土岐小次郎

の姿であった。

「はい、私でございます」

「なんと思つてこんな所へ……」

「供待ちにお待ちしておりましたが、お館の中があまりに賑やか、そこで羨ましく存じまして、後苑の中へまぎれ入り、今までこつそりご酒宴のご様子を……」

「不躰^{ぶしつ}け千万、何んということだ」

「綺麗な白拍子がぎつと二十人、素肌^{すずし}へ褌^{すずし}一枚を着て」

「馬鹿な奴だ、何を云うか」

「尹^{いん}の大納言様が茶筌^{さしぬき}鬚を散らし、指貫^{さしぬき}一つで道化した踊りを、たった今しがた踊りましたつけ……」

「アツハハ、とんだものを見たなあ」

「兄上お一人がお寂しそうに、取り澄ましておいでなさいましたが、水に油でございましてよ」

小次郎は頼春とはまた従兄弟なのであったが、きわめて親しい仲だったので、兄上兄上と呼んでいた。

そうして頼春と同じ館に、兄弟のようにして住んでいた。

身内であつて主従関係——いわば居^い候^{そうろう}の関係なのであった。

で、この夜もこの館まで、頼春の従者として来たのであった。

「小次郎」

とにわか^いに厳^{いか}めしく、頼春は言つて小次郎を見詰めた。

「云おう云おうと思っていたが、云う機会がなくて今日まで過ぎしたが、その方この頃館を忍び出で、二条あたりの怪しげな館へ、しげしげ通うということだが……」

「はい、通いますでございます」

「さてはその方例によつて、たわれ女などにうつつを抜かし……」

「違いまする、ちと違いまする」

「なんの違うことがあるものか」

「ヒンヒン、ワンワン、ニヤンニヤン、コケコッコ——」

「ナ、なんだ、いったいそれは!!」

「という稽古なども致しますので」

「たわけめ、こやつ、気が狂ったか」

「ヒンヒンというのは馬の啼き声、ワンワンというのは犬の啼き声、ニヤンニヤンというのは猫の啼き声、コケコッコと申しますのは、にわとり鶏の啼き声にございます」

「いいかげんにしろ、つまらないことを」

「こいつを一続きにいたしますと、ヒンヒンワンワン……」

「そちの方が酒に酔っているようじゃ」

「という稽古などもいたしますので。……そうかと思うと幽霊女が、『怨めしや判官殿……』」

「小次郎！」

「という稽古もいたします」

「稽古稽古とそちは申すが……」

「この小次郎に至りますると、いかにして女をたらすべきかきか」はママ？ ……」

「立ち去れ！」

「という稽古をいたしております。——年増女に対しましては……」

「さてさて困った奴だのう」

「まずこのような色眼を使い……」

「薄気味の悪い男ではあるぞ」

「次にやんわりと手を握り……」

「よせ、馬鹿者、わしの手などを……」

「次には大胆に頬を寄せ……」

「ホホウ、そうか頬を寄せるのか」

「次にはひしと……」

「うむうむひしとな……」

「これで卒業にござります」

「面白いな、そうかそうか」

「おほこむすめ初心娘に對しましては……」

「いづれたらし方違うであろうな」

「大違いにござりまして、まずしなやかに笑いかけ、次に鼻にかかる優しい声で……」

——しかしこの時後苑の奥から、人の話し声が聞こえて来たので、小次郎は云いやめて耳を澄ました。

一人がつつましく言上するのを、一人が黙って聞いていて、時々簡単に質問すると、そういったような話し声であった。

場所が場所であり時が時であった。ひどく頼春には気にかかった。

「小次郎、わしも直じきに帰る。お庭などあまり歩き廻らず、供待おとちに穩なしく待っているがよいぞ」

云いすてて頼春は足音を忍ばせ、話し声のする方へ歩いて行った。

小次郎も引つ返した。

(無礼講っていうやつ、面白いものだなあ)

好色で放蕩ほうとうで、剽軽ひょうきん者の彼には、褌一枚の白拍子を抱いて、乱痴気さわぎをやっているところの、この無礼講というものが、どうにも面白くてならないようであった。

(もう一度隙見すきみをしてやろうか)

こんなことを思いながら小次郎は、館の方へ歩いて行つた。

(それにしても桂子様のお館へ、わしがこっそり通うということを、どうして兄上には知つたのであろう?)

面栄おもはゆいのような気持ちがあった。

あの日以来彼は桂子の館へ、しげしげ通つて行くのであった。

得体の知れない大勢の男女が、変な稽古をやっている。これが彼には面白かった。桂子という女に対しては、彼は一面恐かったが、一面なつかしくてならなかった。

それに桂子の妹だという、浮藻という娘に対しては、可愛らしさを覚えていた。

それやこれやで通つて行くのであった。

(兄上を宿所へ送るかえしてから、今夜も二条へ行きたいものだ)

こんなことを考えて歩いて行つた。

(おや)

と不意に足をとめた。

行く手の萩の叢くさむらの根もとの辺りに、一人の男が身を伏せて、そこから透けて見える館の座敷の、無礼講の様子を見ているからであつた。

(俺のような人間もあるものと見える)

小次郎はニヤリとした。

(編すずし一枚の女の体！　こいつを見るのは悪くないからなあ)

しかしにわか小次郎は、

(少し変だぞ)

と呟いた。

その男が顔を黒頭巾で包み、そうして黒の忍び衆の衣裳で、全身を包んでいるからであつた。

(あんな扮装みなりをした人間は、お供衆の中にはいなかった)

こう思つたからである。

なお見るとそこから十数間はなれた、満天星どうだんの木の蔭の暗い所にも、同じ姿をした二人の人間が、館の方を睨みながら潜ひそんでいた。

見ると否々いらないなそればかりでなく、築山の裾にも土橋の袂たもとにも、同じような人間が隠れていて、館の様子をうかがっていた。

(大変だあ——ツ)

と小次郎は思った。

(細かんじや作だ細作だ細作の群れだ！ 細作の群れが何百人となく、お庭の中に入り込んでい
る！)

何百人はないでしょう。

が、十数人はいるらしかった。

(細作だとすると、細作だとすると……六波羅方の細作に相違ない！)

大変だあ——ツといよいよ思った。

頼春は庭の奥の方へ歩いて行つた。

と、数人の人影が見え、そこから話し声が聞こえて来た。

「楠木兵衛尉正成なども……」
そういう声がハッキリ聞こえた。

後苑の尊貴

それは日野資朝すけともであつた。

いつの間に無礼講の席を遁がれて、このような所へ来たものか、白芙蓉の咲いているそれを横手に大地に跪座きざして謹ましく、そう言上しているのであつた。

資朝の前に立たせられたは、まだ御年おんとしおん御十七歳ばかり、はなはだお若くはあらせられたが、ご身長拔群の御方おんかたで、白の練絹ねりぎぬで御顔を包まれ、黒の道服を召されていた。ご微行なるがゆえであろう。高貴の御方だということは、神采しんさい奕々えきえきとでも形容しようか、その御方ただご一人が、そこに肅然しゆくぜんと立たせられたばかりに、周囲の自然——花木緑葉が、清浄にすがすがしく感じられる、そのことだけでも領うなずかれた。

すこし引きさがつて一人の武士が、御刀を捧げて立っていた。

村上彦四郎義光よしてゐるであつた。

その背後にも数人の武士が、寂然と佇み警護していた。

「楠木兵衛尉正成なども、いざ事あがりましたる際におきましては、一族郎党をこぞりまして、金剛山の險によりお味方仕ると力強き誓言、播磨の赤松則村も、必ずお味方仕ると、いさぎよき誓約にござりまする。伊予にありましては土居、得能、勤王の兵を挙げますこと、火を睹るより明らかにござりまする」

資朝の言葉は凜然としていた。

高貴の御方は無言のまま、御領きあそばされたばかりであった。

「南都北嶺の僧徒衆の、御味方あるはかねてよりのこと、お心がかりはござりませぬ」

「番直の土岐、多治見の徒も、数度の無礼講にことよせまして、その志試みました結果、

二心なき頼もしき心榮え、あらかた知れましてござりまする」

「今は急速に兵を挙げ、一挙に六波羅を討伐し、探題北条範貞を誅し、官方の堅き決心のほどを、天が下に知らしめますること、何より肝要かと存ぜられまする」

「うむ」

とはじめて力強い御声が、高貴の御方の御口より洩れた。

「そちどもの辛勞察するぞ」

「お言葉勿もったい体のう存じまする。……資朝ごときわずかに先年、山伏に姿変えまして諸方の豪族をかたらいましたまで……」

「俊基も心勞したであろうよ」

「有難きお言葉に存じまする。俊基聞かばいかばかりか喜び。……その俊基儀も私めとおなじく、昨年湯治に事よせまして、紀伊の国へまかり下り、土地の豪族南海の諸將と、ことごとく謀議仕りまして、お味方にいたしましてござりまする」

「諸臣の尽忠うれしく思うぞ」

「勿体なきお言葉に存じまする」

「ここでしばらく話が絶えた。」

木蔭にひそかに身をかくして、聞き澄ましていた頼春は、この時、

「はあ——」と声を洩らし、静かに大地に膝をつき、両手を延べて平伏した。

誰あろう高貴の御方おんかたこそ、今きんじょう上第一の皇子みこにましまし、文保二年二月二十六日、

仏門に帰せられ比叡山に上らせられ、梨なしのもと本門跡とならせられた、尊雲法親王に御在おわされたからであった。(後の大塔宮護良親王)

(かかる尊貴の御方が、このような所へ御座ござあるとは?)

頼春は全身に汗を覚えた。

と、御門跡ごもんぜきの御声おんこえが響いた。

「今上の御宸襟ごしんきん推察し奉れば、我れ仏門に帰せし身ながら、法の衣のりころもかなぐり捨てたく捨てたく」は底本では「かなぐり捨てたく」思うぞ」

「……………」

御門跡の御声はなおも響いた。

「院政より今上のご親政となられ、いかに口本安ひのもとらかなったか。大津、葛葉くずはの二関の他は、関所ことごとく開放し、商売往来の弊ついえをはぶき、また元亨元年の夏、大旱だいかんあつて地を枯らし、甸服てんぷくの外百里の間、赤土せきどのみあつて青苗せいびょうなく、餓莩がひょう葶巷に横よこたわり、飢人地上に倒れし時、主上御宸襟を悩ませられ、朕ちん不徳あらば朕一人を罪せよ、黎民れいみん何んの咎とがあるべき、しかるに天この災わざわいを下すと、ことごとく嘆き思おほし召し、朝餉あさがれいの供く御を止めさせらる。さらに主上におかせられては、庶民訴訟出来の時、下情かじようかみ上に達せざ

るあらば、公平裁断を欠くものあらんと、記録所を置かれて出御ましまし、直きに訴えを聞こしめす。さらに八カ条の徳政を行い、仁政の範を垂れ給う。しかるに何んぞや北条高時、陪臣執権の身をもつて、文保のご和談に口を藉り、今上を廃し奉り、持明院統を立てんとす。人臣の身をもつて皇位継承に、容喙するの無道なる、不忠不義至極とおぼゆるぞ」

御門跡の御声はいよいよ鋭く、ますます熱を持つて響かれた。

「しかも高時その者たるや、性昏愚にして放縱無頼、酣飲を事として政を忘れ、鬪犬、田楽にその日を過ごす。補佐する高資に至つては——長崎高資に至つては、貪慾にして苛察の小人、賄賂を貪り訴訟を決し、私情をもつて人事を行い、ひたすら威服を擅にす。……人心北条氏を離れおるぞ！」

叱咤するような御声であつた。

資朝をはじめ附き添う人々、ことごとく頭を地に垂れている。

「ここに至つて主上におかせられては、後鳥羽上皇の御志、朝権恢復の御志を継がれ、そちをはじめとして俊基など、誠忠志を同じゆうするもの、主上を翼賛しまいらせて、今度の拳を計りたるに、われ若年とはいいなから、仏門に帰せし身とはいえ、直接謀議

にあずからず、遺憾至極におぼゆるぞ」

御声に曇りが帯おばれて来られた。

「その後のなりゆきも心もとなく、無礼講ありと聞いたれば、そのありさまも見届けたく、今宵こよひ忍んで参ったのであるが、そちに逢い事情をつまびらかにし、心おちい安堵あんどはしたが、……資朝！」

と御声が精気を帯おばれた。

「朝権恢復、平天下、万民和楽の大目的と、仏法における衆生済度と、何の異るところがあろう！ ……この頃われしきりに思うぞ、如しかず忍にんにく辱の袈裟を脱ぎ、無上菩提の数珠を捨て、腰に降魔の剣を佩き、手に大悲の弓矢を握ろうと！ ……還俗げんぞくして戦場に立ちたいのじゃ！」

「……………」

無言ではあつたが手を上げて、資朝は抑止よくしの形をした。

「方今天下の武士という武士、わずかの数をのぞきましたは、他はおおよそ鎌倉幕府に、今に帰属しております。朝家頼むは南都北嶺、爾余の僧衆にござります。かかる情勢の今日にあつて、宮家御門跡にあられますること、いかばかりか力強くいかばかりか……」

「……………」

「なにとぞご自重！ なるべくご韜晦とうかい！ ……しかる後に獅子王檻おりを出で！」

「うむ」

「百獸を懼しやうふく伏 あそばしませ。……」

「うむ」

「宮！」

と資朝は仰ぎ見た。

「やがてご令旨れいし四方に飛び、勤王の諸將雲のごとくに起こり……」

この時「曲くせもの者だ——ツ」と喚く声が、遙か後苑のあなたから聞こえた。

喚いたのは小次郎であった。

小次郎の声に驚いて、諸所に潜んでいた忍び姿の者は、一斉に地から立ち上がった。

小次郎を目がけて飛びかかる者、門を目がけて逃げて行く者、館を目がけて斬り込んで

行く者！ ……後苑は喧騒の場裡となった。

館からも怒号や悲鳴が起こった。

「六波羅勢だ！」

「討手だ！ 討手だ！」

「討ち取れ！」

「遁がすな！」

「敵は小勢じゃ！」

編すざし一枚の遊君白拍子は、悲鳴をあげて奥へ駆け込み、燭台を仆し盃盤を踏んだ。

館の中は闇となった。

土岐頼兼の叫ぶ声が聞こえた。

「六波羅方の討手ではござらぬ。しかも小勢十数人の、野武士か夜盗か忍び姿の、とるにも足らぬ相手でござる！ 見苦しゆうござるぞ、お立ち騒ぎなさるな！」

つづいて多治見ノ四郎二郎の、甲高かんだかに叫ぶ声が聞こえた。

「門々をことごとくお閉じなされ！ 一人も館から出してはならぬ！ 遁がして内情を六波羅方へ、注進されては一大事！」

門々を固める音が聞こえた。

館から庭へ飛び下りて行く、錦織判官代にしごりや赤松則祐のりすけや、川越播磨守や平賀三郎などの、颯爽さつそうとした姿が見えた。

太刀音！

閃光！

仆れる音！

呻き声！

怒号！

悲鳴！

叫喚！

むこうの隅へ追いつめられ、こっちの隅へ追いつめられ、無造作にバタバタ斬り仆される、忍び姿の者どもの姿が見えた。

と、突然館の奥から、俊基の甲ばしった大音が聞こえた。

「連判状を奪われましたぞ！ 一大事！ 一大事！」

この時一人の忍び姿の男が、木の間をくぐり灌木を踏み越え、庭の奥の方へ走って行くのが見えた。

「あの男じゃ！ あの男じゃ！」

二、三人がそつちへ追っかけた。

が、見る見るその男の姿は、闇に隠れて見えなくなつた。

この混乱の場にあつて、お怪我あつては一大事と、なしのもとこもんせき梨本御門跡様をお急せきたてて申し、従者ともども裏の門から、資朝はお歸し申し上げた。

それをそこまで見届けておいて、土岐頼春は館の方へ、一散に走つて歸つて来た。と、行く手から忍び姿の、見なれない男が走つて来た。

云わずと知れた曲者の一人——と見てとつた頼春は、

「おのれ！」

抜き打ち！

「ワーツ」

悲鳴！

虚空を掴んで倒れた奴を、見返りもせず後に残し、頼春は館の方へ突き進んだ。と、どうだんくさむら満天星の叢の蔭から、一人の男がソロリと出て来た。

ほかでもない小次郎であつた。

「チエ、もろく斬られたわい。……兄上なかなか手て利ききじやなア」

こんなことを口の中で呟いて、死骸の側へ寄つて行つた。

「おや、こんなものが落ちている」
一個の巻軸を拾い上げた。

野の宮の妖精

これより少しく前のことであるが、栗栖野小野のひところ所に、木深い野の宮が立っている、社殿の前の荒れた庭で、一人の老婆が焚火たきびをしていた。

屋根は崩れ縁は腐くち、狐格子はなかば外れ、枯れ草落ち葉でその屋根も縁も、その本質の解らないまでに蔽われ埋くみずめられ隠かくされていた。

焚火はトロトロと燃えていた。

焚火の上には巨大な土釜どがまが、蜘蛛くものような形にかかっている、蓋ふたの隙から湯気が立たつていた。

それを見詰めながら切り株に腰かけ、その老婆はいるのであった。

ただいている髪は卵たまごの花のように白く、火の光で銀色に光あって見えた。

身長たけは七尺もあるであろうか、それだのに全身は痩せていて、細い枯れ木を連想させた。

そういう体へ着けているのは、巫女みこの着る白衣であり、そういう足に穿こいているのは、一本歯ぼくりの木履であった。そうして腰の辺あたりに差しているのは、四尺ほどの御幣ごへいであった。この驚おどろのような鼻を持ち、鎌形の大きな口を持った、妖精のような老婆こそ、ほかならぬ鬼火うばの姥うばなのであった。

それにしてもその姥の足もとの辺に、ヌクヌクと体をあたためながら、縞蛇ややまかがしが渦を巻いてい、その側にその蛇を恐れようともせず、数匹の蝦蟇がまが腹這はらつてい、少し離れた枯れ草の中に、山猫が二匹金の眼を光らせ、黙然と焚火を見詰めてい、その側に立っている櫟くぬぎの枝に、梟ふくろうが止まって眠っているのは、いったいどうしたというのだろうか？ 焚火を慕い、暖気を恋い、集まって来たのだということとは出来る。

それにしても老婆がいる。

ではそれらの動物は、この老婆を恐れないのであろうか？

そうとしか思われない。

鬼火の姥は黙もくつたままで、そろそろたける土釜の中の粥かゆの、香ばしい匂いを嗅いでいた。だが時々眼窩めくぼの奥に、刃物のように光っている眼を、野の一方に押し据えて、じっと何かを見るようにした。

彼女の視線の向けられた方には、荒野と丘とが起伏してい、京へ通う道が通つてい、そうしてそれらを距てながら、日野資朝の別館が、築地に囲まれて立っていた。

二町足らずの距離であつた。

華やかに彼女に見えて来るものは、築地の上に盛り上がっている、広大な楼にともされている明るい燈ともしび火の色であつた。

館では無礼講の乱痴気さわぎが、今行われていなければならぬ。

不意に女の声が聞こえた。

「夜食のお粥たけたかえ？」

声は社殿の縁から来た。

若い女がそこにいた。

縁に腰かけているのであつたが、丈延たけびた草が胸の辺りまで届いて、半身を蔽うていたために、人がいるとも見えなかつたのである。

それは飛天夜叉の桂子であつた。

「ああもうソロソロたける頃さ」

鬼火の姥は眼も上げないで云つた。

「お前さん一人で食べるにしては、その夜食多すぎはしないかえ」

そう桂子は笑いながら云った。

「なんの一人で食べるものかよ、あの子にもやらなけりやアならないし、この子にもやらなけりやアならないのだよ」

「どこにそんな子供いるのだえ？」

「まあ黙つて見ているがいいよ。今に沢山の子供たちが、ガツガツとお腹なかをへらしながら、闇の中から素つ飛んで来るから。……それよりお前さんそんな所にいずに、ここへ来て火にでもおあたりな」

こう云うとはじめて鬼火の姥は、社殿の方へ眼をやった。

「行きたいけれど行けやアしないよ」

桂子は暗い中で微笑した。

「そんな恐ろしい眷族けんぞくが、お前さんの周囲まわりにいるんだものねえ。……蛇だの蝦蟇がまだの……
…恐こわや恐こわや!」

「ふふん」

と姥は鼻で笑った。

「そんなしおらしいお姫様でもないに」

「あたしやアしおらしいお姫様さ。お姫様は長虫がお嫌いだよ」

「ふふん」

とまたも鬼火の姥は、鼻で笑ったばかりであった。

二人はしばらく黙っていた。

「何んと思つて鬼火の姥には、こんな森の中へ入り込んだやら」

——ややあつて桂子は皮肉に云つた。

「何かと思つて飛天夜叉殿には、こんな森の中へ入り込んだのやら」

鬼火の姥も皮肉に云つた。

「無礼講のご様子遠見に来たのさ」

「わたしやアとげられない謀反たくんで、あがき廻る馬鹿な人間どもの姿を、嘲笑つてやろうと入り込んだのさ」

「さあとげられるかとげられないか、お前さんなんかにわかるものか」

「鬼火の姥はみとお見透しじゃよ」

「せいぜいのところ一、二年の先が」

「お前さんなんかには明日のことさえ、てんから見透しつくまいに」

「勝負はどっちが勝つかねえ」

「とにかくわたしやアこう云っておくよ。武家方のご運強いとねえ」

「せいぜいそれも数年のうちさ」

「今度の企くわだて破れるよ」

「……………」

「裏切り者があらわれてねえ」

「……………」

「妻子には心ひかれるものさ」

「……………」

「この眼力狂わないよ」

「……………」

「……………」

二人はここで黙った。

それにしても何んという対照だろう！

野を越えたかなたにお館があつて、そこでは無礼講の乱痴気さわぎが、華やかに享樂的に人間的にさも陽氣に行われているのに、同じ野を越したこちらには、荒れた野の宮を中ににして、年を経た松や桧ひのきや杉、梧桐や柏の喬木が、萩や満天星どうだんや櫛はせなどの、灌木類とうちまじり、苔むした岩や空洞うろとなつた腐木くちきが、その間に点綴てんてつされ、そういうおそろしい光景を、焚火の光が幽かすかに照らし、幽暗とした他界的な、非人間的なたたずまいを、現出させているではないか。

しかもそういう自然に包まれ、話しているところの生物といえ、人間には相違なかつたが、人間的の力を持った、妖精じみた女性なのであつた。

が、それにしても鬼火の姥とは、どういう素性の女なのであろう？

飛天夜叉の素性が解らないように、この老婆の素性もわからないのであつた。

しかし一般に知れていることは、深山で長く修行をして、超人間的の魔力を持った、恐ろしい巫女みこだということと、飛天夜叉とは反対に、武家方の味方だということと、木精こだまや水の精や山神をさえ眷族として自由に使う、そういう女だということであつた。

「や、燈火ひが消えた！ どうしたというのだ！」

鬼火の姥は不意に云つて、不安そうに野を越えて館の方を見た。

日野資朝卿の館の燈火が、いかさまこの時不意に消えて、その上そこから叫び声や喚声
が、風に乗って聞こえて来た。

鬼火の姥は立ち上がった。

「さては子供たちやりそこなつたか」

突つ立つたまま茫々と、館の方をいつまでも眺めた。

と、桂子が嘲けるように云つた。

「姥よ、見透しはどうなつたかよ」

「……………」

「ははあさては鬼火の姥よ、手下を——子供をお館へ忍ばせ、何か悪いこと巧たくらんだね」

「……………」

「今度の企くわだて破れると云つたが、どうやらお前さんの企ての方が、破れたような格好だね」

「剣戟けんげきの音が聞こえるわ！ ……あッ、斬られた！ 子供が斬られた！ ……あッ、ま

た斬られた、子供が斬られた！」

鬼火の姥は地団太を踏んだ。

嵐が勢いを加えて来た。

枝葉が揺れ、病葉わくらばが舞い落ち、焚火が靡き、草ひるがえが翻り、そうして姥の白髪と白衣とが、
白ほのおいひらめのように閃いた。

「宮方に加担し味方をして、謀反を企てる奴ばらの、連判状を奪い取り、探題様へ差し上げようと、子供達を多数忍び込ませたが……あッ、庭の隅へ追いつめられ、また斬られた斬られた！」

姥の怒りと焦燥とが、虫や鳥獣にも伝わつたらしい、山猫は背を立て毛を逆立さかだて、足を踏ん張つて唸り声を上げ、鼻は枝から舞い上がり、焚火の上を輪のように舞い、蛇はとぐろをほぐし出した。

と、一匹の縞蛇が、五尺あまりの太紐のような体を、焚火にテラテラ光らせながら、鬼火の姥の足に搦からみ、胴の方へ這い上がった。

姥はほとんど夢中であつた。

「しめたぞ！ 奪つた！ 連判状は奪つた！ ……逃げる逃げる逃げる逃げる！ ……それさえ奪つたら大丈夫！ 逃げな逃げな早く逃げな！」

蛇は胸まで這い上がった。

「あッいけない！ 斬られた——ッ」

と、姥はバリバリと齒を噛んだが、夢中で蛇を両手で握り、

「ム——、残念、取り返された——ツ」

蛇は二つに千切られて、ダラリと延びて下がったが、千切れた口から滴したたつた血が、焚火の上へこぼれたらしく、腥なまぐさい匂いがひろがった。

「範覚はんがく範覚！ 範覚！」

と、突然姥は呼ばわつた。

「行つてみようぞ、館の前まで」

すぐに、

「オ——ツ」

という声が聞こえた。

社殿の横に碑いしづみがあつて、なかば雑草に蔽われていたが、その蔭に若い山伏が、さつきから膝を抱き首を垂れ、コクリコクリと居眠りそぼをしていた。

呼ばれて眼をさまし立ち上がり、側の金剛杖をひっさげると、ノツソリとばかり立ち現われた。

「眠い、疲労つかれじゃ、昨夜のつかれじゃ。……姥のせめ方ははげしいからのう。……ようこ

れは飛天夜叉殿か。……桂子殿おいでと知ったなら、お伽かたがた出て来たものを」

社殿の方へ好色らしい、いやらしい眼付きを流してやった。

年は二十六、七であろうか、厭らしいところはあつたけれど、たしかに美貌の山伏であつた。

気になるのは唇が貝の蓋のように薄く、茱萸ぐみのように赤いこと、焚火に照らされておりながら、その顔色が蒼味を持つて白く、気味悪いほどだということである。

これらの特色はその性質が、残忍であり酷薄であり、好色である証拠であつた。

鬼火の姥の手下であり、かつ情慾の相手なのであつた。

焚火の側へノツソリと佇たたずみ、眼はなお桂子へ注いだままで、

「恋の相手が鬼火の姥でなくて、飛天夜叉殿であろうものなら……何んだ畜生！ 薄っ気味の悪い！」

金剛杖に搦みつき、ウネウネと蛇が上がつて来たのを、一振り振つて大地へ叩きつけた。「鬼火の姥と来たひには、肌といえは苔の生えた枯れ木じゃ。コツコツしていて水気がなく、カサカサしていて粘り気がない。……それでいて、……いやもう力の強いことは。……わが身苦しくて苦しくてな。……お役目と観念すればこそ、じつとがま

んをしているが……しかしどうにも恋ではなくて、姥とのつきあいは拷問じやよ。……畜生！」

とその時腹の辺りを目掛けて、巨大な蝦蟇がまが飛びかかって来たのを、片手をあげて叩き落とし、足をあげて踏み潰つぶした。

鬼火の姥が怒鳴り立てた。

「館の門々がとぎされたわ！ 子供たちが可哀そうにとじこめられ、一人残らず殺されるわ！ ……範覚範覚、行つて見ようぞ！」

腰から御幣ごへいを引っこぬくと、額の辺りへ捧げ持ち、呪咀のろいの言葉を喚きながら、鬼火の姥は走り出した。

依然として縁へ腰かけたまま、範覚の言葉へは耳も藉かさず、鬼火の姥の狂態ばかりを、気持ちよさそうに眺めていた、飛天夜叉の桂子が声をかけた。

「鬼火の姥よ、鬼火の姥よ、とうとうお前さんの今夜の企て、木ッ葉こ微塵ばみじんにこわれたねえ」すると突然鬼火の姥は、野に足を止どめ振り返ったが、

「第一の企ては破れたよ。……が、第二の企てがある！ ……女房に心とらわれる男を――わしが……誘つて……見てごらん！ ……範覚おいで、何をしているのだ！」

云いすてて姥は走り出した。

「待ちな、姥おば、俺おらも行く。……あの走りざま、色気がないなあ……役えんの行者じゆばくに呪縛じゆばくされたという、鬼子母神きしもじん様にそっくりじや。飛天夜叉殿てんやしゃだん、ではご免。……未練みれんのこして行く
としようぞ」

ノソリノソリと金剛杖こんがうじやうをつき、金地院こんじいん範覚はんかくは歩き出した。

「いいとりあわせの二人だよ」

云い云い笑止らしく桂子は笑い、社殿しゃだんの縁えんから飛び下りたが、

「おや」

と不意ふいに彼女は云つた。

「皇子みこ様さまお通りじや、尊おんい御方みかたが！」

なるほど、荒野くわんげを京の町の方かたへ、一筋通ひとすぢつていゝる道みちを辿たどつて、館たねの方かたから一団いっだんの人影ひとかげが、足早あしはやに歩いて来るのが見えた。

梨本なしもと御門ごもん跡あと様さまが従者ずさに囲かこまれ、歩あを運おんばれる御姿おんすがたであつた。

「御栄みさかえあれ皇子みこ様さま御栄みさかえあれ！……御父おん君きみ様さまは御今ごきん上じやう様さま、御母おんぼ君きみ様さまは北畠きたはたけ氏うぢ、権大

納言もろちか師し親ちか様さまのご息女めかけ、民部みんぶ卿けい三さん位ゐ局きよ親ちか子こ様さま、……ご幼年ごせうねんから御聡明ごそうめいで御濶達ごくたつ、帝ていの

ご寵愛もおいちじるしく、ご兄弟様との御仲も御むつまじく、四方よりのご人望は富岳よりも御高く、御在しますところの御皇子様！ いよいよ弥栄えましまして、やがてはこの御国の御礎石となられ、現身ながら御神として、崇められまするでござりましょう！ ……御栄えあれ皇子様御栄えあれ！」

桂子は讚め言葉をお送りした。

なお焚火はトロトロと燃え、土釜からは湯気が薄白く立ち、風に煽られて病葉が、ひつきりなしに、散つて来た。

今は野の宮はひっそりとしていた。

そういう境地に佇んで、遥かに野路を京の方へ、一団となって御歩きなされる、梨本御門跡様のご一行を、つましく眺めている桂子の姿は、この野の宮の御神体が、仮りに女人に現われたようであった。

ふと桂子は眼を伏せて、さびしそうに呟いた。

「日野様別館には小次郎様も、今夜おいでになった筈だ。 ……妾の所へは来られないだろう。 ……妹が、浮藻、あのお方を、ああも恋しているのだから ……恋！ いいわねえ、何んていい ……でも妾は封じられている！ ……永久に恋は封じられている」

それは悄然とした姿であつた。
ひっきりなしに病葉が散つた。

意外の出来事に時を費し、とぎくらくんとよりはる土岐藏人頼春が、小次郎を連れて日野別館から、三条堀川の自分の宿所へ、帰りの足を運んだのは、あかつき暁に間近い頃であつた。

「兄上、大変でございましたなあ」

そろそろ水色を産み出しそうにしている、東の空を仰ぎながら、小次郎はそう頼春へ云つた。

小次郎と肩を並べながら、これは空など仰ごうともせず、思案に余つたというように、足もとばかりを見詰めながら、黙々と歩いていた頼春は、

「うむ」

と一言云つたばかりであつた。

京の町々は眠りの中にあつて、家々の雨戸も窓もしとみ蔀も、ことごとく閉ざされて寂として、
い、天の河ばかりが屋根に低く、銀の帯を引いていた。

と、頼春はうわごと謔言のように云つた。

「連判状を奪われたそうなの」

「……………」

小次郎は微笑した。

そうして懷中をヒョイと抑えた。

(俺、その連判状を持つているんだぜ)

だが言葉には出さなかった。

「わしは今夜血判したのだ。……お企てへ一味し忠誠^{つかまつ}仕る。もし偽りあるにおいては、梵^{ぼん}天^{てん}帝^{たい}釈^{しゃく}四大天王、日本六十余州の神祇より、きつと冥^{めい}罰^{ばつ}を受くべきものなりと、誓ったあげく姓名したため、しかと血判いたしたのだ」

依然として頼春は譫言のように云った。

小次郎はまた微笑した。

(その連判状おれ持つているんだ。……兄上が叩き斬ったあの男の手から、ころがり落ちた連判状をよ)

二人は無言でしばらく歩いた。

「その連判状奪われたそうなの。……奪った奴が六波羅方で……」

「アツハハハ」

とおかしくてたまらず、とうとう小次郎は声を立てて笑った。

まどわしの声

「何がおかしい!」

と頼春は怒鳴った。

「この身の心の苦しさも察せず」

「じやと申しても、兄上兄上、どうにもおかしゆうございます。アツハツハツハツ、イツヒツヒツ」

「何がおかしい、この馬鹿者!」

「じやと申しても、アツハツハツ、その連判状と申すやつが、誰かの懐中にありまして、この辺にまごまごしているとあつては、何がおかしいと仰せられても、やはりメチャメチャにおかしくて、アツハツハツ、エツヘツヘツ、クツクツクツ、ピツピツピツ——」

と、桂子かつらこの館で笑い上戸の稽古に、憂身うきみをやつしている一人の男の、その笑い方を知

っているだけに、小次郎の笑い方は堂に入っていて、なかなか立派なものであった。

だが小次郎は笑っていないながらも、ああまで連判状の行衛ゆくえについて、兄上が心配しているのだから、いいえさ兄上ご心配なさるな、兄上があの時お斬りになった奴が、その連判状を持っておりまして、それを私が横から出て奪い、今懷中に持つておりますと、こう云つて安心させてやろうか。——こう思わざるを得なかった。

(が、まあもう少しジラシてやろう)

与太よたでナンセンスでいたずらっ兎の彼は、ここでも本性を發揮して、明かさないことにきめてしまった。

「小次郎」

と頼春は沈痛に云つた。

「女房というものいとしいものだぞ！」

「はあ」

と馬鹿らしくなったので、小次郎は冷淡な返辞をした。

「私には女房はございません」

「戦場に出て功をたてる、主君に日常お仕えして、お覚えよかれと苦心する、みな妻子の

「ため家のためじや」

「はあ」

「大義も、節義も、忠も、士道も……」

「妻子には代えられませんでござりまするかな」

「迂濶うかつにも俺は血判したのだ！ ……ご謀反へお味方仕ると！」

「……………」

「迷うぞ！」

「……………」

「迷う！」

「……………」

「男心だ！」

「……………」

「が、もう仕方がないかもしれぬ。——その血判した連判状は……」

（ちやアんとここに鎮座ましましている）

ヒョイと小次郎は懷中を抑えた。

(で、絶対に安全なんだがなあ)

「六波羅方へ渡ろうものなら」

(渡りませんな、大丈夫です。……ここにちやアんと鎮座ましまして)

「旗あげせぬうちに捕えられ、打ち首じや！ 梟し首じや！」

「……………」

「いっそ！」

「兄上」

「男らしく、盟約の義を貫いて……………」

「兄上」

「それとも…………それとも…………思い切って…………」

この時し囁わがれた女の声こゑが、どこからともなく聞こえて来た。

「頼春殿、それがよろしい！」

「誰だ！」

と頼春は仰天して、せわしく四方あたりを見廻した。

暁の光のさし出る前に、夜というものはその暗さを、ひととき強めるものであるが、そ

の時刻が今であった。

で、暗い巷には、それらしい人影は見られなかった。

「小次郎」

と頼春は怪訝そうに云った。

「お前いま何んとか云ったか？」

「はい、兄上と申しました」

「そうではない、それ以外に……」

「いえ、なんとも申しません」

「お前に何か聞こえなかつたか？」

「さあ、遠くでにわとり鶏の音が……」

「いやいや噎れた女の声じや」

「聞こえませんがございますな」

「頼春殿、それがよろしいと……たしかに、このように聞こえたが……」

するとこの時同じ声が、どこからともなく聞こえて来た。

「武士は武家方へつくものじや、官方へつくのはかえつて不忠。……武家方に返り忠なさ

りませ」

「小次郎」

と頼春は顫えを帯びた声で云った。

「聞こえたであろう、あれじゃあれじゃ！」

「変ですなあ」

と小次郎は云った。

「私には何んにも聞こえませんが」

そう、小次郎には遙かの方角から、鶏の音が幽かに聞こえ、近くの小路で藪を上げるらしい、軋り音が聞こえたばかりであつて、そんな暖れた女の声など、全然聞こえては来ないのであつた。

「そうか」

と頼春は腑に落ちないように云った。

「ではわしの空耳かもしれぬ。……行こう」

と二人は歩き出した。

が、またも頼春の耳へ、追ひ縋るように同じ声が聞こえた。

「ご謀反ことごとく失敗に終り、お味方をした武士衆は、あるいは討ち死にあるいは斬り死に、公卿衆は遠島となりましょう。……難をまぬかるる手段は一つ、返り忠ばかりにござりませぬぞ！」

それは怯やかすような声であった。

もう頼春は動けなくなった。

往来の真ん中へ足を止どめ、胴顛いする心持ちで、もう一度あたりを見廻してみた。

と、十数間離れたあなたに——もと来た方の家の軒に、その軒よりも高いほどに、身長高い一本の御幣のようなものが、風に靡いて立っていた。

巫女姿の老婆であった。

「あいっだ！」

と頼春は呻くように云った。

そうしてあなたかもその御幣に、人を引きつける魔力があつて、その力に引かれたかのよう、頼春はそつちへ走つて行つた。

「誰だ！」

と老婆と顔を合わせた時、頼春は焦噪した怒声で叫んだ。

「そちであろう！ そちであろう！ 俺に言葉をかけたのは!!」

「頼春殿」

と老婆は云った。

「あなた様にお言葉をかけましたは、いかにも妾わたしにござりまする。……返り忠おすすめしましたも、この姥うばにござりまする」

「なの宣れ！ 誰じゃ！ 名を宣れ！」

頼春は刀へ手をかけた。

（俺の心を見抜いた女、生かしてはおけぬ！ 生かしてはおけぬ！）

柄を握った指の間が、膏あぶらあせ汗で粘っていた。

「承久以来武家方に対し、宮方の謀反なりたち成功ませぬ！ ……この度のご謀反とて何んの何んの……」

「黙れ！」

頼春は一喝した。

「この身の心を見抜いた女、素性が知りたい！ なの宣れ宣れ！」

「世間の人達は妾のことを、鬼火の姥と申しております」

「おおおのれが鬼火の姥か！」

暗い空間を上斜うわななめに、星が飛んだかと感じられた。

抜き打ち！

大蛾が地から舞い上がったかと思えた。

鬼火の姥が二間あまり飛んで、御幣ごへいを頭上に振りかぶったのである。

「お斬りなさる気か、駄目じや駄目じや！ ……人間の造った刃物では、この姥の体斬れぬ斬れぬ！ ……さような考えおやめなされて、姥の言葉にお従いなされ！ ……元亨二

年の春の頃より、宮方においては諸山諸寺の、高僧名僧を召し寄せられ、関東調伏の大法秘法を、ひそかに行わせおらるること、姥においては夙つとに承知じや。 ……仏眼金輪五壇の

法、一字五反孔雀経、七仏薬師燃盛光、烏髯うすさまへんじょうなんし沙摩变成男子の法、五大虚空蔵、六観音、六

字訶臨訶利帝母、八字文殊普賢ふげんえんみょう延命、護摩ごまの煙りを内苑に満たせ、振鈴しんれいの音を掖えぎで

殿んに響かせ、祈り立て祈り立てしている筈じや。 ……が、何の利益があらう！ ……武

家が武力ちからで取った権じや、宮方がそれを取り返そうとなら、やはり武力で取り返さねばならぬ。 ……坊主、山伏の修法などで、何んの政権がとられようぞ！ ……しかるに当今

日本の武士、ほとんどことごとくが武家方に属し、わずかに宮方に属するもの、そちたち

一族の土岐と多治見、これでは大事とげられまいがな。……六波羅殿へ返り忠し、官方の陰謀内通なされ！ 身の安穩たもたれるばかりか、恩賞かならずありましようぞ！ ……いとしいそなたの奥方の、早瀬殿はやせの心持ちにも同情せねばなりませんまい！ 早瀬殿のお父上は、六波羅の奉行でござりまするぞ！」

云い云い頭上の柄長の御幣を、姥は揉み立て揉み立てした。

暁の風に姥の裳裾もすそも、袖も白髪しろがみも靡なびき翻ひるがえり、波が砕くだけて作られた水泡みなわが、涌みなき立ち踊り騒さわぎ立つように見えた。

「妻！ ……早瀬！ ……おとおお妻よ！ ……お前を思えば、お前を思えば！ ……」
限りなく愛している妻であった。

この妻のことを思えばこそ、大義も土道も捨てようかと、心を惑わしているほどであった。

その妻のことを云われたのである。頼春は心をとりに乱した。

相手に抜き身の太刀を差しつけ、ジリジリと逼せまって行きながらも、頼春は言葉を上ずらせた。

「おおおのれ汝が鬼火の姥か、不思議な力を持っていると、噂うわさに立っている鬼火の姥か！ ……」

さればこそ俺の心持ちを、そうあからさまに見抜いたのであるう！ ……姥よ、おおお姥よ姥よ！ ……助けてくれ！ 教えてくれ！ ……どうしたらいいか、俺はどうしたら！ ……黙れ！」

と頼春は覚醒めたように叫んだ。

「遁がさぬ！ 殺す！ 生かしてはおかぬ！ ……己の心を見抜いた汝、生かしておいては後日の祟り！ 六波羅殿へでも内通されては！ ……死ね！」

と飛び込み斬りつけた。

また大蛾が空へ舞うと見えた。

翩翩へんぽんと姥が身かわしたのである。

とたんに活然と音がして、御幣ごへいが地上へ落ちて来た。

白一条！

四尺の戒刀！

御幣に仕込まれている戒刀が、今や抜かれて姥の頭上に、高く斜めに振りかぶられている。「小冠者！ すされ！ フ、フ、フ！ ……わしを斬るとな！ 笑止千万！ ……親切を仇で返す奴！ ……その儀ならばよ——し、引導渡すぞ——ッ」

ユサユサユサユサと寄つて来た。
 が、その前へ小次郎が、この時走つて来て身を挺した。

美しき妻

この時東の空の裾が、あかつき 暁の色に染められて、あたりがほの 仄かに明るくなった。

と、奇蹟が行われた。

たけ 猛り立っていた鬼火の姥が、その暁の水色の光に、照らし出された小次郎の姿——たぐい 類まれなる美貌を見るや、振りかぶっていた戒刀を下げ、眼を細くし、口をあけ、二、三步ヨロヨロとよろめいたが、恍惚とした表情で、

「人間か？ ……男か？ ……さてもさても！ ……美しいのう！ 美しいものじゃ！」
 と、うわごと 譫言を云つたことである。

じゆそ 呪咀も、予言も、闘志も、魔力も、うば 姥からことごとく失われたようであつた。

厭らしい、みにく 穢い、好色無慚の、鬼火の姥のこの様子には、頼春も小次郎もあつけ 呆氣にとられ、むしろ戦慄をおぼえて来た。

頼春の危険を助けようとして、馳せつけ身を挺した小次郎は、刀も抜かず背後へさがり、身をそむけ眼をそらし、頼春は差しつけた刀を引いて、これは憎悪の切齒をした。

姥は小次郎を見詰めたまま、今度はフラフラと寄つて来た。

「さわらしてください、抱かしてください！ ……姥の通力やぶれてもよい！ ……本望じゃ、さわらせてください！ ……柘榴ざくろのようなその唇へ、練絹ねりぎぬのようなその頬へ！」
フラフラと寄つて来た。

「人殺し——ッ」

と小次郎は叫んだ。

咽喉のどへ切つ先がつきつけられても、武士である小次郎は気が弱くとも、まさかに人殺しとは叫ばなかつたであろう。

が、女怪さながらの姥に、唇や頬へさわられるとあつては、恐怖し叫ばざるを得なかつた。

「助けてくれ——ッ、おれ敵かなわん！」

果然助け船ちかくがあらわれた。

この時まで附近ちかくの小路の中に、ひそかに佇ただずみ身を隠し、様子を見ていた一人の男が、ツ

カツカとこの時出て来たのであつた。

鬼火の姥の情夫であり、山伏である こんじいんはんがく 金地院範寛であつた。

金剛杖で大地を叩いた。

「姥よ、病気か、また病気か！ ……美少年好みあくじきびようの悪食病か！ ……エツヘツヘツ、

情けねえなあ」

それから小次郎を睨むように見たが、

「なるほどなあ、こりやア凄すじい！ 男の俺でさえこりやア参る！ 美しいものじゃ、業なりひ

平朝臣らあそんじゃ！ ……やい！」

と威猛高に吼えるように云い、金剛杖を振りあげた。

「行け！ 二度とあらわれるな！ 鬼火の姥の眼前へよ！ ……あらわれたが最後一夜の

うちに、骨と皮ばかりにされてしまふぞ！ ……な」

と急に声を落とす、

「な、俺にまかせて置け。 ……姥のような絶倫の精力家には、俺のような絶倫の精力家でない、ソレ間に合わないというものだ。 ……それにさ俺にしても姥を取られると、ほんとうのところちと不便だ。 ……だからよ俺にまかせて置け！」

頼春の妻は早瀬と云った。

大変美しい情の深い、良人おっと思いの女であった。

まだ年も若かった。

この頃彼女は心配であった。

良人の頼春の様子が変わって、憂鬱になったからである。

(辛いことよ)

と早瀬は思った。

(何か隠しておいでになる)

そんなように思われてならなかった。

(年月つれ添う妻の妾わたしに、ものをかくすとは何んということぞ！)

こう思うと悲しく怨めしく、見すてられたような気持ちもし、すこし良人が憎くさえ思われ、どうあろうと良人の心の秘密をさぐり、自分の力でそれを消して、以前のように朗らかで気軽な、坊やのような人になければならないと、こう思ったりするのであった。

日野別館の無礼講に列し、連判状へ血判して以来、事実頼春は憂鬱となった。

心が迷っているからであつた。

宮方へお味方つかまつ仕ると、血判までして誓つた以上、宮方へつくのが至当なのであるが、さてそうして合戦となる、と、可愛い妻の父、斎藤太郎左衛門利行殿を、敵に廻して戦わなければならぬ、ではいつそのこと返り忠をして、武家方すなわち六波羅方はらがたへつこうか？

一族の十郎頼兼や、多治見ノ四郎二郎と戦わねばならぬ。

(どっちへ廻つても苦しい身の上だ)

このことが彼の心持ちを、憂鬱にしているのであつた。

(それより血判をした連判状を、あの夜曲くせもの者に奪われた筈だ。それが六波羅方の手にはいろいろものなら……)

一網打尽謀反のともがらは、六波羅方に捕えられよう！

今日は捕り方が来るだろうか？ 明日は縄目の恥はじに逢おうか？ ——このことが彼の心持ちを、さらに憂鬱にするのであつた。

秘密を心に持つている。

それを妻に知らすまいとする。

で、自然と彼の起居動作、言語応対眼づかいなどが、陰険となり不正直となり、隠しだ

て式となるのであった。

早瀬にはそれが悲しかった。

その良人の隠しだて式が！

（あのお方の朗らかだった心持ちを、ああも陰鬱にした悪い何かを、どうあろうとわたしは探し出して、わたしの力で消さなければ）

で彼女はカマをかけては、いろいろ良人へ話しかけた。

よく晴れた今日は九月××日で、坪庭つぼにわでは萩と木犀と菊と、うめもどきと葉鶏頭さと山茶花ざんかとが、秋のお祭りを行つてい、空では雁かりが渡来したばかりの、元気のよい声でうたつていた。

「あなた」

縁に近く円座を敷き、その上に坐り脇息により、物憂そうに坐つて、三白眼で、庭を見ている頼春に向かい、早瀬は坪庭から声をかけた。

「お父様よりお使いが参り、明後日あさつては吉例の菊花の宴、二人うち揃つて参るようにとのこと、ねえ参ろうではございませんか」

夫婦めおととなつて三年を経た。そういう二人でありながら、その仲の親しさ睦まじさは、ほ

とんど新婚と変わりなく、人眼なければ呼び合う言葉など、甘く、遠慮なく、舌したたるいたのであった。

「うむ」

と頼春はただに答えた。

心はそこにはないのであった。

（宮方へ附こうか？ 六波羅方へ行こうか？）

「ねえ」

と早瀬はまた甘えた声で、

「蜜柑みかんが葉の下なに生るといふこと、あなたご存知でございました？」

「何に？」

と頼春は不思議そうに訊いた。

突然変なことをいい出されたので、物憂かった心が急に解けて、ついそんなように云つたのである。

（よかった！）

と早瀬は嬉しく思った。

(何んでもわたしはこの人の心を、カラリと軽いものにしてやって、ズンズンものを云わせなければならぬ)

そこで彼女は云いつづけた。

「地震のあるのを知っているものは、なまず鯨が一番だと申しますね」

「アツハツハツ何を云うやら」

「海嘯つなみのあるのを知っているものは、かに蟹が一番だと申しますね」

「アツハツハツ何をつまらない」

「今年は雪が多いか少ないか? —— ということを知っているものは、蜜柑の実だそうでございます」

「そうかねえ、わしは知らん」

「雪の多い年だと知ると、蜜柑は葉下へしがみつきますけれど、雪が少ない年だと知ると、葉の上へ顔を出しますそうで」

「ははあさうかねえ、面白いねえ」

「蜜柑は気候を知っておりますのね」

「そうらしいなア、偉いものだ」

「良人の心を知っているものは、誰が一番でございましょう？」

「……………」

「妻ですの！ 女房でございます！」

とうとうここへもつて来たのであった。

頼春はヒヤリとした。

（俺の秘密に感づいているらしい）

こう思ったからである。

椋鳥むくどりが群れをなして翔かけて来たが、坪庭の柿の木へ一斉に下り、いかにもガサツに啼なき立て、騒けんそぎ立て、しばらく喧けんそ騒をつづけたかと思うと、真昼の陽のひかりのみなきつている空を、なんの屈托くつたくもなさそうに、また打ちそろつて翔けて行った。

早瀬は欄干へ背をもたせかけ、涙ぐんだ眼でそれを見送った。

その横顔が頼春に見えた。

薄桃色をした可愛い耳たぶ、額から何んの窪みも持たず、真っ直ぐにつづいているおつとりした鼻、——六波羅第一と賞讃うたわれた美貌が、娘時代と変わりはなく、今につづいているのであった。

が、思いなしか頬のあたりへ、すこしく陰影が出来たようであった。

(瘦せた)

と頼春には思われた。

それが痛々しくてならなかった。

(俺にもしものことがあったら、この女はどうなるだろう)

寡婦！ ……美貌！ ……うら若い身の上！ ……自分の妻となる前に、幾人、いやい

や幾十人、この女を射落とそうと、六波羅武士や北面の武士が、狙い、口説き、誘惑した
ことか！ ……では独身ひとりみとなったと知ると、同じような種類の若武士どもが、手を変え

品を変え立ち代わり入り代わり！

(たまらない事だ！ たまらない事だ！)

頼春の血は煮え返った。

(人手に渡してたまるものか！)

「早瀬！」

と思わず情の逼った声で、頼春は云って身をのり出した。

「……………」

その烈しい愛情の声に、早瀬の体は引かれたかのように、庭から部屋へ駈け上がった。

「あなた！」

「うむ」

「お心割つて……」

「……………」

早瀬の手は良人おつとの膝へかかり、その眼は良人の眼へ食い入った。

——が、頼春は首をふった。

首を振った頼春ではあつたけれど、その夜妻との添い臥しの床で、未練の言葉をふともらした。

「一樹の蔭かげに共にやどり、一河の流れを共に汲む、それさえ多生の縁だという、まして相馴れて三年となる、等閑なおよりでないわしの心、折りにふれ物につけ、お前も知ってくれたと思うよ。……それにしても人は老少不定ろうしよふじよう、いつわしが敢あえなくなろうもしれぬ。……わが身はかなくなつたと知らば早瀬、なき後も志かわらず、貞女の心を！心を貫いて！

「……………」

不覚にも頼春は落涙さえした。

ほそぼそともされている有明の灯で、良人の顔を見詰めていた早瀬は、起き上がつてにわかには居住居を直した。

「怪しの節々ふしぶしこの日頃中、心にかかりおりましたが、ただ今のお言葉きくからに、いよいよ怪しく存じます。……明日死ぬか今日死ぬか、お言葉どおり人の身の上は、老少不定にござります。……明日さえたのまれぬ人の身の上、それを後世までのあらまじごとをお云い出でてのご落涙、ひとかたならぬご辛勞が、お心にあるからと存じます。……それをお隠しあそばすとは、あまりといえは薄なさけ！ お怨みいたすでござりましょう。……三年みとせの間の夫婦仲、人がうらやみ笑うほどに、……笑われますのも至極のほどに……そうありましたは偽りか！ ……それならいつそ！ ……いつそ妾を！」

膝にとりつき齒を食いしぼり、しやくり上げしやくり上げた。

「あなたに心底しんていうたがわれ、かくしだてされますほどならば、この先いきて何んのだのしみ！ ……愛想つかされぬ今のうちに、いつそあなた様のお手にかかり！ ……妾を殺してくださりませ！ ……それも厭か！ ……それほどなら、この身でこの身を……」

と枕まくらがたな刀を、早瀬は取つて鞘さやを払った。

「早瀬！」

と仰天して頼春は、必死と早瀬の手を抑えた。

「死なばもろとも！ ……なんのそち一人を！ ……短気な！ ……えい、夕、短気な！

……放せ！ 放せ！ これ放せ！」

刀をもぎ取つて大息を吐いた。

戸外には夜風が出たと見えて、坪庭の植え込みのざわめく音や、落ちる木の実が池を叩く音が、幽かすかながらも聞こえて来た。

館やかたの内はひっそりとしていた。

今夜も小次郎は宵のうちから、この館をぬけだして、二条あたりの怪しげな館へ、どうやらこっそり行つたらしく、早くから姿を見せなかったが、今に帰つてはいないようであった。

心しんをほそめた燭台の灯は、涙にぬれて色蒼すさまざめて、なお顫えている早瀬の顔と、背後うしろのあたりに投げ出された抜き身を、怪しく凄すさましく照らし出していた。

「早瀬！」

と頼春は声を忍ばせて云った。

「……………」

早瀬は眼を据えて良人を見詰めた。

「早瀬！」

とまたも頼春は云った。

うわずった苦しそうな声であった。

「わしは苦しい」

と溜息ためいきを吐いた。

「明かせば武士がすたれよう！……が、わしにはそなたが可愛い！……そなたと別れるほどならば……そなたに疑がわれるほどならば……武士も、男も、なんの惜しかろうぞ！……早瀬！ 宮方ご謀反じゃ！……それへわしも……わしも加担！」

親と子

その同じ夜の深夜であった。

六波羅探題の奉行職、斎藤太郎左衛門利行は、にわかに眠りからさまされた。

「お嬢様おこしにござります」

と、侍臣が知らせて来たからであつた。

「ナニ嬢が？ 早瀬が来たと？」

「はい、おこしにござります」

「で、頼春も一緒にか？」

「いえ、お一人にござります。……それもお供もお連れ遊ばさず」

「……………」

太郎左衛門は立ち上がった。

先年妻を先立たせて以来、側室そばめも置かない男おとこ鰥やもめの生活くらし、それだけ真面目な人物であ

つたが、娘を愛する心持ちは、人いちばい勝すぐれていた。

（この深夜に女の身一人で、三条堀川からこの六波羅まで、何用あつて来たのであろう？）

（——大事が！ 何か一大事が！）

ふとそんな予感がした。

（夫婦あらそいかも知れぬわい。あまりに仲がよかつたから）

こんなようにも思われて、つい微笑が浮かびそうになつたが、恋婿頼春にかたづいて、三年をけみした今日が日まで、ついぞ一度としてそのような始末を、持ちこんで来たこと

のない彼女であった。そうではあるまいと考えられた。

「よいわ、ここでよい、寢所へとおせ」

立ち上がった太郎左衛門はまた坐った。

間もなく侍女こしもとに案内されて、素足の指に血などにじませ、かむって来たらしい被衣かつぎを

手に持ち、髪を乱し顔蒼ざめた早瀬が、ソワソワした様子ではいつて来た。

「お父様！」

とすが縋るように坐った。

「……………」

無言でそういう様子を見詰め、太郎左衛門はとむねをついた。

(尋常でない出来事らしい)

そう思ったからである。

「頼春は？」

とまず訊ねた。

「は、はい、良人おっと頼春は……………」

バラバラと涙をこぼしたが、

「わたくし無理に酒すすめまして、酔わせて深い眠りに入らせ……」

「……………」

「わたくし一人家をぬけ出し、ま、参りましてござります」

「……………」

親子は烈しく眼を見詰め合つた。

六十近い太郎左衛門の、白髪しらがの多い鬢びんの毛が、黒塗り燭台の灯に照らされて、銀線のよ
うに顫えて見えた。

「早瀬！」

と忍ばせた声ではあつたが、強い烈しい力を持った声で、

「父を信じて……さあ何事も……心しずめて……云うがよいぞ。……頼春何とかいたしたかな！」

「お父様！」

とこちらも必死！——早瀬も必死の声を顫わせ、

「宮方ご謀反！ 良人頼春も！ ……」

「娘！」

「あツ……いえいえ……お父様！」

早瀬はグツと唾をのんだ。

親子ではあるがこれを機会に、敵味方になろうもしれぬ！
云えぬ！ 今になって早瀬は感付いた。
（知りたいはお父様のお心持ち！）
では迂濶うかつには！ 迂濶には

「お父様！」

とさぐるように、

「宮方ご謀反あそばすやもしれずと、この頃世上に行われまする取り沙汰、お父上には、お父上には？ ……」

「うむ」

と太郎左衛門は領うなずいたが、

「鎌倉の悪虐日ごとに増し、両六波羅の非義非道、事ごとに加わるとの非難高く、天の憎しみ神の怒り、北条一族の滅びること、三年は過ぎじと取り沙汰されおること、この父も承知ではあるが……」

「ここで云いやめて娘の顔を見た。」

——官方ご謀反、良人頼春もと、こう一気に云つて来ながら、にわかには語を変え様子を
 変え、世上の取り沙汰などと云い出したことが、不思議に思われたからであつた。

(娘といつても心許されぬ。家を去つて良人にかしずけば、親より良人に従くが至当！
 ……これは様子を見ねばなるまい)

こう思つたからである。

が、早瀬は父親の心が、そうあろうとは感づかなかつたらしい。

「お父様！」

とはずんだ声で、

「取り沙汰真実となりまして、官方武家方お手切れとなり、もしも合戦となりましたなら
 ？」

「大日本はいわゆる神国、朝敵となつて榮えしもの、古往今来一人もなし、近くはたいらの平
 相しやうこく国清盛入道、唐土天竺てんしゆが征せめて来ようと、傾くまじき勢威であつたが、頼朝義経院
 宣を奉じて、仁義の戦起いくさこして以来、たたかえば敗けたたかえば破れ、一門ことごとく西
 海に沈み、子孫ほろびしが何より証拠……」

「おおおそれでは官方武家方、お手切れ合戦となりましたら、官方ご勝利でござります

るか!」

「宮方ご勝利! 何んの疑がい! つもつても見よ当今の鎌倉、また南北六波羅の殿ばら、奢り増長我慢熾烈、神明仏陀の怒りの矢先、眼にこそ見えね迫りおるに、一朝宮方と干戈かんかに及ばば、土崩瓦壊疑がいなし!」

「それでは……それでは……お父様も……身六波羅殿のご被官ながら……お心はどうから宮方へ?」

「この国に生きとし生けるもの、心はことごとく宮方よ!」

「それ聞いて安堵あんどいたしました。……どうなることかと思つたに……それ聞いて安堵いたしました」

早瀬は太郎左衛門へひしと縋つた。

「宮方ご謀反にござりまするぞえ!」

「……………」

「この日頃良人頼春の様子、ソワソワとしておちつかず、そうかと思うと物憂そうに……それで妾いろいろさまざま、言葉設けて探りましたところ、今宵になって寢所の床で、はじめて明かした一大事! ……お父様、宮方ご謀反! 日野中納言様や俊基様や、そのほ

かの公卿衆や坊様にまじり、多治見ノ四郎二郎国長様も、土岐十郎頼兼様も、そうしてそうして良人頼春も！」

「うむ」

「ことごとく一味徒党となり、無礼講と称しては相集まり、その実ひそかに六波羅征めの……」

「うむ」

「謀議をいたしておりますとか」

「うむ」

「聞きました時には胸つぶれ、良人は宮方父上は武家方！ 挿まった妾はどっちへつこうかと！ ……でも安堵いたしました。……お父上のお心が宮方へ……」

「……………」

太郎左衛門はヌツと立った。

「娘！」

その声の凄じさ！

「不愍な！」

眼には涙があつた。

「不覚者は土岐頼春！」

「お父様！」

「よく聞け！」

と太郎左衛門は悲哀と苦痛と、怒りとをこきませた烈しい眼で、早瀬を上から見下ろした。

「『春の野に、あさる雉子きぎすのつま恋に、おのが在所ありかを人に知れつつ』と、うたわれた古歌を存じおるか！ その雉子きぎすこそ土岐頼春！ あつばれ右近府の蔵人くらんどとして、若いながらも武名高く、素破すわや合戦とある時には、一方の物ものがしら頭ともなる男が、女房の愛に引かされて、さほどの大事をうかうかと明かし、頼まれたお方を裏切るとは！ ……我は鎌倉譜代の武士、六波羅の重恩受けたる身、七百余騎を預かりおる、軍奉行の職にある者じゃ！ ……かからん時に何んの何んの、宮方などに心寄せようや！ ……そうとも知らずうかうか参り、良人の秘密を告げた汝おのれ、早瀬、汝も汝も不覚！ ……が、不慙！」

と太郎左衛門は、また坐つて腕を組んだ。

早瀬の顔色は藍あゐのようであつた。

その唇は土気色で、体はガタガタ顫えていた。

はじめて知った父の心！ つれて危険な良人の身の上！

(どうしようどうしよう！)

あさはかとも不覚とも、云いようない自分の所業！

(どうしようどうしよう！)

おどついた眼で父の顔色を、ただに窺うかがうばかりであつた。

「娘！」

「は、はい」

といざり寄つた。

「父はこれより六波羅殿へ伺候し……」

「……………」

「事情つぶさに言上し、今宵のうちに手配りし、一挙に宮方を討つて取る！」

「……………」

「不愼なはそち！ ……そちたち夫婦！」

「……………」

「生きていたいか!？」

「お父様!」

「頼春といつまでも添っていたいか!？」

「……………」

「であろうよ、添っていたいであろうよ。……………では……………」

とグツと眼を据えた。

「日本一の不覚者、前代未聞の臆病者、土道の廃れ、人の裏切り者! ……この汚名をめいを未代まで背負い、返り忠の焼き印を顔に押し、頼春も生きろそちも生きろ! ……生き得る手段はただ一つ!」

「は、はい」

「頼春をここへ呼び……………」

「は、はい」

「彼の口より謀反のあらまし……………」

「は、はい」

「云わせて密告させることじや!」

「は、はい」

「人やって即刻呼び寄せようぞ」

「は、はい」

と早瀬は手を合わせた。

「嬉しいか？」

「添うてさえ……」

「添うてさえおれれば嬉しいか」

無言で早瀬は頷いた。

「未練！……が、女心だ！」

閉じた太郎左衛門のめがしち眼頭からも、涙がバラバラと膝に落ちた。

この夜小次郎は桂かつらこ子の館の、奥の部屋で話していた。

朗らかな団欒

どこからまぎれこんだ馬追であろうか、燭台の裾を巡りながら、時々たちどまって鳴いたりした。

鳴く時青い羽根がこまかく顫えた。

桂子と浮藻と小次郎とが、その横でしめやかに話していた。

そうしてこの部屋の出入り口に近い、片寄ったところには大蔵ヶ谷右衛門が、大おおまさ鉞かりを砥石とへかけて、ゴシゴシと磨いでいた。

右衛門は桂子の股肱ここうの臣で、桂子のためなら水火の中であろうと、笑って平然とはいって行くほどの、忠誠の心の持ち主であり、仁に近いほどの木訥漢ぼくとつかんであったが、剛勇無双りよりよく、力絶倫、二十貫の鉞まさかりを揮ふるわせたら、面おもてに立つ者はないほどであった。

それでいて他面諧謔漢かいてやくかんで、見かけに似合わぬ多才児たさいでもあり、この道場では桂子に代わって、泣き男だの幽霊女だの、稽古をつけてさえいるのであった。

小次郎がこの館へはじめて来た時、弓の折れの鞭むちをひっさげて、例の稽古をつけていた男が、この大蔵ヶ谷右衛門なのである。

「……ウナイ男に慕われて、もう一人の男にも慕われて、どっちへも行けずにママのテコナは、真間ままの入江へ身を沈めて、若い身空を死んでしまったんですものねえ、テコナはほ

んとうに可哀そうよ」

いろ紙で雛ひなを折りながら、そう浮藻は小次郎へ云った。

「はあ」

と小次郎は返辞をした。

「阿呆な女とも云えますなあ」

滑なめらかな細い浮藻の指先が、器用に動くのをうつとりと見ながら、小次郎は云いつづけた。

「もう少し気の利いたやり方だつて、ありそうなものに思われますがなあ」

「どうして？」

と浮藻は眼をあげた。

不平そうな色が眼に出ていた。

「二人の男を順番に取つて、二人ながら満足させ、自分でも満足するという法など……」

「小次郎や」

とたしなめるように、今夜は不思議と女らしく、膝の上へ派手やかな縫い物を置き、針をはこばせていた桂子が云った。

「娘に頬を染めさせるようなことは、なるべく謹つつしんで云わない方がいいよ」

「はあ」

「小次郎や」

とまた桂子は云った。

「すこしわたし苦になっているんだよ」

「はあ」

「その『はあ』という言葉だがねえ」

「はあ」

「それぞれ、それがいけないのさ。田舎いなかびでいて間が抜けていて、下卑げびてさえいる『はあ』という言葉、それを使うとお前さんの縹きりよう緻ちが、——綺麗すぎるほど綺麗な小次郎が、一度に田舎者になってしまって、どうにも嬉しくないのだよ」

「へい」

「あれ、『へい』はもつと悪いよ」

「はあ」

「あれあれ元へ戻ってしまった」

「……………」

「今度は唾者おしになったのね」

「何んと云つたらいいのです」

「『はい』とお云いな、ただ『はい』とねえ」

「はい」

「及第だわ、満点よ」

「はあ」

「おや」

「ハッハッハッ『はい』」

ここでみんなは笑いだしてしまった。

で、この部屋にはなごやかな気分が、ひとしきり拡がりただよった。

馬追うまおいは燭台を巡りながら、毛のような触覚をふるわせたり、青い羽根を時々ほころば

せたりした。

「右衛門や、まだ磨ぐとのかい」

と桂子は右衛門へ話を向けた。

「いいかげんでおいたらよいではないか」

「お姫様」

と右衛門は云った。

「この鉞まさかりを磨ぐということは、私の趣味でござりましてな。これさえ磨いでおきますると、

私は心持ちよろしいので」

「大変物騒な趣味なんだねえ」

「世間が物騒になりますると、趣味までが物騒になりまする」

「蹴球けまりだの双六だのというようなものは、どうやらお前には向かないそうな」

「ありやア公卿くげ方の遊戯でござりますよ。私どもには向きませんなあ」

「そう公卿方をコキ下ろしてはいけない。どうして当今のお公卿様方は、勇猛果敢でいらつしやるよ」

「そういうお方もいらつしやいますとも。たとえば日野資朝様、たとえば藤原俊基様など。……が、少数でござりますよ。……爾余のお公卿様と来たひには、アツハツハツハツ、他愛ありません。……ヨイシヨヨイシヨ！ヨイシヨヨイシヨ！……大分磨げましてござります」

鯖さばの腹のようないさぎよい光に、大鍼は光り出した。

「ねえ小次郎さま」

と浮藻は云った。

「ではあなたはママのテコナは、阿呆の女だとおっしゃるのね。……ではあなたにはママのテコナの、純な生き一本の心持ちが、ちつともおわかりになりませんか」

ずいぶん不平だというように、そう浮藻は云い出した。

「と云うわけでもありませんが……ええと、さあ、何んて云おう……融通の利かない不経済な……ええと、さあ何んて云おう」

すこしこわそうに桂子の方を見、当惑したように鼻に皺しわをよせ、

「わたしでありましたら死ぬことだけはやめて……ええと、それから、ええと、それから……」

「ええとそれからどうなさいますの？」

浮藻はひどく好奇心を持って、その後の言葉を待たらしく、雛を折る手を止めてしまった。

「さつきも私申しましたとおり、まず一人を満足させ、そうして自分も満足し……」

「それだけでいいじやありませんか。……一人と一人とだけでネエ小次郎様！」
熱を持った烈しい処女おとめの眼で、浮藻は小次郎を見詰めながら云った。

「一人と一人だけでネエ小次郎様！」

「はい、しかし、もう一人の男に、テコナという女は恋された筈で……」

「ですから自分から死んだのよ」

「そいつが私にはわからないんで……」

「どうしてお解りになりませんか？」

「どうしてと行ってそんな場合には……」

「死ぬよりほかはありませんわね」

「え、そいつが私にはわかりませんので」

「どうしてですか、小次郎さん？」

「二人の男に恋された以上……」

「どっちへも行けなければ死にますわねえ」

「いえ、両方へ行きますので」

「あら、そんなこと出来ると思つて！」

「何んですって！」

とかえって驚き、

「私はいつもそうして来ましたので……」

「小次郎や」

と桂子が云った。

とたんに鉞まさかりが宙へ上がった。

右衛門が鉞をふりあげたのである。

「さあ磨とげた！ 斬れるぞ斬れるぞ！ 時々鉞も血を吸わないと、精気を失い元気を失う！ ……斬られて血祭りにあげられたい奴、どこかにないか、あれば出て来い！ ……女たらし、軟弱漢、不正直者、謀反人、忠義の心忘れた奴！ ……北条高時、弓削ゆげノ道鏡、蘇我の入鹿いるか、川上梟帥かわかみたける、こういう奴ならいつでも斬る！ ……われらがご主人桂子様ご姉妹、ご姉妹に、盾たてつく人間あらば、それこそ情け用捨はせぬ！ ……すぐに斬る、遠慮なく斬る！」

頭上で鉞をふり廻した。

燈火ともしびに反射した鉞の刃は、蛍合戦の時数千の蛍が、塊かたまって巨大な球となり、それが

虚空に渦巻くがように、青光り閃き渦をまいた。

小次郎は顫えて首をちぢめた。

(おれ斬られる！ あぶねえあぶねえ！)

「右衛門や」

と桂子は云った。たしなめるような声であった。

「お前の心持ちはわかつているよ。……口に出してあまり云わないがいいよ。……お前の武勇も解っているよ。……大事に蔵しまっておくがいいよ」

「はい」

と右衛門は穩おとなしく云った。

そうして鉞を床の上へつき、その柄へ躰をもたせかけた。

「こうしてこのお部屋の出入り口を、この鉞で守りますが、私の趣味でござります」

——で、もう首をうなだれて、立ったままで居眠りをはじめ出した。

顫あごひげ鬚あごひげたくましい彼の顔は、すぐに無邪気なものになった。

「小次郎様」

と浮藻は云った。

「ママのテコナの心持ちが、ではどうしてもあなた様には……」

（おれ降参だ）

と小次郎は思った。

（おれ、とんだことを云い出してしまった。おれ、一生云われるぞ）

「小次郎様」

と浮藻は云った。

「ママのテコナの心持ちが、わたしの心持ちでございますの。……でも妾はテコナのように、けっして二人の男などに、思われても恋されてもおりませぬ。……いいえいいえ誰も一人も、わたしなど恋してはくさいませんの。……でもわたしは、妾の方では、一人のお方を、たった一人のお方を……とても恋しておりますのよ。……でもそのお方は妾のこ
となど……」

この時この館の玄関の方から、人の声が聞こえて来た。

桂子はそれへ聞き耳を立てた。

右衛門もカツと眼をあいた。

「小次郎様」

と浮藻は云つた。

浮藻には玄関からの人の声など、耳に聞こえては来ないらしかった。

「ママのテコナは二人の男に……」

人声は乱れた足音と共に、この部屋の方へ寄せて来た。

右衛門はユラリと鉞をあげた。

「でも妾は一人のお方に……」

足音はこの部屋の前まで来た。

「お姫様、一大事！」

部屋の外の男の声が叫んだ。

「誰だ——ッ」

と右衛門は怒号した。

「右衛門か俺じゃ、袈裟太郎じゃ！……ここ開けてくれ一大事じゃ！」

「うむ袈裟太郎か！ 何んだ何んだ！」

右衛門はガラガラと扉をあけた。

と、廊下には細作かんじゃが係りの、風見かきみの袈裟太郎が額に汗かき、大息ついてかしこまってい

たが、

「両六波羅騒動じゃ！ 内裡攻めんと大騒動じゃ！」

六波羅探題

「ナニ六波羅が内裡を攻める!!」

こう云いながら立ち上がったのは、身をひきしめていた桂子であった。

ツカツカと戸口へ近寄ったが、

「袈裟太郎や、くわしくお云い！」

「は」

と袈裟太郎は一揖し、

「お命令によりまして私はじめ、雉六、石丸、棕右衛門など、六波羅方の動静を、日夜うかがいおりましたところ、今夜にいたりまして活漕となり、早馬数騎鎌倉さして、馳せ下るよう見うけましたれば、途中に要して取って抑え、事情責め問いましたるところ、官方ご謀反内通者あつて分明、そこで鎌倉へ注進し、兵を乞うとの意外の話……」

「内通者あつて分明というか？ 内通者あつて！ 内通者あつて？」

桂子の顔には不安と疑惑とが、この時にわかに現われた。

「で、まずこの旨何むねより先に、お知らせいたそうと存じまして……」

袈裟太郎の言葉の終わらぬうちに、またもや足音あわただしく響かせ、二人の男が駆け込んで来たが、

「姫君様 一大事！」

「六波羅にては、兵どもを集め、到着づけはじめましてござります！」

一人は細作かんじやの石丸であり、もう一人も細作の椋右衛門であつた。

「仔細をお云い！ さあさあ早く！」

「は」

と云つたは石丸で、

「六波羅探題の大門ひらき、篝火かがりび火さかんに燃えたたせ、軍奉行いくさぶぎようの斎藤太郎左衛門、

同じく隅田弾正少弼しょうひつ、床几しょうぎを立てての検分のありさま、あまりに由々ゆゆしく存じまし

たれば、雑兵をとらえ訊しましたるところ、姫君様にも夙つとにご存知の、摂州葛葉くずはの莊園に

おいて、地下侍じげさむらいども代官に反そむき、合戦に及びおりますが、その合戦に兵を送つて、鎮

定するまでの話よと、その雑兵めは申しましたが……」

「それは偽りいつわでござりまして、そのように世間態をとりつくろい、その実は四十八箇所の警護の武士さむらいと、在京の武士とを召し集め、内裡攻めんとだいりの謀りごとの趣き、探り知りましてござりまする」

と、すぐに棕右衛門が後をつづけた。

「おおおおそれから、おおおおそれから!!」

と桂子はイライラと後をうながした。

「内通者は誰だ！ お云いお云い！」

「美濃ノ国は土岐の住人、土岐右近ノ藏人頼春とか！」

「いけねえ！」

と思わず叫んだは、この時まで桂子の背後に立ち、浮藻に片手を握らせたまま、話を聞いていた小次郎であった。

「兄上じや！ 内通者は！」

——ギラギラとこの時光るものがあつた。

右衛門のひっさげていた大おおまさかり鉞で、それがこの時頭上に高く、ユラユラユラと上がつ

たからである。

「さあこの鉞血が吸えるぞ！ 裏切り者の血が吸えるぞ！」

「兵どもの噂によりますれば……」

と石丸が忙しく後をつづけた。

「土岐頼春その最初は、宮方のお味方でありましたところ、妻の愛に雄心ゆるみ、裏切り内通いたしました由！」

「やられた！」

と桂子が地団太を踏んで叫んだ。

「鬼火の姥めにしてやられた！ ……あの女の予言にそっくりじゃ！ ……が、こうしてはいられない！ せめて気の毒な人々の、家族なりとも家族なりとも！ ……」

ここは五条松原で、六波羅探題の大屋敷が、篝火、幔幕、槍、長柄、弓矢によって厳めしく、さも物々しく装われていた。

この六波羅の探題は、京都及び畿内近国、関西諸国一般の政務と、軍事とをつかさどる重職で、その威権の重いことは、鎌倉の執権につくほどであり、必ず北条氏一族に限って、

任ぜられることになっていた。

この時の探題は北条範貞のりきたで、いま甲冑かっちゆうに身を固め、侍所さむらいどころの奥に控えていた。左右に居流れたは検断所の司つかさ、評定衆、問注所の司、引付衆ひきつけしゆう、越訴奉行おつそ、祇候人しこうにんの人々で、同じくいずれも武装していた。

大庭は雑沓そのものであった。

三鱗みつろうこの定紋の大幔幕を、三方一面に引きまわし、大篝火でそれを照らし、板盾、竹盾で四方を固め長柄ながなた、薙刀なぎなたで警護した中を、行く人々来る人々、ことごとく甲冑で身を鎧よろつていた。

聞こえるものは馬の嘶いななき、武器の触れ合つて立てる音、怒声、制止声、撃柝げきたくの音。輝くものは抜き身の刃。

中央の床几に腰うちかけ、到着を告ぐる人々に、いちいち会釈えしやくをしてしている者は、斎藤太郎左衛門利行で、その傍らかたわに引き添っているのは、土岐藏人頼春であった。

小桜こいざくら緘くわの胴丸たうまわしに、五枚兜をわざと外し、丸鞘太刀を佩いている彼は、裏切りをした罪惡に、良心苦痛を覚えると見え、顔色蒼ざめ唇ふるえ、視線定まらずただあちこちと、狐つきかのように見廻していた。

舅太郎左衛門より使者が来て、その館へ行ってみれば、妻の早瀬の姿があった。それで一切の事情が解った。

舅に強請されるままに、彼は舅と連れ立って、この夜ただちに探題へ伺候し、官方ご謀反の一切を、返り忠して密告したのである。

で、今は武家方の一人として、ここに並んでいるのであった。

この物々しい騒動も、自分の密告のためかと思えば、恐ろしく思われてならないのであった。

まず軍いくさの血祭りとして、土岐十郎頼兼と、多治見ノ四郎二郎国長とを、その館やかたにこれより攻めて討つてとるとのことであった。

(二人ながら俺の一族だ！)

その一族が自分の密告で命を捨てなければならぬのであった。

(密告！ 裏切り！ 返り忠！ ……武士として風上に置けぬ所業！ ……それをしたのがこの俺なのだ！)

身の置き所ない思いであった。

その思いが刻一刻に、彼の心に強まって来た。

(それもこれも女房可愛さからだった！)

「ベツ」

と思わず唾を吐いた。

今ではその妻が穢きたならしいものに、しきりに思われてならないのであった。

(なぜあれほどの一大事を、妻などに俺は話したのだろう!!)

次第に後悔が濃くなつて来た。

(俺に酒を強しい酔わせて眠らせ、出しぬいて舅の屋敷へ行き、俺の話した官方ご謀反――

この話を舅に打ち明けたとは！　これが人の妻のやり口か！)

良人おっと可愛さの心持ちから、行なつた所業だということは、もちろん頼春にもわかつていた。

(とはいえそれも一つの裏切りだ！)

愛から出た妻の裏切り！

(良人が妻の愛に溺れ、頼まれたお方を裏切れれば、妻は良人を愛するあまりに、良人を裏切つて人非人とする！　……裏切り者と裏切り者！　……それも愛から！　呪うべき愛から！)

この間も到着の武士どもは、一方の木戸から現われて、さも勇ましく宣りをあげ、到着の帳へ名を記させ、別の木戸から出て行つた。

唐綾緘の鎧を着、柿形兜を猪首にかむり、洩染め手綱に蒔黄の母衣、こぼれ桜の蒔絵の鞍、五色の厚総かけたる青駒、これに打ち乗つてあらわれた武士は、

「清の党の旗頭、葛西ノ忠太候うなり、お書き留めくだされい」と宣つて通つた。

白糸緘に胡麻幹小札、この大鎧を一着し、真紅の鉢巻をムズと締め、黄母衣に木地の鞍置かせ、浅黄手綱の黒駒に乗つたは、濃州方県の城の主、明石播磨之介貞朝であつたが、

「談天門の攻め口は、わが手にて候うぞ」

と大音に呼ばわり、カラカラと笑つて通りすぎた。

桐原駒に沃懸地の鞍、蒔黄緘に紅裾濃、桃形兜に白の母衣、この武士も悠々と通つたが、

「名古屋の前司候うなり、美福門はわが手にて攻める、余人かならず手出し給うな」と、颯爽と宣つて通りすぎた。

間もなく二騎が並んで通った。

一人は陶山時秀で、山吹緘の鎧を着、火焰鍋尻の兜をかむり、宿月毛の駒に乗り、紫手綱を握っていた。もう一人の武士は河野治国で、卯の花緘の鎧を着、兜はわざと侍者に持たせ、浅黄鬱金の母衣をかけ、紅手綱の白駒にのり、時秀と並んで歩ませて来たが、「安嘉、達知の二つの門は、我ら兩人にて受け取るべし、違算あるべからず」と豪笑し、別の木戸から引き上げて行つた。

来る武士通る武士みな朗らかで、ただ戦場での功名手柄に、心を打ち込んでいるらしく、ほかに憂いはなさそうであつた。

伊勢平氏美濃侍、近江の山本姉川衆、伊賀の服部三河の足助、矢矧衆の兵どもが、色さまぎまの旗標立て、黄や緋緘や白檀磨きや、啄木、花革、藤緘や、さては染め革や柑子革や、沢瀉などの鎧を着、連銭葦毛、虎月毛、四つ白足や白額や、柑子栗毛や姫栗毛や、好みの駒にまたがって、暁近い空の光と、篝火とに姿明るめて、雄々しく来ては宣りをあげ、別の木戸から消えて行つた。

来る人の姿、行く人の姿、頼春の眼には夢の中の人物、遠い他国の武者押しの場の、他人かのように思われ見えた。

心がそこにないからであつた。

と、一人の若い武士が、幔幕をかかげてはいつて来たが、太郎左衛門に近寄つて、その耳もとで囁くと、ふたたび幔幕をかかげて去つた。

「頼春」

と太郎左衛門は厳めしく云つた。

「北きたどの殿（探題北条範貞の事）ご誼じゃよ！ そちへのご誼じゃ！」

「……………」

ハツと夢から覚めたように、頼春は舅の顔を見た。

「十郎頼兼と多治見ノ四郎二郎、この二人を討つて取る。ついでにはそち勢に加わり、二人の者の首しゆきゆう級きゆうの真偽、見究めかたがた参れとのこと！ 早々出発するがよかろう」

「あの私が頼兼、国長の……」

頼春はガチガチ歯を鳴らした。

「討手うっての勢に加わりますので？」

「そうだ」

と太郎左衛門は鋭く云つた。

「北殿ご誼じゃ、すぐ打ち立て！」

「私が一族の頼兼と国長を！……ソ、それはあまりに無惨！」

「黙れ！」

と太郎左衛門は一喝かつした。

「そちの返り忠神妙ながら、なお本心こころもとないと、おぼしめしての北殿ご誼！ これ解らぬか、迂濶者め！」

「じゃと申して、じゃと申して、現在一族の頼兼、国長を……」

頼春はハラハラと涙をこぼした。

「この儀ばかりは！ この儀ばかりは！」

「私情じゃ！」

と太郎左衛門は吼ほえるように云った。

「北殿ご誼は公おごと！ 私情をもつて拒むとあつては、頼春、せつかくの返り忠むだになるぞよ、水の泡となるぞよ」

「たとえ水の泡になりましたも……」

「これ」

と太郎左衛門も涙を眼に溜め、声を沈ませて囁くように云った。

「早瀬の心変わぬか」

「早瀬！……妻！……おお妻ゆえに！」

「そちのごご誕拒んだが最後、謀反の心根こころねいまだ消えずと、捕えられて縛り首！　しかも頼兼、国長は、運命変わらず討たれるのじゃ！」

「……………」

「そち死なば早瀬は生きていまい」

「……………」

「娘と婿とに先立たれて、ワ、わしも生きていぬ！」

「舅殿！」

「頼春行け！」

「は、はい」

「※悔ざんげの道、贖しよくざい罪ざいの浄きよめ、他きよにあらう、他日きよほかに…………」

「は、はい」

「な」

「はい」

とフラフラと立った。

(すた 廃れた武士だ、廃れついでに！)

頼春はフラフラと歩いて行つた。

みつろうこ 三 鱗の旗をたまわつて、宮方征討に向かつたのは、おぐし 小串三郎ろうざえものんじよう 左衛門尉のりゆき 範行と、

山本九郎時綱とであつた。

従う勢は五千余騎、六条河原へ打つて出いで、ここで勢を二手にわけ、時綱はそのうち二千余騎を率い、土岐頼兼を討つてとるべく、三条堀川へ寄せて行つた。

が、時綱は兵法巧者の、心掛けある武士だったので、このように大勢して押して行つたならば、あたり 四辺動揺して人も出で、それに紛れて十郎頼兼遁のががれて、故郷へ帰ろうもしれぬ。
——こう思つたので三条河原へ、わざと兵を屯たむろさせ、

「頼春殿それがしと参られい」

こう云つてこの軍に附けられて来た、返り忠の土岐藏人頼春を連れ、他に二人の郎党を従え、頼兼の館へ忍びやかに向かつた。

門前に馬をとどめ、小門よりつと中へはいった。

中門の方を窺い見た。

どのい宿直の武士とおぼしい者が、物具、刀、太刀など散らし、枕を外して眠っている姿が、
有明の灯で幽かかすに見えた。

「よし」

と呟いて館を巡り、厩うまやの方へ潜行した。

それから館の背後へ廻った。

(抜け道などあつては一大事)

こう思ったからであつた。

が、背後うしろはことごとく築地で、門より外には道はなかつた。

「よし」

と時綱はまた呟いたが、

「頼春殿、駈け入りませうぞ」

と、この時まで無言で従つて来ていた、頼春の方へ振り返つて云い……

そちが頼春！

……その返辞を待とうともせず、廊から客殿へ駆け上がり、二間まばかり馳はせ通り、ここぞと思われる一間をあけた。

「誰だ！」

と叱るように声をかけ、ふり返り睨んだ武士があつた。

たつた今しがた起きたばかりの、そうしてそこで髪を調べていた、土岐十郎頼兼であつた。

武装している時綱の姿を見ると、一切の事情を知つたらしく、

「心得たり！」

と大音に呼ばわり、傍らの太刀を取り上げて立つた。

つづいて側そばなる障子一枚を、無造作に足で踏み破り、六間の客殿へ躍り出た。

時綱もすぐに後を追つた。

「……………」

「……………」

問答をする必要はなかった。

当面の敵を討って取り、ともかくも遁がれようと思つたらしく、頼兼は奮迅の勢いをもつて、ただし天てんじょう井きつさきに鋒をあてては、刀折れて不覚をとるであろうと、掬すくい斬りに斬りかかった。

(この敵広庭へおびき出し、あわよくば生け捕りにしてやろう)

こう時綱は考えた。

で、うち払いうち払い、背後うしろさがりに退いた。とうとう広庭まで走り出た。

が、必死の頼兼の、鋭い太刀先には敵すべくもなく、次第に時綱はあやうくなつた。

「頼春頼春！」

と時綱は叫んだ。

「背後に廻れ！ 加勢頼むぞ！」

頼春は時綱の遙か背後の、木立の蔭たたずに佇んで、茫然とした心持ちで眺めていたが、こう云われてフラフラと木蔭を出た。

ほとんど機械的に太刀を抜き、アヤツリ人形のようにその太刀をふり上げ、夢遊病者のように進み出た。

その姿を頼兼が見た。

「おお？」

と彼は疑がわしそうに云い、

「ああ！」

とすぐに放心したように云った。

彼は太刀をダラリと下げ、押されたように後へさがった。

その眼は空洞うつろさながらとなり、その唇はポカンと開き、極度の意外にぶつかつた人間が、瞬間に現わす痴呆的表情！——その表情をあらわした。

不意に彼は呻くように云った。

「そちが！ ……頼春！ ……裏切つたとは！ ……一族の ……同じ血の ……一族のそちが ……」

にわかには彼の表情が、何んともいえない変なものに変わった。

怒りか？ 恨みか？ 呪咀のろいか？ 悲しみか？ ……

いやそれ以上のものであつた！

それは憐愍あわれみであるようであつた！

つづいて彼の顔に恥辱の色が、稲妻のようにあらわれた。

名誉ある土岐の一族から、裏切り者の出たことを、自分自身に恥じるかのような、そういう色があらわれた。

彼はにわかにも首をちぢめ、肩を下^{せな}げ背を曲げ、何者かにお詫びでもするように、居縮むいすくような格好をしたが、時綱と頼春とに背を見せて、館の方へクルリと向き、元の寝所の方へ走り出した。

すぐに時綱がその後を追った。と、鬨とぎの聲が門の方から起こった。三条河原に屯たむろしていた、二千の兵が寄せて来たのである。

門を破り築地を乗り越え、六波羅勢はこみ入って来た。

土岐の郎党は眠りからさめ、物具もつけず走り出で、死に物狂いに防戦した。

比較にもならぬ多勢に無勢、頼兼の家臣は一人で十人、二人で百人の敵を受け、けなげに力戦苦闘はしたが、またたく間に斬り立てられた。

と、館の縁の上へ、時綱の姿が現われた。

「土岐頼兼を討ち取ったり。……敵ながらも天晴あっぱれ腹切って死んだわ！ ……首級取くびとったは山本九郎時綱！」

と大音声に呼ばわつて、鋒きつせきに貫いた頼兼の首級を、高くかぎして味方に示した。

ドツと喊かんせい声こゑが湧き起つた。

「主君との討たれて候うぞ！ お供仕つかまつれ！ 一人も生くるな！」

名を惜しむ源氏の流れであり、美濃の名族の土岐の家臣は、こう声々に呼ばわつて、眼にあまる大軍の六波羅勢の中へ、駆け入り駆け入りして切り結び、相撃ちとなつて死ぬ者あり、刺し違えて死ぬ者あり、一人のこらず死に果てた。

生け擒りされた者は一人もなかつた。

頼春はただ茫然としていた。

自分の周囲で討ちつ討たれつ、斬りつ組みつ殺しつ殺されつしている、人と人との戦いも、槍、長柄、太刀の閃きも、馳せ違い入り違う人馬の姿も、ただ「一団となつて動く物」——そうとしか見えなかつた。

その混乱の人馬の渦に、自分も巻かれておりながら、そうして押しやられ突きやられ、怒涛どしとうの中の小舟のように、めちやめちやに揉まれておりながら、彼は何んにも出来なかつた。

ただ一つの恐ろしいものが、幻影のように見えるばかりであつた。

憐愍^{れんびん}を現わした頼兼の眼！

そう！ そればかりが幻影のように見えた。

それにもう一つ、一つの声ばかりが、周囲の叫び声や苦痛の声や、馬の嘶^{いなな}きや太刀打^{たちう}ちの音や、矢叫びの声を貫いて、彼の耳に聞こえて来た。

「そちが！ 頼春！ 裏切ったとは！ ……一族の……同じ血の……一族のそちが！」
この声ばかりが聞こえて来た。

（頼兼は俺を憐れんだのだ！）

怒りならば、軽蔑ならば、憎悪ならば、ないしは呪咀^{じゆそ}ならば、怨みならば、まだまだ救われる余地がある！

そうではなかった！

憐れんでくれたのだ！

（おおお可哀そうに頼春よ、一族の同じ血の俺達を裏切り、生きていたいのか、栄達したいのか！）

こういつて憐れんでくれたのだ！

（たまらない！）と頼春は思った。

渦巻き乱れていた兵どもが、

「引きあげろ！ ソレ引きあげろ！ …… 錦小路高倉へ行け！ 多治見ノ四郎二郎の館へ行け！」

と、口々に叫ぶ声が聞こえて来たのは、それから間もなくのことであつた。と潮の引くように六波羅勢は門から出た。

それに紛れ、それに引かれ、頼春も門から外へ出た。

二千の人馬が京の町を、錦小路高倉の方へ、無二無三に押して行つた。

昨夜多治見の館では、盛んな酒宴が行なわれ、暁近くなつて一同は寝た。呼びよせた遊君や白拍子も、そのまま館に泊まり込んだ。

と、ドツと鬨の声があがつた。

「素破や！」

とばかり四郎二郎は、枕を蹴つて立ち上がった。

傍らに寝ていた白拍子は、五条の白菊という女であつたが、心が健気で機転も利いていた。

隣室へ駈け込むと 鎧櫃よろいびつをあけ、四郎二郎へ打ちかけた。

「神妙！」

と四郎二郎は感謝しながら、手早く上帯うわおびをひきしめた。

この間に白菊は館を駈け廻り、眠っている人々を呼びさました。

四郎二郎国長の郎党に、小笠原孫六という豪の者がいた。

鬨の声を聞くやすぐに飛び起き、鎧はつけず太刀ばかり佩いて、部屋から駈け出で中門へ行き、大門の方を屹きつと見た。

と、築地の上を越して、車の輪の旗一流が、風に靡いているのが見えた。

(小串三郎左衛門範行の旗だ！ さては！)

と仰天し引き返したが、館の四方を駈け巡りながら、

「寄せ手は六波羅の小串の一方！ かかればご主君宮方に附属し、近日事を挙ぐべきの計画、敵に知られての討手うってなるぞ！ ……やわか敵も逃がすまじ！ 我らも敵には従いがた

し！ ……末代までの語り草に、斬つて斬つて斬りまくり、力尽きなば腹切つて死ねや！

降くだるまじきぞ敵に降るな！」

と、大音声に呼ばわった。

これに勇気を獵り立てられ、窮兇の多治見の郎党ばらは、籠手脛当てそこそこにして、太刀を抜き長柄を揮い、槍をしごいて館を走り出で、ヒタヒタと門ぎわへ押し出した。

孫六は手早く甲冑をつけ、二十四差したる胡籙を負い、重籙の弓を小脇に抱き、門の上なる櫓へのぼり、中差しとって打ちつがえ、狭間の板八文字に押しひらき、

「あらことごとしの大勢や、我らの武勇こそ証拠立てられたり！ ……寄せ手の大將は小串殿か！ 不足なき相手なり！ ……近づきて矢一筋請け候え！」

と、大音に呼び大音に呼び、十二束三伏充分に引き、矢筈かくるるばかりとなし、矢声高く切つて放した。

と、真つ先に進んだは、狩野下野前司の郎党、衣摺助房という猛者であつたが、鉢附けの板まで矢先白く射ぬかれ、馬から真つ逆さまに落ちて死んだ。

孫六はこれをはじめとし、差しつめ引きつめさんざんに射、鎧の袖、草摺りの間、冑の鉢下、胸板、脇腹、相手かまわず敵を射た。位置はよし、手練は無双、ただ一本の空矢もなく、二十三人を射て取つた。

一筋の矢が後にのこつた。

これを抜きとつて腰へ差し、胡籙を外して櫓より投げ、

「冥途の旅の用心に、矢一筋残したり、思いのこすこと今はなし、日本一の剛の者の、死に様さまよくご覧じて、やがて貴所方の運命となる日の、お手本なりとなしたまえや！」

こう呼ばわると刀の鋒きつさきを、孫六はガバと口にくわえ、真つ逆さまに櫓より飛んだ。

太刀先およそ一尺あまり、頸うなじに抜けて息絶えた。

この間に多治見の郎党ばらは、館の四方の門をかため、門かぬきをかい重石おもしを宛てがい、籠城の手筈をととのえた。

——いずれはことごとく討たれる身！ が死ぬ前に六波羅勢を、一人なりと多く討つて取ろうと、心を定めての兵法であった。

この決死の兵法には、雲霞うんかのように寄せて来ていた、六波羅勢も恐れをなし、左右そとうなく門を押し破つて、乱人することが出来なかつた。

門ぎわまでは寄せたものの、躊躇ちゆうちよ躊躇ちよせざるを得なかつた。

が、無鉄砲のはやり雄おはあつた。

伊藤彦四郎父子兄弟で、門の扉の破れ目から、向こう見ずに這い込んだ。

「来たわ！」

「単め！」

「不愍な馬鹿者！」

「志は猛く殊勝ながら、この智恵のなき、討ちとれ討ちとれ！」

多治見の郎党は声々に呼ばわり、相手に一太刀さえ合わさせず、ことごとく門ぎわで討つてとつた。

寄せ手の勢はこれを知るや、いよいよ恐怖の思いを強め、かえって門ぎわから退いた。

と、多治見の郎党たちは、あべこべに門をおしひらき、

「討手を承わるほどの人々の、何んという穢き振る舞いぞ、あなたよりおいでないならば、こなたより推参仕る！」

と、傍若無人の声をかけ、嘲笑つて突つ立った。

さすがに怒つた寄せ手の勢は、欺かれるとは夢にも知らず、先陣にあつた五百余人、馬乗り放して歩だちとなり、喚いて門内へ駈け込んだ。

「得たりや痴漢、討つてとれ！」

と、多治見の郎党は扶助け合い、面もふらず斬り立てた。

死を恐れざる二十余人に、斬りたてられ突き立てられ、五百余人の六波羅勢は、ここに討たれかしこに討たれ、爾余の輩算を乱し、門の外へ退いた。

が、眼にあまる大勢であつた。

忽ち二陣が駈け入つた。

「ごさんなれ、斬り崩せ！」

多治見勢は競つてかかつた。

これも見る間に斬り立てられ、ダラダラと門外へ退いた。

辰の刻よりはじまつて、午の刻まで戦いつづけたが、二十余人の多治見勢に、二千の六

波羅勢は敵しかね、要害とてない館一つを、陥落しかねて持てあました。

が、この時あらた新手の勢が——すなわち土岐十郎頼兼を討つた、山本九郎時綱の姿が、この館の背後に廻り、館に続いている民家を破壊し、館の築地と門とを破り、大挙して乱入した。

と、見てとつた小串勢は、

「多治見の討手は我らが役目、余人に功を奪われるな！ 今こそ進め！ 揉みつぶせや！」
と、表門から乱入した。

腹背に大軍を引き受けて、今はこれまでと覚悟を定めた、多治見ノ四郎二郎国長は、この時まで中門に床しょうぎ几を立て、大將軍のごとく控えていたが、

「今はこれまでぞ、死に恥じさらすな！ 殺生もこれまでぞ、雑兵ばら討つな！ いさぎよく刺し違えて死ねや死ねや！」

と、大音声に呼ばわった。

この一言に多治見の郎党は、持ち場持ち場からことごとく離れ、国長の周囲に集まった。見てとった裏門方の勢は——すなわち時綱の一隊は、先を争って寄せて来た。

その勢の中に頼春がいた。

土岐藏人頼春がいた。

放心状態でありながら、押され、引かれ、揉まれ、突かれて、ここまで走って来たのであつた。

それへ国長の瞳が向いた。

「おお！」

と彼は怪訝けげんそうに云った。

「ああ！」

と続いて驚いたように云った。

「おのれは頼春！ ……そちが、頼春が！ ……六波羅方にいようとは！ ……おおおお

さてはおのれが裏切り！ ……おのれが裏切りいたしたな！」

国長は叫ぶと床几からはなれ、大勢の敵のいるものも忘れ、ツカツカと中門から外へでた。

「われらが宮方へ加担のこと、いかがあつて敵に知られ、今こんぎよう 暁討手下つたかと、心にいぶかしく思っていたが、これでわかった、汝おのれの裏切り！ おのれの裏切りによって知れたのじゃな！ ……何んといおうぞ、大虐極悪！ ……天も許さぬ地も許さぬ！ ……ヨ、頼春ウーツ！ おのれがおのれが！」

国長の声は血を吐くようであつた。

「おのれの裏切り、おのれの返り忠、尋常一様のものではないぞ！ ……日本は神国そのご皇統は、一筋にして御神みかみより出ている！ ……われらが今回の企てこそは、この大本おおもとに帰さんとして、なかごろ大本をあやまつたところの、越権専横の武臣北条を、ほろぼすところにかか関つておるのじゃ！ さればこのたびの汝の所業は、神の界くにへの裏切りじゃぞ！ ……許さるる期ときあるまいぞよ！ ……日夜念々神の怒り、おのれの心を苦しめるであらうぞ！ 承久以来、この日本ひのもとに、大間違ひの言葉が起こつた！ 『宮方ご謀反』というこの言葉じゃ！ ……神の界くにに属する宮方に、いっさい何んのご謀反あらうぞ！ ……

この一点に心づかば、行動に間違ひなかつたであらうに！ ……が、国長一族の誼みに、最後の^{はなむけ}別そちに進ぜる！ 『現世において安心を得、後世^{じょうぶつ}成仏せんと思わば、神の界^{くに}に属しまつる御一方^{おんひとかた}より、許すとの一言承われ！』これが別、今はこれまで！ ……おおおそれにしても死の間際に、真個^{しんこ}の謀反人を一族に持ち、恥じなきその顔を見ようとは！ ——冥路^{よみじ}の障り^{さわ}、あら無念や！ ……が、そのためこの国長、いよいよ今生に未練失せたわ！ 頼春ウーツ」

とズカズカまた前へ出た。

「行く道をあやまらぬこの国長が、一族の不覚者の裏切り行為を、恥じながら死ぬ死にざまを見て、おのれ^{おのれ}※悔^{ざんげ}の心を起こし、余生をあやまらず踏み行なえ！」

突つ立つたまま卯の花^{うづし}緘^{よろい}の、鎧の胸をユサと搔き上げ、草摺りの上を一文字に、鎧通しで搔つ切つた。

ほとばしる血をものともせず、傷口から片手さし入れて、^{はらわた}腸ムズと引きちぎるや、頼春の顔めがけて投げつけ、自身^{おのれ}は仆れて息絶えた。

「素破^{すわ}ご主君^{しゅくん}ご生^{しょうがい}害^{がい}ぞ！ 死ねや死ねや我らも死ねや！ ご主君のお供仕れ！」

と、中門に並居^{なみい}た郎党^{らうたう}たちは、こう叫ぶと互いに刺し違えた。

二十余人のことごとくの郎党、敵を二百七十三人まで殺し、自分たちは一人も捕えられず、立派にこうして死んだのである。

この振る舞いには六波羅勢も、感に堪えて泣く者さえあつた。
が、やがて人々は叫んだ。

「勇士の首級申し受けよ！」

死骸へ向かつて走りかかった。

頼春はこの時気絶して、地に俯向けうつむに仆たおれていたが、蘇よみがえ生えつて顔を上げた。
その顔には国長によつて投げつけられた腸が、赤黒くベツタリと着いていた。

「夜か！ 暗い！ 闇だ闇だ！」

讒言うわごとのように頼春は云い、両手で顔を搔きむしつた。腸が爪によつて剥はぎとられた。
「眼が見えぬ！」

と頼春は呻いた。

国長の腸が——悪血が——いやいや怨恨うらみと呪咀のろいの血が、頼春の両眼へしたたかはいり、
その眼を盲目にしたらしい。

大木戸の異変

それから三日の日が経った。

山伏の金地院こんじいんはんがく範覚はんかくが、伏見街道の出入り口で、群集を相手に吼えていた。

「官方ご謀反とうとう潰つぶえた。……ナニサこんなことはどうの昔から、俺おれらや姥うばには解わかっていたのさ。……姥おばというのはほかでもねえ、みなさまご存知の鬼火の姥おばさ。……姥おばの明察神のごとしだからなあ。……裏切り者があらわれて、官方ご謀反潰つぶえるとな、ちやアんと予言をしていたものさ。……その姥は何者か？ 探題北条範貞様の、カ、隠し、メ、目付け！ ……おつといけねえ、ここまで云つちやアいけねえ。……が、ともかくも今日こんにち日にちじやア、大変もねえ勢力だ。……今回の勲功いやちことあつて、凄すごいようなご褒美ほめいたただいた上に、私わたくし設せの女検非違使けびいし——のようなものにご任官だ！ ……待まちったり、任官はちとおかしい。官位を貰もらったんじやアないからなあ。……私事に過ぎないんだからなあ。……何んといおう？ さあ困こまった。……ナ―二構くまうものか、困こまったことなど、いつさい学者におしつけてしまって、やつぱり任官ということにしよう！ ……女検非違使にんくわんに任官した姥おば、昨日今日の忙いそしきといつたらないよ。……洛の内外を駆け巡り、官方に属した奴やつばら

の余類を、神変自在の見通しで、さがし求めているのだからなあ。……縁につながるこの範覚殿も、そこで忙しいという次第さ。……ナ、何んだって、因縁を云えって？ 俺と姥との因縁を云えって？ ……アツハツハツ、こいつは困る！ ちと云いにくい因縁だからなあ。……が、要するに色っぽい、色っぽい因縁というやつさ」

酒に酔っている範覚でもあった。

得意絶頂の彼でもあった。

頼春をして裏切りさせた、その功の一半は鬼火の姥が、頼春の心をそそのかし、それに押しやったということを、鬼火の姥の言上によって、北条範貞は知ることが出来、事実姥に褒美をとらせ、姥の同類一統にも、厚く物を賄まかなった上、なお今後ご用をつとめるようにとの、ご誕じょうをさえ内密に賜たまったのであった。

姥の一党で姥の情夫の、この金地院範覚など、もつとも多額に賄まわれた方で、得意はまさに絶頂なのであった。

行衣の下へ腹巻を着、籠手こてさえつけた範覚は、一方の物頭にでもなった気で、厳めしく物々しく振る舞うのであった。

が、素性は争われず、それにそうでない平素ふだんの時でも、度外れたお喋しゃべ舌りの彼だったの

で、まくし立てることまくし立てること！

そういう彼をとりまいて、黒木をいただいた白河女や、壺装束の若い女や、牛を曳いた近郊の農夫や、高足駄をはいた北嶺の僧や、御幣を手に持った清水の巫女や、水干に稚子輪の僧院の稚子や、木匠や魚売りや玉工や鏡師が、あるいは笑いあるいは怒り、あるいは軽蔑の表情をし、時々擲揄の声をかけたり、叱るような声を発したりして、でも去りもせず聞いていた。

街道の出入り口の広い地域には、巨材と青竹とで嚴重な柵と、いかめしい門とが作られてあった。そうして弓や槍や長柄や、薙刀や鉄杖で固められていた。

急ごしらえの関所であり、人別あらための吟味所であり、人馬の往来を調節して、非常に備える大木戸でもあった。

数十人の六波羅の甲冑武士が、鋭い眼を八方へ配りながら、関門を通る人々の姿を、仔細に嚴重に調べている様子が、殺伐の気を二倍にした。

「土岐十郎頼兼の妾、同じくその子の六歳になる朱丸、この二人を捕えようと、鬼火の姥めは死に物狂いなものじゃ」

と、範覚は吼え出した。

「頼兼も多治見ノ四郎二郎も、敵ながら天晴れに討ち死にし、一族郎党一人残らず、この世を去ってしまったのじゃ。……そこで六波羅方大狼狽よ、宮方に一味し徒党した輩やからの、姓名人数がわからないからなあ。……それにもう一つ困ったことは、今回の宮方ご謀反の次第を返り忠して、内通した男、土岐藏人頼春という男が、行方不明になってしまったことさ。……戦場から身をかくしてしまったのだそうさ。……そこでいよいよ六波羅方では、宮方に加担した人間の名を、知ることが出来なくなつたという次第なのさ。……ところが十郎頼兼の妾めかけの、千寿というのが子供と一緒に、高倉辺に住んでいたそうさ。……で、その女でも引つとらえて、拷問糺明でもやらかしたら、その宮方に加担した輩の、一部の名ぐらいわかるかもしれないと、そこで姥が探しにかかったのだが、いちはやくその女身をかくしてしまつて、どこへ行つたかわからぬそうさ。……よいか、お前方も京の住人で、六波羅様の並々ならぬご恩に、常日頃からなつてゐる以上、俺らや姥と心を合わせ、その女とその子供とを、目付け出さなくばすむまいがな。……合点だな！ そうともそうともそうとも！ ……とところでその女の顔形だが、まずザツとこうだそうさ。……」

ベラベラ範覚は喋舌り続けた。

周囲の群衆は好奇心をもつて、今は熱心に範覚の言葉へ、聴き耳をかたむけて静まつて

い、大木戸警護の武士たちは、眼を見合わせたり渋面をつくったり、時には舌うちをしたりしながら、範覚の方を眺めていた。

そうしてこの間にも京へ入る者、また京から外へ出る者、往来の旅人は武士たちによって、嚴重に身分を調べられたり、そのある者は怪しまれて、大木戸の横手の詰め所の構内へ、乱暴に連れて行かれたり、そうでない者は追われるようにして、めいめいの目的の方へ行かせられたりした。

今日はよく晴れた秋日びより和で、時刻も真昼であたりは明るく、空では鳶とびが銀笛をころがし、浮かんでいる雲にたわむれてい、陽のあたっている地面では、犬が幾匹となく狂っていた。が、遙かの京の町の、西七条あたりで火事でも出したか、黒煙が高く上がっているのが、何んとなくたまたまいを殺気立たせて見せた。

「……ところでその女の顔形だが……ええと、こうと……いけねえ忘れた！ ……はてな、俺、酔ってるかな？」

したたか酔っている彼であつた。それに秋陽にカンカン照らされ、さらにベラベラ喋舌つたため、その酔いが加速度に進行し、ひどいものになっている彼でもあつた。

「酔っちゃいない！」と彼は怒鳴つた。

「せいぜいのところ生酔なまよいだ！ ……こうと、生酔いというやつは……酔っていないということであつて……酔っていないというからには、正気であるということであつて……正気であるということは……生酔いであるということであつて、……生酔いであるということは……さてよ、こいつ、どうも変だ！ ……いろいろのものがグルグル廻り、遠くに見える比叡山めが、四つにも五つにも見えるように……俺の云うことどこまで行つても一向埒らちがあかないが……こうと生酔いというやつは……妾めかけの顔形ということであり……その顔形は美人でなくてはならず……美人だとすると生酔いで……どうも変だ！ 少し違う！ ……どつちに致しても美人でなければならず……美人ということであつてみれば……飛天夜叉ひてんやしや殿がまず美人！ こいつだ！ わかつた！ やつと埒らちがあいた！ ……俺酔つていない、その飛天夜叉だが……汝おのれら頼春を知つていようがな！」

と金剛杖で大地を叩き、

「その飛天夜叉の頼春が！ ……また待つてくれ少し違ふ！ ……ヤイ生酔い正気になれ！」

にわかに範覚は笑い出した。

「あやまる俺が悪かつた。生酔いはどうやら俺らしいからな。……さあて生酔いの俺様だ

が、飛天夜叉殿の美しさには、ほとほと参っているのだな。どうかなるまいかと思うのだが、一向どうにもならないどころか、あべこべに俺たちの敵となつてな、鬼火の姥殿うばに盾つくのよ。……で、当然宮方なのじゃ。……そこで当然頼兼の妾と、その小倅こせがれとを隠したのさ。……が姥はこう云うのだ『京の町からは出ていない』とな。……妾と小倅とが京の町に、まだ住んでいるとこう云うのさ。……そこは見通しの利いている姥じゃ、言葉に間違いはなからうというものさ。その姥だがこうも云うのじゃよ。『いずれは最近にその妾と小倅、大木戸を脱け出し他国へ走ろう。とり逃がしては一大事、是が非でも大木戸で捕えねばならぬ』と。……で、この金地院範覚様が、この大木戸に頑張つて、見張りをしているというものさ。……姥の片腕金地院範覚、姥にも負けない見通しでな、金輪際見落としてはしない。……こうベラベラお前たちを相手に、駄弁ろくを弄ろうしておりながらも、浄玻璃の眼で一人一人、往來の奴ばらを睨にらんでいるという訳さ」

範覚はいかにも得意そうにこう云うと、ご自慢の筋金入りの杖——金剛杖をつきそ反らし、自分でも胸を反らして見せた。

と、この時一人の盲人が、町の方から竹の杖を突き、その杖の先で覚おぼつか束なげに、地をさぐりながら歩いて来た。

にわかめくら
俄盲目に相違なく、その探りかたも歩き方も、あぶなつかしく不慣れであった。

深い編笠で顔をかくし、素足に草履を突っかけている。まだ年も若いらしく、武士あがりとみえて肩にも腰にも、いかついところが残っていた。

「鬼火の姥は欲張りだな」

と、範覚はまた喋舌り出した。

「土岐頼春という男をも、懸命にさがしているのじゃよ」

「何故じゃい？」

とこの時群集の中から、一人の武士がいぶかしそうに訊いた。

「それはな一旦宮方に従き、思い返して返り忠をし、宮方の謀反六波羅殿へ、密告をした男じゃからよ。……四郎二郎の錦小路の館を、六波羅の討手攻め滅ぼした際に、戦場から遁がれて身をかくしたが、こやつを捕えて訊ねたならば、宮方一味の輩の姓名、人数もわかろうというところから、姥はさがしにかかっておるのさ」

いつか盲人は群集に雑つて、範覚の言葉に耳を立てていた。

肩を落とし首を垂れた、それは寂しそうな姿であった。

「土岐蔵人頼春といえ、六波羅、北面ひつくるめての、美男の武士だということじゃ

の」

と、もう一人の武士が呟くように云った。

「さよう、美男の武士でござる」

と、もう一人の武士が相槌をうった。

ずんぐりと肥えた赭ら顔の、驚つ鼻をした武士であつた。

「拙者頼春を存じております。……というのは数回逢つたからで」

と、驚つ鼻の武士は云い足した。

と、盲人はその武士の側そばに、同じ姿勢で立っていたが、ソロソロと身を引き歩き出した。

その素振りに驚つ鼻の武士は、何やら審いぶかしさを感じたらしかつた。

身がかめると盲人の顔を、編笠の下から覗いて見た。

「や、貴殿は？ ……」

と、云つたとたん、盲人の手が電光のように延びて、その武士の太刀の柄へかかつた。

「わッ」

キリキリと舞つて虚空をつかみ、やがてすぐに大地へ仆れ、のたうち廻り、間もなく息絶えた。驚つ鼻の武士の体を見れば、鳩尾みぞおちから背中まで充分に、太刀が貫き通されてい

た。

「斬られた！」

「死んでる！」

「お侍さんだ！」

「誰がいったい殺したんだ！」

忽ち混乱が湧き起こった。

そういう混乱を後にして、大木戸の方へ寂しそうに、肩を下げ首を垂れた盲人が一人おぼつかない歩いで行つた。

大木戸警護の武士たちは、混乱の渦や喚声に驚き、その数人が走って来、爾余の者も怪訝そうな顔をして、混乱の方へ注意を向け、誰一人盲人が裾のあたりへ、血のしぶきを付けた姿で、大木戸を通りぬけ、伏見街道へ出たのに、注意を払おうとはしなかった。

範覚もポカンとして立っていた。

（俺の人氣を誰が攫さらつたんだ）

と、云うような顔をして、ポカンとして立っていた。

と、そこへ異様な行列が、町の方からやって来た。

それは諸国を巡って歩く、大掛かりの香具師かぐしの群れであつた。

数台の牛車には、熊や狼や、猿や狐や狸や猪や、鹿など入れた巨大な檻おりが、幾個となく積まれてあつた。

そうして、その前後左右には、二十余人もの同勢が、陽気に囃はやしながら従ついていた。

男もいれば女もい、老人もいれば老婆もい、子供もいれば小娘もいた。

赤い頭巾をいただいたり、鬱金うこんのくくり袴ちやくを着かしたり、紫の被衣かつぎをかずいたり、緋たすきの襷たすきであやどつたりそうかと思うと男の中には、熊の皮の胴服を着たのや、猪皮しがわの脚絆きやはんをつけたのや、そんな風采の者もあつた。

つくり物らしい槍ながえや長柄ながえや、大鉞おおまさかりなどをひつさげて、それらを時々宙で舞わし、踊

りらしい所作などをした。

先頭には大幟おほのぼりひるがえが翻ひるがえつていた。

それに書かれてある文字といえは、

「東大寺勸進、諸国行脚あんぎや、寄進奉謝、茨組」

という、訳のわからない文字であつた。

今日で云えばサーカス団で、だから数頭の飾り立てた馬も、一行の中には雑あやつていた。

一行は大木戸の前まで来た。

と五六人の警護の武士が、バラバラとその方へ駈け出して行った。

「これこれ貴様たちは何者だ」

すると、彼らは愛想よく笑い、至極無造作むぞうさに至極大胆に、いくらか人を食ったひょうきんな口調で、

「東大寺勸進、諸国行脚、寄進奉謝ちようだいつつしんで頂戴せつつの、茨組と申す興行者……」

「丹後の国をふり出しに、但馬たじま、因幡いんぱん、播磨はりま、摂津と、打って廻りましてござりまして……」

「昨日この都へ参りましたところ……」

「何やら市中さわがしく……」

「斬った斬られた討った討たれた、謀反じや裏切りじやと人心兢々……」

「これでは興行はおぼつかなし……」

「というところへ眼星をつけ……」

「ただ今都を退散つかまつ仕り……」

「伏見か奈良か、宇治か大津か、その辺を打って廻ります所存……」

「大木戸お通しくださりませ」

と、口々に喋舌り立て、まくし立てた。

と、そこへ金地院範覚が、酔いのさめきらぬ足どり、よろめきなから寄つて来たが、「ナニ香具師やだ。旅芸人だと。……よしよしそれに偽りなくば、関所を通る切手がわりに、得意の芸当演じろ演じろ！」

と、さも横柄のしに罵るように云つた。

「これはこれは山伏殿、ごもつともなその仰せ、では仰せに従いまして、おぼえの芸当仕りましょう。……やあやあ泣き男と笑い男、幽霊女と鶏とりむすめ娘、まかり出て芸当仕れ」

「オーツ」

という四人の太夫が、一行からぬけて前へ出た。

「悲しや悲しや、九郎判官義経公には、あれほどの功をたてましたに、酬いられずに奥州落ち、安宅あたくの関せきもりでは弁慶の忠義、やつと関守せきもりをたぶらかし、脱け出すことは出来ましたもの、落ち行く先は辺鄙へんびの奥地、ろくなたべ物とてはありますまいし、ろくなお伽衆とぎともありませんまいし、思えばお気の毒なお身の上、オーオーおお気の毒な」

と、まず泣き男が見事な芸を——泣きぶりのよさを披露した。

「アツハツハツ、ワツハツハツ、ヘツヘツヘツ、ヒツヒツヒツ……こりやおかしい、何が何んでえ！ 落^{おちゆうど}人の身で贅^{ぜいたく}沢な、お伽女のあるなしまで、考えるとは何事じゃ！

こりやおかしい、こりやたまらぬ！ ……そればかりでない女好きの、判官殿ときたひには、吉野あたりまで側室^{そばめ}を連れ——静御前^{しずかごぜん}とやらを引き連れて、遊山かのようにノラリクラリと、遊ばれたと云うことじゃ！ ピツピツピツ、クツクツクツ、嫉妬したのがお供の弁慶、忠信や常陸坊^{ひたちぼう}の面々で、そのようにお見せつけ遊ばすなら、我らお供仕らぬ。……これには判官すつかり驚き、そこで静^{しずか}には因果を含め、吉野山中で暇^{いとま}を出す。……クツクツクツ！ アツハツハツ……静の行くのが悲しいとて、判官殿には泣いたそうな。……ピツピツピツ、ホツホツホ——ツ」

笑い男がこう後を受けて、横腹を抑えながら笑いこけた。

と、その後を幽霊女が、怨めしそうに受けて云った。

「怨めしき、判官殿、わらわはそなたに黜^{なぶ}られたあげく、捨てられました浄瑠璃姫の、その亡霊にござります。捨てたばかりかあなたさまには、皆鶴^{みなづるひめ}姫殿やら京の君様やら、ありとあらゆる女に手を出し、その後もずっと女狂い、怨めしや怨めしや！ その天罰が観^{てきめん}面にむくい、今は落^{おちゆうど}人のお身の上、少しは思い知りましたか！ あらここちよや

怨めしや」

長い黒髪を前へ垂らし、両手を胸の辺で泳がせて見せた。

「バタバタバタ！ コケコッコ——」

と、その時、とりむすめ 鶏娘がはばた羽搏き出した。

「夜が明けた——コケコッコ——、木戸ひらけ——コッコッコ——」

武士も範覚も群集たちも、腹を抱えて哄笑した。

「よしよし」

と、警護の武士たちは云った。

「諸国を巡る芸人香具師、その一行に相違ない。木戸を通す、早く行け早く行け」

「待ったり待ったり」

と、範覚が云った。

「念には念を入れると云う。……けもの 獣を入れたおり檻の中を、一応調べる必要がある」

「なるほどそうじゃ」

と、武士たちは、牛車の上に積まれてある檻を、一つ一つ念を入れて覗き廻った。

「熊がいる。これはよろしい」

「ここにいるのは狼じゃ。凄い眼付きをしているわい」

「猪めが一匹眠っている。そのほかには何んにもいない」

「ははあ、こいつが山猫か、普通の猫よりはずいぶん大きい」

こうして最後にとりわけ巨大な、しかも四方とも部厚い板で密閉してある檻の前へ来た。

「こいつ怪しい」

と、範覚は云った。

「この檻ばかりが密閉してある。頼兼か国長の残党ばらを、ひそかに隠してあろうも知れぬ。檻を破って検分検分！」

「いかにも怪しい。檻をひらけ！ これこれ香具師ども、檻をひらけ」

——すると檻の横につくり物としては、真に迫っている大おおまさかり 鉞おまさかりをつき、ノツソリと立

っていたあごひげ 頤あごひげ 髯あごひげのある男が、

「はいはいおのぞみでござりましたら、この檻ひらくでござりませうが、その代わり警護のお武士さむらいさま方や、そこにいられる山伏殿は、命のご用心なさらねばならず、それご承知でござりまするかな」

と、物々しい声で嚇おどすように云った。

「何を馬鹿な、たわごと申すな！ ……何かと申して開けまいとするこの檻、いよいよ怪しい開ける開ける！」

範覚は威猛^{いたげだか}高に怒号した。

「はいはいそうまでおつしやいますなら、お開けいたしますでござりますが、それはそれは恐ろしいものが、はいつているのでござりまするぞ」

「えい、くどい！ 早くあける！」

「それじゃアお開けいたします。 ……この鉞でガ——ンと一撃！ と板がバラバラになる。その瞬間に恐ろしい奴が……」

「飛び出すというのか、ナーニナーニ」

と、云いながらも範覚は一足さがった。

「が何事もご用心、ご用心が専一にござります。 ……山伏殿などズーツとうしろに、お引きさがりなされておられました方が……」

「それもそうだな、ではソロリと……何を馬鹿な、たかが知れてる！ えい開ける！ 開ける開ける！」

「ではソロソロあけまする」

鬚の男は大鉞を、頭上に高くふり冠った。

が、もう一度嚇してみようと、そう思ったように範覚の方へ、ジロリと視線を送ったが、
「よろしゅうござるかな、ガ——ンと一撃！ と、世にも恐ろしいものが……」

「まあ待て待て、何だそいつは？」

「ただもう世にも恐ろしい……」

「虎か？ 唐土の……獅子か？ 天竺の……」

「なかなかもちましてそんなものでは……」

「フーン」

と云ったがまた一足下がった。

「申せ申せ、正体申せ！」

「ガ——ンと一撃いたしました、そのものが飛び出して参りましたら、おのずと解るでござりましょうよ。……さあ一撃！ 命の用心！」

ギラギラと光る鉞を頭上で縦横に振り廻したが、

「イヤ——ッ」

ド——ッと一撃した。

「それッ」

と範覚が真つ先に逃げ、つづいて警護の武士たちが逃げ、群集たちもバラバラと逃げた。檻の戸は微塵みじんに砕かれた。

檻は大きい黒い口を、ワングリと開けて陽を吸っていた。が、何んにも出て来なかつた。

しかし人々は気味悪そうに、その口ばかりへ眼を集めた。

と、そういう人々の眼に、白い小さい握り拳ほどのものが、暗い檻の奥の方から、口もとへ蠢うごめいて来るのが見えた。

「出た——ッ」

「いたぞ——ッ」

「何んだ何んだ！」

白い物は檻の口で足を止め、しばらく動こうとはしなかつた。

でもとうとう飛び下りた。

叫喚！

人々はサ——ッと逃げた。

小さい動物は白兎であつた。

あまりのことに武士たちも範覚も、群集たちも度胆をぬかれ、茫然として声も出なかつた。

と見てとつた頓髯のある男は、鉞を肩にして唄うように叫んだ。

「大^{たい}山^{さん}鳴動して兎一匹！　これがよき例にござります！　そうしてこれこそ我ら茨組の、最後の芸当にござります」

当意即妙のこの言葉には、武士たちも群集も範覚も、笑うよりほか仕方なかつた。

「やられた」

「いやはや」

「ひどい奴らだ！」

「はなから終^{しま}いまで黓^{なぐ}りおつた」

「こうまで黓^{なぐ}られれば腹も立たない」

「通れ通れ、さつさと通れ！」

武士たちは笑いながらそう云つた。

「お許しが出た、さあ行こうぞ」

「方々しからばご免候らえ」

「ソレ」

とばかりに茨組たちは、牛車の牛に鞭むちをくれ、一斉に走らせて自分たちも走り、砂煙りを立てて景気よく、悠々と大木戸をおし通り、伏見の方へ消えてしまった。

後には揚げられた砂煙りが、薄黄色く立ち迷い、晴れた大空をひとしきり、曇どん天てんにしたばかりであった。

「いや面白い奴らだった」

「おかげで我ら眠気ざましをした」

武士たちはかえつて朗らかでさえあつた。

が、それから半刻経つた時、一つの意外の事件が起こつた。

町の方から砂塵さじんを蹴あげて、五十人あまりの異様な一団が、この大戸へ来たことであつた。

いずれも腹巻や籠手脛こてすね当てをし、槍や長柄などをひっさげた、雄々しく物々しい連中であつたが、しかしそれらは武士ではなく、禰ね宜ぎ、修験者、陰陽師、屠児えとり、人相見、牙僧すあい、圍人うまかい、——といったような輩やからであり、そうして例の鬼火の姥うばに、扈從こじゆうしている眷族で

あつた。

先頭に鬼火の姥がいた。

例によつて白の行衣を着、一本歯の木履ほくりをはき、長目の御幣ごへいを持っていた。

「範覚はいぬか、範覚範覚！」

と、大木戸まで来るとけたたましい声で、こう姥は呼ばわつた。

群集を相手になお範覚は、この時も駄弁ろうを弄していたが、

「姥か、これはこれは、あわただしいことで！ ……町に事件でも起こつたのか!! ……

この大木戸だけは大丈夫じゃ！ ……範覚控えている以上、宮方に属した奴ばらの残党、

一人として通すことでない！ ……土岐頼兼の妾や小倅、目付け次第ふん縛る！ ……こ

こばつかりは大丈夫じゃ！」

酔いの残っている範覚は、こう云うと仰ぎようぎよう々々しく胸を張り、金剛杖をつき反そらして見

せた。

「そうかよ」

と姥は歯茎を見せて笑つた。

「立派な関せきもり守、それでこそ範覚、わしの仲間での大立て者じゃ！ ……さてその大立て

者の範覚殿に、至急たずねたいことがある。……旅まわりの香具師やしの一団、茨組と称する奴ばら、ここへ来かかりはしなかつたかな？」

「来た来た」

と、範覚は愉快そうに云った。

「いや面白い奴らだった。芸当をしてな、素晴らしい芸当を！……最後に大きな檻おりをひらき、単一匹を飛び出させたよ、その口上が気が利いていた。大山鳴動して単一匹さ、アツハツハツハツ、見せたかったよ姥に！」

「餓鬼め！」

と、鬼火の姥は吼えた。

「その香具師の群れ、おのれどうした!!」

「ド、どうしたと？ どうするものかよ、仕つかまつつた芸当が関所の切手、という次第で、伏見の方へ……」

「通したというのか、この大木戸を！」

「ソ、そうさ、それがどうした？」

「餓鬼め！」

と、姥は再度吼えた。

「おのれがおのれがその二つの眼、節ふしあな穴かそれとも蜂の巢すから空か！ ……その香具師の群れ茨組こそ、飛天夜叉なのじや、飛天夜叉組なのじや！」

「バ、馬鹿な、そんなこたアねえ」

「餓鬼め！」

と、姥はまた吼えた。

「しかも檻おりには頼兼の妾と、小伴とが隠してあったのじや！」

「うんにや、違う、そんな筈はねえ、念には念を入れたがいと、こう思ったので警護衆と一緒に山猫の檻から猿の檻、密閉してあったでつかい檻まで、いちいち刻明に調べたが、密閉してあった檻の中からは、さつきもいったが兎一匹……」

「黙れ、迂濶者うかつもの、この阿呆あほう！ ……密閉してある檻なんぞ、カラクリじや、まやかしよう！ そのようなものに何んの何んの、落おちゆうど人なんど隠して置こうか！ ……獣けものの檻に、獣の檻に！」

「マ、まってくんな、そんな筈はねえ。獣の檻には獣の類が……熊や猪めが、まさしくいたに！」

「熊は熊だが熊の皮じゃ！」

「皮！ 皮と？ クマカワと？」

「頼兼の妾千寿めには、熊の生皮なまかわをうちかぶせ……」

「……………」

「六歳になる小倅には、猪の生皮なまかわをうちかぶせ……」

「……………」

「獣に仕立てた飛天夜叉の才覚！」

「ふーん」

「範覚！」

「おれどうしようぞ！」

「大木戸通つたは何時なんどきじゃ！」

「おおよそ半刻はんとき、半刻前じゃ」

「二里とは行くまい、ソレ追っかける！」

阿修羅あしゆらとなつた鬼火の姥は、裾ひつからげ御幣ごへいふり立て、

「おのれら来い！ おのれら続け！」

一本歯の木履宙に飛ばせ、真一文字に走り出した。

範覚をも雜えて五十余人の眷族けんぞく、一斉にその後を追っかけたが、ひとりみじめなのは範覚であつた。

(呆あきれたね、なんとということだ！ クマノカワにシシノカワと！ その中に千寿と朱丸とがいたと！ ……ふーん、呆れた。いや呆れた！ ……ほんとだとすると——ほんとならしい！ ……とすると俺阿呆かなア)
酔いなど、すっかり醒ましてしまった。

その日も暮れて夜となつた。

伏見街道を五里ほど行つた地点の、街道を外れた広大な藪ジャングル地に、うごめく一つの人影があつた。

盲目の土岐頼春であつた。

俄にわかめくら盲目の悲しさに、道に迷つて来たものらしい。

この藪ジャングル地は四方十里、それほどにも渡る広大なもので、沼あり河あり丘あり谷あり、それを蔽うて松、杉、柏かしわひのき、桧ひのき、からまつ、櫟くぬぎ、栗くり、白楊しろやなぎなどの喬木類が、昼は日光、

夜は月光を遮り、そうして茨だの櫨だの水松だの、馬酔木だの、満天星だの這い松だの、灌木類は地面を這い、鷺、鶉、雉、梟、鷹、鷲などの鳥類から、栗、鼯、鼯、※、猫、狐、穴熊、鹿などという、獸類を住ませ養っていた。雨の夜は腐木が燐火のように燃え、白昼沼沢地の芦の間では、蟒が野兎を呑んでいたりした。

ここを今、頼春は歩いていたのであった。

悲痛の頼春

盲目の彼には見えなかつたが、馬酔木の叢が小山かのように、ワングリと高くもりあがつて茂り、そういう茂りが前後左右に、起伏をしているその中ほどを、彼はさまよつていたのであった。

その頭上には、や榭が、半かけの月光や星の光を、枝葉の隙からわずか零し、野葡萄や木賊や葎麻や芒で、おどろをなしている地面の諸所へ、銀色の斑紋を織つていた。

枝などに引つかかつたためであろう。冠つていた編笠も今はなく、盲目となつて人相變わり、美男をもつてうたわれた顔が、妖怪のような顔になつていたが、ところどころに負

傷して、流れ出た血がこごつて黒く、色づいている手や足と共に、光の斑紋裡へはいつた時、もの恐ろしく眺められた。

これが命の竹の杖で、おぼつかなさそうに足もとをさぐり、的なしに彷徨っているのであつた。

多治見ノ四郎二郎国長の館が、六波羅勢に攻め落とされ、勝ちほこつた勢がひきあげた時、彼も雑つてひきあげたが、しかし六波羅の探題へも帰らず、自分の館へも帰つて行かず、甲 冑ぬぎすて庶人となり、右近ノ蔵人の官位も捨て、あの愛していた妻も捨て、武士も捨て名も家も、財宝も金も一切捨てて、浄罪と※悔と試練との旅へ、誰にも告げずに出て来たのであつた。

盲目の彼には夜も昼も、朝も夕も空も地も、人間も草木も山川も、万象ことごとくが暗かつたが、しかし心眼にはハッキリと、恐ろしい物が見えていた。

土岐頼兼が示したところの、憐愍をこめた死の前の顔と、死んで山本時綱の太刀に、貫かれた首級それであつた。

そうしてさらに多治見ノ四郎二郎の、立ち腹を切り腸つかみ出し、投げつけた姿、それであつた。

さうして心耳しんじには夜昼となく恐ろしい声が聞こえて来た。

「そちが！ ……頼春！ ……裏切つたとは！ ……一族の ……同じ血の ……一族のそちが！」

と、こう云つた頼兼の声と、

「日本は神国そのご皇統は、一筋にして神の界くにより出でおる！ ……われらが今回の企てくわだこそは、この大本おおもとに返さんと、中頃大本をあやまつたるところの、越権専横の武臣北条を、亡ぼすところにかかわつておるのじゃ！ ……されば今度このたびのおのれの所業は、神の界くにへの裏切りじゃぞ！ ……日夜念々神の怒り、おのれの心を苦しめるであらうぞ！」

こう云つた四郎二郎の声とであつた。

家を出て今日で三日になる。その間彼の心を襲い、魂を怯おびやかしているものといえは「身も心も一つ所へ、決して安らかに置きはしない！」という、そういった強迫観念であつた。

その強迫観念が彼をして、この漂泊、この流浪の、果てなき旅へ出したのであつた。

（このままでは俺は死ぬことさえ出来ない。 ……おお死ぬことさえ出来たならば！ ……即座に死ぬ即座に死ぬ！）

しかしこのまま自殺したならば、あの世において頼兼や国長に、どうして合わせる顔が
あろう！

(浄罪！)

と彼は思うのであった。

(安心して死んで行けるまでに、この世で浄罪しなければならぬ！)

何をおいても強迫観念から——心耳と心眼とにつきまどっている、恐ろしい形と恐ろし
い声の、それから醸かもし出されている——強迫観念から遁がれなければならぬ！

こう彼は思うのであった。

彼は大藪地おおやぶちをさまよって行つた。

が、どうしたら救われるか？ 身と心の置き所を、一つ所に保つことが出来るか？

(許されるより他にはない！)

だがそれは誰が許すのだ？

この一族への裏切り者の俺を、この神の界くにへの裏切り者の俺を！

誰がいったい許すのだ？

すると国長が最後に叫んだ、一連いちれんの言葉が思い出された。

「現世において安心を得、死後じょうぶつ成しゅうぶつ仏ぶつせんと思わば、神の界くにに属する御一方おんひとかたより、許すの一言承われ！」

それはこういう言葉であった。

だがそれはどなたで在おわすか？

どなた？

どなた？

どなたで在おわすか？

そうしてどこに在おわしますのだ？

漠然としたたよりない目標ではあったが、しかしどこかにそういうお方がおわして、それへおすが継りしてお許しを受けたら、救われることが出来そうだという、そういう目標のあるといふことは、彼にはまだしもの慰めであった。

(そのお方をおさがししよう。……そのお方におすがりしよう。……そうしてそのお方にお許しを受けよう)

彼は藪地をさまよって行った。

(ここはいつたいどこなのだ？)

彼には見当がつかなかった。

京の町を出はずれて、伏見街道へ出たということは、食を乞うため門かどへ立った時、その家の者に教えられたが、その街道からはいつかはずれたと、そんなように思われてならなかった。

そうしてここが大藪地で、大密林であるということも、感覚によって感じられはしたが、どこだかはわからなかった。

(どつちみち街道へ出なければならぬ)

彼はソロソロと歩いて行つた。

大藪地であり大密林であつた。では四辺あたりが森閑としていて、寂しくなければならぬ筈だのに、彼にはそうとは思われなかった。

大勢の人間が遠巻きにはあつたが、彼の周囲に集まっているように、そんなように思われてならなかった。

人声がし足音がし、時には叫喚の声さえ聞こえ、斬り合う音や休たおれる音さえ聞こえるように思われた。

そう、彼の感覚は、決して間違つてはいなかった。

盲目の彼には見えなかつたが、この大藪地大密林の、到る所に点々と、松たいまつ火の火や篝か火かりびが燃え、人影が右往しまた左往し、小戦闘こぜりあいが行なわれているのであつた。

飛天夜叉組が逃げ込んだ。それを追つて鬼火の姥の組が、この地域へ入り込んだ。と、この地域にはそれ以前から、野武士や土兵や非人の群れが、職場のようにして住んでいたが、それが双方に加担した。

で、それらの者どもが小戦闘こぜりあいをしているのであつた。

逆立さかだつた女の髪のような、大竹藪の裾を巡り、頼春はソロソロと歩いて行つた。

と、突然五人の人影が、竹藪の蔭から走り出た。

「いた——ツ」

「いたいた！」

と頼春を見るや、五人のうちの幾人かが叫んだ。

「斬れ！」

「討ちとれ！」

殺到して来た。

「待て！……いや、お待ちください！」

驚きながら頼春は叫び、持っていた杖を差しつけて構えた。

「道ふみ迷った盲人でござる。——人違いでござろう、聊りようじ爾なさるな！」

「ナニ盲人？ そんなことはあるまい！」

「盲人が大藪地へはいれるものか！」

「飛天夜叉じや、飛天夜叉組じや！」

「功名しろ！ 討って取れ！」

五人の者どもは口々に喚いて、前後左右から斬りかかった。

鬼火の姥の眷けんぞく族たちであった。

傍かたわらの槻つきの木を楯にとり、大竹藪を背後にし、青竹の杖を差しつけたまま、頼春は途方

にくれて立った。

飛天夜叉の噂は聞いていた。不思議な女だということである。それに属する眷族のことを、飛天夜叉組と称することも、久しい前から聞いていた。

が、自分はいうまでもなく、飛天夜叉組の者ではない。

それだのに自分を飛天夜叉じや、飛天夜叉組の者だといって、討ち取ろうとするこの連中は、いったいどういう者どもなのであろう？

「方々」と頼春は嘆願するように云った。「なんの盲人のこの拙者が、飛天夜叉組などでありましようぞ。……が、拙者を飛天夜叉組じやと申して、打ってかかられる貴殿方は？」

「鬼火の姥の一党よ、存じていながら何をいうぞ！」

「こうとり困んだうえからは、遁がしはせぬ、討つてとる！」

眷族たちは口々に叫んだ。

「ナニおのれらは鬼火の姥の一党？ ……フーム、そうか、鬼火の姥の一党！」

頼春の様子は俄然^{がぜん}変わった。

青竹の杖をふりかぶり、一足又ツと前へ出た。

「鬼火の姥という方には、この方にこそ怨みがある！ ……この悲惨^{みじめ}な境遇に、おとし入れた元兇こそ、あの悪婆^{あくば}じや、鬼火の姥じや！ ……その眷族という方には、何んのおのれら許そうや！ ……が、その前に訊くことがある、鬼火の姥、どこにおるぞ？」

変わった様子に驚きながらも、五人の者どもは口々に喚いた。

「沼辺^{ぬまべ}にいるわい、眉輪^{まゆわ}の沼辺に」

「おのれら飛天夜叉の一党を、包围した陣地にご安居じや」

「おつつけおのれの穢^{きたな}い首級^{くび}も、姥の見参に入るといふものじや」

「眉輪の沼辺？」

と首を傾げ、頼春は一瞬間考えたが、

「ではここは司馬しばの藪地ばか？」

「知れた話だ、何を云うか」

（そうだったか）と頼春は思った。（伏見街道を逸それたところに、司馬と称する大藪地があると、そういうことは聞いていたが、そこへ紛れ込んでいようとは！……その大藪地の一ひと所に、眉輪という周囲一里にも余る、大沼のあることも聞いていたが、そこに鬼火の姥がいる？……よーし行って、逢って怨みを！）

彼が宮方を裏切ったのには、いろいろの事情があつたけれど、資朝すけともきょう卿の別館べつやかたの、無礼講の帰途深夜の町で、鬼火の姥に邂逅し、姥の不思議な魅力を持つた言葉で、愆しやうよ憑つされたそのことが、潜在的に力あつたことは、何んといつても争われなかつた。

それが今では頼春にとっては、怨みであり怒りであつた。

（よーし逢って怨みを晴らそう！……が、その前に眷族どもを！）

「来い！」

とたんに斬り込んで来た。

と、その姥の眷族の一人、修験者風の大男の咽喉へ、身を真っ直ぐにした蝮が一匹、電光のように飛びかかった。

頼春の突き出した杖であつた。

「ギャ——ツ」

まるで獣の悲鳴だ。

持っていた太刀を宙へ刎ね上げ、修験者は仆れてのたうった。

沼辺の鬼火

眉輪の沼の岸の腐木に、鬼火の姥は腰かけていた。

金地院範覚をはじめとし、十人ほどの眷族が、その周囲に集まっていた。

範覚は今は真面目であつた。

金剛杖によりかかりながら、姥の話に耳を澄まし、時々沼を越したあなたの森へ、鋭い眼を走らせていた。

森林に囲まれた大沼は、黒漆の縁にふちどられた、曇った鏡のそれのようであつた。

沼は浅く水も少く、苜あしだの茅かやだの芒すすきだのが、かなりの沖にまで生えていた。が、泥が深かったので、一足もはいることは出来なかつた。半かけの月に照らされて、水は燻いぶした銀のように、朦朧もうろうとした光を浮かべていた。黒漆の縁の森林からは、絶えず点々と火の光があるいは酸漿ほわすきのようにあるいは煙火はなびのように、木の間がぐれに隠見して見えた。松火たいまつや提灯ちようちんの火なのである。飛天夜叉組と姥の眷族と、ここの藪地に住居していて、双方の組に加担したところの、非人や野武士などの大勢が、攻め合い斬り合っているからであつた。で、悲鳴や叫喚や、剣戟の音なども聞こえて来た。

「……その連判状というやつがじゃ……」

と、白い行衣、白い髪に、月の光がこぼれているので、雪の塊かたまりか卯の花くさむらの叢むら、そんなように見える鬼火の姥が、ひそめた物々しい声で云つた。

「素晴らしく大事な料物しろものでな。……それだけに六波羅の探題様にとっては、手に入れた品物なのじゃ」

「なるほど」

と範覚は首を延ばして云つた。

「どっちみち宮方へ加担した奴らの、姓名が記してあるだけだろうが……」

「そうとも、それだけに過ぎないのだが、そうして宮方に味方している、京都在住の者ども名は、連判状がなからうと、だいたいのところ目星がつき、たいして心配にもならないのだが、諸国諸地方の豪族のうちに、味方した奴らがあるらしく、それだけは連判状がなからうものなら、かいくれ見当がつかないようなのじゃそうな」

「どうしてそいつらを引き入れたものかの？」

「資朝卿と俊基卿とが、先年諸国を巡られて、そいつらと逢い口説いたからじゃそうな」

「そいつらに次々に旗あげされたら、なるほど武家方は困るであらうよ」

「手がつけられないということじゃ」

「資朝卿や俊基卿をとらえ、糾問したらよからうに」

「それが出来ないということじゃ。あそこまで官位の高い公卿は、めつたに糾問出来ぬのじゃそうな」

「内裏攻めようと思気込んでいたに」

「あれも北殿一時の怒りで、土岐、多治見を討ちとったばかりで、後は当分穩便じゃとよ。……それにそういう一大事は、鎌倉よりの指揮を受けねば、行ないがたいということじゃ」

「いつ鎌倉から指揮が来るのじゃ？」

「早馬鎌倉へ馳せつくのさえ、相当日数がかかる筈じや。それからいろいろ評定があらつて、それから返辞の早馬が来る。……ずつとずつと先のことよ」

この時けたたましい叫び声が聞こえ、神主姿の眷族の一人が、全身朱に染みながら、林の中から走り出して来た。

「姥、あぶない、逃げな、あぶない！……盲人が……竹の杖で……凄い腕だ！……それが来るのだ！……姥を討とうと！……みんなやられた！……みんな殺された！……」

……俺もやられた！俺も俺も！」

鬼火の姥の前まで来ると、地に斃れて手足を延ばした。

「どうした宗任！」

「や、死んでる！」

「咽喉をえぐられている！」

「鳩尾も！」

眷族たちは走りかかった。

鬼火の姥ばかりは嘲笑った。

「脆い奴じや、沼へでも捨てる！……盲人が……竹の杖で……凄い腕じやと……アツハ

ツハツ、何をいうやら！ …… いずれは飛天夜叉の部下の奴らに、討つてとられたことであらうよ」

「円信！」

としかし範覚は怒鳴った。

「様子を見て来い、林へ行つて！」

山伏姿の円信という男が、すぐに林の中に駆け込んで行つた。

「頼春めは行衛ゆくえ不明になつた」

姥は話をつづけて行つた。

「内通をした頼春めがよ。 …… 頼春さえ武家方についていたら、宮方一味の豪族ばらの名、一切知れて都合よかつたに、行衛不明になつたのじゃ」

「頼春の女房の早瀬とかいう女、この女など糾問したら、宮方一味の公卿や武士の名、すこしは知れるであらうにな。 …… なんでもその女が頼春をすすめて、裏切りさせたということじゃから」

こう範覚は利口ぶつて云つた。

「ところがどうだろう、その早瀬も、家出をしたということじゃ」

鬼火の姥は舌うちをして云った。

「良人の後を慕ってのう」

「へえ」

と範覚は興ざめたように、

「その女も家出、それはそれは。……近來家出が流行はやると見える。……たいして楽しいことでもないに」

「土岐、多治見の郎党ばらは、一人のこらず討ち死にしてみました。……で、どうにも宮方一味の、公卿や武士——豪族の名、ほとんど知ることが出来ないのじゃ。……そこでせめても頼兼の妾、千寿などでもひつ捕え拷問いたしたら知れようかとな。……」

「ところがそいつに飛天夜叉めが附いた」

「そうして大木戸を脱ぬけられた」

姥はジロリと範覚を睨にらんだ。

「ウフ」

と範覚は首をすくめ、さもテレたような様子をしたが、

「そいつを云われると身が縮むて。……が、千寿や朱丸を籠こめて、この大藪地へ追い込ん

だ上は、飛天夜叉にも遁がれられまい。……どっちみち千寿や朱丸めは、姥の手へはいつたというものさ」

「さあそうなつてくれればよいが」

「とにかく今はこうなんだな、千寿か朱丸を手に入れるか、頼春や早瀬を捕えるか、連判状を目付け出すか、そのうち一つでもとげることが出来たら、宮方一味の公卿や豪族の、確實の名を知ることが出来、六波羅殿には安堵が出来る。……」

「そうじゃよそうじゃよ、そういうこととなるのじゃ」

「ところでこれからどうする気じゃな？ ……こう飛天夜叉めと睨み合っていてよ」

「六波羅殿からの加勢を待つて、一挙に狩り立て捕えるのじゃ」

「六波羅殿から加勢が来るとな？」

「とつくに注進してやったのじゃ。……五百か千の援兵が、もうソロソロ来る頃じゃ」

「へえ、そうか、知らなかった。いやそれなら安心だ。……それはそうときやつどうしたか？ 円信め、いつまで何をしているか!!」

云い云い範覚は林の方を見た。

と、そつちから悲鳴が起こつた。

「こいつおかしい、俺が行つてみて来る」

金剛杖を小脇にかかえ、林の方へ走つて行つた。

沼辺の飛天夜叉

沼の対岸の林の中に、飛天夜叉組は屯たむろしていた。

桂子と浮藻と千寿と朱丸と、そうして小次郎とを円く包み、鉞まさかりをひっさげた右衛門や、
鶏とりむすめ娘や、泣き男や、笑い男や、幽霊女が、何の不安もなさそうに、安心しきった様子
をして、小声でしめやかに話していた。

俺おれらの大将は桂子様だ。どんな大事にも驚かず、神変不思議の術を用いて、どんな危難
でも突破して行く、そういう飛天夜叉の桂子様だ。何んの恐ろしいことがあるものか。――
――こういった心持ちがあるからであつた。

で、安心しきつていたのであつた。

熊の皮や猪の皮が敷かれてあり、その上に桂子たちは坐つていた。

傍そばには牛車うしぐるまが幾台となく置かれ、幾箇かの檻も置かれてあり、その中には猿や山猫

や狐が、これも何んの不安もなさそうに、寝たり起きたりしてノンビリとしてい、軛くびきから放された牛や馬は、草を食はみ食はみさまよっていた。

いくらか不安そうに見えるのは、頼兼の妾の千寿だけであつた。

飛天夜叉桂子の性ひとがら質と、その力量とを知らないかららしい。

千寿は二十二、三らしかつた。下ぶくれのふつくらとした顔、のびやかな地藏眉、おとなしい一方の女性らしかつた。

朱丸は頑がんぜ是ぜない六歳だけに、母の膝によつて眠っていたが、濃い睫毛まつげが下したまぶた瞼まぶたを蔽おほうて、どこやらに寂しそうなところがあつた。

「妾のために、このような騒さわぎに……」

ふと、千寿はそう云つた。

「何んと申してよろしいやら……」

「何んの」

と、桂子は笑いながら云つた。

「わたしたちの酔狂すいけうからでございますよ」

酔狂すいけうということは云えるかもしれない。

内裡攻めがあると聞いた夜、攻められる人々の家族なりとも、助け出して落としてやらねばと、そう決心した桂子は、部下を指揮してそれにかかった。

なにがし 某の公卿の一族を、宇治の方へ落としてやったのも、なにがし 某の豪族の一族を、南海の方へ渡らせたのも、資朝卿や俊基卿へ、いち早くそれとなく密使を送って、事件の発覚を知らせたのも、みんな桂子その人であった。

誰に頼まれてやったのでもなかった。自分の好きからやったまでであった。

——土岐頼兼の妾と倅とを、いつ捕えて拷問にかけ、官方一味の輩の、ともがら 誰々であるかを調べるそうなど世間の噂に立った頃には、もうその人達は高倉あたりの、その住居から消えていた。

桂子が連れ出して、かくしたからである。

自分の好きでやった所業でしわざ あつた。

で酔狂とも云われるだろう。

「酔狂などとは勿体ない」

と、千寿は涙を浮かべながら云った。

「お助けなくばもう今頃は、わたくしども親子は六波羅の手に……渡され渡って恐ろしい

目に……」

「そうねえ」

と桂子もこれには頷いた。

「情けしらずの六波羅に渡つて、糾問されたかも知れませぬねえ。……が、それでは神も仏も、この世にないと申すもの。……そうあつてはなりません」

「わたしたち親子にとりましては、あなた様はまことに神か仏……でもこのように鬼火の姥とやらに、四方をかこまれてしまいましたは……」

「アツハツハツ、大丈夫で」

こう云つたのは右衛門であつた。

「われらの大将……いや姫君じゃ……桂子お姫様の力量技倆を、すこしでもご存知でございましたら、そのようなご心配はなさいますまいよ。……アツハツハツ、大丈夫で」

「右衛門や」

桂子は云つた。

「そのような、バカらしい大袈裟なことは、あまり人前で云わない方がいいよ」

「はい」

と素直に右衛門は云った。

「では今後は無言の行！ ということにいたします。……が、その前に思う存分、云いたいだけのことを申すことにしましょう！ ……ヤイ泣き男泣き男、手前泣くという芸があつたら、何故その芸を發揮して、オイオイワイワイ泣き立ててよ、鬼火の姥の眷族どもを、涙で押し流してしまわねえのだ！ ……幽霊女も幽霊女だ、物凄い幽霊の真似でもして、鬼火の姥の眷族どもを、顫^{ふる}え上がらせてしまえばいいに！ ……笑い男だつてそうじやアねえか、自分一人だけ面白そうに、バカのようにゲラゲラ笑つていずに、鬼火の姥の眷族どもをよ、一緒にゲラゲラ笑わせてよ、骨なしにしてしまえばいいじゃアねえか！ ……鶏^{とりむすめ}娘なんかもノンキ過ぎらあ。コケツコーと啼くもいいが、啼いたら啼いたでお日様でも昇らせ、世間を明るくするがいいんだ。……どだい俺は不平なんだ！ 鬼火の姥ずれに取りかこまれてよ、飛天夜叉組ともあろうものが、こんなところにトグロをまき、身うごき出来ずにいるなんてなあ」

おおまさかり
大 鉞をブン廻した。

「右衛門や」

と桂子は云った。

「お前の不平はわかつているが、でも自分のそういう不平を、罪のない他人に移すつてこと、不道徳でよくないよ」

「はい」

と右衛門は穩おとなしく云つたが、

「もう不平など申しますまい。……が、もう一度だけもう一度だけ、云わせていただくことにいたしましょう」

大鉞をまた振り上げた。

「色がなま白くてグニヤグニヤで、意氣地がなくて女たらしで、若い娘の純な心を、ひつ掻き廻す青二才、こういう奴は氣に食わねえ！ ……ましてやそいつの一族の中から、裏切り者が出たとあつては、どうにもこうにも腹が立つてならねえ！ ……そういう青二才がこの辺にいるなら、この鉞で真二つにしてやる！ 来い！ 出て来い！ さあ出て来い！」

云い云い小次郎をギラギラと睨んだ。

浮藻と仲よく並びながら、桂子の傍そばに坐っていた、土岐小次郎は首をちぢめた。

（あぶねえ、オレ殺される！）

「右衛門や」

と桂子が云った。

「そう一刻ごくに云うものではないよ。……どんな人間にだってよいところはあつるよ。……お前の攻撃しているその男だつて、今に大功をあらわすよ。……それよか物騒な大鉞を、もう手もとへ引つ込ました方がいいよ」

「はい」

と右衛門は穏しく云い、少し離れて草の上へ坐つた。

「小次郎や」

と桂子は云つた。

「気を悪くしちやアいけないよ」

「はい」

と小次郎も穏しく云つた。

「いいえ何んとも思ひはしません」

「ねえ小次郎様」

と囁くような声で、今度は浮藻が話しかけた。

「ではあなたにはママのテコナの……」

(アレいけねえ)

と小次郎は思った。

(またテコナでいじめられるのか。……大鍼で脅かされた後を、テコナでいじめられちゃアやりきれねえ)

でも小次郎の心持ちは、今たいへん寂しいのであった。

兄ともいべき親しい仲の、また従兄弟いとこの蔵人頼春が、官方を裏切つて武家方へついた。そのため今回の大騒動が起こり、土岐十郎頼兼も死ねば、多治見ノ四郎二郎国長も死んだ。そうして噂による時には、頼春も早瀬も家出をして、行方不明になつたという。

で、本来なれば小次郎その者も、土岐一族として討たれて死ぬか、でなければ官方の裏切り者として、武家方の禄ろくを食はむかして、生存しなければならなかつたのであるが、あの夜幸い館にいずに、桂子のもとへ来ていたので、そのどちらの身の上ともならず、こうして桂子の一党として、このようにくらすことが出来るようになった。

が彼の一族に卑怯未練の、裏切り者が出たということが、彼の肩身を狭くして、爾来ずいぶん憂鬱なのであつた。

幸い桂子が彼を支持し、浮藻が愛してくれるので、比較的ノンキにくらすことは出来たが。

それにもう一つ彼の心には、重い荷物が負わされていた。

連判状を持つてゐることである。

日野資朝卿の別館の、乱痴気さわぎの無礼講の夜、偶然手に入れた連判状で、はじめは彼らしいイタズラ心と、好奇心とからこつそり秘めて、誰にも明かさず持つていたのであるが、今回の騒動が起つてからは、その品物が非常に重大な、非常に大切な証拠品となり、武家方ではどうともして手に入れようと、苦心惨憺しているらしく、そういう噂も耳にはいった。

が、もしこの品が渡ろうものなら——武家方の手へ渡ろうものなら、著名な公卿や豪族が、六波羅や鎌倉の手によつて、捕えられたり攻められたりして、一大騒動が起ころなければならぬ。

といつて破つて棄てることも出来ない。

宮方に対して申し訳ない。

事情を桂子へうち明けて、桂子の手へでも渡してしまつたら、一番安心かとも思われた

が、そうするには機会を失っていた。

今回の事件の起こる前に、するならすべきものであった。今になって事情をうちあけて、連判状など渡そうものなら、そのような大切な物を持っていながら、何故今まで隠していたかと、さげすまれないものでもない。

きつとさげすむに相違ない。

と、桂子は支持を止め、浮藻は愛してくれなくなるだろう。

(これが俺には何よりも辛い)

そこで彼は今も連判状を、懐ふとこ中に秘めているのであったが、心の重荷に堪えられないのであった。

「姫君様」

と右衛門が、また少しイライラしながら云った。

「いつまでこのような林の中に、鬼火の姥などと対陣し、止どまりおるのでござりまするかな？」

「右衛門や」

と桂子は云った。

「ほんのもう少しの辛抱だよ。……細作かんじやがかりの風見の袈裟太郎が、おつつけ京から帰って来ようから、そうしたらわたしたちは善処するよ」

その言葉の終らないうちに、林を分けて一人の男が、矢のような早さで馳せつけて来た。それは風見の袈裟太郎であった。

「六波羅から出ました兵つわものの数、おおよそ五百騎にござりまして、今街道を走らせおります。この大藪地へ到着しまするも、間のないことと存じられまする」

怪火点々

桂子は武者ぶるいして立ちあがった。

「六波羅勢わずか五百騎というか！ ……牽制けんせいする手間暇はいらぬ！ ……機会は来た、さあ右衛門、退ひぎ鉦かねをお打ち、さあ退ひぎ鉦かねを！ ……」

声に应じて大蔵ヶ谷右衛門は、大鉦を抛り出し、傍かたわらの陣鉦じんかねをムズと掴み、突つ立ち上がると見る間もなく、兵法に叶った桴ばちさばき、哈ごうごう々と鉦を打ち鳴らした。

一里のあなたへも届くであろうか、そういう鉦の音に調子を合わせて、四方八方から鬨

の聲が起こり、すぐに続々と百人二百人、桂子配下の兵つわものや、この森を職場として住居している、この日の鬪いに桂子の方へ、味方したところの野武士や非人、盜賊の群れまで、木の間をくぐり、藪をひらいて引き上げて来た。

と、桂子はまた叫んだ。

「檻おりを開いて猿や狐、熊でも狼でも放しておやり！ あの子たちには用がなくなった。この大藪地大密林をあの子たちの住居にしてやろう」

声に応じて幾人かが、檻へ走り寄って戸をひらいた。

獣たちは走り出た。

が、逃げようとはしなかった。

永年飼われていたからである。

猿は近くの木へ登り、狐は近くの藪へ駆け込み、山猫は腐木の周囲を巡り、熊はいかにも審いぶかしそうに、少し離れた小丘の上から、主人たちの方を見詰めてい、五尺以上もある白しろ猩猩しょうじょう々々は、人間と変らぬ老ろう獺かいさで、桂子や浮藻に可愛がられていたが、栗の木のまた叉またに駆け上がり、人間さながらに腕を組み、（俺どうやら見すてられたらしいぞ。俺そいつ気に入らねえ）と、そんなことでも思っているかのような、寂しそうな顔をして動かな

かった。

桂子は顔を千寿の方へ向けた。

「さて千寿様とも朱丸様とも、いよいよお別れでござります……妾の配てのもの下五人ばかりを、扈こじゆう従させましてあなた様方を、故郷の美濃まで送らせましょう。……ここさえ出ましたら大丈夫！ 鬼火の姥の眷族であろうと、六波羅方の兵であろうと、一人も追いはいたしません。いえ追わせはいたしません。……故郷美濃へお帰りの上は、立派なご一族もおありのこと、その方々に守られて、安樂におくらしなさりませ。……やがては六波羅も鎌倉も亡び、世は宮方となりましょう。……それまではただひっそりと、つつましくおくらしなさりませ！ ……右近太、陣平、軍次、鷲さぎない内、将左衛門よ、お前達にお二人をお送りいたせ！」

応と返辞いりえる声あつて、五人の屈くつきょう竟の若者が、千寿と朱丸との側へ走った。

と、桂子は片手をあげ、遥かの一点を指さしたが、

「見ていてごらん、火がともるから！ ……一ツ！」

はたして一点の火が、遥かの暗黒の密林の中へ、朱を打ったように現われた。

「二ツ！」

桂子はまた云った。

とまたほのおの朱が打たれた。

「三ツ、四ツ、五ツ、六ツ！」

その声をことごとく裏書きして、三ツ、四ツ、五ツ、六ツと、順序ただしく一列縦隊に、
松たいまつ明らしい火の光が、密林の闇にともされた。

十、二十、三十、四十と、火の光は見る見る数を増し、それが一列縦隊となり、東南の方へ動き出した。

野武士や非人や盜賊の群れは、驚きの声をあげた。

「こりや不思議だ！」

「どうしたのだ！」

すると右衛門が笑って叫んだ。

「術よ！ ハツハツハツ、何が不思議！ ……我らの姫君飛天夜叉様の、術よ術よ何が不思議！」

この時密林の一所から、ドツと大勢の喊声が起こり、数百の騎馬武者が駈けて行くらしい、蹄の音や鎧冑の、触れあいせめぎ合う音が聞こえた。

桂子は雀躍こしわどりしてまた叫んだ。

「六波羅勢が到着したわ！ あの火の光にまどわされて、はたして向こうへ追って行くわ！ ……飛天夜叉の一団が伍ごを調え、松明の光に道を照らし、遁がれ出るものと思つたらしい！ ……それが妾わたしのつけめだったのさ！ ……いやいや六波羅勢ばかりでなく、鬼火の姥の眷族どもも、それに味方して闘つていた、この大藪地の住人どもも、妾たちの一団が逃げるものと思ひ、向こうへ追つかけて行くだろう！ ……それが妾のつけめだったのさ！ ……さあこの隙に千寿様朱丸様、早々と出立なさりませ！ ……間道まぢづたいに五人の者が、ご案内いたすでござりましょう！ ……爾余の者は妾に続け！ ……鬼火の姥の本陣を、さあ沼づたいに攻めようぞ！ ……あの姥ばかりはあの火の光に、たばかられるようなことはない！ ……妾の所業しわざだと見破るだろう！ ……そうして姥めは姥の術で、妾の術を破るだろう！ ……あの火の光を消すだろう！ ……姥めに術を使われないうちに、姥めに火の光を消されない先にさあ押し寄せろ！ さあ攻めろ！」

桂子は走り出した。

「行け！」

と右衛門が声をかけ、おおまさかり大鉞をひっさげて、すぐに桂子の後を追つた。

つづいて小次郎と浮藻とが、手を取り合つて走り出した。つづいて風見の袈裟太郎や、泣き男や笑い男や、幽霊女や鶏娘が、その他の桂子の配下と共に、そうして野武士や非人たちと共に、一団となつて後を追つた。

こうして後へ残つたのは、千寿とそうして朱丸と、その二人を送つて行く、五人の桂子の部下であつた。

「桂子様、桂子様！」

千寿は感謝の涙の声で、沼の岸边をかなたへ走る、桂子に向かって呼びかけた。

「ご恩は海山！ 何んとお礼を！ ……今こそお別れ、ご無事で！ 無事で！」

「お姉様、お姉様！」

と、朱丸も思慕の声で呼んだ。

「桂子のお姉様！」

桂子はかなたで振り返つた。

「千寿様、朱丸様！ ……ご無事で……さあさあ！ ……今こそお別れ！ ……縁さえごぎれば……また逢われます！」

「お姉様ヨ——ッ」

「朱丸様ヨ——ツ……可愛い可愛い朱丸様ヨ——ツ」

「いざ千寿様朱丸様、お供仕るでござりましょう」

と、右近太が進み出て声をかけた。

「機会失つては一大事、いざいざ早うご出立」

「はい」

こうしてこの一団は、大藪地をくぐり密林を分け、美濃を目ざして落ちて行つた。

沼のこなたでは鬼火の姥が、突つ立ち上がつて叫び出した。

「やア退き鉦がねが聞こえるわ、さては桂子め落ち行く気か！ ……やア松明たいまつの火が見える

！ ……一点、二点、……十点、二十点……縦隊をなして移つて行くわ！ ……はてな、

あの光、こりや不思議？ ……光はあるがほのおが立たぬ！ ……息づきもせぬ、生命いのちがない

！ ワツハツハツ、火ではないわい！ 飛天夜叉めのまどわしじや！」

その時ドツと喊声が起こり、数百の騎馬武者が轡くつわを揃え、この大藪地の密林を分けて、移動する松明の方角へ、走つて行く音が聞こえて来た。

「一大事、こりやどうじや！」

また姥は叫んで地団太を踏んだ。

「ありやア到着した六波羅勢じゃ！ それがああ火にたぶらかされ、飛天夜叉組が落ちると観じ、追って行くわ、駈けて行くわ！ ……こりやたまらぬ、一大事じゃ！ ……やアやア誰か退き鉦を打て！ ……味方をここへ集めねばならぬ！」

声に応じて眷族の一人——鳶とびの七九郎という男が、用意してあつた鉦かねを取るや、桴ばちさばき荒く打ち鳴らした。

音は忽ち哈ごうごう々と鳴り、大藪地の四方へ響き渡った。

が、どうだろう、その音に應じて、ここの陣地へ帰って来たものは、十四、五人に過ぎなかつた。

その他の姥の眷族や、姥に味方して戦っていた、ここの大藪地の住人の、野武士や非人や盜賊の群れは、六波羅勢と同じように、移動する松明にたぶらかされ、飛天夜叉組落ちると観じ、追討ちにかける気でその方角へ、いずれも馳せて行つたらしい。

「残念！ ……一大事！ ……無念！ 南無三！ ……飛天夜叉めにしてやられた！」

またも姥は地団太を踏み、狂うように躍り上がり躍り上がったが、

「向こうがそうならこつちはこうじゃ！ ……火をともしたなら消すばかりよ！ ……嵐

を起こして、雨を降らして！ ……姥の法力見よや見よや！」

御幣ごへいを額へ押しあてた。

が、その時沼の岸づたいに、一団の人影嵐のように、こつちに向かつて殺到して来た。眷族たちは騒ぎ出した。

「飛天夜叉だ！」

「飛天夜叉組だ！」

姥は凝ぎようぜん然と突つ立った。

「打たれた！ ……先手を！ ……また打たれた！ ……飛天夜叉組じゃ！ ……いかに
もそうじゃ！ ……こうなつては法も祈いのり祷も！ ……間に合わない！ 間に合わない！

……どうしようぞ、範覚範覚！」

見る見る飛天夜叉の一団は、距離あわい間近く迫って来た。

「範覚範覚範覚ヨ——ッ」

大竹藪をうしろにとり、鬼火の姥の眷族の、四つの死骸を足もとに置き、眷族の一人から奪ったらしい、血にぬれた太刀を右手に持ち、それを頭上にふり冠り、左の手に青竹の

杖を持ち、幽鬼さながらに構えている、盲目の頼春を向こうに廻し、金地院範覚は金剛杖を、八相に構えて睨んでいた。

好色で残忍でヨタで駄弁で、懦弱だじやくにさえ見える範覚ではあったが、その実「棒」の一手にかけては、鬼神をあざむく使い手で、金環金筋で堅固に作った、金剛杖の一薙ひとなぎは、利刃りじんよりも凄く鉄才かなさいぼう棒よりも、恐ろしい力を持っているのであった。

がその範覚が杖を構えたまま、進みもしなければ打つてもかからず、じつといつまでも静まっているのは、いったいどうしたというのだろうか？

と、範覚は呻くように云った。

「凄い！ ……ウム……凄いのう！」

ジリリと一足後へ退さがった。

と、頼春は一足進んだ。

しかしわずかにそれだけであった。

依然として二人ながら静まっていた。

（何者だろう？ この盲人？ ……凄いのう、まるで剣鬼だ！）

ゾツとするような殺気を感じ、範覚はまたも一足さがった。

密林の乱闘

後年の武士が武勇を現わし、それを人に誇る時、

「身は頼兼に似たるかや？」

と、セリフのように云ったそうである。

土岐十郎頼兼の武勇は、それほどに勝れていたのである。

その頼兼の一族にあたる、土岐藏人頼春の武勇——劍の技わざに至っては、頼兼に劣らないばかりでなく、たち勝っていたということである。

盲目の身ではあつたけれど、心眼心耳には狂いがなかった。

対者の行動が歴々と、心眼に映じ心耳に聞こえた。

怨みある鬼火の姥の眷族、五人までを討って取り、姥のおり場所へ行こうとした時、また一人敵が現われて、いま立ち向かつて来たのであつた。

（今度の相手は腕の立つ、ずいぶん凄いい奴らしい）

そう頼春には感じられた。

大刀を頭上にふり冠りながら、木の葉の落ちるのさえ感じられる、その靈妙の心耳を澄まし、相手の呼吸をうかがった。

「貴殿……」

と範覚は噎しわがれた声で、金剛杖を構えたままで、疑がわしそうに呼びかけた。

「貴殿……お名前……お明かしください！ ……あまりに美事なお腕前……お名前聞きたい……おあかしください！ ……拙者は金地院範覚と申す！」

「いや」

と頼春は言下に答えた。

「決して姓名申しますまい！ ……誰にも云わぬ、何者にも明かさぬ。……が、このようにご記憶ください。……『裏切り者』と。……な、このように」

「裏切り者？ とは？」

「またこのようにご記憶ください。『神の界くにに属する御一方おんひとかたに、許すとお言葉うけたまわるまでは、死ぬことの出来ぬ男』じゃと。……」

「不思議なお言葉！ ……気にもかかる！ ……拙者も一人の裏切り者を、この頃たず尋ねているのでござるが……しかしその者は無双の美男、かつ立派な若い武士、貴殿のような盲

人ではない。……」

さよう、範覚の尋ねているのは、——姥と共にたずねているのは、土岐藏人頼春なのであつた。

そうして頼春とはかつて一度、京の往来で姥と一緒に、暁方に逢つたことがあつて、その風貌は知つていた。

が、まさかに現在自分と、向かい合つているこの男が、その頼春とは思わなかつた。乞食さながらであり盲人だからである。

頼春にしてからがそうであつた。

ここに自分と向かい合つている男が、かつて鬼火の姥によつて裏切りをしやうよう懲こされた時、現われて来た若い山伏——それであろうとは知らなかつた。

盲目で見えないからである。

「貴殿」

と範覚はやがて云つた。

「我らが仲間を五人がところ、討つて取られた上からは、我らにとって貴殿は敵、惜しい人物とは存ずるが、この範覚お助けは出来ぬ！……覚悟なされい、観念なされい！」

「さようか」

と頼春は水のように云った。

「神の界に属する御一方に、許すというお言葉うけたまわるまでは、決して死ねぬこの拙者じゃ！ ……行く手を遮る者があらば、誰彼問わず用捨いたさぬ！ ……殺生ながら討つて取る！」

「参るゾ——ツ」

「……………」

ガツ！ 礫が飛び土煙りが上がり、真竹が十本束になって切られ、婆娑と地上へ仆れて来た。

金剛杖で薙いだのであった。

が、それをかわされたのであった。

三尺たらず後退った位置に、頼春は立っていた。右手で太刀をふり冠り、左手で青竹の杖を持ち、同じ姿勢で立っていた。

力負けて自分の方が、右手へよろめいた範寛は、

（凄いのう）とまた思った。（俺の方がやられる！ 俺の方がやられる！）

かつてこれまで一度として、かわされたことのない一難ぎであつた。それをどうしてかわしたのか、盲人の身でありながら、眼にもとまらず引つかわし、寂然として立っているのであつた。

(凄いのう。俺の方がやられる！)

範覚は恐怖を感じたが、さすがに逃げようとはしなかつた。

左へ左へ左へと足音を忍ばせて廻り込み、隙を狙つてもう一度、足を薙いでやろうと構え込んだ。

と、どうだろう、相手の盲人は、両眼さながら見えるかのように、これも左へ左へと、同じように廻り込んだ。

(変だ。いや変ではない。……こやつ見えるのだ！ 眼が見えるのだ！)

範覚はそう思った。

(それにしても何者だろう？)

なお範覚は執念深く、左へ左へと廻り込んだ。

と、そういう範覚の耳へ、鬼火の姥のいる沼の方から、けたたましい退ひき鐘かねの音が聞こえ、つづいて烈しい喊声が聞こえ、やがてこつちへ大勢の者が、走って来る音が聞こえて

来た。

(どうしたのだろうか？ 何か起こったな！)

そう思った暇もなく、木の間をくぐり藪を踏み越え、数十人の人影がなだれて来た。

悲鳴！ 叫び声！ 喚き声！ 切り合う音！ 仆れる音！

「飛天夜叉だ！」

「鬼火の姥め！」

とつ組み合う者、斬られる者、追いつめる者、追いつめられる者！

それは飛天夜叉組に斬り込まれ、支えかねて鬼火の姥の勢が、沼辺からこつちに逃げて来たのを、飛天夜叉組が追って来たのであった。

松明が地上にころがった。

枯れ草に燃え移ってカツと立つ！

その横に首級くびがころがっている。

範覚も盲人も混乱の渦に、その所在を眩まされ、どこにいてもわからなくなった。

こんな場合にも恋人同志は手を取り合わなければならぬものと見え小次郎と浮藻とが手を取り合い、戦いは味方が勝っているので狩場かりばで獣でも追うかのように勢い込んで追

駈けて来た。

と、その前へ現われたのは、これも恋人同志であった。

少しばかり臺とうは立っていたが、恋人同志には相違ない、鬼火の姥と範覚とであった。

「やア汝おのれは！」

と姥は云った。

「いつぞや京の町で逢った美しい若衆じやな、若衆武士じやな！」

小次郎に向かつて云ったのである。

「頼春殿と連れ立って、歩いておられた若衆武士じやな！ ……美しや、おおおお！ ……

…おお遁がさぬ！ 取る！ わしのものにする！ ……美しや、おお、おお、おお！」

「助けてくれ——ッ」

と小次郎は悲鳴し、タジタジと背後うしろへよろめいた。

「浮藻殿浮藻殿助けてくだされ！」

その浮藻は金地院範覚の、蛇のような眼に見詰められていた。

「いい娘じや！ こりやどうじや！ ……処女おとめの、未通女きむすめの、お手本じや！ ……俺きめ決定

た！ 俺のものにする！」

浮藻の方へ突き進んだ。

と、その範覚の眼を掠^{かす}めて、カッと銀色に光るものがあつた。

夢中で範覚は金剛杖で払つた。

活然！

音！

流星だ！

斜めに光り物は地へ落ちた。

が、すぐにユラユラ、ふたたび宙へのし上がった。

「や——汝^{わりや}ア!!」

「香具師^{やし}よ香具師よ！」

「大木戸で逢つた……」

「香具師よ香具師よ！」

「宣^{なの}れ！」

「汝^{おのれ}は？」

「金地院範覚！」

「鬼火の姥の眷族だな！ ……俺ア大蔵ヶ谷右衛門よ！」

「飛天夜叉めの!? ……」

「忠義の家来だア——ツ」

いかにもそこへ走つて来たのは大おおまさかり 鉞をひっさげた、豪勇大蔵ヶ谷右衛門であつた。

「鉞くらつてくれたばりやアがれ！」

真つ向からビューツと振り下ろした。

受けたら最後金剛杖など、薪ぎつぼうのように折れたであろう。

範わんざし覚も業師、飛んで避け、

「くらえ！」

と金剛杖を振り込んだ。

が、その時山崩なだれのように、敵味方の勢一団にかたまり、二人の間に殺到して来た。

混乱！

閃光！

血！

飛ぶ首級くび！

が、人間の屠殺団とさつだんは、屠殺し合いながら他の地点へ、すぐに雲のように移って行った。
 脛すね当てのあてたまま斬られている脚！

たたきつぶされた陣笠かぶとや胄かぶと！

メラメラ燃えている数本の松明！

それだけで人間はいなかった。

が、すぐに藪の蔭から、鬼火の姥が走り出して来た。

キヨロキヨロあたりを見廻したが、

「あの美しい若衆武士を！……わしやどうしても！ わしやどうしても！」

小次郎をさがしに来たのであった。

「こりやア何んだ？」

と不意に云って、姥は地面へしやがみこんだ。

燃えている松明と生首なまくび級との間に、一本の巻軸が落ちている。

姥は取り上げて解いて見た。

日野資朝、

藤原俊基、

その他の人の名が記されており、その下に血判が捺してあった。

「連判状だ——ッ」

と姥は叫び、躍り上がってブン廻った。

「これさえありやア！ これさえありやア！」

とたんに竹の林を分けて、一人の男が走り出して来た。

「さっきの娘、思い切れねえ！」

それは金地院範覚であった。

「や、姥か！ ……少しばかり邪魔な」

「範覚ウ——ッ」

と姥は走り寄った。

「テ、手に入れたわ、レ、連判状オ——ッ」

「ホ、ほんとかア——ッ」

と首を延ばしたが、

「娘は？」

と尚もキョロキョロし、

「ホ、ほんとかア——ツ、偉い偉い！……が、娘は娘は!! 娘は娘は!!」
 この時傍らの大槻の木の、てっぺんあたりから雪のように白い、布のようなものが舞い下りて来た。

ニンフ
 水精の群れ

雪のように白い布のような物は、鬼火の姥を上から蔽うた。

「ワ——ツ」

「ギャ——」

と、布のような物は、すぐに宙へ舞い上がった。

「連判状を取られた——ツ」

「ケダモノ——ツ」

と、範覚は槻の木の梢の、猩々を目掛けて金剛杖を投げた。

「ギャ——ツ」

と猩々は悲鳴を上げ、もんどり打って地へ落ちて来たが、折られた片脚を引きずって、

また槓の木へ搔き上がり、枝から枝、梢から梢へ、渡り伝わり姿を消した。

「取られた、連判状を！ ……？ あッ、あッ、取られた——ッ」

姥は地面へペツタリと坐り、阿呆のように空ばかり仰いだ。

戦いはしかしこの大藪地の、あなたに行なわれているらしく、喚声や剣戟の烈しい音が、嵐か怒濤のように聞こえて来た。

やがて数年が経過して、元弘元年七月となった。

比叡山の裏山の谷川で、三人の女が泳いでいた。

琵琶湖へ流れ込む谷川で、左右は樹木と岩組であり、遙かの上流には布を垂れたような滝が、白く巾広くかかっていた。

女たちの泳いでいるその辺りは、岩組が開らせ水がたたなわり、広い渚をなしていたが、蒼空を一片だけ切り取って来て、さながらそこへはめ込んだかのように、水は凄いままでに紺碧であつた。

で、鵠の鳥を想わせるような、純白で艶のある女の裸身は、その色に染められて己自身、紺碧になるかと疑がわれさえした。

それは飛天夜叉桂子の身内の、幽霊女ととりむすめ 鷄娘と、そうして、妹の浮藻であった。
三人の女は泳ぎながら、対岸の一所を絶えず眺めた。

そこには洞窟があるのであった。

それは、この世がまだ未開で、人間が穴居をしていた頃に、そういう人間が住んでいた洞窟で、その洞窟以外にも、この辺には同じような洞窟が、いくつか存在しているのであった。

が、洞窟は杉や、柏や、はぜ 櫨や、野茨に蔽われて、その口を示してはいなかった。

滝や谷川にはつき物のような、いわつばめ 岩燕は空に舞っているし、せきれい 鶴鴿は岩の上を飛んで

いるし、五位鷺は岸の蘆あしの中に、片足でいかめしく立っていて、カラリと晴れた今日の風景は、美しく清らかで幸福そうであった。

が、一つだけ気にかかることがあった。

それは洞窟のある一所から、絶えず煙りが出ていることであつた。

それも尋常の煙りではなく、墨のような色をした煙りでありなまぐ 腥ささを感じさせる煙りであつた。

煙りがそこから吐かれて来るからには、何者か住んでいなければならぬ。

でも、女たちは恐ろしげもなく、その洞窟の住人どもを、かえって誘惑でもするかのように、陽気にハシャイで泳ぐのであった。

「怨めしきは判官殿、わたしを恋死にさせながら、あなた様にはノンキらしく、ほかに増ますはな花の女をつくり……口惜くやしい——ッ」

と幽霊女は云ったかと思うと、ピシヤリ！ と水を掬ってかけた。

と、飛沫ひまつがパ——ッと立ち、日に射られて一刹那、そこへ鮮かに虹をかけたが、水をかけられた鶏娘は、

「キャ——ッ」

と、大仰に悲鳴をあげ、頭からドボ——ンと飛び込んだ。

と、綺麗な二本の脚が、水面から空へピンと延び、しばらく宙でただよったかと思うと、グーツと水の中へ引き込まれてしまった。

死んだかな？ 心配はない！ 三間ばかりの下流へ浮かんで、

「コケコツコー、水あびたーッ、トテコーヨー、こん畜生！」

ピシヤッ！ と水を刎ねとばした。

と、また飛沫しづきに虹が立ち、

「キャ——ッ」

と、今度は幽霊女が叫び、あおのけぎまに引っくり返った。

で、少し痩せた胸から腹から、股から膝から爪先まで、ポカーンと水面へノビて浮かび、
 一間ばかり流れたかと思うと、こいつも水中へ引つ込まれてしまった。死んだかな？ 心配はない！ 二間ばかりの上流へ、頭から先に浮かび上がり、

「怨みあるものか、ないものか……」

ピシヤッ！ とまたも水を刎ね、

「思い知らさでおくべきか——ッ」

「キャ——」

ドボ——ン！

と、鶏娘が沈み浮かび上がると、

「コケツコツコ——」

——で、大変陽気なのであった。

しかし浮藻だけは少し寂しく、水のかけつこの合戦から遁がれ、水中に立っている岩の上へ、一人で今登って行った。

年を加えた浮藻の体は、もうすっかり女になりきっていた。

円い肩、ふくよかの胸、ほどよく割れた細い腰、ピチリと合わさって隙のない股、乳房の円味は半月形であり、脛の線など弓のようであった。水を浴びて少しばかり赤味ざした肌は、瑪瑙を薄絹で包んだようであり、踵まで届きそうな長い髪が、肩から背中を蔽うている様は、天使が黒い巨大な翼を背に畳んでいるそれのようであった。

黄金の雨のような陽の光の中に、そういう彼女の立っている姿は、艶美というよりも妖艶であった。

浮藻は髪を絞りながら、そこからしたたる水の滴を、水晶の簾さながらに、胸や腹に懸けながら、声を張って歌い出した。

澄んだ清らかな声ではあったが、烈しい情熱と悶えとが、その底に強くこもっていた。

それはもう決して無邪気な童心な、小娘などの声ではなく、肉体も感情も成熟し、異性に憧憬れ恋の苦しみに、さいなまれている女の苦しみ——それを現わした声であった。

でもその声は男を知らない、——だから男を知ろうとしている、発達した処女の声でなければならぬ。

たかどの
高樓の欄干には姫が一人、
みずうみ
湖水の小船には武士が一人、

見交わす瞳には恋の、

来ませ来ませと呼び合う声

そう歌う浮藻のそういう声こそ、恋人を呼ぶような声であった。

一町も二町も響きそうな、そういう高い声であった。

小次郎を恋しているのであった。

とげられない恋の小次郎を！

でもどうして二人の恋が、今にとげられないのであろうか？

小次郎の心が変わったからであらうか？

いや決してそうではなかった。

恐ろしい邪魔がはいったからである。

姉の桂子その人であった。

邪魔の主は飛天夜叉なのであった。

そう、飛天夜叉の桂子が、小次郎に恋してしまったのであった。すくなくとも浮藻にはそう思われ、そう思われる理由があった。

もう桂子は以前のように、浮藻と小次郎とを勝手自由に、接近させては置かなかった。時々接近しようとする、一種の眼をもつて二人を睨み、優しく穏か^{おだや}で上品ではあったが、一種の声をもつて二人を制した。

そうしてそれはその二人が、成熟しきつた男女なので、かるはずみの恋をとげることが、監督者として警戒するという、そういう意味のものではなかった。

その睨みは嫉妬の睨みであり、その制止も嫉妬の制止なのであった。

そうして桂子はいつの場合でも、小次郎を他所^{ほか}へやろうとはせず、自分の側^{そば}へばかり引きつけて置いた。

そうして小次郎へ話しかける、桂子の声や態度には、媚^{こび}があり艶^{なまめ}きがあり、哀^{うったえ}訴^{たえ}があり祈願^{いのり}があった。

恋でなくて何んだらう！

それにしても浮藻には不思議であった。

(恋を封じられているお姉様が、まあどうして今になって、小次郎様などを恋するのであろう?)

このことが浮藻には不思議であつた。

そう、姉の桂子は、恋を封じられている筈であつた。

それについて浮藻は姉の口から、以前こういうことを聞かされた。――

「浮藻や、わたし妾は可哀そうなんだよ。妾は一生涯男の人とは、恋をすることは出来ないのだよ。恋をとげた刹那妾の力は――普通の人には出来ないことでも、妾だけに出来る超自然の力が、失われて返つて来ないのだよ。……そう運命づけられているのだよ。……浮藻や、妾は美しいでしょう? だから妾から恋してもよければ、男の方からも恋されるのだよ。

……そういう妾が恋を封じられている……でもその代わり超自然力を、与えられているのだよ。――ところがどうだろう鬼火の姥は、妾とは全然反対なのだよ、姥はあんなに穢きたないから、自分でも恋する資格がなく、男からも恋されはしないわねえ。……そういう姥はいつの場合でも、恋していなければいけないのさ。いつでも男と接していなければ、あの女の持っている通力が、妾と同じような超自然力が、失われてなくなってしまうのだよ。……それがあの姥の宿命なのさ。……だからあの姥から超自然力を奪おう、こう思ったら一

切の男を、姥に接近させなければよく、持っている男を取り上げればよいのさ」
そういう桂子の身の上なのに、どうして小次郎などを恋し出したのだろう？
これが浮藻には不思議なのであった。

黒髪から水を絞り絞り、浮藻は尚も歌いつづけた。

月がかくれて鳥啼めきやめば

船もかくれて櫂かいの音ばかり

行きし恋人帰り来ずに

来ませと呼ぼう声のみ残り……

「コワイみたいなものだ」

と云いながら、周囲まわりに集まっている仲間の者を、ニヤニヤ笑って見廻したのは、道楽のあげく悪疾を受けて、鼻と片眼とを失ったらしい、三十がらみの乞食こしきであった。

「ウツフツツ、悪かアねえ」

乞食と同じように木の間から、女たちの水浴を覗き見ていた、浪人くずれらしい男が云った。

流浪の人々

三人の女の水浴を見ながら、話し合っている人間は、男女とりまぜ八人であった。

世のすたれもの廢人、社会の落伍者、いわゆる流浪の人々であった。

どこかしら彼らは不具かたわであった。

片手ないもの片足ないもの、両耳を剃って落とされたもの、鼻や唇の欠けたもの。……病気でそうなったものもあれば、刑罰によってそうされた者もあった。

その中に一人長方形の白布を、額からかけて頤の下までかけ、顔をかくしている若い女があつた。

癩らいびよう病患者でもあるのだろうか？

それにして頸筋にも手足にも、それらしい徴候があらわれていず、むしろその手は細く白く、上流の産まれを想わせるほど、華車きやしゃでもあり上品でもあつた。垢づきよごれた檻ぼ

襖をまとい、履物はきものさえはいていなかったが、体つきには高雅な品があった。

容貌もおそらく美しかろう。

が垂れ布に蔽われて、誰も見ることは出来なかった。

あるいは容貌が醜くすぎるので、それを恥じてそのように垂れ布で、顔を隠しているのかもしれない。

前方谷川に向かつては、栗の木がまばらの林をなし、後方低い丘に向かつては、馬酔木あしびが丈余の叢くさむらをなしてい、その中ほどの草の原に、檻ぼろと垢のむらみとに包まれている不具かたわの流浪者が、八人がところかたまって、蠢うごめきながら話しあっている様子は、向こうで三人の妖艶の裸女が、水浴をしているのと対照的に、みにくく浅ましく奇怪でさえあった。

「岩の上に立つて歌っている女、こっちへ向いてくれると嬉しいのだがな」

こう云つたのは前身えとりが屠者で、他人の牡牛を盗んだ咎とがで、両耳を剃り落とされた中年者であった。

「ゆつくりここに構えていようぜ。するとあの娘がこつちを向いて、笑いかけてくれるというよい運命にだって、ぶつからないものでもないからなあ」

こう合槌をうったのは、以前は鎌倉の犬飼いであったが、あやまって長崎ながさき高資たかすけの犬

を、自分の犬が食い殺した咎で、右の手を肘から切り取られたと、自称している老乞食であつた。

「ナ、何事も辛抱が大事」

こう老乞食は言い足した。

「秘密のところは見たいものさ」

こう云つてニヤニヤ笑つたのは、先刻から顔へ白布を垂らした、若い女の顔を見ようと、横から覗いたり下から覗いたり、いろいろさまさま苦心したが、一向苦心が酬いられず、女の顔が見られないので、すくなくならず心をイライラさせている、武士あがりらしい男であつた。

左の手の指が五本ともなかつた。

他人の女房をとつた咎で、女の良人おとこに私刑しけいされたのだと、自慢らしく云つていた。

「向こうの女の前も見たいが、こつちの女の顔も見たいものだ。えい、いつそ！」

と云つたかと思うと、矢庭に白布をひつたくろうとした。

とたんに彼は、

「ワツ」

と叫び、あおのけざまにひっくり返った。

女の懐ふところ中から菱形ひしがたをなした、蝮まむしの首が現われて、彼の手を目がけて延びたからであつた。

「やったね、アツハツハツ、とうとうやったね」

「あの大將こいつを知らなかったそうな」

「懲こりて二度とはやるまいよ」

爾余の者は面白そうにそう云つて笑つた。

蝮はしかし穩おとなしく、錢形模様の美しい体を、五寸ばかり懐中から抜き出して、陽ひの中でその体をテラテラ光らせ、口から緋色の舌を吐いてみせた。が、やがて懐中の中へ、引かれた紐のようにはいつて行つた。

蝮の持ち主のこの女は、頼春の妻の早瀬であつた。

早瀬いえが自家をさまよい出たのは、数年前のことであり、愛する良人の頼春が、多治見ノ四郎二郎国長の館を、六波羅勢と一緒に攻め、その戦場から行方不明になつたと、そう耳にしたその日からであつた。

彼女には良人の心持ちが、ハッキリわかるように思われた。

（あの人が宮方に一味したという、そういう秘密をわたしに話した。それをわたしがお父様に告げた。その結果あの人はお父様に強いられ、厭応なしに宮方を裏切り、武家方六波羅方に返り忠をなされた。その結果があんな騒動となり、あの人の一族の土岐頼兼様や、多治見ノ四郎二郎国長様が、むぎむぎ討たれてお果てなされた。……それをあの人は後悔されたのだ。そうして返り忠の武士として、六波羅方にお仕えし、安閑と生活なさることを恥じ、行方不明になられたのだ）

そう彼女には感じられた。

（浄罪の旅へ、※悔さんげの旅へ、あの人は出かけて行かれたのだ）

そんなようにも思われた。

（あの人はわたしをどう思っているのだろうか？）

（憎んでいるに相違ない）

そう彼女には思われた。

（浄罪の旅へ、※悔の旅へ、追いやった元兇がわたしなのだから、あの人はわたしを憎んでいるだろうよ）

彼女にはこれがたまらなかった。

(どうともしてあの人にお逢いして、あの人憎み、あの人怨み、あの人怒りの鞭しもとを受けたい。……どんなにしてもわたしは謝罪したい。……お許しがなければ殺されたい) 彼女は良人に殺されようために、流浪の旅へ出たのであった。

(あの人なしではわたしは生きられない)

こういう感情もちろんあった。

良人恋しさが根本となり、その良人に謝罪したい、その良人に許されたい、その上でなら殺されてもよい。

これが彼女が自家いえを出て、流浪の身となった原因であった。

数年に渡る流浪の旅が、いつか彼女を女乞食にした。

あらゆる苦難と迫害と、誘惑と陥かんせい穽せいとが彼女を襲った。

六波羅第一と謳うたわれた美貌は、乞食となっても面影を残し、彼女の貞操を暴力をもって奪おう——そういう男が時々出た。

そこで彼女は考えた。

(わたしは誰にも顔を見せまい)

そこで癩病患者かのように、顔へ白い布を垂らしたのである。

それでも痴漢は彼女を襲つて、その白布を取ろうとしたり、その貞操を奪おうとした。懐剣などで防ぐことは、かえつて危険を招くことであつた。

奪いとられたらこつちが斬られる。

不思議にも彼女には子供の時から、長虫を恐れない性癖があつた。

逝^ない母などは心配して、「この娘はきつと嫉妬ぶかいよ、この娘はきつと執着づよいよ、女の身で長虫を恐がらないのだから」と、溜息と共に云つたほどである。

これが彼女に幸いした。

彼女は蝮も手なずけた。兇猛の蝮も彼女にかかると、自由になる生きた紐かのようなり、穏しく懷中で眠りさえした。

もう彼女は安全であつた。

うっかり彼女を襲つた男は、したたか毒虫に噛みつかれた。

知つている者は襲おうとはせず、知らずに一度襲つた者も、二度と襲おうとはしなかつた。

こうして彼女は今日が日まで、貞操を安全に保つことが出来た。

悪あがきをした武士だけが、遠く群れから離れて立っていたが、爾余の者たちは早瀬の

周囲^{まわり}で、また暢気^{のんき}そうに話し出した。

「『裏切り者』って男を知っているかい？」

頬からかけて頤の辺まで、刀傷のある男が云った。

「噂にだけは聞いているよ」

両足ともかくも揃ってはいるが、左の足がどういいう加減か、発育不完全で竹のように細い、そういう不具者の五十男が云った。

「なんでも盲人^{めくら}だということだな」

「うん」

と刀傷の男が云った。

「俺は一度だけ逢ったことがある。盲人だよ、凄^{あさま}しい盲人だ」

「むやみと人を斬るそうだが？」

「うん、むやみと斬るそうだ。……昔はそうでもなかったそうだが。……そうだ昔はその男の行く手を、変^まに遮^{さへぎ}って邪魔などとすると、怒^{いか}って斬ったということだが……今じゃアむやみと斬るそうだ」

「狂^{きちがい}人だよ！ 殺人狂^{きちがい}さ！」

吐き出すようにこう云つたのは乳飲^{ちの}み子を膝へかかえ上げ、胸もとをひろげて乳房を出し、それを含ませている二十八、九の、瘦せさらばえた女乞食であつた。

「その狂人の人^{ひとおに}鬼でも、この可愛い子供を見たら、——この子供はずいぶん可愛いわね——殺生の気持ちなどなくなしてしまつて、^{ほとけごころ}仏心になるだろうよ」

「駄目だよ」

と刀傷のある男が云つた。

「その男は盲人なのだからな、子供を見せたつて見えやアしないよ」

「では私は抱かせてやろう。その盲目^{めくら}の狂人にあつたら、この可愛い子を抱かせてやろう」

「この女こそ狂人なんだがなあ」

と、片足竹のように細い男が、気の毒そうに小声で云つた。

「誰だろう、こんな気の狂っている女に、殺生な子供なんかはらませたのは。……それはそうと盲目の殺人狂は、名を宣^{なの}らないということだの」

「そうだ」

と刀傷のある男が云つた。

「誰かが名を訊くとこう云うそうだ、『このようにご記憶ください、裏切り者とな』こ

のように……またこんなように云うそうだ、『神の界くにに属する御一方おんひとかたに、許すとお言葉うけたまわるまでは、死ぬことの出来ない男じゃ』と。……」

「竹の杖を使うということだが？」

「そうだ、……竹の杖が得物なのだ。それでズバリと咽喉のどをつくのだ。……狙いは絶対に狂わないのだそうだ。……が、相手が大勢の時には、相手の持っている太刀を奪って、そいつで斬って斬りまくるそうだ」

「名を宣らないという段になると、ここにいるお嬢様とおんなじだな」

こう皮肉に云いながら、耳を剃り落された浪人くずれの男が、早瀬の方へ頤をしやくつた。

「このお嬢様も名を宣らないで。お嬢様お名前をおきかせくださいと俺が以前まえかたお訊ねしたら『追い慕っている女でございます』とこうお返辞くださいされたばかりさ。アツハツハツ追い慕っている女か！」

みんなはここでドツと笑った。

そうして一斉に早瀬の方を見た。

が、早瀬は黙っていた。そうして身動きもしなかった。

で、明るい陽の中に、顔にかけられた布ばかりが、変に気味悪く白々と浮き出し、妖怪画にあるのつぺら坊のように見えた。

「ところで……」

と片足細い男が、刀傷のある男へ云った。

「裏切り者というその男と、貴殿どこで逢われたかな？」

「美濃の青墓で逢いましたよ」

「今でもそこにおりましようか？」

「さあそれは？ ……どうであろうかな？」

この時不意に悲鳴が聞こえた。

みんなはギョツとしてそつちを見た。

と、早瀬に悪あがきをし、蝮に脅されて胆を冷やし、遠く離れた馬酔木あしびくさむらの叢の、裾に、膝を抱いてこつちを眺めていた男が、あおのけぎまに地に仆れ、手足を宙に泳がせていた。

みんなそつちへ走って行った。

その男の咽喉から血の泉が、頤の方へ吹き出していた。

「きやつだ！ ……裏切り者！ ……きやつがやったんだ！ ……竹の杖で！ ……ブツ

りと咽喉を！……俺は知っている！……きやつの手口だ！」

刀傷の男がそう叫んだ。

「じゃアそいつこの辺にいるんだ！」

「逃げろ！」

「あぶない！」

と数人が叫んだ。

もうその次の瞬間には、乳飲み子を抱えている狂^{きちがい}人の女と、早瀬とだけが後にのこり、ほかの者の姿が見えなくなっていた。

陽が明るくあたっていて、馬酔木の丘のような大きな叢^{くさむら}が、その葉を銀色に光らしていた。

(まあ恐ろしい)

と早瀬は思った。

(白昼^{まひる}に人が殺されるなんて。……そうしてどうだろう殺した人の姿が、どこにもあたりに見えないなんて)

彼女は殺されている男の側^{そば}に、首を垂れて立っていた。

顔の前に垂れている布の裾から、わずかばかり見える足もとの地面、それだけが彼女の視界であつた。

彼女は非常に長い年月、布をかかげて遠くの世界や、身のまわりを見ようとはしなかつた。

（わたしは誰も見たくない。わたしは何んにも見たくない。……そう、あの人を見るまでは！）

この心持ちが彼女をして布をかかげることをさせないのであつた。

（良人おっと頼春に逢うまでは、誰も見たくない、何も見たくない）

この心持ちがそうさせるのである。

彼女も杖をついていた。

その杖で行く手をさぐりながら、馬酔木の叢を巡りながら、当てなしにソロソロと歩いて行つた。

近畿地方はいうまでもなく、山陰、山陽の方面まで、数年の間に良人を尋ねて、彼女は流浪し歩き廻つた。

そうして京の地へ帰つて来たのは、数日前のことであつた。

実家へ帰ろうとはしなかった。

家のことも父のことも、彼女の心にないからであつた。

ではどうしてこのようなところへ——比叡山の裏山というようなところへ、彼女はやつて来たのであろう？

流浪中に彼女にも仲間が出来た。

その仲間がここへやつて来たので、それで彼女も来たまでであつた。

ではどうして彼女の仲間は、こんなところへ来たのであろう？

神社仏閣の所在地へは、世のすたれもの廃人や社会の落伍者が、おのずと集まるからであつた。

ことにこの頃の比叡山の裏山には、そういう廃人や落伍者ばかりでなく、盗賊、追い剥ぎ、悪祈祷者、そういう者まで集まつていた。殺生禁断の場所だけに、鳥獣なども無数にいた。それを狩るために獵師などまでが、弓矢をたずさえてはいつて来、猪ししごや小屋をかけて住んでさえいた。娼婦の群れさえいたほどである。

早瀬は叢の向こう側へ行つた。

と、自分の歩いて行く先を、何者か歩いて行く者があつて、草を分ける音がかす幽かに聞こえた。

彼女は思わずゾツとした。

（裏切り者ではあるまいか？ ……めくら盲目の殺人狂ではあるまいか？）

彼女はたたず佇んで耳を澄ました。

でも彼女は布をかかげて、前方を見ようとはしなかった。

（誰も見たくない、何物も見たくない！）

足音は馬酔木の叢を巡って、今まで彼女たちの一団がいた、その方角へ行くようであった。

不意に女の悲鳴が起こった。

つづいてあかこ嬰兒の泣き声が聞こえた。

「おや」

と早瀬は呟いたが、何がなしに気にかかり、声のした方へ小走って行った。

元いた辺まで走って来た。

つまずいたので足を止めた。

布の裾からわずかに見える、地面の視界の一所に、咽喉をえぐられた女乞食の、その死骸の咽喉の一部と、乳房をあらわした胸の一部と、その胸の上へ乳房を求めて、這い上が

つて来た嬰兒の顔とが、ばけものえ化物絵のように見えていた。

「まあ」

と早瀬は思わず叫び、ベタベタと地上へ坐つてしまった。

「殺されている！ ……咽喉をえぐられて！ ……では……」

と云つたが黙つてしまった。

しかし彼女の心の眼には、盲目の殺人狂の恐ろしい姿が、持っているという竹の杖と共に、——一度も見たことのない相手なのではあつたが……想像によつて映し出されていた。

のろ（咒う！ 私、その男を咒う！）

早瀬はしばらく動かなかつた。

嬰兒がはげしく泣き出した。

乳房をさがし出して吸つたのであつたが、死人から乳は出なかつた。乳房にも血汐は流れ寄つて来ていた。その血が口へはいつたらしい。で、嬰兒は泣き出したのであつた。

「可哀そうに」

と早瀬は云つた。

嬰兒を膝へ抱き上げた。

母の死骸から流された血で、顔を染め指を染めたその嬰兒は、抱き上げられて泣くのを止め、布の裾から顔を覗かせ、早瀬を見上げて無心に笑った。

(わたしこの児を見殺しには出来ない)

早瀬は烈しくそう思った。

殺されている狂人の女乞食が云った、さっきの言葉が思い出された。

——その盲目の殺人狂に、この児を見せてやろう抱かせてやろう、そうしたらその男も仏心を起こして、殺生の真似などしないだろうと、……そういう意味のことを云ったその言葉を！

(気の毒な殺された女の人の代わりに、わたしがこの児をその殺人狂に、抱かせてやろう、そうだ抱かせて！)

その男に対する憎悪の念が、早瀬の心に湧いて来た。

「悪人！ ……鬼！ ……無慈悲な悪魔！ ……罪もないこの児の母親を殺し、無邪気なこの児を孤児などにして！ ……」

この時早瀬の懐中から、銭形模様の艶のある紐が、五寸あまり延びて出た。彼女の懐中にいた蝮であった。

膝の上へ嬰兒が抱え上げられ、懷中が外側から圧せられたので、苦しくなつて出て来たものらしい。

怒つた鋭い輝く眼で、嬰兒の顔を睨みながら、どこを嚙もうかというように、鎌首をユラユラと左右へ振つた。

嬰兒は恐怖を知らなかつた。

珍らしそうに蝮を見詰め、その鎌首を掴もうとして、両手を延ばして揺れる後を追つた。早瀬は垂れ布の内側で、眼をとじ物思いにふけていた。

そういう人々をこなたに置き、間に馬酔木の叢を置き、その馬酔木の向こう側を、血のついた竹の杖をつき、襪褌を着た瘦せた乞食のような盲人が、肩を落とし首を垂れ、憔悴しきつた足どりで、おぼつかなさそうに夏草を分け、谷川の方へ歩いていく。

土岐藏人頼春であつた。

対岸には墨のような異様な煙りを、しきりに吐いている洞窟があつた。

そうして谷川の岩の上では、裸体の浮藻が髪をしぼりながら、情熱の歌をうたつていた。そうして水中では幽霊女と、鶏娘とが水浴をつづけていた。

洞窟の中

谷川の対岸の洞窟の中は、暗さと煙りと悪臭とで、人など住めそうにも思われなかった。でも人が住んでいた。

十数人の男や女が、のたうったり擲み合ったり、転げ廻ったりして住んでいた。鬼火の姥の眷族なのである。

洞窟は意外に広く高く、そうして奥は深いようであった。どこまでもつづいていようであった。

ずつと向こうに数枚の荒筵が、つなぎ合わされて垂らしてあった。

その隙間から墨のような煙りが、束となって蜓って吹き出して来て、こっちの部屋に押しひろがり木の葉や枝に蔽われているが、しかし、さすがに昼の光によって、明るく窓のように見えているところの、洞の口から流れ出して行った。

これはいったいどうしたことか？ 数匹の犬や、猫や、兎や、狐や、猫が四足をしばらく、地面にころがされているではないか。

荒筵の遥かの奥の方から、祈祷の音が絶えず聞こえ、鈴を振る音が合間合間に聞こえた。

人の呻き声や叫び声、犬の吠え声や狐の啼き声で、こっちの部屋は喧騒けんそうしていたが、その喧騒を貫いて、鬼火の姥の上げる祈祷の声と、鬼火の姥の振る鈴の音が、そんなように聞こえて来ることは、かなり怪奇で物恐ろしかった。

しかし十数人の男や女が、のたうったり転げ廻ったり、搦み合ったりして狂っているのは、決して闘っているのではなかった。

煙りに苦しみ、悪臭にもがき、二十日以上に渡る蟄居ちつきよ生活に、すっかり心身衰弱し、衰弱の余りの兇暴的発作、——その現われに過ぎないのであった。

はだかった女の胸の上に、男の毛脛けむらがのつかって、巨大な乳房をもみくちやにしていたが、女は感付いていないようであり、男のムキ出された腹の上へ、女の手がのびて蠢うごめいていたが、男は一向気がつかず、白痴のように口を開け、ちつとでも清潔の空気があったら、吸ってやろうとでも云いたげに、ハ—ハ—呼吸いそをついていた。

と、不意に荒筵の奥から、男の怒鳴る声が出た。

「贄持にえつて来オ——ッ、贄持にえつて来オ——ッ」

金地院こんじいん範覚はんかくの声であった。

「オ——」

と、こつちから一人が答え、屠者^{えとり}らしい男が立ち上がった。

それから、ヒヨロヒヨロした歩き方で、一匹の犬の側^{そば}へ行ったが、やにわに頸^{えり}がみを掴まえると、荒筵の方へ引きずって行つた。

自分の運命を知つたと見え、犬は行くまいとして縛られている四足をしばられたままで、顫^{ふる}わせて、哀願するように悲鳴したが、噛みつく元気はなくなっていた。

筵の向こうへ犬を抛^{ほう}り込み、

「範覚殿、贄^{にえ}あげました」

云いすてると、その男は引つかえして来て、そこに寝ていた娘の横へ、へたばるように坐り込んだ。

すると、娘は憐れっぽく云つた。

「可哀そうに、あの犬も殺されるのね。……心の臓をえぐられるか、肝の臓をくりぬかれるかして」

「そうさ、可哀そうに、贄だからなあ」

煙りが勢いを加えて来た。

臭気も匂いを強めて来た。

と、また範覚の声が聞こえた。

「贄持つて来オ——、贄が足りねえ——ッ」

「オ——」

と、こつちからまた一人が云つた、坊主あがりらしい円い頭の男が、ノツとばかりに立ち上がると、一匹の狐をひきずりながら、荒筵の前まで行き、狐を向こうの部屋へ投げた。煙りの量が多くなり、臭気がひとときわ濃くなつた。

祈祷の声はなおも続き、振鈴しんれいの音もつづいて聞こえた。

と、不意に荒筵が、向こう側からかかげられ、金剛杖に身を縋らせた、金地院範覚がよろめき出た。

「たまらん、参つた、オレ参つた！」

そう云う声も息絶え絶えであつた。

「鳴らんのだ、釜かまが、贄釜がよ！ ……姥のご機嫌、それで斜めさ！ ……姥のご機嫌もご機嫌だが、こつちのご機嫌だつてナナメだあね。 ……同情してくれ、つもつてもみてくれ！ ……前七日、中七日、後七日で二十一日よ！ ……今日が二十一日だ！ ……二十一日のその間中、姥の調伏祈祷に殉じて、一切生物を断っていたばかりか、この洞窟から

日の光の中へよ、一足も出ること出来なかつたんだからなあ。……そこで肉バナレ女バナレさ。あれ、こん畜生、なんてえザマだ！」

突然範覚は金剛杖を振りあげ、屠者えとりの肩の辺りをくらわせた。

「ナ、なんでえ、ソ、その態さまは！ ……×を抱かかいてころがつていやがる！ ……それで済むかよ！ ……手前達てめえたちも姥の祈祷に殉じ、この洞窟へこもった以上、生物断つなア当然だ！ ……そいつを何んだ、そのザマは！ ……アレいけねえあつちにもいやがる！ ……×ツ子の首つ玉アひつ抱え、グーグー眠いつていやがる！ ……起きろ、外道げだうめ、起きろ起きろ！ ……俺おいらの身にもなつてくれ、人一倍その方は強い俺おいらだ！ ……それがよ二十一日の間、オアズケ食くつていたんじやあねえか！ ……オレ恐れるオレ心配だ。こんな時に、キレイな娘でも見てみる、フラフラとなつてポーツとなつて、死にやアしねえかと心配なんだ！ ……」

喚きながら範覚は、あつちへヨロヨロ、こつちへフラフラよろめき歩き、出口の方へ歩いて行つた。

「そりやア姥も気の毒なものさ、宮方の調伏に対抗してよ、武家方の調伏を引きうけて、肉だち塩だち男だちして、二十一日の荒修行！ ……そいつが効験あらわれず、贄釜が音

を上げねえんだからなあ。今夜の丑うしの刻が勝負の別れ目さ、その時になつても効験なければ、犬や狐じやア間に合わねえ。生き身の人間の男と女とを、贄釜の中へたたつ込まなけりやアならねえ！ ……ヤイヤイ汝おのれら用心しろ！ ……悪くふざけると丑の刻に、贄釜の中へ叩つ込まれるぞ！」

「ヒーッ」

恐怖して叫ぶ女。

「俺イヤダ！ かんにんしてくれ！」

と、今にも自分が贄釜の中へ、叩つ込まれて煮殺されるかのように、寝ていた所から飛び上がる男で、ひとしきり洞内は騒々しくなった。

範覚は出口の方へよろめいて行つた。

「ここも煙い、ここも臭い！ ……せめて呼吸いきでも、せいせいした呼吸でも！」

出口まで行つた範覚は、そこで杭くいのように突つ立ってしまった。

洞の口を蔽うている杉や柏や、野茨や槇まぎの葉や枝の隙から、崖下の谷川が眼の先に見え、そこに無邪気に水を浴びている、三人の女の鵠ことうの鳥のような、皓こう々と白い全裸体を、金粉のように降り注いでいる、陽ひの光の中に見たからである。

範覚はまず唸り、つづいて顫え、さらに唸った。

水中にいる二人の女と、岩の上にいる一人の女とを、順々に範覚は眼で追った。

岩の上にこつちへ正面を向け、髪を絞りながら歌をうたっている女へ、とうとうその眼が食いついてしまった。

「おれもたん！」

と範覚は呻いた。

汗が胸から鳩尾の辺まで流れた。

「オレ死にそうだ！ ……どうしたって死ぬ！」

彼の顫えはひどいものになった。

「眼が廻る！ ……動悸がする！ オレ死にそうだ、どうも変だ！ ……血が頭に流れる

！ ……アツ、アツ、嘔気を催して来た」

金剛杖へ縋りつき、倒れまい倒れまいと努力しながら、なおも彼は女の姿を追った。

「オレ、ほんとうにせつないくらいだ！ ……二十一日間断っていた俺だ！ ……女をよ、断っていた俺だ！ ……その俺にだ……あんまりひどいや！ ……拷問だ——ツ、助けてくれ——ツ」

その時女は絞った髪をパ——ツと背後へ両手で払った。

黒い翼が背で羽搏き、女天使の白光体は、その瞬間にふくらむように見えた。

範覚の体は大きく揺れた。

口から泡が吹き出した。

「助けてくんない……夕、助けて！」

金剛杖がボタンと仆れ、つづいて範覚の大きな体が、洞の入り口へあおのけに倒れた。気の毒に気絶したのであった。

この日もやがて夜となった。

晴れた夜空には天の河が、水銀のように流れていた。

同じ比叡山の裏山の、山の斜面に瘤のように、はみ出している丘の上に、沢山の樹木に囲まれながら、一字のお館が建っていた。

万里小路中納言藤房卿が、数年前に建てた館で、山屋敷の一つであったが、この裏山が魍魎魍魎——流浪人や猟師や山賊や乞食、そういうものの巢窟となって美しい風景を穢し出して以来、すっかり見すてて手入れもせず、まして住もうともしなかつた館で、狐

狸など住んでいないだろうかと、そんなにまでも案じられるほどに、それは荒れはてているのであった。

でも今夜はどうしたのか、そこに燈ひの光がともっていた。

廻廊こしに山の景色の見える、古びてはいるが高雅な部屋に、几帳きちょうを横にし、経机きょうぐいに倚より、短檠たんけいの光幽かすかな中で、飛天夜叉の桂子かつらこが、観音経しよしゃを書写しよしゃしていた。

廻廊のあなた前庭の一所、楓かえでの老木の根もとにあたって、雪白の物がかしこまっていた。五尺にもあまる白しろ猩猩しやうじやう々々であった。

それも桂子には気にかかつていたが、遙か向こうの山の中腹に、木の間がくれに一点の火の光が動かずにともっていることが、いつそう桂子には気にかかつていた。

写経の桂子

(あれは無人の猪小屋ししぐやの筈だが)

そう、火の光の見える、山の中腹のその一所には、昨日まで一人の住人すみてのなかった、ほとんど壊れた猪小屋が——獵師が鳥獸を待ち射つたため、荒々しく作った三間ばかりの小

屋が、寂しく立っていた筈であつた。

それなのに今夜は火がともっている。

(変だねえ)

と桂子は思った。

(では獵師が入りこんだのかしら?)

そう思えば何んでもなかつたが、何んでもなくない証拠には桂子の心が、その火にとともにすれば乱されることであつた。

桂子は写経の手を止めて、しばらくその火を眺めたが、やがてその眼を猩々へ移した。

猩々は木もれの月光を受けて、雪の塊かたまりでもあるかのように、黒い地面に浮き出ていたが、桂子の視線が向けられたと知るや、恭うやうやしく辞儀じぎをした。

「卯うノ丸や、ここへおいで、ちよつとわたしのそばへおいで」

桂子はそう云つて声をかけた。

彼女はそれが雪白であつて卯の花のように見えるところから、卯ノ丸という名をつけて、長い間手もとに飼つて置いたが、数年前に伏見街道横の、司馬の大藪地で他の獣と一緒に、放してやった猩々だということを、その猩々がそんなように、館の庭へあらわれた時から、

その形によつて感づいていた。

二十一日前に桂子は、写経の行を営むべく、この古館へ来たのであった。

「卯ノ丸や、どうしたのだえ、どうして側へ来ないのだえ」

また桂子は声をかけた。

と、また狸々は辞儀をしたが、そばへ来ようとはしなかった。

いや側へやつて来ないばかりか、片手をあげると山の一方を指し、桂子をかえつて誘うかのように、二度も三度も辞儀をして見せた。

「わたしを連れ出そうとするのかえ、でも幾度も云うとおり、わたしは今も行けないのだよ、お経を写さなければならぬのだからねえ。……でももうそれも今夜かぎりさ。今夜で済んでしまうのだよ。……明日になったら行ってあげよう。……ね、お前の連れて行くところへ」

また狸々は辞儀をした。

そうしていつまでも同じところに坐り、なつかしそうに桂子を見守った。

桂子は筆をはこばせて行った。

でもどうにも進まなかつた。

二十一日目の今夜までに、写し終えるという念願のもとに、企てた写経の行だのに、半分もとげられてはいないのであった。

絶えず小次郎の傍が、脳裡を掠めるからである。

しかも何んという××を持った、妄想の小次郎であることか！

強力のある逞しい×で、自分を抱きすくめて××している………そういう姿が見えるのであった。

経机の上の小壺の中には、もう染料がなくなっていた。

桂子は左の袖を捲くつた。

白くて滑らかで脂肪づいていて、まことに珠をのべたような、桂子の左の二の腕に、無数に切り傷がついていた。

血を絞った痕なのである。

桂子は右手に小刀を握ると、刃の先で左の腕を引いた。

血が柘榴の果実のように産まれ、次々に産まれて紅紐のようになった。

壺の中へしたたらせた。

彼女は写経をつづけて行つた。

彼女の写経は血書きなのであった。

でも何んのために血書きなどという、荒々しい写経をするのであろう？

この頃宮方では朝権恢復、鎌倉幕府討滅の、再度の計を企てられ、はかりごとをわだその最初の手段として、この年早々に法勝寺の円観、小野の文観、南都の知教、浄土寺の忠円、教円などという、名だたる高僧知識をして、北条家調伏の修法をせしめた。

もつともこの企ては宮方の一人、吉田定房の密告によって、北条氏の知るところとなり、その首謀者と目されたところの、藤原俊基その人と共に、によしよう如上の僧侶たちは捕縛され、京から鎌倉へ護送されたが、なお北条家では心休まらず、わけても両六波羅では不安にたえず、宮方が調伏で向かうなら、こつちも調伏で向かってやろうと、鬼火の姥にそれを命じた。

姥は勇んで引き受けた。

そうして比叡山の洞窟にこもって、その調伏にとりかかった。

と探り知った桂子は、

(ではわたしは観音経の血書き、これ一つで姥の調伏に向かい、その調伏を破ってやろう) 　　こう考えてこの館で、血書きの写経をやり出したのであった。

桂子は筆を運ばせて行き、それを見つめながら白狸々は、なお立ち去らずにかしこまっていた。

桂子は苦しそうに溜息をした。

小次郎の凛々りりしい倂おもかけと、それに関する妄想とが、払っても払っても脳裡ゆきぎに去来し、彼女の煩悩ぼんのうをそそるからであつた。

(いつそ小次郎をここへ呼ぼうか)

ふと桂子はこう思った。

血書き写経のさまたげになると、そう思ったのでこの館へ、小次郎の来ることをかたくとどめ、二条の館へ止どめて置いた。

で、この館には浮藻のほか、幽霊女とりむすめだの鶏娘めだの、女の家来数人と、右衛門だの袈裟太郎だの、男の家来五六人を、めしつれて来たばかりであつた。

小次郎の姿を見なくなつてから、二十一日経つていた。

そのためかえつて彼女の心に、妄想が起こるように思われた。

(そうだ、小次郎を呼ぶことにしよう)

小次郎が側について何くれとなく話し、起居動作してくれたら、かえつて心が慰められ、

写経も進むように思われた。

桂子は側の鈴りんを振った。

鶏娘が襖をあけた。

「袈裟太郎を呼んでおくれ」

鶏娘が顔を引っこませ、代わって風見の袈裟太郎が来た。

「袈裟太郎や」

と桂子は云った。

「お前の早い歩き方で、京の二条の館へ行き、小次郎にすぐにここへ来るように、そう伝言しておくれ」

「かしこまりましたございます」

袈裟太郎は引っこんだ。

一日五十里は走るといふ、その袈裟太郎の風のような姿が、夜の比叡山の裏山の木の間に、やがて京の方へ走って行くのが見られた。

桂子は筆を運ばせて行った。

高殿の欄干おぼしまには姫が一人
湖水の小船には武士が一人

と、不意に歌声が聞こえて来た。

浮藻うきもの歌っている歌声であった。ムラムラと桂子の胸の中へ、嫉妬ねたみと憎悪にくしみとの思いが湧いた。

(小次郎がここへ来ることを知って、浮藻め心をソワツカせ出したわ!)
こう思ったからである。

浮藻が小次郎を恋していることは、数年前からのことであつた。小次郎の方でも浮藻を愛し、恋していることも数年前からで、桂子は自分が小次郎に対し、恋の想いをかけなかつた頃には、むしろ二人のあどけない恋の保護者であり、誘導者でさえあつたが、自分が小次郎を焼きつくばかりに、恋するようになってからは、浮藻と小次郎との恋仲が、嫉まねたましいものの代表となつた。

(浮藻さえなくば! 浮藻さえなくば!)

こんな恐ろしい考えをさえ、浮藻に対して持つことさえあつた。

(浮藻さえこの世にいなかったら、小次郎の心はひたむきに、わたしに向かつてくるだろうに！)

とはいえ桂子はさすがにこれまでは、抑えに抑え、隠しに隠し、この感情を浮藻に対し、露骨にあらわしはしなかった。

ただそれとなく監視して、二人を一緒に置かないよう、二人を二人だけで話させないよう、せいちゆう 撃 肘 するだけに止どめておいた。

そうして彼女は小次郎に対しても、これまで一度も自分の恋心を、うちあけて語りもしなかった。

これもひたすら抑えに抑え、隠しに隠していたのであった。

見交わす瞳は恋の焰

来ませ来ませと呼び合う声

また歌声が聞こえて来た。

「おのれ！」

と桂子は筆を捨てて立った。

(見交わす瞳は恋の焰！ おおおお、おのれらの瞳ではないか！ ……来ませ来ませと呼び合う声！ ……おのれこの姉にあてつける気か！)

身を顫ふるわせ歯を噛んだ。

丈たけなす髪が揺れて乱れ、蓬よもぎのように顔へかかった。

その顔の蒼さ物凄さ！

短たんけい檠けいの火が裾を照らし、床に引いている長い部分や、腰のあたりまでを玉虫色にしたが、肩のあたりは朦朧もうろうとぼけ、天井の闇に融けそうに見えた。

が、顔だけは夕顔の花か、芙蓉の花のように白く抽ぬきんで、それが歌声の聞こえて来る方へ——庭の方へ向けられた。

すさまじい姿に驚いたのであろう、猩々卯ノ丸は颯さつと立つと、傍らの楓かえでの木へかけ上がった。

と、どうだろう、その時までには、いるとも見えず静まって、彼らの王なる卯ノ丸の動作を、凝視していた数百の猿猴えんこうが、八方の木々の枝葉の間で、嵐のように啼き出した。

彼らが揺するそのためでもあろう、木々は騒立さわだち軋きしり合い、にわかには山々谷々に、嵐おろしが

吹くかと想われた。

が、卯ノ丸がまた静かに、楓の木の又またに蹲そんきよ居して、桂子の様子を見守り出すと、猿猴の群れも啼き声をとどめ、木々の枝葉の間から、螢ほたるび火のような眼の光を、無数に点々と闇にともし、彼らの王を見守り出した。

その時、

「お姉様」

と呼びながら、館を巡って妹の浮藻が、浮き浮きと庭先へはいつて来た。

「まだご写経でございますか」

——桂子はツカツカと庭へ下りた。手にはいつかしら白磨きの、握り太の如意にょいをひっさげていた。

あらそう姉妹

「浮藻！」

と、桂子は声をかけた。

何んとなない姉の殺気立った様子と、鋭い声とに驚いて、浮藻は楓の根もとに^{たたく}佇み、返辞もしないで息を呑んだ。

「浮藻！」

と、桂子は憎さげに云った。

「そなた使命を果たしたかえ!!」

「使命!」

と、浮藻は不思議そうに訊いた。

「お姉様、使命とは？」

「何んのために水浴に行くのだえ？」

「おいでとお姉様がおっしゃいますゆえ」

「で、使命を果たしたかえ？」

「……………」

「あの谷川の向こう岸に、何があるとお思いだ？」

「鬼火の姥^{うば}の修法の洞が…………」

「そうさ、修法の洞があるのさ、鬼火の姥の修法の洞が！そこには誰がいるのだろうかね

「？」

「鬼火の姥や金地院範覚が……」

「そうとも金地院範覚がいるよ。姥にとっては無二の味方で、そうして情夫の範覚がねえ。……その範覚を迷わしたかえ？」

「……………」

「鬼火の姥が狂^{きちがい}気じみた、男好きの女なら、金地院範覚は狂気じみた、女好きの男なのさ！ ……その範覚を迷わしたかえ？」

「……………」

「あの二人が一緒に手を組んで、修法調伏を行なえばこそ、姥の調伏^{げん}を見せるのだよ」

「……………」

「姥の調伏を無^む為^いにしようと、こう思ったら姥の身^み辺^いから、範覚を放さなければならぬのだよ……その範覚を迷わしたかえ？」

「それではお姉様は、そんなお心から……」

と、浮藻はななかば泣き声で云った。

「わたしを毎日あそこへやり……」

「そうとも！」

と、桂子は毒々しく云った。

「お前の綺麗な裸身はだかを見せて、色情狂いろきちがいの範覚を迷わせてやろうと、もくろんだのさ！」

「お姉様！」

と、涙を流し、浮藻は腹立たしさと口惜しさの声で、

「姉妹きょうだいの仲でありながら、そんなあさましい恥ずかしい所業しよぎょうに、わたしを妾わたしを追いやるとは……」

「お黙り！」

と、桂子は裂帛れっぱくのように叫んだ。

如意にょいが高くかざされている。

「あさましいぐらい、恥ずかしいぐらい、血書き写経の荒修行に、たずさわっている妾わたしに比べ、何が何が、何あろう！……それとも綺麗な裸身はだかは小次郎以外に見せたくない、そう思つてのその言葉か！」

「お姉様……ア、あんまりな！」

「何を！」

一撃！

「ヒーツ」

と叫び、肩を打たれて浮藻は倒れ、地上を美しい蛾のように這った。

「淫婦よ！ 多情者よ！ 色餓鬼め！ まだ処女の身でありながら、男の生肌恋しがり、あだ厭らしく小次郎を追い、ウカウカソワソワいたしおる！ ……小次郎は姉の所有！ 年月手がけて磨きあげ、あれまでの美玉に仕上げた宝！ 何んのおのれに渡そうぞ！

……男欲しくば洞へ行け！ ……行け！」

二撃！

「ヒーツ」

と悲鳴！

とたんに楓の又からも、猩々卯ノ丸の悲鳴する声が、腸断つように聞こえて来た。つづいて八方の木々の枝葉が、騒立ち群れ立ち軋り音をあげた。

卯ノ丸の眷族の猿猴たちが、王の真似をして騒ぎ出したのである。

逃げようともかく浮藻の裾を桂子は足で踏まえていた。

如意がまた高くかざされている。

「仏身より摩羅伽^{まごらか}まで、三十三身に現^{げん}じたまい、天人、人間、禽獸まで、解脱^{げだつ}せしめたもう觀世音菩薩の、觀世音菩薩普門^{ふもんぼん}品を、血書きして今日で二十一日、写経は完成と思つたに、そのなかばにも達していかない！ 何故じゃ！ そちがいるからよ！ 色餓鬼^{おのれ}の汝^そが側^{そば}にいて、ソワソワ、ウカウカ邪魔するからじゃ！ ……丑^{うし}の刻が勝負の別れ目、この時刻までに写経終えねば、姥めに調伏されるであろう！ ……立ち去れ、ここを！ 行け、洞へ！ 行つて、範覚を迷わせろ！ ……小次郎がおつつけここへ来る。お前がおつてはわたしに邪魔！ ……行け！ 洞へ！ 早う行け！」

三撃！

またも肩を打つ。

打たれて浮藻はうつ伏しに仆れ、爪で大地を引つ搔いたが、起き上がると腰を延ばし、桂子の腕へむしやぶりついた。

「あさましいは姉上こそ！」

胸を抑えられた青大將が、鎌首を立て眼は血ばしらせ、相手を睨み睨んだように、浮藻は姉を睨み睨み、

「よう申されたな、とうとう本心を！ ……姉上こそ邪淫^{ごんげ}の権化^{ごんげ}！ 小次郎様^{よこしま}を邪に恋し、

四年も五年も思い詰めていた、このわたしから横取ろうとなさる！ ……その姉上様どうかというに、男の肌には触れることのならぬ、女行者の身でござんす筈！ ……行けと云う、妾に洞へ！ ……それでご自分の血書き写経の、折しやつぶく伏げんの験を見ようと云われる！ ……そればかりならば参りましょう！ 姉上様の行のおためなら！ ……厭じゃ厭じゃ何んのそればかりか！ ……いいえ姉上のお心持ちは、わたしをそこへ追いやっておいて、おつつけそこへおいでなさる小次郎様をとらえ、煩ほんのう悩うとげらるおつもりなのじゃ！ ……むごいむごい姉上のお心！ 行かぬ行かぬわたしは行かぬ！」

「何をほざくぞ、貪どんじんちじょう瞋ち癡じょう女郎りやう！ ……三毒を備えた我執かたまの塊かたまりり！ ……この姉に楯たてつく

気な！ ……四年五年恋したという！ 汝おのれが小次郎に恋したという！ ……それが何んじゃ、何んの手柄てじゃ！ ……その小次郎を連れて来たはこの身、その小次郎を四年、五年、養やしない育て磨こいたもこの身！ ……小次郎はこの姉のものじゃ！ ……その小次郎を恋するという汝！ 汝こそまことの横取り者よ！ ……何を賢さとしこがって汝が汝が、姉の身の上をあげつらい、男禁制の肌断ちのと、云わでものこと云いおるぞ！ ……男禁制も肌断ちも承知の上でかかった恋、なんのとげいでおくものか！ ……その後は凡ほんぶ婦ぶに帰かえらうとまま、墮だじく地じ獄くの苦くるしみに悩なやもうとまま！ ……さあこう明あかした上からは、肉親でもなければ姉妹で

もない！ 恋の敵情慾の仇！ ……ええ贅にえなんどに追いやるより、いつそ手短かに命取つてやろうか！ ……それより汝の愛嬌顔、潰つぶして醜婦しこめにしてやろうわ！ ……如意にょいくらえ！

と浮藻の顔の、真ん中どころを狙い澄まし、風を切つて力まかせに打とうとしたとたん
に猩々卯ノ丸が、楓かえでの叉またから二人の間へ、白布のように舞い下りて来た。

そうして次の瞬間には、浮藻の体を軽々と抱いて、数間のあなたに飛んでいた。

「卯ノ丸！」

と桂子は怒声を飛ばせたが、事があまりにも意外だったので、早速には二の句がつけな
かった。

その間に卯ノ丸は浮藻を地に置き、自分でも地上へひざまずき、両手を胸の辺で合掌し
嘆願するように悲鳴した。

「おのれが！ こやつ！ 畜生の身で！」

赫怒かくどが桂子へ返つて来た。

如意を高々と振りかぶり、

「元の主人に刃向かう気か！ ……打ち殺してくりよう！ おのれ逃げるな！」

裾踏みしだきツカツカと進んだ。

と、遙かの峰の方から、あたかも風おろしが渡ったかのように、谷をうずめて群れ立っていた木々が、揺れ、靡き、騒立さわだち軋きしり、悲しそうに啼く猿猴の声はらわたが、腸断つように響き渡った。と思う間もあらばこそであった。

四方の木々から庭を目がけ、飛礫つぶてのように十、二十、百、二百と無数の猿が、飛び下り馳まっけ下り軋まっび落ちて来た。

庭は猿で埋うめずもれた。

桂子と卯ノ丸との間を距へだて、卯ノ丸と浮藻との間を充たし、一寸の隙も一分の空間あきまも、この地上には見られなかつた。

広い館の前庭は、毛皮を敷いたそれのようであつた。

牝おとこの猿、牝おんなの猿、子を抱いた猿、老いたる猿——猿の数は千にも余るであろうか、ことごとく地にひざまずき、王なる卯ノ丸の真似まねをして、胸に両手を合せていた。

そうして桂子を見守つた。

今は啼き声は聞かれなかつた。

声のない生きた猿の毛皮は、しかし漣さざなみの打つように、絶えず起伏し動揺した。

王なる卯ノ丸の真似をして、桂子へ頭かしらを下げるからである。

その中であつて雪のように白い猩々卯ノ丸の姿というものは、卯の花が円く叢そうをなして、そこに花咲いているようであつた。

が、その背後うしろに若い女の艶なまめかしい装束がつかねられてあつた！

そう、今は気も心も折れて、ただ悲しさに打ち勝たれて、地に冷たく額を押しあて、咽むせび泣いている浮藻の姿は、つかねられた装束さながらであつた。

しかし浮藻の頭の横に、石像のように立つものがあつた。

少し以前まえから物の蔭たたずに佇み、あさましく凄すさましい姉妹二人の、恋の争いを見聞きしていたが、出場でばを失つて出かねていたところの、大蔵ヶ谷右衛門がこの時出て、浮藻の傍そばに立つた姿——その姿に他ならなかつた。

大 鉞おおまさかりを地について、その柄の石突きに両手を乗せ、その手の甲へ頤をのせ、黙然として動かなかつた。

が心では考えていた。

(これもみんな小次郎のためだ！)と。

そうして窈ひそかに決心していた。

(今こそ鉞^{まさかり}へ血を吸わせてやろう)と。

(彼さえなくば主人ご姉妹に、みにくい争いは起こるまい!)

(小次郎は俺が殺す!)

——この時桂子の右の手から、如意が足もとへ力なく落ちた。

(あさましきよ!)

と彼女は思った。

(救いはないか!! 救いはないか!!)

浮藻の泣き声が高くなった。

(おおお妹にも救いはない!)

暗い谷を越した山の中腹の、猪小屋にともされた燈^ひの光は、この時もなお見えていた。

猪小屋の内外

猪小屋の中から子守唄の声が、ほそぼそとして聞こえて来た。

泣きそ、な泣きそ、和子よ和子よ、泣けばお山で猿も啼く。

小屋の中には早瀬がいた。

膝の上へ嬰兒あかんぼをのせ、それを揺すりながら歌っていた。

部屋の片隅にもつているのは、早瀬のこしらえた松明たいまつであった。

垂れ布の内側うちがわで眼をとじて、早瀬は草原くさはらに坐ったまま、物思いにふけている。

眼をあけて見ると何んたる危険まむし、蝮が嬰兒に食い付こうとしている。

あわてて蝮の頭を撫で、

「このイタズラモノ何をするのだよ、赤ちゃんを虐いじめてはいけないよ。……さあさあおとなしく巢でお休み」

と云った。

すると蝮は懐中ふとこの中へ、すぐに体を引つ込ませた。

そこで早瀬は立ち上がり、殺されている嬰兒の母親へ、別れを告げて歩き出した。

そうしてあて的なしに歩いていくうちに、夕暮れとなり夜となった。

そのうち道に迷ってしまった。

でもこの小屋へ辿りついた。

窓から射している月光で見れば、獵師が置いて行ったのであろう、獣油のはいつている

壺などがあつた。

で、彼女は松葉や枯れ草で、急ごしらえに松明をこしらえ、獸油にひたして火を点じた。
燧石ひうちなども壺の脇に置いてあつたので。

その松明の光に照らされ、切つてある炉の脇に坐りながら、乳がないので腹おなかがすいて、泣き立てる嬰兒あかんぼを揺すりながら、彼女はうたつていたのであつた。

全山を圧して猿の聲が、気味わるく聞こえて来る。

泣きそ、な泣きそ、和子よ和子よ、泣けばお山で猿も啼く。

でも嬰兒は泣きやまなかつた。

(どこかでお乳を貰わなければ)

窓から見れば谷を越した向こうに、どうやら家があるらしく、燈火ともしびの光が明るく見え
た。

(あそこへ行つてお乳いただこう)

そう彼女は決心した。

彼女はやおら立ち上がった。

こんな厄介な泣く嬰兒などを、あんなことから手に入れて、迷惑を感じているべきだの

に、彼女は全く反対であった。

幸福を感じているのであった。

(わたしの子よ、わたしの子よ)

こんなように感じて幸福なのであった。

これまでの彼女の子供といえ、泣きもしなければ笑いもしない、生きた紐のような虻ばかりであった。

それでも彼女はその虻が、おとなしく懐ふところ中にトグロを巻いていたり、時々顔を出して自分を眺めたり、焰ほのおのような舌を吐くのを見ては、可愛いものに思われてならなかった。

それなのに今はどうだろう、こんなにも熱心に一生懸命に泣いたり、そうしていずれ腹がくちたら、とても可愛らしく笑ってくれるであろうところの、ホンモノの人間の嬰兒が、自分のものになったのであった。

可愛く思われてならなかった。

(燈火あかりをつけたままで行こうかしら、それとも消して行こうかしら?)

と、早瀬は立ったままで考えた。

丸太と板とで出来ていて、天井の低い小屋の床には、猟師の食べのこした獣けだものの肉の、干

からびたのが捨ててあつたり、ずがいこつ頭蓋骨やあぼらほね肋骨がとり散らされてあり、そこへ細長い早瀬の影法師が、焰の加減で顫えながら、延びちぢみして映っていた。

(帰つて来る時の葉になる。しおり灯火は消さずにつけたままで行こう)

で、早瀬は小屋を出た。

窓から射し出た松たいまつ明の光で、小屋の外は少し明るかったが、その光の輪から出ると、あかんぼ嬰兒を抱いた早瀬の姿は、夜の暗さに消されてしまった。

でも、木立の枝葉をもれて、星と月との空の光が、あしさいいろ紫陽花色に降つて来たので、その圈内へはいった時だけは、顔に白布をのつぺら坊のように垂らした、女怪のような早瀬の姿が、森の魔のように隠見して見えた。

(この嬰兒のお母様の敵を、かたきわたしどうあろうと取つてやらなければ！)

そう早瀬は考えていた。

(竹の杖をついた盲目の、『裏切り者』となの宣る殺人鬼に、どうともしてわたしは巡りあいたい。そうして蝮を食いつかせ、早くあの世へ追つてやりたい。そうしてあの世でこの嬰兒の親に、お詫びの言葉を云わせたい)

こんなことを考えていた。

また嬰兒が泣き出した。

「おおよしよし、おおよしよし」

早瀬は嬰兒をゆすりながら、谷を越えたあなたに幽かすかに見える、家の燈火ともしびを目あてとし、山の斜面を木立を分け、足の下に浅い谷を持ち、危険を犯して辿たどって行った。

で、彼女の立ち去った後の、猪小屋の中には人氣もなく、ただ松明がパチパチと燃え、二つある窓のうちの一つの窓から、戸外そとの楓の木が枝を差し入れ、虫のために紅あかく色づいている葉を、いつそう紅く血のような色に、その焰は照らしていた。

でもすぐにこの猪小屋へ、氣味の悪い訪問者があらわれた。

まず戸口から青竹の杖が、一本スツと突き出され、つづいて血飛沫ちしぶきの斑点しみをつけた裾と、土にまみれた足もとがはいって来た。

やがて全身をあらわした。

盲目の土岐頼春であった。

「嬰兒あかこの泣き声が聞こえたようだったが」

口の中で呟いた。

「でもここは無入らしい」

どうやら感覚でわかるようであった。

「暖たかい。……火があると見える」

松明の方へ寄って行つた。

あやうく囲炉裡へ踏み込もうとした。

「あぶない」

と呟いて立ち止まつた。

陽^ひ焼^やけた顔色はセピアのようであり、頬は落ちくぼんで剃^そいだようであった。盲目の眼は瞼^{まぶた}で蔽^かわれ、黒い隈^かが暈^かのように輪^わどつていた。これが頼春の顔であった。昔の倅^{おもかげ}などどこにもなかった。

肩は落ち胸はくぼみ、背は曲がり腰はくくれ、全身枝のように痩せていた。昔の倅などどこにもなかった。これが頼春の姿であった。

（今日も人二人殺したつけ）

それを頼春は考え出した。

（一人はどうやら女らしかった）

（女を殺したのは今日がはじめてだ）

彼は持つている竹の杖を、一尺ばかり持ち上げた。

それでグツと突く真似まねをした。

床にあたつて音を立てた。

(柔らかく、ねばつこく、暖たかくさえ、杖の先から腕を通し、全身にまでも感じられたつけ！……悲鳴！……そいつさえ男のものと異ちがつて、グ——ツと胸へ響いたつけ！)

(女を殺したのははじめてだ！)

何かしら血を湧かせ、何かしら心を踊らせ、何かしらゾクゾクさせるものを、女性殺さつり戮くから彼は感じられた。

「悪くなかった」

と呟いた。

流浪の旅へ出て数年になる。

その間彼は一度として、女に接したことはなかった。

それを今日女を殺したことによつて、間接ながらも接したのであった。

そう！ 女の肉体に！

「悪くはなかった」

と眩いた。

※悔ざんげの旅へ、浄罪の旅へ、出て来た頼春ではなかったか。

それだのにどうしてこのようなものに——殺人鬼などになったのであろう？

最初は決してそうではなかった。

神くの界にに属くしまつる御おん一方ひとかたより、許すとお言葉承うるまでは、決して死ねない彼かの行く手てを、遮さへぎる者もののあつた時とき、彼は用捨もちなく殺ころしたのであつた。

が、そうして次つぎから次つぎと、人を殺ころしているうちに、「人を殺すというそのことだけに」興味きょうみを感じかんずるようになつてしまつた。

断末魔だんまごのものがき、末期まごの悲鳴ひめい、それが身心しんしんに感じかんじられたとたん、鬱うつけ結けつしていた血汐ちしほが下くだり、圧迫あつぱくされている心持こころもちちが、一時ひとときに緩ゆるんで生き生きとなつた。

この快味くわいみ、この愉悦えつらくが、彼かを殺人鬼ざんじんきにしたのであつた。

それでいてもちろん心の奥おくでは、神くの界にに属くしまつる御おん一方ひとかたにお逢あいし、許すとお言葉承うわつて、裏切うらり者ものの悶もえ心を、解放かいはつさせたいと思おもつていた。

お許ゆるしを乾かわくように望のぞみながら、実際じつじにおいてはいよいよ許ゆるされぬ、悪虐あくくつの殺人ざんじんを行なつて、彼は旅りをしていたのであつた。

その間も彼は絶える暇なく「許すとお言葉をくだされる、神の界くにに属まつる御一方」とは、いかなる御方おんかたで在おしますぞや、それを求めそれを探した。

と、諸国の武士の口から、このような噂を聞くようになった。

「今上第一の御皇子みこにましまし、梨本御門跡なしのもとごもんぜきとならせたまい、つづいて比叡山延曆寺ひゑさんえんりきじの、天台座主ざすに座すわらせられたまいし、尊雲法親王様におかせられては、二度目の座主をお罷やめあそばされ、叡山の大塔ゑいさんのだいとうにご起居きこましまし、もつぱら武事を御練磨あそばされ、叡山大衆三千の心を、収攬しゅうらんせられおられますそうな」

「宮方ふたび武家討伐、朝権恢復の御企おんくわだてを、密々に行ないおらるるそうじやが、その総帥だいてうのみやさまこそ大塔宮様だいとうのみやさまそうな」

「主上のご寵愛ちゆうじやうのちゆうあいご信任厚く、万事ご相談のお相手そうな」

それはこういうお噂なのであった。

(ああ梨本御門跡様！)

頼春は忽然数年前に、日野資朝卿すけともの別館の夜の後苑でその御方おんかたの、御姿おんすがたと御おんこ声こゑとに接あしまつた事を、まざまざと脳裡のうりに映し出した。

「あの御方おんかたじや！ あの御方おんかたじや！」

と、声を出して頼春は叫んだ。

「裏切り者のこの俺に、許すとのお言葉くださる御方は！」

彼は京の地へ引つ返して来た。

そうしてその御方にお継りしようため、比叡山へ分け登った。

といつか道に迷い、この裏山に踏み入ってしまった。

そうして人二人を殺したのであった。

罪悪の塊り、矛盾の子、饑え乾くごとく救いを求める者——天国に入るか地獄へ墮ちる

か、分れ目の煉獄の業火に焼かれて、悶え苦しんでいる頼春は、猪小屋の中に佇んで、い

ま松明の光に照らされている。

「早瀬！」

と不意に呟いた。

女を殺したことによつて、女の肉体を感得し、その連想が妻の早瀬へ、この時自然に延びたらしかった。

(憎い女！ ……いとしい女！ ……早瀬！ ……妻よ！ ……どうしているか!!)

頬の上に光るものがあつた。

瞥めしいた眼からの涙であった。

この頃、早瀬は山の斜面を、あやうくおぼつか覚束なくたど辿っていた。

と、行く手から足音が聞こえた。

早瀬はいそいで木蔭へかくれた。

その前を足早に歩いて行くのは、おまさかり大 鉞おおくらをひつさげた、やつ大蔵ヶ谷右衛門であった。

(この鉞へ小次郎の血を、今夜こそたつぷりと吸わせてやろう)

こう堅く決心しながら、右衛門は歩いて行くのであった。

(風見の袈裟太郎に連れられて、小次郎めこの道を来るであろう。途中に要して真つ二つに！)

こう決心をして行くのであった。

彼は以前から小次郎に対して、いい感情は持っていなかった。

この頃になつて浮藻うきもばかりか、桂かつらこ子までが小次郎を恋し、そのため妹と争いさえし、

今夜に至つては、あのありさまであった。

(小次郎が生きておればこそだ！)

で、殺そうとするのであった。

彼は朴訥ぼくとつで忠誠で、桂子と浮藻とのためであつたら、何んでもやろうと思つていた。

桂子と浮藻とが彼にとつては、この世界の一切であつた。

そんなにも大切なご主人姉妹が、小次郎を恋し合つて争いをする！

これは堪えられないことであつた。

以前には妹の浮藻ばかりが、小次郎を恋してつけ廻した。

それだけでも右衛門には苦にが々がしく思われ、小次郎を白い眼で見たものであつたが、現

在は何んと桂子までが——飛天夜叉の総帥そうすいともある桂子までが、小次郎を恋して狂態を

演ずる！

(殺さないでどうするものか！)

鉞の刃を月光に照らし、右衛門は小走り出した。

右衛門の姿の消えたのを見て、早瀬はそつと木蔭から出で、谷の向こう側の燈火ともしびを目

あてにまたあぶなつかしく辿り出した。

泣きつかれた嬰兒あかんぼは死んだかのように、早瀬の腕の中で眠り出した。

早瀬自身も空腹であつたが、この子の空腹を思いやつては、道を急がなければならな

った。

(あの燈火ひの見えるあそこのお家うちに、乳の出る人がいてくれればよいが)

このことが早瀬には重大問題であった。

(わたしも何かいただいて、少しでも腹おなかをくちくしたいものだ)

彼女は道をいそぎ出した。

と、またも行く手から、人の歩いて来る足音がした。

(まあまあこんな山の奥の、こんな夜中に幾人となく、人が通るとはどうしたことか)

こう思いながら不安だったので、早瀬はまたも木立の蔭へかくれた。

現われたのは女であった。

そう、それは浮藻であった。

髪は乱れ、衣裳も乱れ、歩き方も乱れていた。

心も乱れているのであった。

(小次郎様がおいでになる。その小次郎様をわたしの手から、お姉様は取り上げようとなさる。……小次郎様にお逢いして、わたしの心をうちあけて、小次郎様のお心を聞いて、

……死ぬとも、生きるとも、他国へ走るとも！ ……何を置いても小次郎様へ、お姉様よ

り先に逢わなければ! ……)

で、脱^ぬけ出して来たのであった。

風見の袈裟太郎につれられて、やって来る小次郎を途中に要して、逢おうと思う一心から、館を脱^ぬけ出して来たのであった。

と、その前へ木蔭から、異様の女が走り出して来た。

「お乳がおありでございましょうか!」

異様の女はそう云った。

「あッ……まあ……お前様は!」

浮藻は足を止どめ顫^{ふる}えながら、妖怪のつぺら坊さながらに、そうして姑獲^{うぶめ}鳥さながらに、顔の代わりに白布のある女、そうして両手に嬰^{あかんぼ}児を抱いた女を恐怖をもって凝視した。

「怪しいものではございません。道に迷って山へはいった。子持ちの女乞食でございませと、早瀬はおずおずと弁^い解^わした。

「この子が可哀そうでございます。……おなかを空^すかせております。……わたしには乳がございません。……あなた様にお乳はございますまいか」

「いいえ、わたしは……」

と、浮藻は云った。

「まだ娘でございますので。……乳など何んで……何んで出ましよう」

「……………」

早瀬は恥じて辞儀をした。

昼間はほとんど絶対的に、垂れ布をかかげない彼女ではあったが、夜は彼女の世界だったので——というのはいつも垂れ布のこなたで、薄暗く住んでいるがため、そういう彼女の生きている世界は夜の世界と違ってよからう。——だからまして本当の夜になると、彼女は大胆に垂れ布をかかげて、人をも物象ものをも見るのであった。そこでこの時も垂れ布をかかげて、やって来た人の姿を見た。と、若い女であった。そこで前後を忘れてしまい、可哀あかんぼそうな嬰兒に乳を飲ませてやりたい、その一心から走り出で、乳はあるまいかと訊いたのであったが、まだ娘だから乳は出ないと云われ、自分の行動のあわたしきかつたことが、にわかに恥しく思われたのであった。

彼女は、しばらく黙っていた。

浮藻はちよつとばかり躊躇ちゆうちよしたが、一刻も早く小次郎に逢いたい、この要求があつ

たので、由緒ゆいしょありげでもあり悲惨みじめでもある、女乞食の身について、一応たずねたくは思

つたものの、そうして親切な言葉などもかけて、そうして谷の向こうに見える、燈火のついでに館こそ、自分達の住居であつて、そこへさえ行つたら乳こそはないが、嬰兒のたべられる食物も、お前さんの食べられる食物もあるから、おいでなさいよと云いたかつたが、心の余裕がなかつたので、思い詰めている男の名を、

「小次郎様！ 小次郎様！」

と、思わず口に出して高く云い、よろめきながら、走るような足で、早瀬を見すて歩いて行つた。

「小次郎様？ 小次郎様とは？」

歩いて行く浮藻を見送りながら、いぶかしそうに早瀬は呟いた。

良人頼春おつとのまた従兄弟いとこに、小次郎という若者があつて、自分たちと一緒に三条堀川の館に、大変親しく住んでいたが、土岐、多治見攻めの起こつた夜、館を明けて留守にした。そうしてそれつきり帰つて来なかつた。

その小次郎のことが、今の娘の言葉から、早瀬の記憶に甦よみがえつたからであつた。

（あの小次郎様のことではあるまいか？）

ふと早瀬はそう思つた。

(まさか)

と、しかしうち消した。

(小次郎という名を持った人間など、世間には沢山ある筈だ)

(人違いよ)

と、そう思った。

(火影ほかけの見えるお家うちへ行つて、お乳なり食物たべものなりいただく)

で、早瀬は歩き出した。

でも、その足はだんだん鈍った。

(よしんば人違いであろうとも、良人頼春のまた従兄弟いとこにあたる、小次郎の名を呼んだからにはあの娘ごに追いついて、その小次郎様のどういう人かを、お訊ねするのが本当のよ
うな気がする。……あの娘ごの云われた小次郎様が、わたしたちの小次郎様と同じ人なら、この小次郎様に逢わせて戴き、良人頼春のことをお訊きしたい。……また従兄弟同志の仲間
なのだから、良人の消息を知っているかもしれない)

で、彼女は振り返って見た。

娘の姿は見えなくなっていた。

(急いで後を追って行こう)

が、この時眠っていた嬰兒あかんぼが、眼をさまして泣き出した。

(お乳を早く飲ませなければ……)

(どうしよう?)

と進退に迷った。

浮藻は猪小屋の前まで来た。

「咽喉のどが乾いた！ 足が疲労つかれた！ わたしは一足も歩けなくなった！」

燈ともしび火の明るい猪小屋を見ながら、そう浮藻は呟いた。

姉と争いをして以来、彼女は湯も水も飲まなかった。半狂乱の心持ちで、かなり嶮けわしい歩きにくい山の斜面を谷に添って、ずいぶん長い時間走って来た。

小次郎に逢いたさで夢中になっていた彼女は、咽喉の乾きも足の疲労つかれも今までほとんど忘れていた。

が、人の住んでいるらしい、燈ともしび火の明るい猪小屋を見るや、にわかになんか感じられた。白湯さゆぐらいはあそこにもあるだろう、藁わらぶとん布団ぐらいはあそこにもあるだろう。ほん

の少しの間休んで行きたい。せめて白湯で咽喉をうるおしたい。

こうしきりに思われて来た。

浮藻は猪小屋の門かどまで行つた。

戸など外れている猪小屋であつた。

ただ部屋の隅に松たいまつ明があつて、それが焰ほのおをあげていて、獣の骨や獣の乾いた肉が、と散らされてある生なまぐさ臭いような床や、丸太と板とで造つてある壁や、切つてある炉などを照らしていた。

でも人はいなかつた。

「ご免ください」

と彼女は云つた。

「白湯などいたただかせてくださりませ」

云い云い彼女は部屋の中へはいつた。

と、奥にも部屋があるらしく、そつちから人の氣勢けはいがした。

「もし、ごめんくださりませ」

云い云い浮藻はそつちへ進み、隣りの部屋と境いをなしている、なかば外れた戸の側そばま

で行った。

竹の杖が突き出された。

「あッ」

クルクルと体を旋回し、脇腹を両手で抑えた浮藻は、やがて床の上へ仰向けに倒れた。もう彼女は動かなかった。

しばらくの間は寂然としていた。

松明が灰を一握りよりも多量に、ボツタリと床の上へ落としたばかりであった。

が、やがて瘦せた骨ばった、垢ついた腕が隣り部屋から宙を泳ぎながら差し出され、それが浮藻の足へかかった。

浮藻の体は床を這って、隣り部屋へ引き込まれた。

後はふたたび寂然となった。

窓から部屋の中へ差し出されている楓の、血のように紅い病葉が、吹き込んで来た風に揺れたばかりであった。

「待て小次郎！」

と右衛門の声が、大楠の樹の蔭から響いたのは、風見の袈裟太郎と連れ立って、二条の桂子の館からこの比叡山の裏山の、谷に添った山路を走って来た、土岐小次郎の端麗な姿が、その大楠の樹のすぐの手前まで、馳けつけて来た瞬間であつた。

ギョツとして小次郎は足を止めた。

と、その前へ おおまさかり 大 鉞 を下げた おおくら やつ 大蔵ヶ谷右衛門の姿があらわれた。

「右衛門殿か、いかがなされた」

そう云つた小次郎の声の冴え冴えとしていることは！

あたり 四辺を黒い壁のように囲み、空をさえ黒い雲のように蔽うて、この辺りは木立が茂つていた。

それだのに銀色の月の光が、じようごがた 漏斗形に上から降りかかり、小次郎の全身を照らしているのは、いったいどうしたというのだろうか？

男性としての完璧の美！ それを備えている小次郎を、闇へ封じて隠してしまふことが、天がどうにも惜しく思つて、そこだけへ巨大な隙間を作り、月光を降らしたに相違ないと、そう思うより仕方なかつた。

そんなにも小次郎は美しくなつていた。

小次郎と右衛門

「小次郎！」

と右衛門は鉞を振り上げ、小次郎へ身近く逼つて行つた。

「元から氣に入らねえおのれ汝だつた！ が、今ではもつと氣に入らねえ！ ……汝がこの世に生きてゐる限り、ご主人桂子様きようだいご姉妹に、争いの絶える間ねえと睨んだ！ ……不慙ではあるが命取るぞオーツ」

真ツ二つ！

ふり下ろした鉞！

隕いんせき石が空から落ちたようであつた。

が、小次郎の端麗な姿は、毫ちひさうも彫刻的な形を崩さず、二間あまりのうしろに立っていた。
「解つた！」

その声は銀のようであつた。

「右衛門、お前の心持ちは、この小次郎にもわかつてゐる！ ……それは忠誠で、それは

朴訥で、そうして一本気で、そうして純粹だ！ ……みんなひどく立派なものだ！ ……
が、一つだけ欠点がある、勝手すぎるといふことだ！ ……美徳を沢山持っているのはいい
が、その美徳を押し通して、他人に迷惑をかけるつてこと、コレ少才し勝手すぎると思う
よ。 ……それもいい加減のものならいいが、他人の命をとるといふのだから、勝手さがち
つとばかり大袈裟だよ。 ……そこで右衛門やわしは云うが、立派な心持ちはわかつてい
るのだから、あんまり荒げなく出さないで、そつと何気なく仕舞つておいでとねえ」

何んと悠然とした態度であることか！

そうして何んとその云い方が、彼をそのように名玉に仕立てた、玉磨きの名匠桂子のそ
れと——その云い方と似ていることか！

小次郎は太刀さえ抜いていなかった。

「わつぱ！ 二才！ 何をおのれ——ツ」

嘲弄されたとても感じたのであろう、右衛門は鬪牛のような吼え声を上げ、また鉞をふ
りかぶると、業わざもなく思慮もなく、一文字に小次郎へ走りかかった。

「モ、問答、ム、無用才——ツ！ くたばれ——ツ、狡こうどう童！」

ガッ！

真ツ二つ！

これは成功しなかった。

小次郎は決してノロマでなく、その反対の敏捷びんしやうであり、かつは一族の土岐頼兼や、同姓頼春の血を受けていて、劍技も無鉄砲の右衛門などは、ダンチに勝れているのだから。

で、真ツ二つにされたのは小次郎ではなくて、小次郎の背後うしろに、これは一向逃げも走りもしない、白のような杉の切り株であった。

鉞の刃が切り株に食い込み、ちつとやそつとでは抜けなくなった。

「右衛門や、わしはここだ」

小次郎の声が背後うしろから聞こえた。

やつとこさで鉞を切り株から抜いて、懲こりずまにそいつをまたふりかぶり、

「おのれ——ッ」

と繰り返して刻み足して進んだ。

と、この時谷を目がけて、石のように転がって行くものがあった。

それは風見の袈裟太郎であった。

右衛門が小次郎を殺そうとしている。

殺される小次郎ではなさそうだが、うちやっておいてはかたがつくまい。桂子様にお知らせして、桂子様に仲裁していただき、双方にひっこみをつけてやろうと、こう考えて袈裟太郎は、その得意の速走り、谷を突つ切り走り出したのであった。

(袈裟太郎きやつ頭がいいわい)

袈裟太郎の真意を早くも察して、小次郎はそう思った。

(このひとのいい右衛門を、殺すことはさて置いて、怪我をさせても気の毒だ。といつていつまでもあんな塩梅に、鉞をブン廻しているうちには、自分の脛ぐらいたたつ切るだろう。……だからどうともして止めなけりやアならない。……頑固爺の鉞の舞い、こいつをやめさせる人といえは、桂子様以外にはないのだからなあ)

右衛門が身近く逼っていた。

鉞が頭上で揺れている。

右衛門の呼吸づかいは苦しそうであった。

数年の間に右衛門は、眼に見えて年を取ったのである。

その上二十貫の大鉞を、二度がところ空振りさせられた。

気があせり呼吸がはずむのであった。

それに右衛門は気おくれしてもいた。

女たらしの柔弱者と、そう思っていた小次郎が、何んと素晴らしい武道の達人で、しかも大胆不敵であることが！

思い違い！

見損ない！

で、右衛門は気おくれしていた。

それだけに彼は自分自身に対して、おそろしく腹を立てていた。

小次郎に対する憎しみと、自分に対する怒りとで、彼はアガツテいるのであった。

「右衛門や」

と小次郎は云った。

「わしは皮肉を云うのではないが、一つ話をしようと思う」

いまだに小次郎は太刀も抜かず、手に持っていた小扇こおうちぎを、前に差しつけ構えていたが、
 訓さとすような声で穩おたやかに云った。

「昔力持ちがあつたそうだよ。力自慢の力持ちがねえ、薪まきざつぼうを、両手に握って脛で

折って見せると、こう見物に吹聴^{ふいちよう}して、さて太い薪ぎつぼうを、両手に握って脛へあて、グツと力をこめたそうだよ。ポキンと見事に折れたそうだよ。薪ぎつぼうではなくて脛の方がねえ。……右衛門や、止めた方がいいよ、大鉞を揮^{ふる}うってこと。……あぶない！」

と小次郎は横へ飛んだ。

と、小次郎の元いた辺から、土と小石が四散した。

「右衛門や」

と小次郎は云った。

「わしは皮肉をいうのではないが、今の程度ならまだいいのさ、撲^{なぐ}られても痛痒^{つうよう}を感じない、石ところや土くれを撲ったんだからねえ。でもそんなこと繰り返していると、力自慢の力持ちのように、自分で自分の脛を折るよ。……おや！」

と小次郎は呆^{あき}れたように、二、三歩うしろへ退ぞいた。

右衛門が鉞を地上へ投げ捨て、組んで取ろうと両手を拡げ、押つかぶさるように進んで来たからである。

(オレ降参だ)

と小次郎は思った。

(こんなオトツツアンに抱き縮められるのは厭き。……これが可愛らしい浮藻だったらなあ)

「首捻じ切るぞオ——ツ」

と猛然と、右衛門は小次郎へ躍りかかった。

一閃！

「わッ」

見よ、小次郎は、はじめて抜いた長目の太刀を、延び延びと構えて前へ差しつけ、その先で右衛門が海老えびのようにノケゾリ、まさに倒れようとしているではないか。

「右衛門や」

と小次郎は云った。

「わしはちよつとでもお前の体へなんか、太刀をさわらせやアしないじゃアないか。びつくりするにはあたらないうよ」

そう、小次郎はただ太刀を抜いて、抱きつかれまいとして防いだままであった。

が、太刀の抜き方が、鋭くて素早くて機先を制していたので、右衛門ほどの豪勇も驚き、海老のように体を曲げたのであった。

「ウ、ウ、ウ、ウ！」

と右衛門は唸った。

重ね重ねの自分の醜態に、恥じ怒り、悲しくさえなり、口が利けなくなったのである。しかし次の瞬間には、まさかり 鉞の方へ飛んで行っていた。

柄をひっ掴むとグ——ツと振り上げ、

「今度こそ遁がさぬ、にゆうしゆうじ 乳臭児めが——ツ」

振り返って躍りかかった。

「や!!」

これはどうしたんだ？

小次郎の姿が見えないではないか！

でも十数間のかなたにあたって、抜き身を肩にし、裾をつまみ上げ、小鹿のように軽快に、藪を巡ったり木立をくぐったりして、木洩れの月光の燻いぶし銀の光を、斑紋として全身につけた、小次郎その人が走っていた。

ポカンと右衛門は突っ立ってしまった。

機先を制されたからである。

(いけねえ俺、年イ取った)

刹那^{せつな}右衛門はそう思った。

(若い奴には敵^{かた}わねえ)

が、すぐ猛然と思り返した。

(負けねえ、追いつく！ 追いついて殺す！)

で、猪^{しし}のように追っかけた。

しかしどんなにヒイキ目に見ても、深林地帯のこの競^{マラソン}走は、オトツツアンの方が負けるでしょうよ。

第一オトツツアンは年寄りだし、それにさんざんジラサレテ、くたくたに体をつからせている上に、持ち物というものがご自慢物ではあるが、二十貫の鉞^{くわ}というのであるから。

そこへいくと青年小次郎は、年が若くて気力は旺盛、ジラした方でジラされていない、持ち物といえは細味の太^{たち}刀で。

まさに小次郎は悠々としていた。

チヨイチヨイ^{うしろ}背後を振り返りながら、

(あんまり速く走るのも、トシヨリに対して考えものだ)

こんなことを思っていたわるように、時々歩みをゆるめたりした。

(オレ少し皮肉すぎたかな?)

言葉もやり方も右衛門に対して、皮肉すぎたように思われて来た。

(ひとのいいオトツツアンには相違ないんだからなあ)

ひどく気の毒になって来た。

(さりとてオレ、あのオトツツアンに、殺されてやるほどの義理はなし。……そこで自然とあんな言葉や、あんな行動に出たというものさ。自然だアね、自然だアね)

冷静な人間の眼から見ると、カンカンにあがっている人間の姿がどうにも阿呆らしいものに見え、つい皮肉が云いたくなくなったり、皮肉なイタズラがしたくなくなったりする。

利口な人間からバカヤローを見ると……やっぱり皮肉がやりたくなる。

右衛門に対してこの小次郎のやり口も、ここへ帰納出来そうであった。

(自然だアね、自然だアね)

マラソンは尚もつづいて行った。

桂かつらこ子は長柄ながえをかい込んで、袈裟太郎と一緒に館を出た。

猪小屋の暗い奥の部屋では、盲目の頼春の鉤かぎのような指が、浮藻の胸をさぐっていた。

生死卍巴

指は浮藻の軟らかい胸を、下の方へ探つて行つた。

浮藻は気絶しているのである。

そうして盲目の頼春は、色情狂となつているのである。

昼間杖で女を突き殺した。

それから感じられた女の肉体！

その女の肉体を、その瞬間頼春は感じた。

猪小屋の奥の部屋に佇たたずんで、捨てて出た妻の早瀬のことなどを、それからそれへと思ひ出していた。

そこへ女の声が聞こえた。

水を求める女の声……

で頼春はほとんど夢中で、杖で女を気絶させ、この部屋へ引き入れたのである。

ここにも窓は二つあった。

谷の方へ向いた窓の口は、蒼い紗しやぎぬ布を四角に切つて、そこへ張つたように蒼白く見えた。

月夜の戸外そとに向いているからである。

その月夜の蒼白い光は部屋の中にも忍び込んでいた。

坐っている頼春の膝の上に、大輪の白い花が咲いていた。

浮藻のあおむいた顔であった。

その上の方一尺ばかりのところ、盲目の顔が浮いていた。

恍惚とした顔であった。

惨忍と淫虐とを現わした、醜い恍惚とした顔であった。

この時猪小屋の入り口へ、早瀬の姿があらわれた。

嬰兒あかんぼを抱き、顔に布をかけた、産女うぶめのような姿であった。

道で逢つた娘が小次郎の名を、口ばしりながら小走つて行つた。

そのことがどうにも早瀬にとつては、心にかかつてならなかつた。

泣き出した嬰兒はまた眠った。

(この子に乳を飲ませるより先に、あの娘さんに追いついて、小次郎様の素性を聞き、良お人頼春のまた従兄弟いとこにあたる、小次郎様であるようなら、その小次郎様に逢わせていただき、良人の居場所を知らせていただく。……わたしが家を出旅に出て、このような身上になったのも、良人に逢おうためなのだから)

で娘の後を追った。

猪小屋の見える辺まで来た。

するとさっきの娘らしい女が、小屋へはいつて行く姿が見えた。

そこでここへ来たのであった。

早瀬は小屋を覗いて見た。

松たいまつ明は明るく燃えていたが、娘の姿は見えなかった。

(どうしたのだろうか?)

と不思議に思つて、早瀬はしばらく佇んでいた。

隣り部屋から人の氣勢けはいがした。

(まあ隣り部屋にいるのだよ)

早瀬は小屋の中へ一足はいつた。

と、男のしわが嘎れた声で、

「このやわはだ軟肌！　おとめ処女の肌！」

と、呻くがように聞こえて来た。

早瀬は小屋から走り出た。

(男の声だ！　どうしたのだろうか？)

何か恐ろしい出来事が、隣り部屋で行なわれているらしい。——そんなように感じられた。

早瀬は小屋の横手へ廻った。

山の斜面に口を開けて、窓が一つ開いていた。

そこからそつと部屋の中を覗いた。

さっきの娘が死んだかのように、あおむけに床に仆れていた。

娘の後ここのう脳を膝の上のせて、一人の男が坐っていた。

その横に竹の杖があった。

男が顔を上向けて呻いた。

「麻痺しびれるわい、身も心も！」

それは盲目の顔であつた。

早瀬は思わず叫なぼうとした。

しかしようやく自分で堪こらえた。

(あの男だ！)

と、瞬間に思つた。

(この嬰あかんぼ児の母親を殺した『裏切り者』と宣なのる男だ！)

(どうしよう！ どうしよう！)

その男は、またも一人の女を——娘を犠牲にしようとしている！

(この子の母親の敵かたきを討ち、あの娘の危難を救つてやりたい！)

(どうしよう！ どうしよう！)

夢中で腕へ力をこめた。

嬰児が腕の中で苦しそうに動いた。

ギョツとして手をゆるめた。

(泣き出されては大変だ！)

この時胸を押されたため、苦しくなったか懐中の蝮が、五寸ほど体を外へ出した。

(そうだ!)

と、早瀬は突嗟とつさに考えた。

(『裏切り者』は武術の達人、わたしなどには討てそうもない。この蝮を部屋へ放してやり、毒のある歯で噛ませてやろう)

彼女は蝮の頭を撫で、念ずるように口の中で云った。

「子供よ、お前、お願いします! 部屋の中へは行って、あの男に噛みついておくれ!」
間もなく蛇うねる長い紐が、板壁を伝って、床へ下り、薄蒼く月光の射している中を、鎌首を立て尾を揺すり、頼春と浮藻との方へ泳いで行くのが見えた。

一人は気絶していて何も知らなかった。

もう一人は盲目であった。

蝮はやがて二人の周囲を、円くウネウネと廻り出した。

桂子は谷を横切っていた。

袈裟太郎がその前を走っていた。

桂子のかいこんでいる長柄の刃へ、雑草が触れて切れて散った。

袈裟太郎の注進で右衛門が、小次郎を殺そうとしていると聞き、桂子はどんなに驚いたことか！

(だいそれた奴、不届き者、止めて聞かずば手討ちにしてくれよう！)

血書き写経ぎようも行もなかった。

夢中で飛び出して来たのである。

二人の走る谷の木々は、嵐も吹かないに騒立っている。

猿えんこう猴の群れが枝を伝い、谷を渡っているからである。

この頃、小次郎も走っていた。

(右衛門め随分つかれたろうよ)

で、すこし足をゆるめ、肩うしろごしに背後をふりかえって見た。

右衛門のひっさげている鉞まさかりが、大儀らしく重そうに、地上一尺を、前後に揺れているが見えた。

(ムダだ)

と、小次郎は気の毒そうに思った。

(トシヨリに鉞、荷が勝っている。……数年前ならよかつたろうよ。が、今では荷厄介で、ムダさ。……ちようど右衛門の忠義立てのように！)

また小次郎は足を早めて走った。

行く手の木の間から燈ひの光が見えた。

(ははあ小屋だな、猪小屋だな)

猪小屋を取り巻いて猿猴の声が、嵐のように響いていた。

頼春はノツと腰をあげた。

左右の手を床へついた。

左の手の下に蝮まむしがいた。

キリキリ！

腕へ捲きついた。

「わッ！」

この時、純白の物が、谷に向かつて開いている窓へ、卯の花くさむらが叢むらをなして咲いたように

……。

(蝮に噛まれた！)

と、頼春は感じた。

一揮^き！

蝮を振り落とし、頼春は隣り部屋へ狂い出た。

猩々卯ノ丸が窓から飛び下り、浮藻を両腕に抱き上げた。

小屋の前まで小次郎は来ていた。

と、小屋から手負い猪^{じし}のように、一人の男が飛び出して来た。

「あぶない！」

ぶつかられるのを防ぐつもりで、

一揮^き！

小次郎は太刀を振った。

「わッ」

「しまった！」

独楽^{こま}のように、左の腕を肘のあたりから、切り落とされた頼春は、キリキリキリキリぶ

ん廻った。

が、すぐその姿は見えなくなった。

猪小屋の燈^ひを目あてにして、馳け上がって来た桂子の横手を、丸太のように転がって行く、人間らしい物の姿が見えた。

足を踏み外して谷へ落ちて行く、土岐頼春の姿であった。

卯ノ丸が窓から地上へ飛んだ。

「^{ばけもの}化物！」

人を誤まって斬り、呆然としていた小次郎の眼へ、女を抱えた大猿の姿が、まこと化物さながらに見えた。

「おのれ！」

やにわに峰打ちにかけた。

悲鳴！

浮藻を思わず放し、卯ノ丸は木へ馳け上がった。

「助けて——ッ」

と気絶からさめ、浮藻は叫ぶと飛び上がり、夢中で林へかけ込んだ。

「やア！ 浮藻！ 浮藻だ浮藻だ！」

追おうとした小次郎の背後うしろから、

「くたばれ——ッ」

と大鉞が！

「助けて——ッ」

と浮藻の声！

「浮藻だ浮藻だ！ ……おのれ右衛門、また邪魔な所へ！ 邪魔な所へ！」

「くたばれ——ッ」

と二度ふたたび鉞が！

ひつ外して、

「浮藻殿オ——ッ」

追おうとする小次郎の行く手を遮りさえぎ、仁王のように突つ立った右衛門、

「そいつがいけねえ、その浮藻殿オ——ッが！ くたばれ！」

とふり上げた大鉞！

それをあたかも支えるかのように、この時なが長柄がえが突き出された。

「右衛門！」

「あッ、お姫様ア——ッ」

桂子が高く立っていた。

「助けて——ッ」

と遠退く^{とおの}声！

そつちを目がけて小次郎は走った。

転落して行きながら頼春は思った。

「流れるわ流れるわ毒血が！ 流れるわ流れるわ悪血が！ ……頭から胸から腕を通して
！ ……快味！ なぜだ、この快味は！！ ……人を斬った時の快味より、斬られた今のこ
の快味は！ ……何故だ？ 何故だ？ 何故だ何故だ？」

落ちて行く躰を止めるものがあつた。

三尺ばかりの石の祠^{ほこり}であつた。

勢いで右手が扉を破つた。

指にふれる物がある。

引き出して夢中で傷口を抑えた。

一本の巻軸であった。

彼の左右、彼の頭上で、猿猴えんこうの群れが啼き叫んでいた。

見えていた浮藻が見えなくなつた。

小次郎が四辺あたりを見た。

洞窟ほらの口がそこにあつた。

「もしや?」

小次郎ははいつて行つた。

天井へまでもどきそうな、巨大な釜がかかつていた。

それを載せている巨大な炉は、獅子のような口をあけていた。

そうしてその中で燃えている火は、血を含んでもいるように見え、そこから吹き出している墨のような煙りは、黒駒くろこまの靡なびかせる鬘たてがみのようであつた。

釜の周囲には心臓や肝臓や、眼球や四足よつあしや耳やそういうものを切られたり剝えぐられたりした、犬や狐や猫まみの死骸が、とりちらされたり積まれたりしてあつた。

釜かまからは湯気が立ちのぼり、岩の天井にぶつかって、滴しずくとなつて落ちて来た。

釜の中でグラグラ煮えているものは、その犬や狐の臓器であつた。

釜のかなた、この部屋の奥から、四筋の燈明が射して来ていた。

その光と炉の焰とに、朦朧もうろうと照らされて見えているものは、畳み上げられた岩の上に、

白木で造られた戒壇であつた。

御幣ごへい、七五三繩しめなわ、真榊まさかきの類が、そこでも焚かれて見えているごまの煙りや、炉から吹き出し

ている墨のような煙りや、湯気などに捲かれて見え隠れしている。

壇上に坐りこちらへ背を向けた、鬼火の姥うばの行衣ぎようえ姿が、物の怪のように見えていた。

読経の声と鈴の音ねとが、絶えずそこから聞こえて来た。

釜かまの側そばに二人の男がいた。

二人ながら姥の眷族けんぞくで、二人ながら屠者えとりであつた。

手に持っている薄刃の庖丁は、獣の血と膏あぶらとでネチネチしていた。

腕も胸も顔までも、獣の血で赤黒く穢よごれていた。

二人ながらクタクタに疲労つかれていた。

煙りと火気と臭気と殺戮さつりくとで、疲労ひろうしきつていたのであつた。

どうしても贄釜にえがまが鳴らないという、その恐怖と責任とですっかり心を怯おびえさせていた。恐怖と当惑と疲労との眼を、二人は時々洞窟の隅へ、助けを乞うように投げることがあった。

金地院範覚がいるからである。

気絶から蘇生そせいした範覚は、頓とみに気抜けして、白痴ばかのようになった。

姥の調伏を助けようともせず、贄釜の音をあげさせようと、指揮しようともしなかつた。洞窟の隅から暗いところへ洞壁を背にして坐り込み、金剛杖を膝こにのせ、ボンヤリ乎ことしているのであつた。

(さっきの女！ ……裸体はだか！ ……ワ——ツ)

と、こんなことばかり考えているのであつた。

鬼火の姥は気が気でなかつた、

満願の時刻が逼せまつて来るのに、贄釜が音を上げようともしない。

「受け入れられない」証拠しやうこだからである。

今、姥は壇上ひしがたの人形を取つた。

紙で刻んだ人形である。

ごまの煙りの中へ投げ込んだ。

煙りに包まれ、火気に揚げられ、人形は白い蛾のように、天井の方へ舞い上がった。やがて贄釜の真上まで行った。

真ツ逆さまに落ちなければならぬ！

が、人形はヒラヒラ揺れて、横へ流れて床の上へ落ちた。

石の床は滴で濡れていた。

その滴に意気地なくぬれて、ベツトリと床へ、へばりついてしまった。

「受け入れられない」証拠である。

桂子が同じこの裏山で、血書き写経の行をして、こっちの行と対抗していることは、鬼火の姥も知っていた。

その桂子の対抗によって、こっちの行が妨げられ、験を現わさないうに相違ないことも、彼女はとうに感付いていた。

そのために一層焦心るのであった。

丑の刻がだんだん近寄って来る。

「範覚ウーッ」

と、不意に姥は吼ほえた。

「贄釜の中へ、贄を入れるオ——ツ」

「オ——ツ」

と、範覚は立ち上がった。

が、すぐにフラフラして、金剛杖へすがりついた。

「たちくらみツていうやつだな。……無理アねえ。眼だつて眩むさ！ ……裸はだか体の女を見

たんだからなあ！」

遙か向こうの下手しもての方に、荒あらかむしろ蕙むしろのたれが見えていた。

そつちへ範覚はよろめいて行つた。

「野郎どもオ——ツ」

と、声をかけた。

「ハダカの女を持つて来オ——ツ……違つた！ いけねえ！ そうじやアなかつた！ 贄にえ

持つて来オ——ツ、裸はだか体の贄を！ ……と、ドツコイまた違つた！ ハダカの贄は、自分

ながら変だ！ ……贄のハダカを持つて来オ——ツ！ ……はてなおかしいぞ、少し違う

ようだ！ ……贄のハダカ？ 贄のハダカ？ ……変なものか！ これでいい！ ……ヤ

イヤイ野郎ども持つて来オ——ツ、贄のハダカを持つて来オ——ツ、贄のハダカを持つて来オ——ツ」

すると、彼方むこうから声が聞こえた。

「贄のハダカつて何んでござんす？」

「範覚さん、そんな物アこつちにやアねえ」

「黙れ範覚！」

と、範覚は怒鳴った。

「文句を云わずとヤイヤイ範覚、贄にえのハダカ持つて来オ——ツ」

笑う声が向こうから聞こえ、

「範覚さんは、お前さんなんだよ」

「お前さんこそ範覚さんなんだよ」

「そうだ」

と、範覚は足踏みをした。

「俺こそ金地院範覚だ！ ヤイヤイ範覚ハダカ持つて来——ツ」

「範覚ウ——ツ」

と、姥が壇上から叫んだ。

「贄釜の中へ贄を入れる——ツ」

「ちげえねえ！」

と、範覚は答え、

「贄釜の中へ贄を入れる——ツ、……贄持つて来オ——ツ、犬、狐、まみ猫、ねこ猫、兔、贄のハダカを持つて来オ——ツ」

ドツと笑う声が向こうでしたが、犬と狐とがむしろ庭の間から、こっちの部屋へ投げ込まれた。二人の屠者えとりはすぐに飛びかかり、四足をしばられた二匹の獣を、釜の傍そばへ引きずつて来た。

獣は悲鳴し体をもがいた。

しかしすぐに動かなくなつた。

二本の庖丁が獣の胸に、柄を上にして立っていた。

やがて臓腑が掴み出され、釜の中へ投げ込まれた。

釜の横に積まれてある薪たきぎの束が、つづいて炉の中へ投げ込まれた。

枯れ木、枯れ草、馬糞、牛糞、獣皮、獣骨、髪の毛などによって、出来あがっている燃

料であつた。

炭のような煙りが炉の口から吹き出し、湯気が釜からひときわ立った。が、釜は鳴らなかつた。

時がズンズン経つて行く。

煙りと湯気とは束となつてうね蜒り、蕙の隙から出て行つた。

が、それとは反対の方へも、煙りの束が出て行つた。

そつちにも口はあるものと見えた。

突然姥が立ち上がり、壇から床へ下りる姿が、巨大な御幣ごへいさながらに見えた。

「駄目じゃア——ツ」

と、姥は吼え声を上げた。

釜のまわりを馳け巡りながら、つづけざまに姥は吼え立てた。

「贄が不足じゃ！ 受けてくださらぬ！ ……叩つ込め男を！ 叩つ込め女を！ ……人

柱じゃ！ 人間の贄じゃ！ ……可哀そうだが人身御供ひとみごくうじゃ！ ……範覚ウ——ツ」

と、範覚の前へ立つた。

「連れて来才——ツ、贄を！ 人間の贄を！」

この時女の叫び声が、どこからともなく聞こえて来た。

「助けて——ッ」という声であった。

垂れている荒蕙の向こうの部屋から、聞こえて来る声とは思われなかった。

反対の方から来るようであった。

この部屋を充たしている煙りや湯気が、蕙の垂れている方とは反対の方へ、やはり束をなして流れて行つたが、その方角から来たようであった。

そう、そつちにも通路があつた。

いわば、この洞窟の間道なのであつたが、その間道の暗黒の中を、無我夢中で走りながら、時々「助けてえ——」と叫びながら、今浮藻は走つていた。

気絶させられた！

蘇生した！

と、恐ろしい光景が、猪小屋の周囲に展開ひらつていた。

恐怖が彼女の心を搏つかち、ほとんど思慮を失つた。

(逃げなければならぬ！ 遁のがれなければならぬ！)

で、いわゆる 盲目滅法界めくらめつぼうかいに、浮藻はその場を遁のがれたのであつた。

と、行く手に洞の口があつた。

で、そこへ飛び込んだのであつた。

背後から小次郎が追つて来たことも、彼女はまったく知らなかつた。

暗い、細い、洞窟の道を、ただ彼女は先へ先へと走つた。

「助けて——ッ、助けて——ッ」

突然浮藻は光にうたれた。

「あッ」

と、叫んで立ち止まつた。

巨大な釜が湯気を吐いている。

燈明の灯がともっている。

炉が真紅に燃えている。

白衣の老婆と、山伏と、二人の賤民のような男とがいる。

悪臭！ 煙り！ 獣の死骸！

地獄だ！ 絵で見た地獄の光景だ。

「助けて——ッ」

と、恐怖を新たにし、浮藻は叫んで、ガタガタ顛えた。

と、老婆が吼えるように叫んだ。

「お誂え通りの贅が来たわ！ 取り抑えろ！ 釜へ入れろ！」

賤民のような二人の男が、左右から浮藻へ飛びかかった。

「助けて——ッ」

と、浮藻はもがいた。

と、二人の賤民のような男が、もんどり打って地へ仆れ、その間に金剛杖が延びていた。

「昼間の女だ——ッ、裸体の裸体の！ ……オレ覚えている水を浴びていた女だ——ッ」

範覚は驚きと喜びとで、躍り上がり躍り上がった。

「気絶させた女だ——ッ、俺をよ！ 俺をよ！ ……オレもう一度気絶するぞ——ッ、こ

の女だよ！ この女だよ！ ……やらぬ誰にも、オレのものだ——ッ……釜へ！ 何云う

！ 入れるものか——ッ……贅釜^{にえがま}なんどへ、入れるものか——ッ……」

「範覚ウ——ッ……」

と、姥は御幣^{ごへい}へ仕込んだ、戒刀を頭上へふりかぶり、

「女を渡せ、渡せ渡せ！ 渡さねば汝^{おのれ}、汝を雑^{まじ}えて贅にするぞ——ッ、贅釜に入れて！」

「へ、へ、姥駄目だ——ッ」

と、浮藻を捉え小脇にかい込み、金剛杖を片手で差しつけ、範覚は冷笑してまくし立てた。

「姥ごときに、この範覚、贄釜なんどに入れられようや！ ……姥おさらばじゃ、こつちから暇出す！ ……オレ亭主じゃ、この娘のよ！ ……行こうぞ娘！ 来才来才来才——ッ」

——が、疾風！ そのとたんに、間道から人影が飛び込んで来た。

「小次郎様ア——ッ」

「浮藻殿オ——ッ」

「汝ア！」と姥が素早く認め、「その方は、おおお、知つとる知つとる！」

姥は戒刀をダラリと下げ、眼を細くし首を延ばし、糸の切れたあやつりの傀にんぎよう 儡ようのよ
うに、フラフラと前へ出た。

「一度は夜の京の町で、一度は司馬の大藪地で、見かけた美しいお侍さんだ！ ……年たけていっそう綺麗になられた！ ……執心じゃ、さわらせてください！ ……頬へ、額へ、可愛らしい口へ！」

「姥ア——ッ」

と嫉妬して範覚は吼えた。

「病気が出たか、荒淫無慚！ ……やあやあ汝ら出て来い出て来い！ ……この男を贄

釜へ叩つ込め！」

庭をかかげて隣り部屋から、姥の眷族たちがこみ入つて来た。

混乱！

悲鳴！

燈明が消えた！

「小次郎様ア——ッ」

「浮藻殿こつちへ！」

「やらねえ——ッ」

杖！

刀光！

音！

「手へ、胸へ、円々とした肩へ！ ……さわらせてくだされ、執心じゃ！」

「ワツ」

小次郎に誰か斬られた。

「強いぞ！」

「用心！」

「凄い技術だ！」

「オレ、もう一度、オレもう一度！ ……キ、気絶、気絶してえ——ツ」

「ギャツ」

小次郎に誰か斬られた！

戒壇のこわれる音！

「小次郎様ア——ツ」

「もう大丈夫！ ……しっかり縫って！ ……もう大丈夫！」

「やらねえ——ツ」

杖！

払った刀光！

荒蕙が千切れた！

誰か馳け行く！

「逃げた——ッ」

「追え——ッ」

足音！

足音！

丑^{うし}の刻の鐘の鳴った時、桂子は写経を引き裂いて捨てた。

「右衛門！」

と桂子は突つ立ち上がり、館の庭にひざまずいて、手をついていた右衛門を睨んだ。

「そちの無謀を止めようと、走って行って時を費やし、血書きの写経のわしの行、三分の一を余したぞ！」

鬼火の姥^{うば}はこわれた戒壇を、口惜^{くや}しそうな眼で睨みながら、その横に気抜けて地面へ坐り、バカのようになっている範覚へ云った。

「調伏も祈祷もありやアしないよ。……もう何もかも目茶苦茶さ」

その時^{うし}丑の刻の鐘が鳴った。

比叡山延暦寺の大塔の座敷に、お若い一方の貴人がおわした。

丑^{うし}の刻の鐘の音をお聞きあそばされるや、

「断行！」

と一言仰せられた。

後に大塔宮護^{もりなが}良親王——尊雲法親王におわしました。

やがてこの年の九月となり、野山が紅葉で飾られるようになった。

河内国^{かわちのくに}赤坂の地へ、楠木^{くすのき}正成^{まささしげ}が城を築き、宮方ご加担武家討伐の、義兵を挙げたのはこの頃であった。

以前から正成は宮方として、義兵を挙げる機を窺っていたが、元弘元年九月十一日に、明瞭に兵を挙げたのである。

赤坂城を中心に

赤坂城は小城であつた。にわかごしらえの小城であつた。浅い堀、一重塗りの塀、櫓は三十足らずであつた。全体の大いさは方二町。——豪族の館さながらであつた。そうしてそれにこもっている兵も五百ぐらいといわれていた。

そういう小城が河内平野の、小高い所に立っているのである。

さてその赤坂城の可哀そうなほどの姿を、遠望出来る館の縁に、飛天夜叉の桂子かつらこが腰かけていた。

楠氏なんしの一族の恩地おんち太郎、その人の遠縁にあたるころの、恩地宗房むねふさの館なのであるが、主人と家来とはうち揃つて、赤坂城へ入城した。女子供は和泉いずみあたり縁者のもとへ立ちのいた。で、この館は無一人となつた。それを桂子が借り受けて、家来たちと一緒に住んでいるのであつた。

朝日が明るくあたつていて、葉を落としつくして果実みばかり残した柿の、紅玉こうぎよくのような肌を輝かせていた。

「さあお前たちは入城して、めいめい身にある芸を發揮し、多門兵衛様たもんひょうえさまのお役にお立ち」
 そう桂子は三人へ云つた。

泣き男と、笑い男と、風見の袈裟太郎とへ云ったのである。

「かしこまりましたござります」

三人はそう云って辞儀をした。

人足募集の立て札が、赤坂城から立てられた。

で、それに応募するように、桂子は三人へ命じたのであった。

「袈裟太郎は時々ここへ来て、城内の様子を話しておくれ」

「承知いたしましたござります」

「一芸一能ある人間と見ると、きつとお用いになる楠くすのき木様だよ。お前たちきつと重用さ

れるよ」

「へい」

と三人は薄ら笑いをし、

「役づきますでござりまするかな」

「自信をお持ち、きつと役づくよ」

「へい」

と三人はまたうすら笑いをした。

その三人が出て行つてしまふと、背後うしろにつつましく控えていた侍女へ、桂子は愛想よく話しかけた。

「お前たちにもそのうち役づかせてあげるよ」

「どうぞ」

と幽霊女が首をのばして云つた。

「どうぞ、お姫様、わたくしにも」

と、鶏とりむすめ娘も首をのばして云つた。その様子がおかしかったので、庭の隅で昔ながら

倦きもしないで、鉞まさかりを磨いでいた右衛門までが笑つた。

渡り鳥が木々を渡つて通つた。

声が秋を感じさせた。

不意に桂子は寂しそうに、

「浮藻や小次郎はどうしたかねえ」

と云つた。

誰もが何んとも云わなかつた。

「その後消息を聞いたものはないかえ？」

誰も返事をしなかった。

誰も知っていない証拠であった。

比叡山の裏山で起こった事件！……あの事件以来浮藻と小次郎とは、行方不明になったのであった。

今の桂子その人は、あの頃の桂子とは違っていた。

（あの頃のわたしの心には、悪霊が憑ついていたのだよ。自分の子のような小次郎に恋して、妹の恋を妨さまたげたなんて、いったい何んということだろう）

今ではこう思っているのであった。

（どうぞして二人をさがし出して、わたしの手で夫婦にしてやりたいものだ）

死骸があつたというわけではないので、浮藻も小次郎もどこかの世界で、生きていますしいということ、桂子にも感じられているのであった。

午後桂子は館を出て、宛あてなしに野路をさまよった。

（鬼火の姥うばめ、どこにいるかしら？）

その居場所をつきとめようと、桂子は館を出たのであった。

正まさ成さしげが赤坂へ城を築いて、北条氏討伐の兵を挙げた。で、いずれは関東軍が、これを

攻めるに相違ない、ではわしも出かけて行って、いろいろ策動してやろうと、鬼火の姥が眷族をひきいて既にその地に向かったそうな。——ということを桂子が聞き、

(男同志の合戦は、お侍さんたちに任せておけばよい。が、年来の讐敵かたきともいうべき、鬼火の姥がまた出しやばって、そんな態度をとるといふのなら、わたしとしては黙つてられない。出かけて行って抑えてやろう)

そこで出かけて来たのであった。

姥めがどこに住居しているか、桂子にも見当がつかなかった。

(敵の根拠が知れなかつたひには、何をやるにも不便だよ。どうともして居場所をつきとめなければ)

こう思つてこの地へ着いた日から、その搜索にとりかかったのであったが、今にそれが知れないのであった。

千早ちはやの方へつづいている雑木林を分けて、右衛門一人だけを供につれて、桂子は歩いて行つた。

兎が草むらから飛び出したり、野猫がむささびを食つていたりしていた。

林をぬきんでて聳そびえているのは、四千尺に近い金剛山で、秋日に蒼い山肌が、瑠璃るりのよ

うな色に澄んでみえた。

不意に嬰兒あかんぼの泣き声が聞こえた。

「まあ」

と、桂子は眉をひそめ、右衛門の方をふり返った。

「どこかで赤ん坊が泣いてるのね」

「はい、赤ん坊が泣いておりまする」

右衛門も首をかしげた。

と、子守唄の聲がきこえて来た。

泣きそ、な泣きそ、和子よ和子よ

泣けばお山で猿もなく。

三抱えほどもあるらしい、巨大な鉄のような老杉が、この林の王かのように、根をひろげて立っていたが、その蔭から子守唄は聞こえるのであった。

桂子たちは行ってみた。

顔の前へ白布を垂らし、膝の上へ嬰兒あかんぼをのせた、若い女の乞食がいた。

途方にくれたように、うずくまっていた。

「まあ子持ちのお菰こもなのね」

気の毒そうに桂子は云った。

「もし」

と、早瀬は声をかけた。

「お乳おありではござりますまいか。……もし、おありでございましたら、この子に飲ませてくださいませ」

「わたし、これでも娘なのだよ」

桂子は微笑してそう云った。

「だから、お乳は出ないのだよ」

「とんだ粗忽そこつを申し上げました」

「あのね」

と、桂子は情け深く云った。

「この林を出て少し行くと、恩地という人のお館があるから、そこへ行って、何かいただくといひよ」

「ご親切にありがとうございます」

「でも、お前さん何んと思つて、こんな林の中などへ入り込んだの？」

「……………」

「いまにも合戦がはじまるというのに、野武士や追ひ剥ぎが群れをつくつて、ここらへ入り込んでいるのだよ」

「はい」

「この林など物騒なのだよ」

「はい」

「人里へ早く行つた方がいいねえ」

「はい、ありがとうございます」

桂子と右衛門とは先へ進んだ。

嬰兒あかんぼの泣き声と子守唄の声とが、追っかけるように聞こえて来た。

桂子は何か心が引かれ、足を止めて振り返った。

女乞食が嬰兒を抱いて、トボトボと歩いて行く姿が見えた。

（由緒ありそうな乞食だが？）

といった、立ち入って身の上を訊くのも、大人おとなげ気ないように思われた。

(どうしよう?)

佇たたずんでいた。

早瀬はトボトボと歩いて行く。

楠木正成が赤坂城を築いて、北条氏討伐の旗上げをしたと、人の噂で聞いた時、

(良人おっと頼春は宮方に味方し、それを裏切つて武家方についたが、それを後悔して行方不明になった。今の良人の心持ちは、宮方にあるに相違ない。ひよつとかすると赤坂城へはいつて、宮方にお尽くししているかもしれない)

ふと、早瀬はこんなように思つて、この地へさまよつて来たのであった。

おぼつかない宛あてではあつたけれど、ほかに宛てのない彼女としては、そんなことでも宛てにして、良人をさがさなければならぬのであった。

早瀬はトボトボと歩いて行く。

嬰兒あかんぼはなかなか泣きやまなかつた。

「おおよしよし、おおよしよし。……すぐにお乳をのませてあげます。……恩地様とかいうお館へ行つて、お乳をもらつて飲ませてあげます。……お泣きでないよ、お泣きでない

よ」

あやしなから、彼女は行くのであった。

彼女にとつてこの嬰兒は、もう何物にも換えがたい、大事なものになっていた。

(この子を立派に育てあげて、わたしの跡目を継がせなければならぬ。土岐の跡目を、土岐の跡目を！)

こんなことをさえ思っているのであった。

そうして彼女は、この嬰兒の母の、憎い敵の殺人鬼へ、蝮まむしを噛みつかせてやったことに、喜びを感じているのであった。

(蝮の毒が全身に廻つて、あの殺人鬼は死んだに相違ない。この子に代わつて母親の敵かたぎを、わたしは取つてやったのだよ)

彼女は足を急がせた。

と、不意に木蔭から、三人の野武士があらわれた。

「いい女らしいぞ」

「まだ若いな」

「業病じゃアないか、顔に垂れがある」

「手足を見ろ、綺麗で満足だ」

「お顔拝見」

「担いで行け！」

早瀬の周囲をとりまいた。

しかし早瀬は驚きもせず、垂れ布の内側で苦く笑った。

(わたしの懷中に蝮がいるってこと、この人達は知らないそうな)

しかし、その時淫らの様子の、若い女が二人あらわれ、野武士たちの間へ雜ったので、かえって早瀬は度胆を抜かれた。

桂子は先を歩いていた。

と、一座の丘があり、その裾を向こうへ廻った時、芒すすきの中に野武士の死骸が、一つころがっているのが見えた。

「まあ」

と、桂子は小走って行つた。

「ははあ咽喉のどをやられていますな」

右衛門、そう云つて腰をかがめ、その傷口を覗くようにしたが、

「刃物で斬った疵きずではない」

「おや、あそこにもう一つ」

こう云つて桂子はまた小走つて、これも芒の中にころがつている、同じような野武士の死骸の前に立つた。

「こいつも咽喉をやられております。……刃物で突いた疵ではない」

おおまさかり
大 鉞すずきを地につきながら、また右衛門は呟くように云つた。

林が途切れて芒すずきの原となり、その芒の原の一所に、松の林が立っていたが、そこから数人の云い争うような、高い声が聞こえて来た。

「右衛門や行つてみよう」

もう桂子は走り出した。

と、忽然と芒の原の、芒の上へ、青空の中へ、純白の物が躍り上がり、宙でヒラヒラとひるがえ翻つたが芒の原へ隠れてしまった。

桂子と右衛門は、眼を見合わせた。

と、まだ白い物は宙へは匆ねた。

「狸々だ——ッ」

「卯ノ丸だよ」

松林の中からは云い争うような、数人の高い声が聞こえて来た。

松林の中では土岐頼春が、五人の野武士にかこまれていた。

左の腕が、肘ひじのあたりから、綺麗さっぱりになくなっていった。

だからそこから長い袖が、ダラリと風わるく垂れていて、それがピラピラ揺れたりした。裾に血のりがついていたが、右手に持つている杖の先にも、やはり血のりがついていた。でも、何んと頼春の顔は、明るく愉快そうに朗らかなんだろう。

頼春をとりまいている野武士たちは、いずれも太刀を抜き持っていたが、相手がこわいといったように、かなり遠くへ離れていた。

「……で、われら申し上げるのじゃ」

と、その中の一人の武士が云いついだ。

「われらの住居へおいでくださいな」とな

頼春は笑って云うのであった。

「斬ってくださいとお願いしながら、よしそれでは斬ってやると、貴殿方お仲間のお二人が、親切にも拙者を斬ろうとすると、何んと忘恩のこの拙者の右手めてが、拙者の意志を裏切

つて、あべこべに親切なお二人の人を、ブツリと突き殺した、そのように」

「……………」

五人の武士はバタバタと逃げた。

が、すぐに忍び足して、数間の近くまで帰って来た。

「行こうという拙者の意志に反して、この足がどうにも動かぬのでござるよ」

黄味の深い秋の朝の光が、松の林の梢こすえから、縞しまをなしてここへも射して来て頼春の足もとに揺れそよいでいる。熊笹の葉の上の女郎蜘蛛じようろうぐもを、鉋物かのように光らせていた。

「この足が、どうにも動かぬのでござるよ。……が、これはもつともとも云えるて。……

よい条件ばかりが揃っていて、悪い条件がないのだからのう」

すると、もう一人の武士が後をつけた。

「本来なれば、我らの仲間を、二人理不尽に討って取られた貴殿、許して置くわけには参らぬのでござるが……」

「あんまりお技うでまえ倆が立派じやによつて……」と、もう一人の武士が後をついで云った。

「招待しようとお申しておるので」

「盲目でしかも片腕で、得物といえは竹の杖で、われらの仲間のその中にもあつても、そう

とうな沖田と毛利氏とを、一突きずつで退治した技倆……」と、四人目の武士が感にたえたように云った。

「前代未聞、凄いといわねばならぬ。……で、ご招待いたしたいというので」

「感謝」

と、頼春は愉快そうに云った。

「女があつて酒があつて、ご馳走があつて寝具がよい、そういう住居へ来いといわれる。感謝！ よろこんで参りますとも！ ……ただで養なってくれるという！ 感謝！

何んのお断りしよう！ ……その上そこへ参つても、これといってやるべき務めもなく、これといって持つべき責任もない。いてくれさえすればよいという！ 極楽じゃ、極楽浄土じゃ！ このセチガライ戦国の世に、そんな極楽浄土がある！ 行かなかりうものなら罰があたる！ ……行こうぞ行こうぞ、行かいでどうしよう！」

ニヤニヤ笑つて云うのであつた。

「おいでくださるか、それは重畳、さあではすぐに、案内仕る」

と、五人目の武士がせき立てるように云った。

「行きますとも、行きますとも。……さあご一緒に参るとしましょう」

「こつちでござる、さあ参られい」

五人の武士は歩きかけた。

が、頼春は動かなかった。

「どうなされた、なぜお歩きなさらぬ」

「変でござるよ、足が動かぬ」

頼春の云い方は皮肉でもなく、また擲揄やゆでもないのであった。

心持ちがほんとうに愉快なので、それで何んでも本当のことを、ポンポン云うまでにすぎないのであった。

比叡山の裏山にいた頃の頼春と、何んとひとが違っていることか！

でもそれでいて相手から見ると、凄う人間に見えるのであった。

そうしていつも一道の殺気が、ほとぼしって来るように思われるのであった。

「盲目めくらで片手てんぼうの乞食の身の上、これでも生きていたいのだろう」

と、通りすがりにそう云ったところ、

「ではお斬りくださりませ」

と答えた。

「よし、慈悲を出して斬ってやる」

と、沖田と毛利とが太刀を抜くと、ヒョイと杖を突き出した。

「わッ」

ヒョイとまた杖を突き出した。

「わッ」

それだけで可哀そうな二人の間は、他愛なくこの世から暇いとまを取った。

そんな業わざをした相手であった。

だから五人の野武士から見ると、頼春という人間が、殺気に充ちた凄惨な恐怖しい、殺人鬼に見えてならないのであり、そうして彼がさも愉快そうに、こだわらずに云う云い方が、皮肉に聞こえてならないのであった。

五人の武士は息を呑み、体をかたくして黙っていた。

「よいことづくめのそういう所へ、さとうかうか行つたとする、行つてみるとこれはこれは、よい条件というやつ引つ込んでしまい、新規に悪い条件が、続々と出て来て充たしてしまう。——というのが浮世の常で。……ということであつてみれば、行こうという意志の方が間違つていて、この動かない足の方が、ほんとうであるかもしれませぬのう」

ここでまた頼春は愉快そうに笑った。

「いや」

「違います」

「そんなことはござらぬ！」

と、野武士たちは口々に弁解し出した。

「迂散うさんに思われるはごもつともでござるが、われらがご案内いたそうとするは、われらの
お頭の館でござつてな……」

「ナーニ山寨でござろうよ！」

「……………」

しかしもう一人の武士がつづけた。

「そのわれらのお頭というは……………」

「泥棒であるに相違ない！」

「……………」

しかしもう一人の武士がつづけた。

「一芸一能ひいに秀でたお方を……………」

「豪族へ売り込むという手もござるて！」

「……………」

「どつちみち……」ともう一人の武士がつづけた。「百聞一見にしかずと申せば……」

「残念、拙者盲目めくらでのう」

「ナール」

「とはいえ拙者見えまする！」

「さてこそ！」

「心眼で見えるのじゃ！」

「……………」

松の枯れ葉が針のようにこぼれて、いまだ抜いたままで、鞘へ納めない、五人の野武士の五本の太刀へ、ひっそりと触れて行ったりした。

不意に頼春は決心したように云った。

「せっかくのおすすめとやかく申さず、貴殿方のお住居へ参るとしましょう」

それから口の中で呟くように云った。

「笠置かさぎの城の落ちるのも、ここ数日のうちであろう。と、神の界くにに属しまつる御一方おんひとかたが、

この赤坂へおいで遊ばす筈だ。……それまでどこにいようとままよ」

「卯ノ丸よ、ここへおいで！」

桂子かつらこはこう云つて手を拍うつた。

呼んでも卯ノ丸は来なかつた。

芒すすきの中へひざまずいて、何か恐縮でもしているように、むやみと辞儀をするばかりであつた。

そうして時々うしろの方を見ては、そつちへ指さしをするばかりであつた。

「変だねえ」

と桂子はいぶかしそうに云つた。

「叡山の裏山へあらわれた時にも、側そばへ来ずに辞儀ばかりしていたが、でも大変なつかし
そうにして、恐縮なんかしなかつたものだよ。……それにしてもあの時もそうだったが、
今度もあんな方へ指をさして、わたしをどこかへつれて行こうとする。……いいよ、どこ
へでも行つてやろう。……右衛門や、行つてみようじゃアないか」

「馬鹿な人間などに比べましたら、比較にもならない利口な卯ノ丸、それにお姫様には忠

実な卯ノ丸、あのようにお誘いするからには、わけがなくてはなりません。参りました方がよろしいようで……」

そう右衛門は真面目に云った。

「では卯ノ丸や、一緒に行こうねえ」

桂子は足を進めた。

卯ノ丸はいかにも嬉しそうに、十数間の先へ立つて、松林の方へ匆ねて行つた。

桂子たちは松林の中へはいった。

さつきまで人声がしていたのに、行つてみれば人はいなかった。

でも林の外れにあたり、六人ばかりの人影が見えた。

五人は野武士らしい男であつたが、一人はみすぼらしい乞食であつた。

朝の陽が午後の陽に変わった頃、桂子と右衛門とは深い谷の底に、茫然として立つていた。

正面に城門のような岩壁があつて、道を遮さへぎっているからであつた。

赤坂からはおおよそ三里。それぐらい距へだたつた地点らしかった。

ではこの辺りは千早と金剛山との、中間にあたっていなければならぬ。

千年も経たかと思われるような、二抱えから三抱えもある、杉や桧や檜の巨木で、あたりは隙なく鎧われていて、空など蒼い帯のようであった。

宵闇のようにあたりは暗い。

金剛砂で出来ているからであろう、谷の道は白かった。

その谷の道の左右には、金剛山の山脈が、眉を圧して逼って来ていて、それにも老樹や灌木が、すすくと隙間なく聳えていた。

白い地肌に黄だの茶色だの、縞や斑紋を沁み出させている、人工のように見える天然岩が美しくしかし厳めしく、手をかけるところも足をかけるところも、絶望的でない垂直さで、正面に聳えているのであった。

城門というより云いようがなかった。

桂子と右衛門とはそれを見上げて、茫然と佇んでいるのであった。

というのはここまで案内をして来た、狸々卯ノ丸がここまで来ると、姿を消してしまつたからである。

そうしてそれまではいつも前方に、見えがくれしていた六人の男が、やはりここまでや

つて来ると、姿を消してしまつたからである。

それはあたかも岩の城門が、音なく開いてそれらの生物を、呑み込んだとしか思われなかつた。

この月の二十八日に、笠置かさぎの城は落城した。そうしてその城にこもつておられた、主上をはじめたてまつり尊そんちよう澄法親王、藤原藤房、同じく具行ともゆき、千種忠顕ちくさただあき、尊貴しんけん緞顕の方々は、関東軍の手に渡つた。

月を越えて十月となり、その十日の午後となつた時、

「お姫様いよいよでござります」

と、赤坂の城からぬけ出して来た、風見かきみの袈裟けさたろう太郎が注進に及んだ。

「何んだよ袈裟太郎、あわただしいではないかえ」

と、館の奥の書院の間で、塗り机に肘ひじをもたせかけ、以前まえかた偶然行つたことのある、金剛山の谷間たにあいの城門のような岩壁のことを、思い出していた桂子は云つた。

「いよいよ関東の兵ども、赤坂城を目ざしまして、押し寄せましてござります」

袈裟太郎は眼を据えて云った。

「その前衛の部隊としまして、勝間田彦太郎入道が、一千の兵を率いまして、伊賀路より、たつた今しがた、白布の郷へ入りまして、農家に分宿いたしましたり、飯屋かりやを建てましたり、幕屋をつくりまして、宿しゆくしましてござります」

「そうか、いよいよ来たのかい。そろそろ来る頃だと思つてはいたが。……お城の様子はどんなかしら？」

「赤坂の城内でござりましたら、士氣旺盛と申しますより、ほとんど関東の寄せ手の勢など、眼中にないといったように、静まり返つております」

「そうだろうねえ、そうなくてはならないよ」

「いずれもが申しております。われらが御おんたいしやう大将たもんひやうえ多門兵衛様は、智徳兼備わが朝での孔明、このお方をいただいている以上、戦いに負けよう筈はない。その上に我らは金枝玉葉の、大塔宮様をさえ奉戴いたしておる。死も生も問題でないと。……」

「その宮様のご機嫌はいかが？」

「いつも麗うららかにござりまする」

「随分ご苦勞あそばしたのにねえ」

主上と計りたてまつり、大塔宮様が積極的に北条氏討伐のご計画を進め、まず六波羅を攻めようものと、ひそかに北畠具行をして、諸国に兵を徴させたのは、七月下旬からのことであつた。

が、不幸にもこのことは、八月に至つて北条方に洩れた。

高時は大いに狼狽したが、長崎高資の謀を用い承久の例に則つて、人臣の身としては不埒にも、主上を絶島に遷し参らせ、大塔宮様をとらえたてまつり、ともかくもせんものと計画し、この旨を六波羅へ申しやつた。

と、いうことを大塔宮様には、告ぐる者あつてお知りになり、直ちに内裏へ密奏した。そこで八月二十四日の夜、主上におかせられては勿体なくも、婦人車にお召しになられ、神劍、神璽を奉じたてまつり、ひそかに南都へご行幸あそばされ、ついで和束の鷲峯山へご行幸、ここも、危険とおぼしめされ、笠置の城へ入らせられ、ここを行在所とお定めあそばされた。

が、これ以前に大塔宮様と、ご談合あそばされた一事があつた。

六波羅討伐の挙兵の際には、主上比叡山へ鸞輿を巡らさる。——というところの御打ち合わせであつた。

そこで主上におかせられては、侍臣花山院師賢卿へ、もんりゆう 竜の御衣ぎよいをお着せになり、御輿おんこしに乗らせて比叡山へ遣つかわし、

「車駕、延暦寺に幸す」と宣のらせられた。

叡山の衆徒は感奮し、大塔宮様ともどもに、車駕しゃがを西塔に迎えたてまつり、おりから攻めよせて来た佐佐木時晴の、六波羅勢を打ち破つたが、その時心ない山風が吹いて、御車みくるまの簾すだれを翻ひるえした。

御車みくるまの中に坐せられたは、主上にはおわさで師賢もんかたであつた。

いかに衆徒たちは失望したか。

次第に勢が離れ去つた。

大塔宮様におかせられても、

(今はこれまで)

とおぼしめし、比叡山を捨てて大和路より、主上のおわす笠置へ入れ、さらに笠置もあやうしと見るや、回天の秘策を御胸おんむねに持たれ、正成まさしげのこもる赤坂城へ、数日前にお入りあそばされたのであつた。

「袈裟太郎や」

と、桂子は云った。

「寄せ手の様子はどんな塩梅あんばいだえ？」

「お話にも何んにもなりません。こんな小城、おとすの朝飯前だと、このように申して油断に油断し、京都や、淀や、神崎かんざきなどより、めし連れしました遊君ゆうくんを侍はべらせ、乱痴気さわぎいたしておりますそうで」

「そうかえ、それは面白そうだねえ。ではわたしは見に行こうかしら」

「何をお姫様ひいさまおっしゃいますやら」

「戦陣での乱痴気さわぎ、わたしは一度も見ることがないよ。参考のため見たいような気がする……そう、見に行くときめてしまおう。……袈裟太郎やお前もおいで」

「へい……しかし……わたしはお城へ……」

「お城へ帰るのは見合わせとして、わたしと一緒に行くがいいよ」

「どちらでも結構でございます」

「ではお前を連れて行くときめたよ。……お前たちも一緒に行くがいいよ」

うしろに控えていた鶏娘とりむすめと、幽霊女とを振りかえり、そう桂子は笑いながら云った。

「京男ちがと異ちがつて東男あずまおとこには、よいところがあるかもしれないからねえ、お前達二人も連

れて行つて、東男を見せてあげよう」

「まあ、お姫様イヤでございますよ」

と、まんざら厭でもなさそうな様子で、幽霊女がしなをつくつて云つて、鶏娘の方をチラリと見た。

「オホホ、お姫様、オホホ、いやな」

と、これもちつともイヤでなさそうに、鶏娘も云つてしなをつくり、

(小次郎様に恋されて以来、お姫様も^{すい}粧におなりになり、アジなことをおっしゃるよ)と、こんなことを思つていた。

この月十五日に関東軍は、総勢こぞつて京都を立ち大和路と佐々良^{さざらじ}路と天王寺路と、そうして伊賀路の四道から、赤坂の城へ向け出発した。

総勢二十万と号されていた。

中一日を旅に費やし、十七日赤坂へ到着した。

総大将は^{おさらぎむつのかみ}大仏陸奥守であつた。

土地の豪族篠原左近、この人の館を本陣とし、その夜陸奥守は軍議を開いた。——とい

うのは形式だけで、実は酒宴をひらいたのである。

部屋部屋の境いの襖ふすまを外し、こうこうとした広間とし、燈火ともしびのあかるくともしつらねた、その部屋の正面に毛皮を敷き、京都五条から連れて来たところの、白拍子しらび鞍馬ようしくらまを膝へ引きよせ、これは五条の白拍子の、千山というのを胸へ寄せ、悦えつに入っている坊主頭の、河越三河入道をニラメながら、

「三河どうじゃ、……いい女だろう。……千山、それでワザ師でな、……そうであろうがな、コレ千山！」

「何を入道様仰せられますことやら」

「いやこの鞍馬もたいしたものじゃ」

と、陸奥守は咽喉を鳴らしながら、

「口舌くぜつがよいのじゃ……な、鞍馬」

しかし鞍馬はこう云われても、それには返辞をしようとはしないで、

「それよりも明日の赤坂の城せめ、どうなることござりませうねえ」

と、うまく話をそ反らせてしまった。

「城ともいえないあんな小城、朝飯前に踏みつぶすまでよ。……」

歓楽陣

そうかと思うと縁に近い座では、佐々良路さざらちの先頭を承わつて来た、金沢武蔵うまのすけ右馬助が、千葉介貞胤ちばのすけさだたねを相手とし、神崎かんさきの遊君人丸や、同じく遊君中将を前に、無骨者だけに笠置かさぎぜめの、手柄話を話していた。

「大手一しげのりの木戸口より、仁王堂まで寄せたと思え、ここを固めていた敵方の将は、足助次郎垂範しげのりであったが、三人張りの強弓に、十三束三伏の、雁かりまた又の矢をひきつがえ、二町をへだてた我らの陣へ鳴り音たかく射てよこした」

「おおその矢をあなた様には、見事に受けて刎はね返し……」

と、愛想の合槌を打ったのは、右馬助などよりもずっと美男で、ひとがらでもある三浦若狭判官わかさはんがんへ、それとなく秋波を送っていた、厚肉丸顔の人丸であった。

「ト、ところがそうではのうて、味方の豪勇荒尾あらお九郎と、舎弟弥九郎とが田楽刺しに刺され、ために我らは総くずれよ……」

「これこれ」

と周章あわてて止めたのは、敵あいかた娼中將の白絹のような顔へ、虎鬚とらひげの顎をしばしば寄せて、中將にひどく嫌われながら、自分では一人でいい気持ちになっている、千葉介貞胤で、
 「それでは敵を褒めるようなものじゃ、とんと自慢にはならぬではないか」

「ほんにの」

と右馬助は気がついて、

「そういうこともあつたなれど、われら恐れず搦め手へ廻り、木戸を焼きはらいなだれ込んだので、行在所あんざいしよは煙いしよぜめよ。……で城は落ちたというものじゃ」

こうしてどうやらバツを合わせた。

少し離れた一所では、

「昔平ノ重衡しげひらは、囚人めしゆうととして東海道を、関東へ降る道すがら、何んとかいううまやじ駅で白拍子の千寿と……で、わしも……行こう、亀千代」

と、天王寺路の大將の、仙馬越前入道が、淀よどの遊君亀千代の織手せんしゆを、爪のもとまで毛の生えている、熊のような手でグツと握り、奥へしよびいて行こうとするのを、同じ路からやって来たところの、狩野彦七郎左衛門ノ尉しやうが、左の手をムズと掴み、

「こつちへ来い、こつちへ！」

と、反対の方へ引き入れようとした。

「あれ抜けまする、腕が抜けまする！」

と、左右の手を両方へ引つ張られ、亀千代は身もだえして悲鳴をあげた。

と、それがおかしいというので、小山判官秀朝ひでともや、佐々木入道貞氏や、大和弥六左衛

門ノ尉や、長崎四郎左衛門ノ尉や、北条駿河八郎や、宇佐美摂津前司ぜんじや、武田伊豆守や、

渋谷遠江守、足利治部大輔高氏や、結城七郎左衛門ノ尉親光などが、手を拍ったり哄笑

したりした。

そういう連中も白拍子や遊君や、またこの地の人買いの手から、早速ここへ売り込んでよこした、私娼たちを引きつけて、酒を飲み肴さかなをくらっていた。

と、この時縁を越した、そうして幔幕を張り廻した、そうして篝火かがりびを焚きつらねた、

中庭の明るい光の中へ、老婆と山伏とが現われた。

鬼火の姥うばと篝火はながくとであった。

「や、何んだ!! あの化物は!!」

と、大仏陸奥守おさらぎが素早く目付け、胆をつぶしたようにそう云った。

と、その前に膝行しつこうして、お杯さかずきを頂戴さかいたしていた、六波羅探題より附けられて来た、

軍監の大野信濃守が、

「北殿（六波羅北の探題）にも南殿（同じく南の探題）にも、ごひいき鼻肩ひいきにいたしております、鬼火の姥と申すところの、験のある巫女みこにござります。山伏は金地院範覚と申して、姥の片腕にござります。……陣中お見舞いといたしまして、参りましたものと存ぜられま
する」

と、とりなし顔に言上した。

「鬼火の姥の噂なりや、北殿南殿より承わり、この入道もつとに承知じや。……ほほうあれが鬼火の姥か、凄しみい形相をしておるのう」

と、大仏陸奥守は眉をひそめて云ったが、

「陣中見舞いに参つたとあつては、うっちゃって置くのも気の毒じや、呼んで杯をとらせよう。……金地院とやらも呼ぶがよい」

鬼火の姥と範覚との、物の怪じみた異様な姿は、間もなく大仏陸奥守のきらびやかな、ご前へ連れ出された。

「姥」

と陸奥守は声をかけた。

「北殿南殿に頼まれて、調伏やら細作かんじややらに、よう武家方に尽くしてくれたそうじやな。今後も尽くせよ、わしからも頼む」

大杯を突き出した。

その杯を両手で受けながら、関東北条家の歴々と、京都一流の白拍子遊君が、紅紫こうしりよう繚乱らんとして入り乱れている、晴れがましいこの場のありさまにも、ちつとも心を驚かさず、範覚が日頃の舌じょうぜつを封じて、オドオドキョトキョトしている様子を、笑止らしく横眼で睨みながら、

「これはこれは勿体もったいないお言葉、お杯もろともに有難く、頂戴つかまつ仕るでござりましょう」と、そう云つて姥は杯を干した。

「今日は陣中見舞いに来たか」

「はい、まずさようでござりまするが、実は飛天夜叉ひてんやしやの桂子かつらこめが……」

「何？」

と陸奥守は眼を見張った。

「飛天夜叉の桂子が何とかしたか？」

「この陣中に変装しまして、紛れ入りおる由承よしわり、見あらわして捕えようと……」

「ほんとか？」

と陸奥守はギョツとしたように、

「飛天夜叉めがまぎれ入っておるとな？」

「入道様には飛天夜叉めを、ご存知あそばしておられますので？」

「そち鬼火の姥ぐらいには、飛天夜叉の噂も聞いておる。……若くて美しいということじやの」

好色の大仏陸奥守なので、もうそっちへ持つて行くのであった。

「その法力と通力も、そちに劣らず見事とのこと。……が、残念にも宮方だそうじやの」

「宮方にござりまする」

「その飛天夜叉が何用あつて、この陣中へなど紛れ入ったのじや？」

「宮方の女にござりますれば、関東方の名ある武将の、御首級みしるし掻こうと変装して……」

「ヒヤツ」

と陸奥守は異様な声で叫び、自分の頸根くびねツ子を掌てのひらで抑えた。

「コ、こいつを掻こうというのか！」

「であろうかと存ぜられまする」

「こいつはたまらぬ、首搔かれてなろうか！」

これ以前から穢きたならしくて異様な、姥と範覚との出現によって、興を褪さましていた座の者は、この時ヒソヒソと囁ささやき出した。

「飛天夜叉が忍び入っているよ」

「われらの首を搔こうとよ」

「身を変じているそうじゃ」

「白拍子にか遊君にか？」

「あの女ではあるまいかな？」

飛天夜叉桂子の凄い噂を、聞き知っている彼らだったので気味悪く思われてならないのであった。

姥も座中の女たちを、鋭い眼で一人一人検査したが、

「飛天夜叉めとこの姥とは、相識の仲にござります。いずれに変身しておりましたも、余人は知らず姥の眼だけは、眩ませることなど、どうしてどうして！ ……が、変じゃ、見あたらぬ！」

座中の女たちは姥に見られ、身の縮む思いするらしく、首をちぢめたり肩をすぼめたり、

顔をそむけたり、俯向うつむいたりした。

そうして自分たちの間でも、あの人がそうではあるまいか？ この人が飛天夜叉ではあるまいかと、疑うたがいがい惑まどい怪あやしみ合あっていた。

一道の鬼気が白々と、冷たく座を貫いたのである。

と、この時中庭の奥、張つた幔幕の背後うしろから、云い争まじうような声が聞こえて来た。

「ともかくもお知らせ致さねば……」

「興をさまそう、後刻に後刻に」

「いやともかくもお耳へだけは……」

幔幕をかかげて一人の武士が、おそるおそる中庭へ入つて来た。

そうして縁へ両手をつくつと、端近はしぢかにいた高坂出羽ごんのかみ権守の耳へ、何やらヒソヒソ囁

いた。

平素ふだんはそのような細々こまごましいことには、決して留意れいぎしない陸奥守ではあつたが、恐怖こふらしいものに捉とらえられている今は、そんなことにさえ心が引かれ、

「権守権守」

と声をかけた。

「何事じゃな、何か起こったかな？」

「怪しい男女を捕えましたそうぞうで」

と権守は物々しく云った。

「怪しい男女？ ほほうどこでな？」

「拙者の陣前を忍びやかに、赤坂城の方へ歩みおりましたそうぞうで」

「なるほどそれは怪しいの」

「斬りすてましようや、捕え置きましょうやと、意見を訊ねに参りましたような次第で」

「さような者は斬りすてた方がよかろう」

「美しい若い男女の由で」

「ほほう」

と、陸奥守は微笑した。

「男などはどうでもよいが、女が美しいとは聞きずてにならぬの」

「しかし」

と、傍そばにいた三河入道が、

「飛天夜叉などであろうものなら……」

「なんの飛天夜叉が男などを連れて、陣前などを通るものか」

「いえいえ」

と、その時まで座中を眺めながら、話を聞いていた鬼火の姥が、

「飛天夜叉めは手下の一人、風見かざみの袈裟けさたろう太郎と申す者をつれて、忍び込んだと申しますこととで」

「フーン」

と陸奥守は鼻を鳴らした。

「男と一緒に忍び込んだのか。……ではその男女もちと怪しいな」

「庭へ引き出し吟味したらどうじやな」

と、三河入道が口を出した。

「さようさ、それも面白かろう。……権守、そやつらを引き出すようなされ」

間もなく叱咤しつたする声などが、幔幕うしろの背後から聞こえて来、やがて篝火かがりびで昼のように明るい、中庭へ四五人の武士に囲まれ、二人の男女が入って来た。

土岐小次郎とぎと浮藻うきもであった。

座中にわかに動揺した。

「なるほどこれは美しい」

「やつれてはおるが素晴らしい美女じゃ」

「売女ちがと異つて素人女は、まことに清らかでよいものじゃ」

女たちは女たちで囁ささやき合つた。

「よい殿ごぶり」

「光源氏じゃ」

鬼火の姥と範覚とは、小次郎と浮藻とを眼に入れるや、いかにも仰天したように、顔を見合わせ囁き合つた。

そうだろう。姥は小次郎の美貌に、修験の道心を失つて、叡山裏山の洞窟内での、調伏を仕損じたほどであり、範覚に至つては浮藻のために、氣絶して仆たおれたほどのだから、

「範覚よ、ありやア小次郎じゃ」

「姥よ、浮藻じゃ、ありやア浮藻じゃ！」

この時、陸奥守は座を立って、ツカツカと縁まで歩いて行つた。

「これ」

と、男女ふたりへ声をかけた。

「何者じや、身分を宣れ！」

「云わぬよ」

と、小次郎は平然として云った。

叡山の裏山でのあの事件後、浮藻を助け出して事情を聞くと、飛天夜叉の桂子が、自分を恋し愛するあまりに、浮藻を迫害したという。

(このまま帰ったら桂子様が、何を浮藻に仕掛けるかもしれない。旅へ出てしばらく鋭鋒を避けよう)

で、小次郎は浮藻をつれて、あてのない旅へ出たのであった。

あしかけ三月の日が経った。

日数はわずかではあったけれど、浮世の相は、いちじるしく変わった。

宮方と武家方との確執が、合戦という形をとって、露骨に表面へあらわれて、世が殺伐となつたのである。

こうなつてみると小次郎も浮藻も、安閑と旅などにいられなくなった。

それに、おそらく桂子たちは、宮方に従ついていずれ様々、画策していることであろう。心もとなく気にかかる。

で、二人は京都へ帰り、桂子の館へ行つてみた。

赤坂の方へ行つたという。

そこで二人は赤坂をさして、こうして旅をして来たのであった。

「宣らぬというか、不敵な奴め！」

陸奥守は憎々しく云つたが、

「おのれ汝らどこへ行こうとしたぞ？ 赤坂であろう、赤坂の城へ！」

「知らぬ」

と、小次郎は平然として云つた。

「どこへ行つてよいか知らぬのじゃ」

「たわけもの痴者め！」

と、陸奥守は笑い、

「汝の行き場所、汝知らぬのか？」

「姉を尋ねて行くのであるが、どこにおわすか知らぬのよ」

「汝ら何んだ？」

「われらは兄妹じゃよ」

「黙れ！」

と陸奥守は嘲笑あざわらった。

「似ても似つかぬ顔を持った、そのような兄妹がどこにあるのか」

「兄妹じゃ、義兄妹じゃ」

「アツハツハツ、そうだろうと思つた。今でこそ義兄妹、アツハツハツ」

「さよう、姉上さえお許しならば、われら夫婦になろうもしれぬ」

「また姉上か、そやつ何者じゃ！」

「云わぬよ」

と小次郎は素ツ気なく云つた。

ここが関東軍の本營であり、そこへ捕えられた自分達であり、自分達の訪ねて行く姉と
いうのは、宮方に味方する桂子なので、それを明かしたなら自分達の身は、安穩ではある
まいと思われたので、知らぬよと素ツ気なく云つたのであつた。

それに桂子に養われていたため、小次郎の心は宮方であつた。自然武家方のこの連中
は、強い反感を持つていた。で、事ごとに素ツ気ない。ぶつきらぼうの返辞をするのであ
つた。

(どうせ敵方に捕えられたわれらだ。殺すものなら殺すであろうし、生かすものなら生かすであろう、追従も軽薄も云う必要はない)

この心持ちが彼をして、素ツ気なくぶつきらぼうにするのであった。

陸奥守は舌うちしながら、元の座へもどつて来たが、

「敵方の細作かんじやであろうもしれぬ、しばらく監禁いたして置け」

と云つた。

小次郎と浮藻とが武士たちに連れられ、立ち去つての後、また座敷は、好色陣と一変した。

厩舎うまやの横に納屋なやがあつて、その方へ忍んで行く女があつた。

酒席にいた娼婦の一人であつた。

館の中での乱痴気さわぎも、ここらあたりへまでは聞こえて来ず、厩舎で馬が地を蹴る音や、非常を警める巡視みまわりの卒の、撃柝げきたくの音ばかりが聞こえて来た。

娼婦は納屋の戸の前に立ち、あたりを見廻してから幽かすかに叩き、

「小次郎様、小次郎様」

と呼んだ。

浮藻と引き放されたただ一人で、納屋にこめられていた小次郎は、闇の中に坐つて冥想していたが、

「どなたでござるな？」

とそつと訊いた。

「妾でござります。幽霊女で。……小次郎様ご心配なされますな、桂子様におかれまして、変装なされてこの館の中に、おいであそばすのでございますから。……すぐにお助けいたしましょう。人が来たようです、ご免なさりませ」

娼婦に化けて入り込んでいた、幽霊女は立ち去つた。

一人の侍女が寄つて来て、

「お仕度出来ましてござります」

と、こう陸奥守へ囁いたのは、館の中の好色陣が、いよいよ本領を發揮して、武將が武將の体面を忘れ、白拍子や遊君と各自の部屋へ、こつそり隠れる頃であつた。

「ウフ、さようか。……では馳走に」

又ツと陸奥守は立ち上がった。

「どこへじゃ？」

と、三河入道が訊いた。

「よい所へじゃ。……いい所へ」

云いすてて陸奥守は躡まんさん躑と、この座敷から出て行った。

この姿を見送っていたのは、まだこの席にいた鬼火の姥であったが、

「範覚よ、どうする気じゃ？」

とそそのかすように囁いた。

範覚はさもさもうらめしそうに、陸奥守の行った方角を、白い眼をして睨んだが、

「入道殿は殺生じゃ」

「では何んとかせすばなるまい」

「姥、どうしたらよかろうのう？」

「横どりされようとしているのじゃ。だからまたそれを横どるがいい」

「どうしたら取れる？ え、姥よ？」

「智恵で取りな、智恵を働かせて」

「……………」

範覚一生懸命考え込んだが、

「やろう！ 智恵で、やってみよう。……ところで姥、お前は どうする？」

「わしが何をよ？ 何をするのじゃ？」

「小次郎をすてては置かれまい」

「……………」

「すてて置けば殺されよう」

「……………」

「助けずばなるまい。是が非であろうと」

「……………」

「姥の力でやるひになれば、助けることなど訳ない筈じゃ」

「わけないとも」

と、姥は云った。

「法力でやれば訳はないよ。……が助けてやった後で……」

鬼火の姥は好色残忍の、すさま凄じい光を眼に漂わせた。

間もなく巫女みこと山伏とが、乱痴気さわぎから姿を消した。

でもしばらく経った時、厩舎うまやの横の納屋の前に、鬼火の姥おばの御幣ごへいそっくりの、白い姿の立ったのが見えた。

両手が額に合掌されていた。

眼が納屋の戸を睨にらんでいた。

と、ひとりでじょうに錠じょうの外れる、ピーンと云う音が聞こえて来た。

小次郎が冥想からさめたのは、この錠の外れた音からであった。

小次郎はにわかには恍惚となり、心も体も自分の所有ものでなく、他人によって勝手自由に、使われているように思われて来た。

と、いつか小次郎は、暗い寒い納屋から出て、どこかへ連れて行かれるような、そんな気持ちにとらえられて来た。

ボツと薄青い光の中に、いつか小次郎は坐っていた。

側そばに一人女ひとめがいた。

「浮藻？」

そう浮藻であった。

浮藻は小次郎へ継りついた。

「小次郎様！　どんなにわたしは！」

もう後には言葉はなかった。

連続した叡山の裏山の危難、やっと遁がれて旅へは出たが、その旅も決して幸福ではなかった。そうして今は敵ともいふべき、関東軍に捕えられ、生死のほどもおぼつかない。

……それらの艱難の重なりからでもあろう、浮藻は痩せて衰えていた。

ふくよかだった頬はこけ、眼の周囲には隈さえ出来ている。

「浮藻殿！」

と小次郎は云い、その可憐しい肩を抱いた。

旅へ出て以来小次郎は、むしろ厳格に過ぎるほどに、浮藻に対して振る舞った。

それは自分をこのような男に、育て上げてくれた桂子に対する、恩と義理とのためであった。

桂子その人に捧げている、小次郎の心持ちというものは、あの泰西の騎士なる者が、自分を庇護してくれる貴婦人に向かつて、捧げているところの心持ちと、ほとんど変わらないものであった。

忠誠と犠牲と奉仕とであった。で、どのように浮藻に対し、愛を感じ恋を感じても、桂子より許しのない限り、とげようなどとは思わなかった。

で、旅へ出てからも、一緒にいるというばかりで、指一本触れ合おうとはしなかった。が、今はそうでなかった。

三月に渡つてもかくも、一刻として離れたことがなかった、それが敵陣に捕えられ、離れ離れに監禁された、どうしているか？　どうかされはしなかったか？　不安と危惧とで一杯であった。その浮藻と逢つたのである。

その浮藻といえは面影やつれ、目には涙、唇には戦慄ふるえ、小鳥のようにおどおどしている。「可憐いじらしや！　浮藻殿オーツ」

引き寄せ抱き締め頬に頬をつけた。

かつてない烈しい愛情が、小次郎の胸へ湧いたからである。

館の廻廊を別殿べつどのの方へ、大仏陸奥守は歩いていた。

寝衣ねまきに着代えた入道の姿は、墓ひきがえるが人間の形をして、歩いているとしか思われなかった。

手燭を持って先に立って、案内をして行く侍女の後から、酒と慾望とで身も心も、燃え

るがようにほてらせて、その入道は行くのであった。

(怒る、罵る、泣く、拝む！……が、俺は承知しない。……)

広大な庭のあちこちに、かがりび篝火が、くさびがた楔形に焚かれている、かつちゆう甲冑姿の軍卒が、槍や長柄を輝かせながら、警護している姿が見えた。

(戦陣にての楽しみといえば一に高名、二に掠奪りやくだつ、三に敵方の女を捕えることさ)

別殿の建物が廻廊の外れに、植え込みにかこまれて見えて来た。

あるかなしかにもされた灯で、別殿の奥の寢室は、淡い桃色にほのめいてい、引き廻されている銀屏風や、その中に豊かに華美なまめに艶かしく、敷き設けてある夜の衾ふすまや、脇床に焚きすてて置いてある、香炉などを臙ろおぼに見せていた。

恐怖と疲労からとであろう、浮藻は衾を引きかずき、髪ひとつまの一摘みを見せたばかりで、屏風の中に打ち伏していた。

不安におののいているからであろう、衾に荒い呼吸いきづかいが、動きとなって現われている。

と、隣室に人氣がし、

「お奥に……」

と女の声がした。

「よし」

という男の声が応じ、つづいて静かに立ち去って行く、女の衣摺きぬずれの音がした。

衾ふとんが恐怖で烈しく顫ふるえた。

香の煙りが流れて来て、屏風を越した衾の上で、淡くウネウネと蛭うねつて見せたが、はないものの例たとえかのように、次第に薄れて消えてしまった。

と、襖ふすまがあげられて、大仏陸奥守が現われた。

屏風の上から覗くように、中の様子をうかがったが、満足らしく微笑した。

やや手荒く屏風をひらき……

「わッ」

と陸奥守はノケゾツた。

衾を踏んで突っ立ったは、金剛杖を握った範覚であった。

「おのれ！ 曲くせもの者オ——ッ」

と陸奥守が、喚こゑきを上げて起き上がり、逃げようとする脾腹ひばらの辺あたりを、金剛杖の二度目の突つきが突いた。

ノビて、気絶して、巨大な入道は、そのまま動かなくなってしまうた。
 範覚はヒヨイとうすら笑った。

(もろいなア)

とでも云ったようである。

それから範覚は屏風から出て、地袋じぶくろの戸を引きあけた。

範覚のやった所業しわざなのであろう、両手両膝をしばられて、猿轡さるぐつわまでかまされた浮藻

の姿が、痛々しくその奥に横よこ仆たわっていた。

そういう浮藻を小脇に抱えた、範覚の姿が風のような早さで、別殿から庭へ躍り出したのは、それから間もなくのことであつた。

「曲者オ——ッ」

警護の軍卒が二人、素早く目付けて遮さへぎった。

「わッ」

「キャッ」

金剛杖の二雑なぎ!

風のような早さで走って行く!

が、警護の武士たちは、至るところの庭にいた。

「曲者オ——ッ」

「ソレ捕えろ！」

別殿が怪しいと思ったのであろう、数人がそれへ馳け込んだ。

「一大事、御大将が！」

「陸奥守様が！ 陸奥守様が！」

柝たたくが烈しく打ち鳴らされ、松明たいまつが八方へ飛び廻り、注進が四方へ伝えられた。

「夜討ちだ！」

「寝首掻きだ！」

「飛天夜叉かもしれぬぞ！」

館は混乱にわの場となり、歓楽の陣営が修羅の場と化してしまった。

この時、庭の小暗い所で、娼婦に姿をやつしていた、幽霊女と鶏とりむすめ娘とが、ひそひそ

話を交わっていた。

「面白いからやつつけようよ」

「鬨ときをつくつてやろう。夜明けの鬨を」

でも仄ほのかに薄青く、他界的幽暗な光の輪に、身のまわりを囲まれながら、小次郎と浮藻との烈しい恋は、なおこの時も続いていた。

烈しい、濃こまやかな、むさぼるような、二人のくちづけは長くつづいた。

しかしこの時清朗とした、朝の鶏とりの啼き声が響き、それに誘われたか諸方から、関をつくる鶏の声が聞こえた。

ハツと小次郎は正気に返った。見れば幽暗として薄青い光も、二人の周囲から消えてなくなり、暗い寒い納屋の中に、今は素早く突っ立ち上がった、鬼火の姥ごへいの御幣ごへいのような姿が、細く高く立っていた。

「おのれ——ッ」

と怒った小次郎は、猛然として飛び上がった。

「穢けがらわしや汝姥おのねば！ ……たばかられたか残念至極！ ……死におろ——ッ」

と、躍りかかった。

が、いまだに姥の力が、彼に影響しているものと見え、足にも腕にも力がなく、後方しりえへドツと仆れてしまった。

と、その時戸が開いて、出て行く姥の姿が見えた。

「遁がしてなろうか、おのれ待て姥！ この恥辱晴らさで置こうか！」

小次郎は追つて出た。

館も庭も混乱していた。

一所では篝火の火が、亭ちんに燃えついて火事を出して、一所では軍兵同志が、夜討ちと誤信し、疑がい合い、同志討ちをして斬り合っていた。

白拍手や遊君は泣きわめきながら、部屋や廻廊を走り廻っていた。

その数人が恐怖のままに、部屋から部屋、廊から廊と、奥へ奥へと逃げて行った。

「ヒーツ」

と、一人が悲鳴をあげ、のけざまに倒れて気絶した。

二人の遊君は抱き合つたまま、足をすくませて動かなくなった。

遙かの奥に御簾みすがかかつてい、そこへ陰火が燃え上がり、髪ふり乱し血を流した、女の幽霊があらわれたからである。

鬼火の姥は混乱の場にわを、右に縫い左に縫いして走って行った。

小次郎はそれを追っかけて行ったが、それは自分から追っかけるといふより、姥の力が

小次郎に働き、誘^{いざ}なつて行くといった方が、あたつてゐるように思われた。

館の庭から遁^{にげ}がれ出た時、

「姥！」

と、呼びかける声があった。

浮藻を抱いた範覚であつた。

「おお範覚か、首尾は首尾は？」

「ごらんの通りだ——ツ……小次郎は？」

「従^ついて来るぞよ、あの通りだ——ツ」

「これからどうする？」

「静かな所へ！」

「それじゃア、林へ！」

「うむ、行け行け！」

樺^{びな}や羅漢^{あすひかし}、柏^{からまつ}や落葉松などで、出来あがつている林があつて、十七日の冴えた月光に、

紗のように捲かれて静もつていたが、その中へ一同が駆け込んだ。

この頃金剛山の方角から、数十人の人影が、この林つづきをこの方角へ、さんざめきな
がら歩いて来た。

私娼、傀儡師くぐつし、金剛砂売り、ふたなり、侏儒こびと、吐蕃人とばんじん、——そういう人々の群れであ
つて、先頭に立つて歩いているのは、鬼火の姥と範覚とであつた。

「ちと陣中見舞いとしては、遅くなつたので気がかりじゃよ」

巨大な御幣ごへいを腰に差し、自分も御幣さながらの躰を、夜風に、ビラビラひるがえ翻しながら、そ
う姥は心配そうに云つた。

「総大将の大仏陸奥守様は、短気なお方だというからのう」

「ナーニ」と、範覚は一向暢気のんきに、「これだけのお伽衆とぎしゆうを連れて行くのじゃ、姥も我
が身も優待されるのであろうよ」

云い云い、金剛杖を振り廻し、行く手の露草を払つたりした。

「それはわしはな、関東の人たちに、面目ないことをしているのだよ」
と、鬼火の姥は心外そうに云つた。

「まだ例の連判状を、手に入れることが出来ないのだからのう」

「猩々しやうじやうにさらわれた連判状か？」

「そうだよ、司馬の大藪地でのう」

「あんな連判状が今になっても、そんなに姥には大切なのかな」

「わしにとつて何んの大切なものか、北条様や武家方にとつて、大変もない大切な品なさ。……楠木多門兵衛正成くすのきたもんひょうまさしげという男が、突然宮方加担の兵を、こんな所へ挙げてしま

った。噂によると日野資朝卿すけともきょうと、とうに約束が出来ていて、連判状にも名を記してい

たとよ。……備後びんごでは桜山四郎入道がこれも北条家討伐の、宮方の兵を挙げたそうじゃ。

……ひよつとかするとこの入道なども、連判状へ記名している。その一人かも知れぬではないか」

「そうさな、そうかもしれぬのう」

「日野資朝卿は佐渡の地で、俊基卿としもとは鎌倉の地で、つい最近首を斬られてしまった。……

……大塔宮様だいとうのみやさまは赤坂の城へ、ご入城遊ばしてお遁がれじゃ。……この方々を糾問して、

宮方加担の人々の名を、きき出すことは出来なくなった。……で、どうでも、連判状を手

に入れ、それを知るより法はないのじゃ。……楠木正成、桜山入道、これくらいならまだ

よいが、その他に続々と旗上げされたら、いかな関東の力でも、抑えることは出来ないか

らのう」

「旗あげするものそうあろうかの？」

「こんな形勢になつてくると、どこからどんなものが飛び出して来るか、とんと見当がつかぬものさ。……四国、中国、九州あたりには、氣心の知れない大小名どもが、様子がかがっているからのう。……それにお味方の連中にしてからが、味方頽勢たいせいと目星をつけると、平気で宮方に款かんを通ずるいうことになつてなるからのう」

「そんな裏切りの心の持ち主、お味方にもあるだらうか？」

「あしかがどの足利殿などあぶないそうじや」

「足利殿？　高氏殿？」

「そうよ。足利高氏殿よ」

「でも、あのお方は笠置攻めから、この赤坂の城攻めまで、神妙にご従軍されたがな」

「不承不承にご従軍なされたのじやそうな」

この時、姥たちの後について、さんざめきながら歩いて来た。娼婦だの金剛砂売りだのが、声を合わせて歌い出した。

天王寺の妖霊星

見ばや見ばや妖霊星

歌につれて踊り出したのは、三尺足らずの侏儒で、頭ばかりが人並よりも大きく、手足が子供さながらの体を、独楽のように廻したり、凧のように泳がせたりした。

それに続いて踊り出したのは、韃鞮服を着た吐蕃人で、わからない西域の蛮音で、吐蕃歌をうたつて踊り出した。

みんなドツと声を揃えて笑った。

秋深い十月で、落葉樹はおおよそ葉を落とし、林はカラツと隙けていた。その隙間からは月光が洪水のように流れ込んでいた。

その月光に濡れながら、妖怪じみた一団は、踊りはやして行くのであった。

が、そういう一団を、遠景のように向こうに眺めて、こんな林には珍らしい、大銀杏の木の根もとの辺りに、小次郎と浮藻とを前に据え、鬼火の姥と範覚とが、黙然として立っていた。

と、

「小次郎や」

と、姥が云った。

「わたしが誰だかお解りかえ？」

それは桂子の声であった。

「小次郎様、浮藻様」

と、金地院範覚がつづいて云った。

「わたくしがおわかりでござりまするかな？」

風見の袈裟太郎の声であった。

「小次郎とも浮藻とも、別れなければならぬ時節が来たよ」

桂子の声は咽むせぶようであった。

谷間の人々

三人の男が手をつないで、その周囲を廻つても、まだ余りはしないだろうかと、そんなにも太い銀杏の幹で、月光は完全に遮さへぎられ、闇のようになっていたその中に、顔を見られるのを恥じながら、でも自分では相手の顔を、これが見納めといったように、食い入るように見詰めながら、桂子は云いつづけた。

「どうしているかと案じていたに、でもよく無事に帰って来たねえ。……いろいろ苦勞を

したことと思うよ。……せつかく帰って来たお前たちなのだから、本来なればわたしとしては、早速館へつれ帰り、これまでどおり一緒に住みたいのだが、でももうそれは出来なくなつたよ。……小次郎にはそれがわかりだろうねえ。……三人一緒に住もうものなら、小次郎も浮藻もわたしまでも、苦しまなければならぬのだよ。……ねえ小次郎やそうではないか」

桂子の声はしばらく途絶えた。

鬼火の姥たちの一団は、もう向こうへ行き過ぎたと見えて、歌う声もはやす声も聞こえなくなつた。

小次郎は大銀杏の影から外れた、月光の中に浸^{ひた}りながら、浮藻を横にして坐っていたが、心はいまだに夢のようであつた。

(浮藻だと思つてくちづけしたら、それが鬼火の姥であり、鬼火の姥だと思つた人が、桂子さまであろうとは!!)

肉親相愛に似た感情が、今彼の心を苦しめていた。

(桂子様は恋人ではない。お母様だ、お姉様だ、お師匠様だ、恋人ではない! ……そのお方と愛し合つたとは!)

顔を上げることさえ出来なかつた。

「小次郎や」

と桂子は云つた。

「わたしは自分を信じ過ぎていたよ。……わたしの心は昔に返つた、今度小次郎に逢おうとも、邪よこしまの心など起こしはしまいと！ ……でもそれは駄目だったよ。……お前が美し過ぎるからだよ。……浮藻や」

と桂子はいたわるように云つた。

「この姉が許すによつて、小次郎と夫婦いっしょになるがよいよ。……愛し合つて末永くお添い！」

「お姉様！」

と浮藻は咽んだ。

今も彼女は夢を見ているような、そんな気持ちでいるのであつた。

小次郎と引き放されて館へ入れられ、綺麗きれいな部屋ふすまの衾ふすまの中へ入れられ、

「陸奥守様のお伽とぎをするのじや」

と、そう侍女に云いきかされた。

(もしそんなことにならうものなら、舌かみ切つて死んでやろう)と、心ひそかに覚悟し

ていた。

と、そこへ意外にも、金地院範覚が現われて、自分をいましめ猿轡さるぐつわをかき、地袋じぶくろの中へ入れた。

それから連れ出されてここへ来た。

その範覚は袈裟太郎だという。

夢を見ているような気持ちであった。

「可哀そうだが旅へおいで」

桂子は二人へ訓さとすように云った。

「世の荒波に揉まれ揉まれて、立派な人間になっておくれ。……わたしも、わたしも、一人で寂しく、でも清浄潔けっさい齋さいして、やはりお前たちに負けないような、立派な人間になるからねえ」

「お姉様！」

と浮藻は叫んだ。

「旅へなど！ ……何んで！ ……お姉様と別れて！ ……いえいえ妾は！ ……何んで旅へなど！」

姉に許されて恋しい小次郎と、夫婦になるということは、浮藻にとつて、例えようもない、嬉しいことには相違なかつたが、この乱れた世に二人ばかりで、当てのない旅へ出るということとは、辛い悲しいことであつた。

「浮藻、小次郎や、お別れだよ」

桂子の声は情愛深い中に、苦痛と威厳とを持つていた。

「このち将来逢えるか、生涯逢えぬか、それは神様のおぼしめし次第。……おお、でも、妾としては、逢いとうない！ ……夫婦となつたお前達には！」

桂子は歩き出した。

「お姉様！」

と追ひすが縋つて、浮藻はその腕へ縋ろうとした。

それを小次郎はしずかに止めて、

「お別れいたすでござりましょう」

と云つた。

彼も桂子と住むことは、その心が許さなかつた。

恐ろしい悲劇と不倫とが、一家の中に起こるだろう！ そういう不安があつたからであ

る。

地に伏し仆れて咽び泣いている浮藻と、地につつましく両手ついて、顔も上げずに坐っている小次郎、この二人を後に見すてて、袈裟太郎を連れて桂子は、足早に林を出て行った。

林の中が静まったので、子を育ててでもいるらしい、母鳥の優しく啼く声が、小高い梢こずえの隙ねぐらの中から、歌うように聞こえて来た。

小次郎は立ち上がった。

「浮藻殿、参りましょう」

「……………」

嗚咽おえつの声を立てながら、浮藻は弱々しく立ち上がった。

黙って二人は歩き出した。

晴れて夫婦になれるという、その喜びはあったけれど、桂子に永久見すてられたという、その悲しみが二人を押し、かてて前途に光明のない、放浪の旅へ出たという、この不安が二人の心を、重く苦しく憂鬱にしていた。

(これからどうなることだろう?)

(これからどうしたらよいだろう?)

黙々として二人は歩いて行く。

と、不意に二人の行く手の、煙りでもこめていられるかのように、蒼白く見えている月光の中へ、梢から舞い落ちた白い物があつた。

それは巨大な猩々であつた。

浮藻は思わず小次郎へ縋り、小次郎は足を止めた。

と、にわかに浮藻は喜びの声を、なつかしさをこめて響かせた。

「卯ノ丸だわ！ 卯ノ丸だわ！」

そうしてそつちへ走つて行つた。

小次郎も後を追つた。

赤坂城攻撃のはじまつたのは、その翌日のことであつた。

馬鹿にしきつた寄せ手の勢は、馬乗り放し乗り放し、われ先にと堀へ飛び込み、櫓の下へ立ち並びこみ入ろうとひしめいた。

と、櫓の狭間から、二百人あまりの射手の射る矢が、拳下がりの狙いうちに、篠のよう

に射出いだされた。

密集した勢への狙いうちであつた。ほとんど一筋の空矢からやもなく、わずかの間に千人あまり、寄せ手は死人と負傷者ておいとを出した。

寄せ手は案に相違して、

「この城意外に手強いぞ、一旦しりぞき陣を立て直せ」

と、狼狽いしい退いた。

と、左右の小山の蔭から、菊水の旗二流れあらわれ、三百余騎が殺到して来た。

正成まさしげの舍弟正季まさすえと、一族の和田正遠まさととが、隠し伏せて置いた勢であつた。

二手は左右から寄せ手の勢の中へ、鶴翼かくよくをなして駆け入つて、忽ち魚鱗に一変し、ふたたび鶴翼に散開し、さらに魚鱗に備えを変え、さながら一心同体かのように、開いては閉じ閉じては開き、眼にあまる寄せ手の大軍を、縦横無尽に駆け散らした。

と、城の三の木戸が開いて、二百人の射手が走り出して来、右往左往している寄せ手を目かけ、差しつめ引きつめさんざんに射た。

こうして寄せ手は全く敗れ、前の陣から後の陣と、次第次第と崩れ立ち、五十町あまりも退いて、ようやくそこへ止どまることが出来た。

で、その間の地上には、死骸や武器や旗さし物やが、狼藉ろうぜきとして捨てられてあり、夜になつた時、野武士の群れが、死骸の肌つき金を奪うために、また甲冑かっちゆうを剥ぐはために、どこからともなくあらわれて来た。

そういう夜の宵よいづき月に照らされ、城門のような岩壁の前に、桂子が立っていた。

側そばには右衛門と袈裟太郎とがいた。

桂子は可愛らしい百姓娘、右衛門はその父親、袈裟太郎はその使僕しもべ——そんな風に身をやつしていた。

山へ枯れ木や枯れ草とりに行き、道に迷つたという風であつた。

三人の前に聳そびえているものは、数日前に右衛門と一緒に、狸々卯ノ丸の後を追つて来て、はからずもぶつかった城門のような、厳いめしい姿の岩壁であつた。

(何がなしに気にかかる)

で桂子は岩壁の奥を、こつそり探つてみようと思つて、二人を供につれて来たのであつた。

三人は木蔭に身をかくして、驚くべき光景を見ているのであつた。

というのは岩壁の左側から、甲冑をつけた野武士らしい男が、五人十人あるいは二十人と、たいまつ松明を振って現われ出で、罵ったり笑ったり歌ったりしながら、谷間の道を赤坂の方へ、さも元氣よく行くかと思うと、そつちの方からは同じような野武士が、今日の戦場から剥いで来たらしい、よろいかぶと鎧や冑や太刀や長柄や、旗さし物などを携たずさえて、これも元氣よく帰って来て、岩壁の右側からはいつて行き、出る者と入る者とが顔を合せると、

「仕事はどうだった？」

「まず上首尾」

「まだ獲物はあるだろうか？」

「うむ、まだまだ獲物はあるが、とうじょう東城の氣の強い百姓どもが、本職の俺たちの真似まねをして、戦場あらしをやっているから、早く行かないとなくなってしまうぞ」

と、こんなことを云い合っているからであった。

「右衛門や」

と桂子は云った。

「岩壁の背後に何があるか、やつとわたしには見当がついたよ」

「何があるのでござりませうかな？」

「野武士たちの巢窟そうくつがあるのだよ」

「それに相違ごいません」

と、風見の袈裟太郎が合槌を打った。

「それも大掛かりの巢窟が」

「面白い出来事にぶつかりそうだよ、さあ中へは行ってみよう」

そこで三人は岩壁に添って、左側の方へ行ってみた。

岩壁につづいて平行している、山の斜面から灌木の枝葉が、こんもり外側へはみ出しているの、正面から見るとそんな所に、道などありそうにも思われなかったが、行ってみると細い道があった。

その道を通って進んで行つた。

すぐに岩壁の内側へ出た。

と、そこに番小屋があつて、得物をたずさえた武士が数人、守衛のように立っていた。

「これお前たちは何者だ？」

と、その中の一人が声をかけた。

三人は意外な嚴重さに、ヒヤリと心を冷たくしたが、氣転の利く袈裟太郎が進み出て、

「わたくしどもは東城の百姓、山へ枯れ木とりに参りましたところ、いつか道に迷いました……」

「なるほど」

と武士は領うなずいたが、

「それで鉞まさかりなど持っているのか」

と、右衛門が持つている自慢の品へ、苦笑しながら指さした。

「へい、さようでございます。枯れた大木などあの鉞で、切り倒すのでございます」

「ここがどこだか知っているか？」

「存じませんでございます」

「はいつたが最後出られない処ところだ」

「……………」

「漢あやごんのかみさま権守様のご領地じや」

(まあ)

と桂子はそれを聞くと、心の中でそう思った。

(有名な漢権守の領地なのか。……恐ろしい処へ来てしまった)

漢権守はこの時代における——いやずつと上代から、そうしてずつと後世にまでも、謎の人物として恐れられ、また憎まれていた怪物であった。

漢あやという姓が示しているとおり、これの祖先は漢土の帰化人で、その主長の一人には、飛鳥朝の大立て者、蘇我そがの入鹿と結託し、わが国の朝野に大勢力を揮ふるった、有名な漢直あやあたがある。

が、大化の新政が成つて、蘇我氏一族が滅ぼされるや、漢氏もことごとく勢を失い、一族四方へ流遇し、その一派は武蔵へ流れ、これは高麗こまの帰化人であるところの、背奈氏せなしと合してその土地に住み、他の一派は京都洛外の、太秦うずまさ辺に住居して秦氏はたしの一族と合体したりしたが、宗家は代々摂津せつつ、和泉いずみ、河内かわち、この三国に潜在して、勢力を揮ふるったということである。

その職業とするところは、野武士や賤民かしろの頭として、それを部下とし養つて、合戦ありと聞き知るや、勝ちそうな大将の陣へ行つて、我らお味方いたすによつて、これこれのご褒美ほうびいただきたいと云い入れ、一隊を率いて戦場へ出、先陣をかけた横槍を入れて、戦いを勝利に導くのが一つ、合戦の終えた後において、その戦場へ出かけて行き、落ちていたる武器や肌付け金を奪い、または敗れて逃げ行く武士を、途中に襲つて首級を取り、勝つ

た方の陣へ持つて行き、恩賞にあずかったということである。

そうかと思うと美女を養い、娼婦としての訓練をし、諸大名や長者や廓くるわなどへ売り込み、また戦いの陣営などへも送つて、利得あげたということである。

美少年もまた訓練し、売買したということである。

さらに諸国から不具の男女を、部下の手をもつて誘拐して来、それにいろいろの芸を仕込み、一座を組ませて諸方へ送り、興行をさせたということでもある。

港々へ部下をやり、漂流して来た異邦人をさえ、自分の住居すまいへつれて来て、特色にに応じて芸を仕込み、お伽衆として売つたということでもある。

いわば香具師やしの大親方であり、また人買いの大親方でもあり、野武士の大将、娼婦の大主人、盗賊の巨魁きょかいでもあるのであった。

ところでもつとも奇怪なことは、誰一人として漢あやごん権守のかみの、本当の姿を見た者がなく、だから事實は漢権守という、そういう人間は存在していないで、一つの団体の名称に過ぎないと、そう云われていることであつた。

そうかと思うといやそうでない、漢権守は実は女で、それも非常な美人だよと、こんなように云う者があるかと思うと、老人だと主張する者などもあつた。

が、偽いつわりない真相は、やはり漢権守はあるのであるが、眼の所へ二つの穴をあけた、全身を包む黒の被衣かつぎで、その体を蔽うているので、同じ館にいる腹心の部下にも、本当の姿がわかっていない。——ということであるようであつた。

「おいどうしよう?」

と番小屋警備の、守衛の武士が朋輩ほうばいへ云つた。

「こやつら三人どうしたものかな?」

「さようさ」

と朋輩の武士は云つた。

「求めてこつちから連れて来たのではなく、向こうから迷い込んで来たのだから消してしまふのがいいだろう」

消すというのは殺すことらしい。

「が、娘はあのとおり綺麗だ」

「娘だけ送り込むか」

「ともかくも三人送り込んで、係りの者に取捨しゆしやさせたがいい」

と、三人目の武士が云つた。

「では貴公送つて行け」

「よし」

と、その武士は番小屋から出て、桂子たち三人の前へ立った。

「来い、よい所へ案内するから」

生ける白布

三人はその後へついて行つた。

小広い道が出来ていて、その左右は杉並木であり、左側は山の斜面であつたが、右側は丘から丘に通じた、丘陵地帯をなしていた。

並木道には松明たいまつの光が、行つたり来たりして織おりをなしていた。

戦場へ掠奪りやくだつに行く者と、掠奪から帰つて来た者との、振り照らしている松明であつた。

おおよそ一里も歩いた頃に、小山の上に造られてある、城めいた建物を中心に、二百軒あまりの人家が立っている、そういう町のような一ひとところ所へ来た。

ある一軒では武士の群れが、長柄ながえの血のりを拭ったり鎧の千切れをつくろつたり、鏃やじりの錆びを落したりしながら、碗で酒をあおりあおり、今日の赤坂の戦いについて、批評や噂をやっていた。

そうかと思うと一軒の家では、若い美しい女たちが、笛や鼓の稽古をしていた。物売の店があるかと思うと、刀鍛冶の工場などがあつた。

露地や小路では男や女が、何やら話し合つて笑つてい、犬はその間を駈け廻り、馬は、厩舎うまやでまぐさを食い、子供は喧嘩をして泣いていたりしている。

漢あやごん権守のかみの城下であつて、元からの家臣はいうまでもなく、掠奪されて来た女たちや、誘惑されて来た不具かたわもの者なども、この城下に家を構えて住み、各自の生活をいとなみながら、しかも漢権守の監督を受け、めいめいの身に相応した芸や、相応した業を修得し、売られて行く日や派遣される日を覚悟して待っているのであつた。

そういう一画を桂子たちは、案内の武士に導かれながら、お城の方へ歩いて行つた。そういう三人を眺めながら、

「可哀そうにあの三人も、お城でさんざん虐いじめられたあげく、俺たちの仲間へ下がつて来るのだよ」

と、こんなことを云っている老婆もあつた。

やがて小山の麓ふもとへついた。

そこに一つの石の門があつた。

案内の武士が、衛兵らしい武士に、何やら数語かたつたかと思うと、衛兵らしい武士は門をあけた。

で、三人はその門を通り、かなり急の坂を城の方へ登つた。

道の左右は自然石を畳んだ、いかめしい石の垣であつて、道が人間の腸はらわたのように、うねりくねっているのに添い、石垣もうねりくねつていた。

ところどころに門があり、門には衛兵が立つていた。

そうして門へ行きつくごとに、案内の武士は何か囁ささやき、囁くと衛兵は門をあけた。

宏大な城を頂上に持つた、この小山には樹木がなく、文字通りの禿げ山であつた。

もちろん人工でそうしたので、それは城内で、苛責かしゃくに堪えず、逃亡しようとする捕われ人どもが城から外へ逃げ出した時、樹木があつたら隠れられるであろう。それを防ぐために、そうしたのであつた。

とうとう城の前庭まで来た。

城の外廓が鉄板で鎧よろつた、宏大極まる桶かのように、桂子たちの眼前に聳えていた。と、桂子が二言三言、何やら袈裟太郎へ囁いた。

すると袈裟太郎は頷いて、そつと案内の武士の側そばへ寄り、横腹のあたりへ拳をあてた。

「！」

異様な悲鳴をあげたばかりで、案内の武士は気絶して仆れた。

「その男の上うわおひ帯をお取り」

桂子はそう云った。

今は可哀そうな案内の武士の、一丈あまりの白い上帯が、袈裟太郎の手によってほぐされた。

「その男を始末おし、そうしてわたしがおいでというまで、お前たちはこの辺で待つておいで」

白の上帯を受取りながら、桂子は右衛門と袈裟太郎とへ云った。

「で、お姫様にはどうなされますか？」

と、心配そうに右衛門は云って、大おおまさかり 鉞あごの柄へ頤あごをのせた。

「わたしは一本の白しらぬの布となつて、お城の中へはいつて行くのさ」

「ははあ上帯に身を変じて？」

「そうだよ、上帯に身を変じてね」

「お一人で大丈夫でございましょうか」

と、袈裟太郎が不安そうに云った。

「飛天夜叉には危険はないよ」

「さようで」

と右衛門が大きく頷いた。

「飛天夜叉様は術者でございますからなあ」

気絶して仆れている案内の武士の、死骸のような躰の横に、佇たたずんでいる右衛門と袈裟太郎には、田舎娘に扮していたところの、桂子の姿が見えなくなり、鉄板でも張ったような城壁の裾を、白布が高く宙に延び、二尺あまり地上へ裾を引き、月光に全身を薄蒼く染め、煙りの棒のように揺れ顫えながら、玄関の方へ動いて行く姿が、悪夢のように見えるばかりであった。

この前庭には人氣がなく、遠くで鳴らしている撃げ柝きたくの音が、間遠くに聞こえるばかりであった。

城壁の角を玄関の方へ、生ける白布は曲がろうとして、二人の方へ顔を向けた。

一本の白布に過ぎないのであるから、もちろん顔も手足もなかった。

が、顔のあるべきてっぺん所から、一尺ばかり下がった辺——だからそこは頸でなければならぬ。——その辺から白布が背後の方へ捻じれて、二人に向かつて上下へ揺れた。

で、あたかも顔をねじ向けて、挨拶したように見えたのである。

二人の家来は辞儀を返した。

城内の廊下を生ける白布が、奥の方へ歩いていった。

足のない白布ではあったけれど、二尺あまり裾を床へ引いて、膝のある所と思われる辺へ、蛭りをつくり髪をつくり、しずしずと先へ這つて行く様子は、白衣を頭からスツポリとかずいた、上 藤が歩いて行くのと変わりがなかった。

廊下はぼつと明るかった。

曲がり角曲がり角に金網で蓋うた、巨大な燭台が置いてあって、その光が遠くまで届くからであった。

と、行く手から腰元らしい姿の、若い女が二人来かかり、いぶかしそうに足を止めて、

寄つて来る白布を見寄つた。

「……………」

「……………」

二人は声さえ立てられなかった。手を取り合い躰をもたれ合わせ、そのまま気絶して仆れてしまった。

この夜この城の一つの部屋に、土岐頼春ときよりはるが端座していた。

膝の上には巻軸が置いてある。

彼はどこからともなく聞こえて来る、嬰兒あかんぼの泣き声に耳を澄ましながら、心を滅入らせるのであった。

五人の野武士に誘われて、この城内へ来て以来、夜となく昼となくまれまれにはあるが、その嬰兒の泣く声が聞こえた。

そうしてそれをあやすらしい、優しい細々とした女の声の、子守唄の音が聞こえることもあった。

泣きそ、な泣きそ

和子よ和子よ

と。……

頼春はその声を耳にすると、深い悲哀を感じるのであった。後悔に似た悲哀であり、郷愁に似た悲哀であり、過去に行なった罪悪を、霊魂によって責められている、と、そういったような悲哀でもあった。

「ああ今夜もまた聞こえる」

(この巻軸も不思議なものだ)

膝の上のその品をまさぐりながら、頼春はそう思った。

比叡山の裏山で、左の腕を斬り落とされ、谷の底へころがり落ちた時、偶然石の祠ほこらから手に入れたところの品なのであるが、この品を手中に入れた時から、一匹の巨大な猿えんこう猴こうのような獣けだものが、たえず自分の近くにいて、守護するように思われてならなかった。

盲目の頼春にはその巻軸に、何が書かれてあるものかは、まったく知ることが出来なかった。

時々その巻軸を人に見せて、読んで貰おうかと思うこともあったが、それが何んとなく非常に大切な、また重大な秘密を持った、尊い品物のように思われて、

(いやいや人などには見せない方がよからう)

と今日まで誰にも見せることなく、秘密を保つて来たのであった。

また嬰兒あかんぼの泣き声と、子守唄の声とが聞こえて来た。

(思い切つて行つて見ようか?)

珍しく頼春はそう思った。

こうまでも悲哀の心持ちを、こうまでも深刻に起こさせるところの、泣き声の主と唄声の主とが、何者であるかということについて、彼はこれまでは一度として、確かめてみようとはしなかつた。

その真相を知ることによつて、恐ろしい苦痛を覚えそうだと、こう思われたからであつた。

それに彼はこの住居が、漢あやごん権守のかみの居城だと、食膳の世話や寝起きの世話をする、若い女から聞かされた時以来、一足もこの部屋から出なかつた。

捕えられたら遁のがれられない。恐ろしい漢権守の住居の、身の毛の立つような噂話を、久しい以前から聞いていたからであつた。

(笠置かさぎの城が陥落して、大塔だいとう宮みや様が赤坂の城へ、遁のがれてお入り遊ばされたそうな。

この御方おんかたにお眼にかかり、許すとお言葉承わりたいばかりに、生きていような自分なのだが、はいつたが最後出ることの出来ない、ここの住居へ来た以上、望みは絶えたというものだ！……では俺は部屋から一步も出まい！)

それで彼は出ないのであった。

盲目の身の燈ともしび火はいらず、部屋の中はほとんど闇であつたが、金網をかけた火鉢があつて、そこで炭火が盛んに熾おこつていて、その余光あおりで頼春のこけた頬と、窪んでいる眼との寂しい顔が、赤くポツと見えていた。

不意に廊下から悲鳴が起こり、人の仆れる音が聞こえた。

素早く巻軸を懐ふところ中へ入れ、傍そばを放さない竹の杖を取ると、頼春は立ち上がり、ソロソロと引き戸をひきあけた。

そのほとんど鼻の先を掠かすめて、丈高たけい白布が裾を引き、垂直に立ちユラユラと揺れ、廊下を一方へ這つて行き、その後方うしろに近習らしい武士が気絶して仆れていた。

(女が俺の前を通つて行く)

頼春はそう思った。

盲目なるがゆえに気絶している武士も、生ける白布の這つて行く姿も、かいくれ認める

ことが出来ず、盲目になつて以来鋭い感覚が、いよいよ鋭く磨ぎ澄まされた、それによつて女が通つて行くと、かえつて真相を識つたのであつた。

また嬰兒あかんぼの泣き声が聞こえた。

(行つてみよう、思い切つて！)

頼春は廊下へ出、泣き声の聞こえる方へ足を運んだ。

それは白布の行く方角であつた。

廊下が鉤の手に曲がついて、それを曲がつて左へ行けば、広い中庭へ出ることが出来る。

白布と頼春とはそつちへ進んだ。

中庭にお長屋が立つていて、その一軒の窓に向いた部屋に、膝に嬰兒を抱きながら、早瀬がうなだれて坐つていた。

(お月様でも見せてやつたら、この子たいがい泣きやむかもしれない)

ふと、早瀬はこう思い、立ち上がつて次の間へ出、土間へ下りて戸をあけた。

望もちを過ぎした月の光が、すぐの足もとまで射して来ていた。

胸に嬰兒を抱きながら、顔に依然として白布を下げた、姑獲鳥うぶめのような早瀬の姿は、やがて煙りか寒冷紗かんれいしゃのような、月光の中へさまよい出た。

足もとを見詰め、物思いに耽けり、あたりなど見ようとしない彼女だったので、彼女の背後うしろから白布の柱と、竹の杖を持った盲目の男とが、ひっそりと歩いて来ることなどには、気が付こうとはしなかった。

植え込みの少ない中庭ではあつたが、桧ひのきの木ぐらいは立っていた。

頼春の姿があらわれた時、その葉の茂みから巨大な獣が、雪の塊かたまりりのように落ちて来て、頼春の背後から従った。

こうして片側は本丸の建物、反対側はお長屋の並び、それによって画され作られている、長方形の中庭を、姑獲鳥うぶめと布ぬの柱ぼしらと盲人と、猩々との縦隊は声なく進み、その行く手の遙かのあなたには高く厳いめしく聳こえている、別べつ櫓やぐらの方うへへ蠢うごめいて行つた。

(やつと少し、わたしは幸福になつた)

泣きやんだ嬰兒あかんぼを睡らせようと、拍子を取つて揺りながら、この住居へ来てからの生活についてそう早瀬はつくづく思つた。

赤坂のほとりの雑木林の中で、野武士と若い女とに、ついて来るように勧められて、彼

女はここへ来たのであった。

「嬰兒に飲ませるお乳もあります」

「綺麗なお部屋もおいしいご馳走も、清らかなお衣裳めしものも差し上げましょう」

「わたしたちの住居へおいでなさいまし」

と、こう勧められて来たのであった。

嬰兒に飲ませるお乳がある！ このことが一番彼女の心を、ここへ来させるようにしたのであったが……

さて、本当にここへ来てみて、その人達の云ったことが、みんな真実であることを知って彼女は驚喜し感謝した。

（大慈善家のお城なのだよ）

こう思わざるを得なかった。

「何んというお方のお城なのですか？」

世話をしてくれる小娘へ、ある日彼女はこう云って訊いた。

「漢あやごんのかみさま権守様のお城でございます」

と、その娘は言葉すくなく答えた。

「いつまでご厄介になれましょうか？」

「永久にでございます」

「永久に？ ……でも、わたしとしましては……尋ねる人がありますので、早晩おいとまいたしませねば……」

「はいったが最後出られません」

「まあ」

と、早瀬は笑い出してしまった。

信じられないからであった。

城内はどこを歩いてもよいが、城外へは決して出てはいけない。誰と何を話してもよいと、そう娘は教えてくれた。

「下の町へも参れませんか？」

と、いぶか審しそうに早瀬が訊くと、

「いずれはあそこであなた様も、お住居になることでございますが、まだ時が参りませぬゆえ」

と、その娘は気の毒そうに答えた。

早瀬は、これまでの習慣から、人と話すことを好まなかった。

そうして、昼間は部屋から出ないで、夜になるのを待ちかまえて、一人でこつそり歩き廻ったりした。

お城にもお長屋にも沢山の人が、生活しているように思われた。

(それだのにどうして陰気なんだろう?)

これが早瀬には気にかかった。

妖怪画のような縦隊は、別櫓の方へ進んでいた。

五重の層を持った別櫓の、頂上の部屋に鬼火の姥うばが、水盤の水を見詰めながら、傍かたわらの範覚へ云っていた。

「今夜は用心しなければいけない。変な者が入り込んだらしいぞ」

活躰解剖いきみふわけ

「姥よ、何んだ、変なものとは？」

例によつて金剛杖をつきそらせ、それへ体を縫らせながら、そう金地院範覚は云つた。

「変なものとは変なものよ。それがハッキリわかるほどなら、変なものとは云いはしない」
姥の声は不機嫌そうであつた。

櫓の部屋は広く頑丈で、正方形に出来ているらしく、床も天井も組細工で、壁には窓や狭間はざまがあつて、格子がはまつているらしかつた。

が、今は芯しんを細めた、一基の燭台の幽かすかな光が、わずかに四辺一間四方ぐらいを、明るめているばかりだつたので、その光の輪の中にはいつている、範覚の姿と姥の姿と、姥の膝すねの前の床の上に、水を湛えて置いてある。白い陶器すえものの円い水盤とが、ぼんやりと見えるばかりであつた。

水盤おもてひかりの面は燈光を受けて、磨いた銅板のそれのような、気味の悪い光に輝いていた。でも、そこには物の像かたちなど、何も映つていなかった。

で、範覚は首をのぼし、水盤おもての面を凝視したが、

「わしには何も見えぬがのう」
と、云つた。

「何が凡眼に見えるものかよ」

と、すぐに姥はセセラ笑うように云った。

「わしの眼にだけ見えるのじや」

そういう姥の眼は水盤の面に、食い入るように注がれていた。

「白い高い柱のようなものじや。そいつがユラユラと歩いて来るのじや。……その後から子を抱いた女が一人、その後から盲目の男が一人、その後から白い狸々が一匹、間をへだてて従いて来るのじや」

「人間ではないのか、柱なのか？ ……柱が歩くとは変ではないか？」

「だから変な物とっているのじや！ ……おかしいのう、どうもわからぬ」

「姥にもわからぬ事があるのかのう」

「わしと同じくらいしわざの術者なら、わしより優れた術者なら、そいつのやるしわざは、わしにはわからぬよ」

「姥より偉い術者などあるものかのう」

「なければよいが、あるような気がする」

「飛天夜叉！ ……飛天夜叉の桂かつらこ子！」

「あいつにはこの頃、後手ばかり食うよ」

「大仏陸奥守様の陣中でも、ひどい後手を食ったのう」

「わしやお前の身に変身されて、とんでもない騒動を起こされてしまった」

「その後へ行つたわれら二人の、疑がわれようというものは！」

「冷遇され方というものは！」

「思っただけでも腹が立つわい！」

「ほうほうの態で逃げ帰つたわい！」

「白い高い柱のようなものが、飛天夜叉めの変身じやとすると、姥うっちゃつてはおけぬのう」

「何のうっちゃつておけるものかよ」

「さて、そこでどうする気じや？」

「今度は、わしが先手をうつのさ」

「打ちな、姥、先手を打ちな！……が、何んじやい、打つ先手は？」

すると、姥は水盤の面を、依然として熱心に見詰めたまま、あるかなしかに残忍に笑つた。

「漢権守様の行なわせられる、活躰解剖の今夜の犠牲に、さあ何物があてられるかの

う

範覚は、ゾツと身顫みふるいをした。

「ああ今夜もあいつがあるのか」

「女を男に変えるのじゃ」

「苦痛に充ちたあの悲鳴！ あれにはわしもおののくよ」

「男を女のように一変して、宦官かんがんといつて宮廷などへ入れる。そういうことは唐土からにあるそうじゃ……女を男のように変えてしまつて、変態へんたいごのみの富豪おだいじんへ捧げる、そういうことだつて唐土からにはあるそうじゃ。……漢権守様のご先祖は、唐土あのちのお方であられる筈じゃ……嬰兒あかんぼの眼をわざと潰し、瞽婢ごひといつて色を売らせる、そういうことも唐土からにはあるげな。……顔の前へ白い布をかけた、姑獲鳥うぶめのような女が抱いている子も、漢権守様のお手によつて、やがては瞽婢ごひにされるであらうよ」

範覚は突いていた金剛杖で、思わず床を烈しく突いた。

「そんな話はやめてくれ！ あんまり酷ひどい！ あんまり惨酷だ！ ……俺もずいぶん殺生な男で、殺ひところし人など何んとも思つていないが、嬰兒の眼を潰すほどの、そんな惨酷だけは出来そうもない！ ……姥、頼む、ここから出してくれ！ ……いや一緒にこの城から

出よう！ ……それにしても俺には不思議でならない、何んと思つて鬼火の姥には、こんなところへやつて来たのだ!!」

「歸つて来たのじゃ、この城へよ！ ……時々この城へ歸つて来て、住まねばならぬわしのじゃ」

「では何んだ、姥の身分は？ この城での姥の身分は？」

「やがて知れよう、じつとしていな。 ……とにかくこの城へさえ歸つて来れば、鬼火の姥の力も業も、外にいる時より百層倍も強まる！ ……範覚よ、安心していな。安心してわしにすが縫つていな」

この時巨大な真しんちゆう鍬くわの銅鑼どらでも、強い力で打つたらしい、陰気な金属性の音が聞こえ、それが長い尾を引いて、城の隅々へまで行き渡つた。

「漢権守様のお出ましの時刻じゃ」

姥はユラリと立ち上がり、燭台の灯を吹き消した。

と、この部屋は暗黒となり、巨大な御幣ごへいのような姥の姿が、ぽつと灰はいしろ白くその闇を分けて、戸口の方へ歩くのが見え、その扉のひらく音が聞こえた。

範覚だけが後に残っていた。

(漢権守様のお姿を、俺は一度も見たことがない。……見てはいけなさと云われてはいるが、今夜は是非とも見たいものだ)

範覚は闇の中に佇みながら、このことばかりを考えた。

一人の侏儒こびとが長い廊下を、巨大な頭を左右に振り、子供のようにヨチヨチした歩みで、でも一生懸命にはしりながら、廊下の左右に出来ているところの賓客——むしろ囚人めしゆうどともいうべき、捕われ人たちのいる部屋部屋の窓と、その扉とを閉鎖とざしていた。

扉へは外から錠を下ろした。

その侏儒こびとが廊下を曲がって、ほかの廊下の方へ姿を消した時、鈴りんの音が聞こえて来た。

と、廊下の遥か向こうへ、血紅色けつこうしよくをした灯の光が、一点朱を打ったように現われた

が、それがだんだん近寄って来た。

漢権守あやごんのかみ様の一行なのである。

黒の法衣を着た老いた僧が、青銅で造った大形の龕燈がんとうを、両手で重そうに捧げた後から、稚子輪ちごわに髪を結って十五、六の美童が、銀の鈴を振りながら、側目わきめも振らず歩いて来、その後から具足をつけた二人の武士に、その左右を護衛されながら、眼のある位置へだけ

二つの穴をあけた、白の裾長の被衣かつぎめいたものを、分銅形に着了漢権守が、その背後うしろに活いき躰解剖きみふわけの犠牲を、担架に載せたのを従えて、悠々と足を運んで来た。

担架の上の犠牲者の体には、布が一杯にかけられていたので、何者であるかわからなかつた。

担架の後からは盆を捧げた、道服を着た医師くすしめいた男が、盆の上に整然と並べられている、小刀メス、小槌こづち、小鋸このこぎり、生皮剥なまかわはぎの薄刃物、生き眼なまづめ剝めりの小菱銚こびしほこ、生爪剥なまづめがしのえんげつ月形の錐きり、幾本かの針といったような物を、大切そうに見守つて、嚴肅の顔をして従いて来た。

「漢権守様のお通りじや、覗いてはならぬぞ、隙見してはならぬぞ」

と、そう警戒を与えるかのように、鈴の音は絶えず鳴り渡つていた。

その一行が進み進んで、一つの賓客部屋の前まで来た時、漢権守は足を止めた。

と、みんな足を止めた。

何か権守は囁いたようであつた。

すると、警護の一人の武士が、その部屋の窓の前へ行き、まず拳で戸を叩き、それからその戸を外から開けた。

と、鉄格子のはまつている窓から、一つの男の顔が覗いた。

また、権守は何か囁いた。

すると、龕燈を持つていた僧が、担架の側へ歩みより、蔽おおいの布の片隅をかけた。

眼を閉じ口を閉じた女の顔が、血けつこうしよく紅色の龕燈の光に、瑪瑙めのうのような色艶を帯びて、

悲しそうに浮かび出た。

と、窓の顔が悲鳴するように叫んだ。

「浮藻うきもだ！ 浮藻だ！ 浮藻ヨ——ッ」

女の眼まぶたが瞼をあけた。

「あッ、あッ、あッ、小次郎様ア——ッ」

蔽いの布が波を立てた。

起き上がろうとするのであろう。

が、血紅色の龕燈の光を、血溜りのように、浴びている布の下の、浮藻の体は縛られていたので、血溜りに波を立てたばかりで、起き上がることは出来なかつた。

浮藻の顔が布で隠され、小次郎の顔が閉じられた戸の、窓の向こう側に隠された時、漢権守の一行は、廊下を向こうへ歩み出した。

窓の戸を叩き、部屋の扉を蹴り、ののし 詈り、叫び、やがて嘆願する、小次郎の声部屋の中から嵐のように聞こえて来ても、それに答える何物もなかった。

血紅色の龕燈の光が、遙かの廊下の向こうに見え、そこから鈴の音が聞こえるばかりであつた。

それも廊下を曲がつたと見えて、間もなく見えなくなつてしまつた。

叫びつかれ、狂いつかれて、小次郎は俯向きうつむに仆れてしまつた。

(おお浮藻はどうなるのだ！ おお浮藻はどうされるのだ！)

活躰解剖いきみふわけの犠牲にされて、不具者かたわものにされるといふことだけは、疑がないように思われた。

その活躰解剖の恐ろしい苦痛も、人に聞かされて知つていた。

(生きながら浮藻は切られ刻まれて、不具者にされるのだ)

その浮藻とは卯ノ丸に導かれ、この城の中へはいつて以来、引き放されて別々にされ、今まで逢うことが出来なかつた。

そうしてまことに不思議なことには、この城の他の囚人めしゆうどたちは、この城の中ならど

こへなりと大概の所へは行くことを許され、ほとんど自由を許されていたのに、彼ばかりには許されていなかった。

で、彼はこの城へはいつて以来、この部屋ばかりに寝起きしていて、食事の世話や身のまわりのことなどは、一人の老婆によって扱かわれていた。

そうしてここが漢あやごんのかみ権守の、恐ろしい住居ということや、活躰解剖の真相なども、その老婆から聞かされた。

もつとも彼はそれ以前から、漢権守という人物の噂や、

(はいつたら永久出ることの出来ない、この世の活き地獄)であるその居城すさまの、凄じい噂は聞き知っていた。

(それにしてもこの城へはいつて早々、浮藻が活躰解剖の、犠牲などにされようとは！)

小次郎は猛然と床から飛び起き、扉の方へ走って行った。

「開けろ！ あけてくれ！ この扉をあける！ ……助けないでおこうか、助けないでおこうか！ ……浮藻よ浮藻よきつと助けるぞよ！ ……おおお頼む、この扉をあけてくれ！ ……」

小次郎は全身を力まかせに、扉へ叩きつけ叩きつけた。

もちろん扉は開かなかつた。

そうして誰もが答えなかつた。

しかし小次郎は扉のあかないことも、そうして誰もが答えないことも、覚悟の前だといったように、いや誰かに答えさせてやる、きつと扉はひらいてみせると、そう決心しているかのように、いつまでもいつまでも執念ぶかく、叫び、呼び、喚きながら、駄をうちつけうちつけした。

活躰解剖いきみふわけの手術の部屋の、手術台の上に浮藻の体は、一人しずかに置かれてあつた。

浮藻も小次郎と同じように、漢権守の人物と、その恐ろしい居城とについては、ずっと以前から、聞かされていた。

そうして卯ノ丸に導かれて、この城へはいつて来て、小次郎とひき放され、一つの部屋に住居させられ、寝起きの世話や食べ物ものの世話などを、とりしきってやってくれる老婆から、ここが漢権守の居城であることを、言葉少なに説明された時、もう自分の運命の、窮きわまったことを覚悟した。

(泣いても喚いても遁がれることは出来ない)

でも彼女はこんな境遇にいても、自分のことよりは小次郎のことが、しきりに気づかわれてならなかった。

(生きているか、殺されたか、どこに住んでいるか、病んではないか?)と。――
で、彼女は老婆に訊ねた。

「あのお方はおたつしやでございます」

老婆の答えはそれだけであった。

彼女も小次郎と同じように、城内を自由に歩くことも、人と自由に話すことも、許されていなかった。

で、彼女はこの夜まで、自分の部屋にだけに住んでいた。

そこへさっきのあらくれた男が、二人突然はいつて来て、彼女を縛り担架にのせた。活躰解剖の恐ろしい噂も、彼女は聞かされて聞いていた。

(いよいよそれに!)

と彼女は思った。

抗^{あらせ}うことの愚かしき、許しを乞うことの無益さを、その瞬間から彼女は悟った。
ほとんど気死^{きし}の状態で、彼女は廊下を揺られて来た。

(小次郎様は？ 小次郎様は？)

その間も彼女の思っていることは、恋人小次郎のことばかりであった。

窓ごしにはあつたけれど、その小次郎の顔を入れた時の、彼女の心持ちというものは！

喜びでもあれば悲しみでもあった。

台の上で白布に蔽われ、今浮藻は眼を閉じている。

まぶた 瞼の下の頬のあたりが、涙ですっかり浸されている。

まつげ 睫毛の厚い切れの長い、でも泣いたため膨れぼつたい瞼が、やがて痙攣して眼があいた。

「あッ」

足もとの方を眺めた時、彼女は思わず声を上げた。

巾三尺長さ六尺、そういう立て板に一人の男が、かわひも 革紐でゆわ 結いつけられていた。

それは裸体の男であり、いきみふわけ 活躰解剖を行なわれ、そのまま捨て置かれた犠牲者らしく、胸

から腹、腹から股、股から爪先まで血のすだれ 簾が、もみ 紅絹を裂いて懸けたかのように、いまだにヌルヌルと流れていた。

顔は全く解らなかつた。

人間の男の頭髮かみの代わりに、何んの獣ともわからなかったが、獣の毛が頭に生えていて、それが前方へパーツと下がり、顔をかくしているからであった。

浮藻は眼を閉じ軀を固くした。

悪寒おかんが全身を貫き通し、顫ふるえがどうしても止まなかった。

そういう浮藻を枕もとの方から、これも立て板に結いつけられた、裸体の女が見下ろしていた。

が、その女の二つの乳房は胸のどこにも見られなかった。

その女には乳房がないのであった。

で、そこだけが窪んでいて、二つの珠たまが箝はめ込まれていて、その珠の中央に、漆うるしが点ぜられていた。それはそっくり眼であった。

そうして、臍へそのある位置にあたって、三日月を下向きに懸けたような模様が、黒く刺いれず青みされていて、わずかにその女が呼吸いきをするごとに、それが口のように蠢うごめいた。

その女が黒い布でも冠むつて、そういう腹部はらを露むきだ出して、ムキ出しの脚で歩き廻まわつたとしたら、胴体がなくて巨大な顔から、足のつづいた化物ばけものとして、何んとい見世物になることだろう！

物の気配を感じたので、また浮藻は眼をあけて見た。

漢あやこんのかみ権守くすしと医師とが、枕もとに立つていた。

分銅のように見える権守の、被布かっぎをかぶった丈高い体の、顔の部分にある二つの穴から、浮藻を見詰めている眼の光は、燃えている黒いほのおのようであった。

「……脳髓の入れ替えじゃ。何んでもないよ、入れ替えじゃ」

枯れ葉がが高い梢こすえの先で、風に吹かれて揺ゆれているような、嗶しわがれたカサカサした声であった。

「脳髓の入れ替え？　ちとそれは……」

と、生皮なまかわは剥ぎの薄刃物の刃を、掌てのひらにあてて験ためしながら、当惑したように医師は云った。
「命もちませんでござります」

「ただ脳髓を入れ替えるだけじゃ。……何んでもないよ、入れ替えるだけじゃ」

医師は当惑したように、長い間の惨酷な所業に、無表情になっている仮面めんのような顔へ、皺しわをたたんで沈黙した。

「まず頭の生皮を剥いで、ついで頭蓋骨ずがいこつを上手に割って、そつと脳髓を取り出いだして、その後へ羊の脳髓を入れる。……アツハツハツ珍なものが出るぞ。……それから上手に

頭蓋骨を継いで、そつと生皮をかぶせるのじゃ。……何んでもない、何んでもない」

そう云っている間も権守は、二つの穴から浮藻の顔を、食い入るように見詰めていた。

「しかし」

と、医師は恐る恐る云った。

「脳髓の組織に至りますと、まことに微妙でござりまして、なかなかもちまして入れ替えなど。……さようなことをいたしましたなら、この女の命はすぐに……」

「何んでもない、何んでもない」

と、漢権守は抑えるように云った。

「ほんの簡単な解剖なのだ。ほんの手軽な手術なのだ。苦痛もまことに少いし、命には何んの別状もないし……それに羊の脳を入れたら、この娘ごは以前よりもずっと、穩しやかになるであろうし……何んでもない何んでもない」

(変だ)

と医師は思つたようであつた。

(これはこの女を殺すつもりなのだ)

「ではまず頭の生皮を剥ぎ……」

と、握っていた薄刃物を、天井から宙へ下がっている、唐土渡りらしい飾りのついた、切り子形の龕の燈火にかざしながら、医師は決心したように云った。

「試みますでござりましょう」

「早くおやり、時刻が経つから。……邪魔がはいらないものでもない」

冷たい医師の左の手が、浮藻の蒼褪めた額を抑えた。

「……………」

活躰解剖の犠牲者の口から——立て板にしばられている男女の口から、苦痛に充ちた呻き声が洩れた。

部屋は血腥い臭気ばかりであった。

範覚は廊下を歩いていった。

(漢権守様のお姿をとうとう俺は見損なってしまった)

コツンコツンと金剛杖の先で、幽かな音を立てながら、範覚は廊下を歩いていった。

(それというのも恐いからさ)

廊下の左右は囚人達の部屋で、部屋部屋からは囚人たちの、呟いている声、呪っている

ような声、突然恐怖に襲われたような、叫び声などが聞こえて来た。

でもそれらの声々は、漢権守の怒りを恐れ、自分たちの悪運命を観念した、低い押しつぶされたような声であった。

(浮藻とそうして小次郎とが、ここに捕えられて来ている筈だが……)

範覚は部屋部屋の声や音に、耳を澄ましながら歩いて行った。

(姥め俺にひし隠しにして、どこかへ隠してしまいおった)

いつか範覚は廊下を行きつくし、庭へ出られる出入り口まで来た。

「わッ」

と範覚は思わず叫んだ。

蒼白い月の光の中に、白布しらぬのが柱のように宙へ延び、それがユラユラと歩いて来る後か

ら、姑獲鳥うぶめのように子を抱いた女と、竹の杖をついた盲目の男と、猩猩しょうじょう々々が歩いて来

るからであった。

(こいつが姥の云ったあれなんだな)

瞬間範覚はそう思い、悪寒が身の内を走るのを感じた。

「化物ばけものだア——ッ」

と悲鳴をあげ、範覚は奥へ逃げ込んだ。

廊下の曲がり角を曲がろうとして、範覚は背後うしろを振り返って見た。

白布が後を追って来ていて、数間の背後に身長たけ高く立ち、頭を天てんじょう井いへ届かせそうにしながら、走って来るのが見てとられた。

「助けてくれ——ッ」

と悲鳴をあげて、範覚は夢中で廊下を走った。

なおこの時も土岐小次郎は、部屋の扉を内から開けようとして、扉へ体をたたきつけたきつけ、

「この戸をあける、開けてくれ！ ……浮藻よ浮藻よ力を落とすな！ ……この小次郎がきつと助ける！」

と、喚き声をあげていた。

するとこの時まで頑丈に、微動さえしなかつた固い扉が、外側からおの自みづかずと錠が外れて開いた。

「浮藻よ——ッ」

と小次郎は驚喜し、廊下へ弾のように飛び出した。

「アツ」

白布が柱のように、すぐの眼の前に立っていて、それがユラユラ揺れながら、顔にあたる辺を上^{うへ}下^{した}に戦^{そよ}がせ、頷^{うなず}くような表情をしたが、やがて忽ち廊下の一方へ、^{すべ}這るように走って行くではないか。

浮藻は医師^{くすし}の冷たい指が、額へ触れたと感じた時、これがこの世の最後だと思った。

「神様！」

と思わず口の中で云った。

(いいえ、妾には小次郎様こそ！)

「小次郎様！ 小次郎様！」

絹を裂くような鋭い声で、そう悲しそうに二声呼ぶと、浮藻は気絶してグツタリとなった。

その時生皮剥ぎの薄刃物が、浮藻の額へあてられた。
と、薄刃物が床へ落ちた。

「不手際な！」

と権守が云った。

「時が経つ、早くやれ！」

医師は狼狽して薄刃物を拾い、浮藻の額へ刃先をあてた。と、薄刃物はケシ飛んで、閉ざされてある扉へあたった。

二人は驚いて扉の方を見た。

徐々に扉がひらくではないか。

扉が開いた向こうの廊下の上に、巨大な白蛇が^{うね}蛇りをなして、^{わだか}蟠まっている。そのように、長い白布が束ねられてあり、その中に可愛らしい^{いなか}田舎娘風の飛天夜叉の桂子^{かつらこ}が佇んでい、その^{うしろ}背後に小次郎がいた。

それが^{あやごんのかみ}漢権守の眼にはいった。

「……………」

「……………」

桂子と権守とは睨み合った。

この間も、

「^{ばけもの}化物だーッ、助けてくれーッ」

と叫び、夢中でこつちへ走つて来るらしい、範覚の声が聞こえて来る。

右衛門とそうして袈裟太郎とは、城壁の裾、大門の横に、桂子の身の上を案じながら、黙々として立っていた。

と、にわかに城内から、叫喚の声や太鼓の音や、銅鑼どらの音が響いて来た。

「何か事件が起こつたらしいぞ」

「脇門こもんでも破つてはいつてみようか」

右衛門は鉞まさかりを持ち直した。

と、その脇門こもんが内側から開いて、浮藻を抱いた小次郎と、桂子とが走り出して来、それを追つて大勢の者が、雲でも涌くように涌き出して来た。

「お姫様ア——ッ」

と右衛門は叫んだ。

「お逃げ、一緒に、右衛門、袈裟太郎！」

「お小次郎様も浮藻様も」

と、袈裟太郎は驚いて叫んだ。

四人は一散に走り出した。

その行く手に廻り横から襲い、後から続いて武士や不具者かたわもの——城兵とらわれびとと囚人の人の群れが、混乱し渦巻いた。

城兵たちは桂子たち一団を、ひっ捕えようとするのであったが、囚人たちはそうではなく、この機会にここから遁がれ出ようと、ひしめき合っているのであった。

その混乱の渦の中に、頼春もい、早瀬もいた。

頼春は盲目の悲しさに、突きやられ押しやられ蹴り仆されたりした。

起き上がって一人の手へ縋った。

「盲目じゃ、頼む、手を引いてください！」

「お気の毒な」

とその手を引いて、人渦の中から遁がれようと、掻き分けて行くのは早瀬であった。

片手では嬰兒あかごをしつかりと抱き、片手では盲人の手を引いて、無我夢中に走るのであった。

もう今では城兵たちは、桂子たちの一団ばかりを、追っかけてばかりいることは出来なくなつた。

囚人どもの逃げて行くのを、遮らなければならなくなった。

で、城兵と囚人たちの、格闘殺戮が行なわれた。

櫓の一つが燃え出した。

囚人の何者かが、いち早く放火したらしい。

が黒煙りを金欄のように縫い、火の粉が金粉のように蔭かかれて見えた。

この騒動が麓の町へも、どうやら伝わって行ったらしく、松明の火が右往左往し、雑然たる物音が響いて来た。

思うに桂子たちの一団であろう、そういう混乱の麓の町へ行ったら、かえって危険と感じたかのように、城の断崖から続いている、曠野の方へ走って行くのが見えた。

と、その一団を執念く追って、もう一つの団体の走るのが見えた。

中に巨大な御幣があった。

戒刀を額に押しあてて、白衣の裾を翻して走る、鬼火の姥の姿であった。

それと並んで走って行くのは、金剛杖を斜めに構えた、山伏姿の金地院範覚で、その二人の後ろから続いて、屈竟の城兵が十人ばかり走った。

聖雄と英雄

その翌日のことであつた。

「正成まさしげ、お早う。よい朝だな」

「これは宮様お早うござります。……よい朝あけにござります」

という、さわやかな挨拶あいさつが赤坂城の、櫓の中で交わされた。

赤地錦の直垂ひたたれに、色かんばしい緋緘ひおとしの鎧よろい、すなわち曦あさひの御鎧おんよろいを召された、大だい

塔うのみやもりなが宮護良親王は、白磨きの長柄をご寵愛の家臣、村上彦四郎義光よしてゐるに持たせ、片岡

八郎その他を従え、窓から窺うかがわれる河内平野の、朝霧の景色をご覧になりながら、舎弟正ま

季さすえと恩地太郎とを連れた、楠木正成と顔を合くすわした。

「今日はどんな兵法を使つて、二十万の大軍に泡を吹かせるか、これがわしには楽しみだ
「よ」

何事にも率直の宮家であられた、こう仰せられて正成を見詰めた。

「宮様の御感ぎよかんに入ろうものど、正成苦心しております。……が、兵法にかけましても、

ご鍛錬の宮様の御感に入ること、なかなか困難にござりまして、正成大汗にござります」

誠忠、律義、木訥ぼくとつ、恭謙きょうけん、そういう性質の正成ではあったが、宮家とはことごとく気心が合い、水魚の交わりを呈していたので、何事も気安く云うことが出来た。

(大汗) などとさえ云うのであった。

「いずれお前のことであるから、あツというような奇手を使って、敵を狼狽させることであらうよ」

「すくなくも向こう四日間は、奇手妙手を用いまして、敵を一足も城内へは入れぬ。——というのが、方寸にござります」

「向こう四日間？ ふうん、四日間？ ……五日目にはどうなるのか？」

「正成討ち死にござります」

「ナニ討ち死に？ すこしお待ち」

宮家は切れ長の睫毛まつげの濃い、涼しい御眼おんめをパチパチとさせたが、

「そんな筈ではなかったがな」

「正成討ち死にござります……一族郎党もことごとく戦死で。……城は陥落にござります」

そのくせ正成は笑っているのであった。

(ははあ)

と宮家は感づかれた。

(これはまたわしをカツグ気だな。河内産まれのこの爺は、これでなかなか剽軽者で
冗談を仕掛けるから油断が出来ぬ)

「さようか」

と宮家は仰せられた。

「お前に討ち死にされてしまつては、わしも生きている甲斐がないから、お前と一緒に討ち死にときめよう」

「宮様も討ち死ににござります」

「ほほう、それも決定きまつているのか」

「きまつておりますでござります」

「討ち死にをしてそれからどうする？」

「私は近くの金剛山へ分け入り、しばらく世の中のなりゆきを眺め……」

「変だのう」

と宮家は云われた。

「それでは死んではいけないではないか」

「で、宮様におかれましても、しばらく草莽そうもうの間に伏され……」

「ああわしも生きているのかな」

「いえ、皆討ち死ににござります」

「……………」

「そこで敵は安心いたし、兵をひとまず諸国へ帰す……」

「はあなるほど、そういう次第か。……おおかたそうだろうとは思ったが……つまり敵方をして我々一同みんなが戦死したものと思わせるのだな」

「はいさようにござります」

「お前一流の兵法だな。……ではわしも戦死ときめて、戦死した後では熊野へでも行こう

「よ」

朝日が葛城かつらぎの山脈の上へ昇り、霧が次第に晴れて来た。

鳥の大群が空にあつて、堀や野面に散在している、昨日の戦いで戦死した敵の、冑かぶよろいや鎧よろいを剥ぎ取られた死骸を、啄ついばもうとして気味悪く啼き立て、舞い下がり舞い上がるのが見えてとられた。

宮家は正成と連れ立って、櫓を下へ足を運ばせた。

まさすえ
正季やよしてゐる義光たちも従った。

持ち場持ち場を固めている、将も卒もこの一団を見ると、うやうや恭しく頭を下げた。

二の木戸あたりまで辿たどって来た時、十数人の兵どもが、円くかたまつて騒いでい、その中から悲しそうな泣き声が聞こえた。

「正成、何んだな？」

と宮家は訊かれた。

「泣き男にございます」

正成は微笑してそうお答えし、その方へ向かつて足を進めたので、宮家もその群れへ寄つて行かれた。

哀れつばい顔をした年輩の男が、涙を流し鼻に皺を寄せ、

「悲しや悲しや我らのご主人様の、多門兵衛正成公は、戦い利あらずと観念あそばされ、

昨日深夜にお腹を召され、この世を去りましてござります。……おしるし首級などあらばほうむ葬ろうも

のと、わが身探しているのをござるが、死骸へは火をかけ焼きましたとか、後に残ったは灰ばかり、あら悲しや何んとしようぞ」

オ——イ、オ——イと泣いていた。

宮家は呆氣にとられながら、その男の顔から視線を反らし、正成の顔を見守った。

「なかなか上手にござります。……ああ云えとわたくしが申しましたので、稽古いたしておりますので、あれを聞きましたら寄せ手の者どもは、まこと正成が死んだものと、信じ込むことをござりましょう」

「ははあ」

宮家は吃驚したように仰せられた。

「そこまで手筈をつけているのか。……が、あの男は何者なのだ」

「人夫募集に应じまして、入城しました者にござりますが、何やら由緒ある者のようである……」

「泣き声、真に迫っているので、まことお前が死んでしまったような気がする」

「この正成めつたのことには死ぬようなことはござりませぬ。……正季、そちもそうであるろうの」

「はい」

と舎弟の正季は云った。

「生きかわり死にかわり、七生までも、わたくしは生きて王事に尽くします」
兄にも劣らぬ誠忠で律義で、感激性の強い正季は、そう云っただけでも果たし眼であつた。

宮家たちは城内を見廻つて行つた。

夜がすっかり明けはなれた頃、寄せ手はヒタヒタと攻め寄せて来た。

昨日の合戦に不覚を取り、多勢を討たれた寄せ手の勢は、

「後攻なきよう山を妨り、人家をことごとく焼き払い、心やすく攻めるがよからう」

と、そういう評定もしたのであつたが、本間党と渋谷党とが、承引しようとはしなかつた。

というのは昨日の合戦で、最も手痛くこの二党が、敗北させられたからであつて、

「東一方こそ山田の畔が、少しばかり重なつてはいるものの、他の三方は平地つづき、堀一重堀一重のわか造りの仮り城、こもる人数といえばわずか五百、このようなものを落とすというに、そのような用意したとあつては、後日の批評恐ろしゅうござる。諸公方ご躊躇なさるるなら、我らが勢ばかりにてもヒタ攻めに攻めて……」

と、こう云つて攻撃を進めた。

「では」

と、そういうことになり、大軍が一気にかかることになった。

本間、渋谷の手の者が、真つ先立つて突き進み、堀の中へこみ入りこみ入り、忽ちきりぎ切岸の下まで押し進み、逆茂木さかもぎを引きのけ打ち入ろうとした。

城中は静まり返っていた。

矢一筋さえ射てよこさない。

(これはどうじゃ)

と寄せ手の勢は、かえつて不安を感じたらしく、城を眺めてためらった。

しかし気負っている寄せ手であった。敵におびえているからであろうと、こう考えて四方の塀へ、熊手うちかけたり素手で縫ったりし、一気に城内へこみ入ろうとした。

と、合図らしい太鼓の音ねが、櫓の一つから鳴り渡った。

とたんに塀が一斉に崩れた。

塀は二重に拵えてあり、その一重を切つて落としたからである。

千人あまりの寄せ手の勢は、折り重なつて塀の下になった。

そこを目がけて櫓々から、大石大木を投げ下ろした。

七百あまり打ち殺され、寄せ手はにわかには怖毛立ち、潮の引くように退いた。

(ははあこれが今日の兵法か。……味方の一兵をも損じないで、大勢の寄せ手を退けたところ、正成らしいやり方じや)

西櫓の窓から見下ろしていられた大塔宮はそう思われた。

翌日も翌々日もその翌日も、寄せ手は懲りずまに攻めよせたが、そのつど正成の奇計によつて、退却させられる憂目ばかりを見た。

四日目の夜は大暴風雨であつた。

その暴風雨を貫いて城から不意に火の手があがつた。

「や、燃えるわ、城が燃えるわ！」

と、寄せ手は事の意外に驚き、これも正成の奇計ではないかと、なかばは危ぶみながら眺めていた。

火はいよいよ燃え盛つた。

そこで寄せ手の勢は門を破り、城の中へこみ入つた。

ほとんど城兵の影はなく、大穴がいくつか掘られてあつて、そこに死骸が投げ込まれてあり、積んだ焚木が燃えていた。

そうして一人の中年の男が、さも悲しそうに泣き喚きながら、穴の周囲をさまよっていた。

「おやさしかつた多門兵衛様には、すでに矢折れ兵糧ひょうろうつき、この城保ちがたしとご覚

悟なされ、ご自害あそばされてござります。首級おしるしなどあらば葬ほうむらうものと、このよう

にお探しいたしても、かけた火に焼かれてそれさえない。悲しやな、オーオーオー」

寄せ手の勢たちは凱歌がいかをあげた。

「正成腹切つて死んだそうな」

「一族郎党みな死んだらしい」

「大塔宮様もご薨去じや」

が、背後の山や谷には、五人十人と組をなして、落ちて行く城兵の姿が見られた。

誰一人悲しんでいる者はない。

これも「手」さ、多門兵衛様の「手」さと、かたく信じているからであった。

九人の者が篋みのかさ笠を着て、熊野街道を通っていた。

そのお一方は大塔宮であらせられ、後の八人は家臣であった。

雨に叩かれ風に吹かれ、関東の兵の襲撃を避け、忍び忍びに落ちられるのであった。先刻までは正成とも同伴であったが、今は別れて九人ばかりとなり、回天の雄志はお胸にあつたが、現実には強いお味方もなく、心細く辿たどられているのであった。

と、この九人の一行は、その翌日も熊野街道を、うち連れ立って辿たどっていたが、その姿は武士でも農夫でもなく、兜とんぼ巾すずかけ篠すずかけ懸すずかけ金剛杖とんぼの、田舎山伏となっていた。

宮家の打ち上がったご風采は、つい人目に立つらしく、

「尊げな山伏殿、ご報謝しましょう」

と米などを掴んで、わざわざ捧げる者などがあつた。

金枝玉葉おんみの御身おんみではあるが、今は山伏にやつしおわされた。

微笑せまいして施米せまいをお受けになつた。

藤代ふじしろより切目王子きりべおうじ、次いで熊野と辿り辿り、漸次ぜんじ一行は十津川とつがわの方へ向かつた。

戸野の館

「氣違いよ氣違いよ！ 氣違いよ泡齋ほうさいよ！」

自身気違いの戸野兵衛は、十一月の寒風に吹かれながら、大和十津川の自分の館から、往来へ走り出してそう喚いた。

吉野十八郷のその中でも、芋ヶ瀬、十津川、蕪坂かぶらざかといえば、肥沃の地として知られていたが、その三郷の主であるところの、戸野兵衛の狂乱なので、往来の人も子供たちも、気の毒とは思っても笑止とは思わず、遠くの方から見ていられるばかりであった。

と、二人の若い女が、兵衛の後から追っかけて来た。

嫁の蓬よもぎゆう生いしこと従妹の呉服くれはとであった。

連れ帰ろうとするのである。

が、兵衛は帰ろうとはしないで、

「ナニわしが気違いだと、戸野兵衛が気違いだと、アツハツハツ何を云うか！ 熊野三所の大権現人間の身に現われて、兵衛となつたとは思わぬか！ 気違いは汝おのれらよ！ ……気違いよ気違いよ！ ……藤が咲いた？ 柵の藤が それこそめでたいめでたいめでたい！ ……新築をした大館おおやかたの、飾りに植えた神木の藤じゃ！ ……柵の大きさ二十間三十間！ 館の結構はそっくりお城！ ……ナニ贅ぜいたく沢たくじゃ慢心じゃと それで気違いになつたというか アツハツハツ何が贅沢！ アツハツハツ何が慢心！ ……戸野兵衛ほ

どの大々名が、お城を築きお山の神木を移し植えたとして何が慢心！ ……慢心とは汝らよ！ ……気違いよ気違いよ！」

と、いよいよ狂いあばれるのであった。

「まあまあ何んで小父様が、気違いなどでありますものか、正気も正気ずつと正気。 ……さあさあお帰りなさりませ」

十八の呉服くれははなだめながら、兵衛の右の手に取り縋れば、

「あれほどのお館おやかつくりましたとて、誰が贅沢じや慢心じやなどと、蔭口きくものがありましょうや…お山の神木藤の大木を、移し植えたといいますが、お許しを受けお祓はらいをしてお所変えをしたばかり、誰が非難などいたしましたしませ。 ……さような事などお心にかけず、気をたしかにお持ちなさりませ。 ……今はともかく館へお帰り」

と、兵衛の子息大弥太おおやたの嫁は、左の腕を取って引くのであった。

そこへ下僕しもべが二、三人、おくればせに走って来て、兵衛を介抱し歩ませた。

こうしてこの一群の立ち去った後は、嶮しい山と急流はやい溪川たにがわとで、形かたちづ成づくられている十津川郷の、帯のように細い往来には、人の影さえまばらであった。

この日も暮れに近づいた頃、戸野兵衛の館の門を、数人の山伏が訪ずれて、

「これは三重の滝に七日うたれ、那智のお山に千日こもり、三十三カ所を巡礼いたすところの、山伏の身にござりますが、路に迷いこの里に出でましてござる。一夜の宿をおかしくだされ」

と、難渋した態に申し入れた。

婢女めしつかいが奥へ通じたと見え、ひき違いに蓬生よもぎゆうが現われた。

「わたくしの舅様しゅうとすこし以前より、物の怪けにでも憑つかれましたか、乱心の気味にござりますが、ご祈祷きとうをしてくだされましようか」

と云った。

「われわれ事は平山伏、祈祷しても験少のうござりまするが、あれに見えまする辻堂に休まれる、先達殿せんだつは若年ながら、効験第一のお人にござりますれば、お宿してご祈祷願われませ」

こう一人の山伏が云った。

「まあまあそれは何よりのこと、では早々その御坊ごぼうを……」

こうして九人の山伏が、戸野兵衛家の客となつたが、これは大塔宮だいとうのみやのご一行で、光

林房玄尊、赤松則祐のりすけ、木寺相模きでらさがみ、岡本三河房、武蔵房、村上彦四郎、片岡八郎、平賀三郎の人々であった。

蓬生は山伏たちのいる部屋へ行つて、

「去年の暮れ頃からでござりますが、舅様には程を越えたほどの、綺麗好きとなりまして、座敷座敷を直すやら、新しく館を建てますやらし、ご神木としてお山にありました藤を、庭へ移し植えるやらいたしましたが、この頃になつてお心狂われ、何の彼かのと、埒らちもないこと云われ、藤はお山へ返せなども云い、館を飛び出しては騒ぎ廻り、ほとほと困こじはてております。薬も療治も甲斐ないありさま、なにとぞご祈念くださいまして、少しなりとも正気になりますよう……」

と、誠心まじこころこめてそう云つた。

先達姿の大塔宮は、自ら備おのずかわる威厳のあるお顔へ、幽かに微笑をうかべられ、「それは気の毒祈つて進すすめる。平賀坊用意あれ」

と、言葉少なに仰せられ、やおら茵しとねからお立ちになり、蓬生の案内に従つて、後しりえに八人の従者を連れ、戸野兵衛の寢室へ入られた。

と、兵衛は眼をあげて見たが、これも威厳にうたれたものか、荒れもせず喚きもせず、

そのまま眼を閉じ静まってしまった。

平賀坊の平賀三郎は、宮家の御笈おんおいを兵衛の枕もとへ立て、独鈷どっこ、三鈷鈴これい、錫杖しゃくじょう、五十串いそくし、備うべき仏具を取り出して、笈の上へ置きならべた。

宮家は比叡山の元天台座主ざす、僧家としても智行兼備の御方おんかた、何んのご躊躇するところもなく、珠数サラサラと押し揉んで、千手陀羅尼せんじゆだらにを高らかに読まれた。

部屋には兵衛の妻焚野たくのをはじめ、兵衛にとつては叔父にあたる、竹原入道の娘の呉服くれはや、腰元などが並居なみいたが、宮家のお声の朗らかさと、その風采の尊げなのと、その容貌の端麗さにうたれ、

(病人は治るに相違ない)

と、信仰の心を持つようになった。

なかでも呉服は、処女心おとめこころから、若い先達の優雅かぎりない、その姿に魅せられたものか、眼に愛慕の光を宿し、頬に羞恥の紅潮をさして、まじろぎせず、宮家を見守った。

宮家の唱名の後につづき、

「摩訶般若波羅蜜多、十六善神哀愍覆護、滅悪生善経々部、明王部天童部、七曜九曜十二宮、二十八宿三十番神、修行者猶如薄伽梵」

と、八人の山伏も珠数おし揉み、一斉に唱えて責めかけた。

と、にわかに戸野兵衛は、額から汗を流し、寝具から半身を起こして叫んだ。

「あら苦痛や、堪えがたや！ 熊野三所の権現が、われに退けと責めかくるわ！」

が、それも一時で、やがて枕へ頭を落とすと、子供のように眠り出した。

そうして、翌日まで眠りとおし、眼がさめた時には、正気になっていた。

「狂気したとは武士として不覚な。……それにいたしても狂気のわしを、祈祷で本復させ
てくれたという、山伏殿こそわれには仏、とどめてご接待いたさぬばならぬ」

戸野兵衛はそう云つて、髪を撫でつけ衣裳を着かえ、山伏たちのいる部屋へ行った。

「これはご主人、本復されたそうじやの」

と、それと見て声をかけたのは、赤松坊こと赤松則祐で、

「正気に返られて何より結構。……今後はあまり気苦勞せぬよう」

と、いたわるように云つたのは、村上坊こと彦四郎よしてゐる義光であった。

「おかげをもちまして戸野兵衛、いつまでも生き恥じさらすことなく、真人間に返ること
出来ました。何んとお礼を申してよいやら」

と、兵衛はいかにも嬉しそうに云つた。

「そのお礼なら、われらにではなくて、先達殿に申すがよかろう」

こう云ったのは光林房であった。

兵衛は云われて恭しく辞儀をし、

「お見受けいたせばまだお若く、少年と申してもよろしいほどでござるに、ご修行の力こそ恐ろしく、ようお治しくだされました。……それにいかにもお顔なりお姿なり、清く尊げに見えますことは……や、空言あだごとはさて置いて、これほどの恩こうむりました我が身、ご恩返さねばなりません。つきましては先をお急ぎでなくば、なにとぞ十日なり二十日なり、このまま逗留くだされて、われらが接待お受けくださりませ」と、心をこめて申し出た。

九人の山伏は顔を見合わせた。

願ってもない幸いだからであった。

宮家が楠木正成と共に、赤坂の城をふりすてたのは、赤坂の城が小城であり、兵も

少く兵糧も乏しく、とうてい関東の大軍を引き受け、長期に渡って戦うことが不可能であるからではあったけれど、もう一つ宮家としてのご計画には、昔から宮方の味方として、忠烈の義士を輩出させている、十津川一帯の豪族や、吉野、熊野、高野の衆徒に、令旨れいしを

伝えて味方につけ、義兵を挙げさせるといふ一事があつた。

で、途中で正成と別れ、正成は金剛山へ分けのぼつたが、宮は十津川へ入られたのである。

そうして、戸野兵衛の館を訪ね、一宿したしと云い入れたのも、一宿して様子をうかがい、宮方に従う氣勢があつたら、身分を明かして宮方とし、それを縁にして十津川一帯の、豪族を糾合しようものとの、御下心おんこころからのことであつた。

それなのに、兵衛の乱心を治した意外の出来事から歓待され、先方から逗留を進められたのである。満足せざるを得なかつた。

「せつかくのお進めでござるによつて、では遠慮なく逗留つかまつ仕り……」

「荒行あらぎようでいささか疲労した体を、休ませていただくことにいたしましょう」

と、片岡坊こと片岡八郎と、岡本三河房がが隙すかさず云つた。

戸野兵衛は大満足で、新館一棟を九人にあてがい、手をつくして歓待した。

家人ことごとく喜んだ中に、わけても喜んだのは娘の呉服くれはで、何かと用を目付けては、その新館へ姿を現わし、若い美貌の先達に近より、何くれとなく話すのであつた。

十二月にはいると寒さが加わり、峰々谷々は雪と氷とで、白く堅くとぎされてしまった。

鹿か、猪か、獣でなければ、容易に他郷へは出られそうもなく、天然の関所を据えられたのである。

ある日八人の山伏たちは、兵衛から届けられた般若湯はんによとうを、炉の火であたため汲みかわしながら、山伏言葉で話していた。

「平賀坊よお主どうする。……河内国金剛山へ、楠木多門坊たもんぼうを訪ねて行き、その後の様子知りたい、などと昨日あたりまで申しておつたが、この雪では行けそうもないぞ」

「そういう赤松坊こそどうする気じゃ。……播磨の国へ立ち越えて、苔繩山こけなわさんへ円心坊を訪ね、先達殿の御旨おんむねを伝えると、口癖のように云っていたが」

「この雪では閉口じゃ」

「村上坊ではなかったかな、吉野山に参詣さんげいし、庵室になるべき地形見立てようと、数日来大分意気ごんでいたが」

「行くことは行くが、先達殿が許さぬ。……道の開くまで待つがよいとな」

「その先達殿だが、ご覧なされ、また娘ごとらえられ、ちとお困りのご様子じゃ」

幾間かへだてた向こうの座敷の、陽あたりのよい縁近くに、若い先達と娘の呉服とが、さも親しそうに話していた。

「まず来年の春までは、雪も氷も解けはしませぬ。そのうち中はあなた様には、この家の捕虜とりこにござりませぬ。そうご観念あそばされませ」

そう、呉服は嬉しそうに云った。

雪と氷とが関所となつて、この気高い美貌の山伏を、永くこの家にとどめておくことが出来る、このことは、ほんとうにこの処女おとめには、嬉しくてならないことなのであった。

「先を急ぐ旅というではなし、置いてさえくださればいつまでなりと、私はここにおりますよ」

若い先達は微笑して云った。

優しい、含みのある、清らかな声は、恋を知り初めた処女おとめの耳へは、楽の音ねのように響くのであった。

「まあ、置いてさえくださればなど、と……おいでくださいませれば、いつまでなりと……十年であろうと、二十年であろうと……でも、いずれはあなた様には、ご修行にお立ちなのでござりませうねえ」

細くはあるが切れの長い眼、小さすぎるほど小さい唇、呉服は京あたりの頭紳けんしんの姫とは、おのずから異った地方豪族の息女の、質朴の美しさを備えていた。

「さよう、参らねばなりません」

「そのように、お若いお身の上で、荒いご修行などなさいまして……何んのお役に立つの
でございましょう」

「仏の道は救いの道、自分を救い人を救う、その助けになるでございましょうよ」

若い先達は、いや宮家は、ふと昔のことを思い出された。

日野資朝すけとも卿の別館で、無礼講の催しもよおのあつた時、微行して庭まで行き、資朝と逢つて

話したことで、

「還俗げんぞくして戦場に立ちたいものじゃ」

こう、その時云つた筈である。

(それがとうとう現実となつた。還俗し、甲冑かっちゆうをつけ、合戦の場にわに立つようになった)

「先達様」

と、呉服は云つた。

熱を持った声であつた。

「……………」

若い先達は、ただ見詰めた。

「呉服を何んとおぼしめしました？」

「……………」

「可憐いとしと……可憐と……おぼしめしましたか？」

懇願するような声であった。

若い先達は頷いて見せた。

呉服の口から溜息が洩れ、涙ぐんでいる眼の中に、喜悦と安心との光がさした。

(可憐いとしとおっしゃった、この呉服を可憐と)

庭の一所に陽溜りひだまがあつて、そこだけ雪がとけていて、笹の葉が微風に揺れている。その側の梅の古木の根もとを、みそさぎいが一羽行ったり来たりしている。

いつもひとりで寂しともしそうに、こそこそと忍び歩くこの鳥は、心に充たされない何物かがあつて、それを求めてともし侶と離れて、探し廻っているかのようにあつた。

呉服のこれまでの心持ちが、そっくりそれに似かよつていた。

心に充たされない何物かがあつて、たえずそれを求めていた。

若い先達に逢つてからは、その何物かの何んであるかが、やつと呉服にはわかつて来た。恋だつた！

日一日と呉服の心へは、若い先達への愛慕の情が、増し、強まり、
 をあげて来た。
 (でも、何んと云い出せよう)

言葉にも行為しぐさにも出だすべき術を、まだ彼女は知らなかった。

「先達様」

と、呉服は云った。

「いいえ」

と、すぐに自分で消した。

「可憐と……わたしを……ほんとうに可憐と？」

「……………」

先達は微笑してただ見詰めた。

と、不意に何気なさそうに云った。

「そなたのお父上は竹原入道殿、この地方では有名なお方、お健すこやかでござるかな？」

話が横へ反れたので、呉服は失望を感じたが、

「たつしや過ぎるほどたつしやでございませうが、老年ゆえ頑かたくなになり……………」

と、云った。

「それにしても何故にそなたには、自分のお家うちへは帰られずに、兵衛殿のお家などにいられまするかな？」

「小父様乱心と聞きましたゆえ、見舞いかたがたお手伝いに参り……そのままずっと、ずっと、今日まで……」

「なるほど、さようでございましたか」

「帰れとの伝言ことづつてはございますが……あなた様が、ここにおいでのうちは……なんのわたくし家へなど……」

「……………」

「先達様」

と、力をこめて、

「わたくしご案内いたします。そのうち是非ともわたしの家へも……」

「いずれ参るでござりましょうよ。……入道殿にもお目にかかり……お目にかかることになりましょうよ」

この言葉には深い意味があつた。戸野兵衛が頼み甲斐ある、誠心を持った武士であることは、既に宮家には観察みとおされておられた。

その一族の竹原入道むねのり宗規！これは兵衛よりも一段すぐれた、この地方での大豪族、

もしこの者を味方として、引き入れることが出来たならば、鹿ヶ瀬しか、湯浅、阿瀬川、小原、この辺一帯の豪族を宮方にすることが出来るであろう。――

こう宮家にはおぼしめされ、逢うべき機会を待っていられたからである。

いや宮家におかれては、兵衛の館におられる間も、北条氏討伐朝権恢復の策を、不断に巡らされておられるのであった。

千早に城を築くといつて、中途で別れ金剛山へ登った、楠木正成へ使者を送り、その後の様子を尋ねなければならぬ。

赤松則祐の一族で、以前から宮方に好意を寄せている、播磨の赤松円心のもとへ、則祐に令旨を持たせてやろう。

吉野は嶮岨要害の地、ここへ城など築き設けたなら、関東の大軍押し寄せても、相当長期防禦出来よう。その地勢も調べてみたい。

高野山や熊野の衆徒へも、令旨を送って奮起させよう。

――こう画策しておられるのであった。

廻廊づたいに嫁の蓬よもぎゆう生が、こなたへ歩いて来るのが見えた。

「お姉様お話しなりませ」

呉服は、いち早く声をかけた。

二つばかり年上の蓬生は、呉服よりは少し陰気であったが、しかし美しさは負けていなかった。

「はいはい」

と、微笑して蓬生は云い、二人の話へ加わった。

「お兄様いまだにお帰りが無いとは……」

と、気の毒そうに呉服は云った。

「いずれもうもうあの人のことゆえ、こここの廓くるわあそこの遊里ゆうりと、遊びほうけておりましようよ」

と、少し寂しそうに蓬生は云い、

「京の地へ行つたが最後、一月二月は帰らぬが普通、もし帰ったら病気が何かで……」

と、やはり寂しそうに云いついだ。

「あまりお姉様がおとな穩しく、お小言おつしやらないからでございますわ」

仲のよいこの二人の女は、姉妹のようにさえ見えるのであり、呉服は事実蓬生を呼ぶに、

お姉様と呼んでいた。

蓬生おっとの良人、この家の長男、戸野大弥太が父にも叔父にも、いや一族の誰にも似ないで、放蕩ほうとうであり無頼ぶらいであることが、父、兵衛の苦勞の種、乱心の原因になっており、蓬生の陰氣の種でもあることに、呉服はとうから感付いていたので、蓬生に同情しているのであつた。

「先達様」

と、蓬生は云つた。

「あなた様の勝れたご祈祷で、ねじけた男の心持ちをお治しくださることになりますまいか」
「さあ」

と、若い先達は、おおらかな微笑を頬にうかべ、貞節であり、苦勞性らしい、蓬生の顔を眺めたが、

「すべて加持かじとか祈祷きとうとかいうものは、受ける人の心の信不信によつて、効験があつたりなかつたりします。……兵衛殿の病氣の治られたは、心に信仰がありましたからで、……そなたの良人大弥太殿とやらには、一度も逢つておりませねば、その性質ひととなりもとんと不明、従つて信仰のありなしなども、……お眼にかかつて性質を見、信仰ある人と存じましたら、

お祈りをしてあげましょうよ」

と、優しく親切にいたわるように云った。

「あなた様のお力づよいご祈祷で、良人の放埒ほうちやうの心持ちが、少しなりと治ること出来ましたら、どのようなにわたしは嬉しいことか。……舅しゅうご様ご姑こ様とめにも安心しましょうし、近郷近在の人達までも、喜ぶことでございましょう」

蓬生は、しみじみというのであった。

「大弥太殿の放埒ほうちやうと申して、どのような所業なされますのかな？」

「これほどの大家の総領でいながら、あぶれ者などを集めまして、そのお頭などになりまして、近郷近在まで出かけて行き、面白ずくの殺傷沙汰。……いつもいつもその苦情が、舅おご様ごのもとへ参りますので……」

「なるほどこれはちと荒い」

「そういう驕慢心をなおしたさに、咲いていよいよ頭を下げる、お山の神木の藤の木を、舅おご様ごには移し植えましたか……」

「ははあ、そういうお心から、藤の神木を移し植えましたのか」

「館など建てましてやりましたら、家におちつくこともあるうかと、それで新館もしつら

えましたような次第で……」

「親ごの心というものは、勿体ないほど有難いものです」

この時、率然と宮家の御心へ、父帝の御事が思いいでられた。

笠置落城後御いたわしくも、賊軍の手にお渡りになり、六波羅へ入御あそばされた

とばかり、世上の取り沙汰で耳には入れたが、その後いかが遊ばされたか。

尊澄法親王、尊長親王、このお二方も賊の手に渡り、藤原藤房、花山院師賢、北畠

具行、千種忠顕、これらの人々も賊の手に……

(その後はいかに？ その後はいかに？)

宮家には思わず沈思遊ばされた。

その夜蓑笠で体を蔽い、雪をしのいで一人の男が、戸野の館へ近寄って来たが、雪持ち松の逞しい枝を、笠のように着ている大門に寄り添い、しばらく様子をうかがってから、潜り戸を拳で、ホトホトと打った。

「誰じゃい」

と、内側から門番が云った。

「こんなに遅く、何んの用じやい」

「あける、わしじや、大弥太じや！ …… 御曹司様おんぞうしのご帰館じや」

「や、ほんとに、大弥太様のお声じや」

すぐに潜り戸があげられた。

「そつとしておれよ、面映おもはゆいからの」

云いすて大弥太は玄関へはかからず、裏口から、こつそり屋内へはいった。

「まあ若様！」

とその姿を認めて、二、三人の婢女はしための驚くのを、

「静かに静かに、ええ騒ぐな」

と、こわい眼付きをして睨みつけ、縁づたいに女房の部屋の方へ行つた。

襖をそつと細目にあけて、内の様子をうかがってみると、かき立てた燈火ともしびの横に坐り、

所在よなさそうに慎つつましく、蓬よもぎゆう生こよみは曆を繰よっていた。

(美しい女ぶりや、粗末にはしまいこと)

久しく留守にして見なかつたからか、大弥太には女房が美しく見えた。

そこで大変満足して、

「女房、わしじや、帰ったぞ帰ったぞ！」

ふすま
襖をあけて内へはいった。

「まあ」

蓬生は驚いて云い、繰つていた曆を横へ置いた。

その前へ大弥太は坐り込み、酒びたりや性慾づかれて、眼袋などの出来ている顔へ、多少テレた表情を浮かべたが、

「まずご免、のつげに謝まる。何んといつても家をあげて、一月も二月も帰らなかつたのだから。……さて女房にもご両親様にも、お変わりごぎなく候や、うかがい上げ奉り候なりさ。……アツハツハツ、これくらいでよからう。……当家の総領でありながら、玄関にもかからず下僕かのように、コソコソと裏口からあがり込んだ心状、察してこの辺で勘弁してくれ。……や、それにしても蓬生殿、しばらく離れて逢ってみれば、京女郎にも負けないほどの縹織、美しいぞ美しいぞ！……とんだ大弥太は果報者よ、よそへ行けばよその女にもて、家へ帰るとよい女房に……もてると思うがどうだろうか」

——少し酔つてもいるようであったが、それよりも家を久しくあけて、遊びほうけて来た心のひげめを、喋舌ることによつてごまかそうと、大弥太はむやみとまくしたてるので

あつた。

曆をのせた塗りの小机を、しずかに横へ押しやって、側そばに立っている燭台に火を、少しかき立てて明るくし、蓬生はつくづくと良人の顔を、少し涙ぐんだ眼で見詰めたが、

「お父上ご病気ともご存知なく、二月に渡つて、うかうかと他国へさまよい歩かれたあなた、何んと申してよろしいやら……」

「ナニお父上ご病気とな!？」

輪廓はさすがに端麗ではあるが、荒んでいるため卑しく見える顔へ、驚きの色をにわか
に浮かべ、大弥太は声をはずませて云つた。

「ご病気とな? ご大病か?」

「ご大病もご大病、ご乱心あそばされたのでございます」

「乱心! それじゃア気違いだな!」

「それもあなた様のお身の上を案じて……」

「俺ア昔から気違いは嫌いだ」

「ご乱心なされたのでございます」

「ナーニ、俺としてもそういう親心や、お前のおろそかでない志に、まったく盲目という

のではない。が、ただ俺としては狭くらしい、この十津川などに埋かずもれて、豪族でござるの土豪でござるのと、いわば井の中の蛙かわずとなつて、一生を終わってしまうのが、どうにも我慢が出来ないのさ。そこでこの土地にいる間は、近在近郷へ出かけて行つて、鬱憤うつげんばらしの乱暴をやつたり今度のように他国へ走つて、羽根をのして一月でも二月でも、遊あそびほうけて帰らなかつたりするのさ。……が、俺としての本心は、功名手柄勝手次第、下剋上のこの時代に、せめて大国の一つ二つ持った、大名になりとなりたいというのさ。……とところで今度京へ行つてみて、耳よりの噂を耳にしたので、こいつをうまく塩梅あんばいしたら、六波羅殿より莫大もない、恩賞を得られるに相違ないと、それで急いで帰つて来たのさ。……ところがせつかく帰つてみると、お父上が氣違いじゃと。……これじゃアどうにもクサるなあ」

「いいえそのお父様のご病氣も、この頃ご本復なさいまして……」

「ナニ本復？ 治つたのか！ ……馬鹿め、早くそういえばよいに！」

「それも尊い山伏殿のご祈祷のおかげでございます」

「ナニ山伏の？ 山伏のご祈祷？」

「九人の山伏殿が参られました……」

「九人の山伏？ フーム、九人の……」

「そのうちのお若い先達様が……」

「その山伏、その後どうした？」

「家うちにご逗留うちでございます」

「この家に泊まっているというのか」

「はい、それでわたくしどもは、毎日毎日心をこめて、ご接待いたしております」

「そうか」

と、いうと大弥太は、急にヌツと立ちあがった。

この夜呉服くれはは自分の部屋で、一人物思いにふけていた。

若い美貌の先達によって、自分を可憐いとしと云われたことが、嬉しく思われてならないのであった。

恋盛りともいうべき十八歳なのに、これまで呉服は、一度として男を恋したことがなかった。

父なる竹原入道の、家庭教育の厳格さが、あずかって力あるのではあったけれど、呉服

その人の心持ちが、真面目で無邪気で清浄であるのと、呉服の恋心に叶うような、相応した相手がなかったからであつた。

そう、呉服その人は、美しく、気高く、智徳にも優れた、いわば理想的男性を、恋人として求めていたのであつた。

でも、これはいうまでもなく、呉服という一人の女ばかりが、特に持つところの傾向ではなくて、若い思春期の処女おとめでさえあれば、誰でも持つところの傾向なのであるが、それが呉服には特に烈しかったのであつた。

そういう呉服の眼前へ、忽然あらわれた若い先達は、まことにその理想的の男性なのであつた。

しかもその人は法の力で、一族の戸野の小父様の病気を、須臾しゆゆの間に全治させたのであつた。

恋心の上に尊敬の心が、加わり積もらざるを得なかつた。

(可憐いとしと思うてくださるそうな)

そのお方がそうなのである。

幸福と感謝と喜悦とで、彼女の心は充たされていた。

(もうあのお方はお休みであろうか、それともご同伴の方々と、お話をしておいでであろうか?)

逢いたい、話したい、見たいと思った。

几帳きちょうを横にし火桶を前にし、つれづれに眺めていた源氏絵巻を、ほぐしたままでかきやつて、呉服はうつとりと考え込んだ。

雪に折れるらしい竹の音が近い庭先から聞こえて来るばかりで、あたりはひっそりと静かであった。

話し相手に顔を出した、二人ばかりの腰元もあつたが、彼女は追いやつたことであつた。恋の想いにふけるには、一人が一番よいからである。

(でも余りに気高すぎる)

ふと彼女はいつも思うことを、急にこの時思い出した。

(尋常の山伏などとは思われない)

熊野詣での山伏や、吉野参りの道者などが、この十津川へは絶えず入り込んで来た。

十津川は山伏や行者や修験者の、往来の中軸にあたっていた。

それでこの郷さとの人々は、それらの人々を接待することを、習慣としてしているほどであつて、

それらの人々には慣れきつてい、それらの人々の修行の大小や、人物の高下を見抜くことにも、ことごとく勝れているのであった。

彼女もそういう人の一人であった。

その彼女の眼から見た時、若い美貌の先達様は、これまで見た名あるどの先達よりも、ずば抜けて気高く思われるのであった。

(あのお若さでどういうことであろう?)

同伴の八人の山伏も、いずれも勝れた人物揃いなのも、彼女には不思議でならなかった。

(お逢いしたい)

とききりに思った。

(でもこのような夜中などに……お訪ねしたらはしたないと……)

彼女はじつと耳を澄ました。

襖の外を足音を忍ばせて、誰やら通って行く者があった。

また庭で竹の折れる音がした。

呉服くれははとうとう立ち上がった。

(一眼お逢いして、一言お話して……)

で、彼女は部屋から出た。

九人の山伏を相手にして、この夜おそくまで戸野兵衛は、機嫌よく四方山よもやまの話をしていた。

「吉野十八郷十津川地方は、昔から宮方でございましてな、王事には尽くしたものでございすよ」

火桶に両手をかざしながら、兵衛の話はいつの間にか、お国自慢に移って行つた。

「神武天皇様のご東征にも、吉野上かみい市の井い光かりとか、磐いわ排おし分わけの子などという土人の酋お長さが、お従いしたものでございするし、壬じん申しんの乱のみぎりには、吉野をられましたおおあま大海人の皇子みこ、天武の帝でございするが、このお方にお附きして、武功をたてましたのが十津川郷民で、そのため帝がご即位あそばさるるや、諸税免許という有難い恩典に、浴あしましたにございす」

「なるほど」

と云つたのは村上坊こと、村上彦四郎義光よしてゐるであつた。

「それに十津川の郷民とくると、武勇絶倫ということにござるな」

「さようで」

と兵衛は深く頷き、

「保元の乱におきましては、指矢三町、遠矢八町——などと呼ばれる騎射の名手が、南都興福寺の信実だの玄実だのの、荒法師ばらに召し具されまして、新院方にお味方し、比類ない武勇をあらわしましたそうで」

「いったいに郷民の性質が勤厚篤実に見うけられまするな」

こう云つたのは片岡坊こと、片岡八郎その人であつた。

「さようで」

と兵衛は自分の郷民を、そんなように真面目に褒められたので、嬉しそうにまた頷き、「平生は芋野老などを掘りまして、乏しく生活しておりますにも似ず、目前の利害などには迷わされず、義を先にし節を尚び、浮薄のところとはございませぬ。自慢するようではございませぬが、頼み甲斐ある人間どもの巢、それが十津川でございませぬ」

ひとしきり風が出たと見えて、庭の松の木から落ちるらしい凍てた、雪の音がした。

と、狐の啼く声が館を巡つて数声きこえ、山国の冬の夜の荒涼さをしばらく聞く人の心に与えた。

火桶ばかりでは暖かさが足りぬと、部屋のひとところ所に切つてある炉で、さつきから炭火を焚いていたが、兵衛はさらに炭を加えた。

「世上この頃の噂でござるが……」

と、兵衛は真面目な口調で云つた。

「赤坂城を落ちさせられた大塔宮様だいのみやさまには、山伏に姿をおやつしになり、熊野方面へ入りとのこと、おいたわしいことに存じまするな」

一座にわかしんに森然となつた。

上座に端然と坐つたまま、兵衛の話に微笑を含みながら、耳を傾けていた若い先達も、その微笑を顔から消し、爾余の八人の山伏たちは、互いにそつと眼を見合わせた。

が、主人の戸野兵衛は、そういう変化などには気がつかないとみえ、

「神武天皇様ご東征の際、熊野において八咫鳥やたがらすが道案内をいたしました以来、熊野地方も宮方みやほうでござつて、王事に尽くしたものでございませうが、現在の熊野の別当職、定じょう遍へん僧そうず都とは遺憾ながら無二の武家方ぶけほうでございませうれば、大塔宮様熊野におわすと知らば、よもや見遁のがしはいたしますまい……」

「ははあ」

とこの時平賀坊こと、平賀三郎が漠然とした声で、何んとなく曖昧あいまいにそう云った。

「熊野三山の別当定遍、そのように武家方でござるかな」

「無二の武家方にございます。……で大塔宮様におかれましても、そのような熊野において遊ぶより、この十津川へお越し遊ばしたなら、私はじめ郷民つかまつこそって、お味方つかまつ仕りご起居も安泰に、万事とり計らうでございますものを、思うにまかせぬ儀にござりますよ」
兵衛はいかにも残念そうに云った。

矢田坊こと矢田彦七が、この時さりげない様子で云った。

「大塔宮様ご一行、まこと十津川へおしのびあらせられたら、兵衛殿には心をこめられ、真実お味方あそばさるるかな？」

「お味方いたさで何んとしましょう」

兵衛はいかにも凜然りんぜんと云った。

「ご承知のとおりこの十津川は、分内ぶないこそ狭くはございますが、四方嶮岨でございまして、十里二十里の中へは、鳥さえ翔かけがたと云われおります。その上ただ今も申しましたとおり、郷民の心に偽りなく、弓矢取つてはことごとく武夫、で大塔宮様ご一行など、この地にお籠もりあそばされて、関東討伐北条氏覆滅の、策源地さくげんちなどにいたし

ましたならば、まことに恰好かっこうと存ぜられます。……この戸野兵衛真まつ先立さきだちつて、お味方仕るはいうまでもなく、兵衛お味方仕ると宣のらば、鹿ヶ瀬、蕪かぶらぎ坂か、湯浅、阿瀬川、小原、芋瀬、中津川、吉野十八郷の莊司しやうじばら、こぞつてお味方仕るか、すくなくも表立うらだちつて指さす者は、一人もあるべからず存ぜられます」

九人は顔を見合せた。

若い先達——大塔宮は、

(もうよい！ 時期だ！)

とおぼしめした。

「相模！」

と傍かたわらの木寺相模を呼ばれ、

「明かしてよかろう」

と、仰せられた。

と、相模は一揖ゆづしたが、

「戸野兵衛殿」

と厳おごそかに云った。

「ここにおわす御方こそ、今上第一の皇子にましまし、前の比叡山天台座主、ただ今はご還俗あそばされて、兵部卿大塔宮護良親王様におわすぞ！ ……われらはお供の木寺相模」

すると次々にいずれもが宣った。

「光林房玄尊」

「赤松律師則祐」

「岡本三河房」

「武蔵房」

「村上彦四郎」

「片岡八郎」

「矢田彦七」

「平賀三郎」

「兵衛」

と宮家は仰せられた。

「笠置を落ち、赤坂を捨て、熊野へ入り、熊野を脱し、この十津川へ参ったも、郷民昔よ

り王事に尽くし、誠忠であることを知ったからじゃ。……この日頃の起居動作により、兵衛、そちの赤心もわかった。……護良頼んだぞよ。味方仕れ！」

戸野兵衛は、呆然とし、しばらく宮家の御顔おんかおを見守り、それから次々に八人の者へ、驚きの眼を移して行つた。

と、にわかに一問ほど迂り、兵衛は床へ額を押しあてた。

「かしこき極わみ！ ……意外も意外！ ……大塔宮様におわそうとは！ ……尋常の山伏にはよもあるまいと、ひそかに存じてはおりましたものの……よもや、よもや、金枝玉葉の！ ……それに致してもあさましや、この日頃の尾籠びろうの振る舞い！ ……それにもかかわらず 御おんみずか自ら、頼むぞよとのご一言！ 兵衛身にとり生々世々の誉れ！ ……お心安うこそおぼしめせ、戸野の一族身を粉に砕き、ご奉公仕るでござりましょう」

額からは流るる汗！

肩がこまかく顫ふるえている。

雪を刎はね返して延びた竹に、払い落とされた雪の音が、窓のあなたから聞こえて来た。

立ち聞きしたらしい男の姿が、妻戸の蔭から廻廊の方へ動いた。

と反対の扉の蔭から、女の姿が素早く出て、その男の袖を掴んだ。

「大弥太様、立ち聞きされたな」

「誰だ？ ……や、呉服殿か！」

「大弥太様、何んとなさるるお氣じゃ？」

「何んとしようとうわしの勝手じゃ！ ……そういうそなたも立ち聞きされた筈じゃ！」

「立ち聞きしました、立ち聞きしました！ ……聞けば何んとあの先達様は、おそれ多

い大塔宮様！」

「わしもそれ聞いて身が顫えた！ ……が、これこそ絶好の機会！」

「何んだとえ？ さあその訳は？」

「云わぬ！ 云うだけの義理もなし！ ……えい放せ！ 袖を放せ！」

「放さぬ、何んの放しますものか！ ……心よこしまのお前様、おそらく何か慾心にから

れて、……」

「何を囁言！ えい放さぬか！」

「それにお前いつ帰られた？」

「たった今よ、今しがた帰って、蓬生に逢つて話をきけば、九人の山伏が泊まっていると

のこと……耳よりの話京で聞き、はてなと思つてここへ来て……」

「立ち聞きしたのでござんしよう。……いよいよ怪しいお前の振る舞い！ ……心セカセカとつかわとして、これからそなたどこへ行くお氣じゃ?!」

「いつまでもクドクドとうるさいわい……そういうそなたこそ女の身で、このようなどこへやつて来て……」

「わたしは若い先達様に……」

「ははあ読めた、懸想けそしたな！」

「えい滅相な。……でもあのお方様は……」

「尊い尊いお方様よ！ そなたなどの恋、何んの何んの……」

「恋どころか、今は必死！ ……お尽くしたい心で一杯！ ……その眼にどうにもお前の様子が……」

「いらぬ詮索、袖を放せ！」

「思うにそなた慾にかられて、熊野の別当じょうへん定じょう遍へんあたりへ……」

「密告すりやア褒美も褒美、一国一城の主あるじになれるわ！」

「やっぱりそれじゃア……」

「ナーニ違う！」

「見抜いたからは、やってなろうか！ ……どなたか、どなたか、お出合いくだされ！」

「こやつめが！」

グ——ツ！

「あツ、あツ、……誰か！」

が、呉服はくれは咽喉をしめられ、グツタリとなつて廊下に倒れた。

向こうから来かかる人影があつた。

(一大事)

と大弥太は眩き、雪の庭へ飛びおりた。

来かかったのは蓬生であつた!!

「まあ」

と云つて足を止め、

「呉服様ア——ツ」

と仰天して叫んだ。

「気絶して……呉服様が……気絶して！」

雪明りの街道を、大弥太は一散に走っていた。

——京都で耳にした噂というのは、大塔宮様が赤坂を脱し、山伏姿に身をやつされ、八人のお供を従えて、熊野の方へ落ち行かれたが、十津川を経て吉野か高野へ、いずれはご潜行なさるであろう。居場所を突き止め密告した者には、一国一城を褒美として与える。——という、そういうことであつた。

(熊野、十津川、吉野といえはいわば俺の縄張り領分、その辺に事実お忍びなら、探すに手間も暇もいらぬ。居場所つき止め密告し、その恩賞にあずかろう)

こう思つて帰宅したのであつた。

帰宅して見れば何んという僥倖ぎようこう、宮家はわが家におられるではないか！

そこで顔見知りの熊野の別当、定遍僧じょうへんそうず都に告げようものと、今走っているのであつた。

積もつた雪を足で蹴上げ、親に似ぬ子の鬼子おにこの大弥太は、寒さも物かは走って行く。と、嬰兒あかごの泣き声なきこゑがし、それをあやす女の歌声が聞こえた。

泣きそ、な泣きそ

和子よ和子よ……

十津川の錦旗

「や」

と大弥太は足を止めた。

こんな場合ではあつたけれど、寒気のはげしい雪の夜に、嬰兒の憐れな泣き声と、母親らしい若い女の、これも憐れな歌う声を聞いては、立ち止まらざるを得なかつたらしい。

「どこだ？」

と、あたり四辺を見廻してみた。

辻堂がみちばた道端に立っていて、黒い影を雪に印していたが、その中から声は来るようであった。

過ぐる日大塔宮護良親王が、戸野の館へおいでの前に、休息あそばされた辻堂なのである。

(乞食だな、嬰兒をかかえた乞食)

惻隠そくいんの心はなかったが、女に眼のない大弥太であった、どんな女の乞食がいるのか？
こう思つて辻堂へ近寄つて行つた。

狐格子へ手をかけて、格子の間から覗き込んだ。

とたんに竹の杖が突き出された。

「わッ」

と、大弥太は脇腹を抑え、三間ばかりケシ飛んで、クルクルと二度ばかりブン廻つたが、そのまま倒れて、ノビてしまった。

森閑として物音もない。

が、遙かの谿間から、ゴ——ツという音が幽かに聞こえた。

雪なだれの音らしい。

ノビて動かない大弥太の体を、蔽うようにして立っているのは、巨大な松の老木であったが、やがて、その枝がユサユサと揺れて、大弥太の体へ雪の束を、間断なく落として来た。

木の股に大きな雪ゆきだるま達磨だるまがいて、螢火のように緑色の眼を、二点鋭く光らせていた。
それは純白の狸々であった。

猩々卯ノ丸の落とす雪に、大弥太の体は埋うづりもれようとしている。

この頃、二つの人影が、この方角へ近寄つて来た。

「姥うばよ、参まゐつた。寒くてたまらぬ」

「暖め合つて行こうではないか」

鬼火の姥と範覚とであつた。

「こんな時にも、そんな言葉か」

「フ、フ、フ、あたたため合つて行こうぞ」

「そのカサカサした枯れ木のような肌でか」

「贅沢云うな、女の肌じゃ」

「どこか起こして泊まろうではないか」

「泊まるもよいが先もいそがるよ」

「や」

と、範覚は足を止めた。

「姥見だおな、行きだお仕だおれだおじだおゃ」

「不愍ふびんやな、旅人らしい」

「うっちゃやっても置かれまい」

「先が急がるる、捨てて行きな」

「その無慈悲、わしや嫌いじや」

範覚はヒヨイと腰をかがめ、大弥太の額へ手をふれた。

「冷え切つていようの、うっちゃやつて行こう」

「うんにや、ヌクヌクじや、まだ暖かい」

「では死んではいないのか」

「氣絶しているだけじや、そこで活じや。……エイ！」

と、一つ気合を入れた。

「ムーツ」

と、大弥太は呻うめいたが、

「人殺し——ツ」

と、不意に叫び、バタバタと手足をもがかせた。

「こやつ、何んじや、恩知らずめ！ 助けてやったのじや、人助けじや！ それを何んぞ

や、人殺し——ツとは！」

範覚は怒って大弥太の頬を、ガンと一つ喰らわせた。

「わッ、杖だ——ツ、そいつでグーツと腹を突かれた、脇腹をよ！……まだ痛むわまだ痛むわ！……や、あなた方は？ ド、どなた様で？」

はじめて正氣づいた大弥太であった。

いぶかしそうに二人を見た。

「おのれ
汝を助けた恩人よ」

「熊野三山の別当職、定遍僧都にお眼にかかろうと、夜をかけて行くわしら二人に、逢ったお前さんは幸福者しあわせものさ」

鬼火の姥も見下ろしながら云った。

その翌日から戸野兵衛は、澆刺はつらつと活動を開始した。

まず黒木の御所ごしよをつくり、大塔宮を奉戴ほうたいし、四方よもの山々に関を設け、路を切りふさいで往来を吟味し、叔父竹原八郎入道へ、今回の事情を申しやった。

竹原入道は直ただちに伺候し、一味誠忠の志を披瀝ひれきし、さらに謹んで言上した。

「戸野の館もさることながら、わたくし館はより手広にこれあり、しかも要害嶮岨にござれば、わたくし館へお移りくだされば、万事好都合かと存じまする」

戸野兵衛にも異存がなかった。

そこで大塔宮ご一行は、竹原の館へ移られた。

はたして兵衛の言明したとおり、とつがわごうみん十津川郷民は須臾しゆゆにして、おおよそ宮家に帰服して、

宮家を守護たてまつし奉るようになった。

やがて竹原入道の娘、呉服くれはは宮家の愛を受け、入道は志しをいよいよ傾け、兵衛もことごとく悦喜して、一族心一つにし、宮方加担に懸命した。

あわただしいうちにその年も暮れ、明けて元弘二年となり、その年の四月の候となった。熊野本宮の別当館の、奥まった部屋で四人の者が、ひそかに話を交わしていた。

眉ゆづけい太く頬の肉の厚い、逞しい僧は館の主あるじ、すなわち定遍僧都であったが、脇息により中ち啓けいを突き、鬼火の姥と範覚と、大弥太とをこもごも眺めながら、

「忌きたんなく申すがよい、忌なく申すがよい」

と、三人の云い条をうながすようにしていた。

「大弥太殿は十津川のお方、地理にも人情にも詳しゆうござれば、申すお言葉も正せい鵜こくを

射ていて、胸に落ちるでござります。……大弥太殿、そなたの意見は？」

こう云つたのは鬼火の姥で、いくらか荒すさんでいるけれど、なかなか美貌の大弥太に対し、まんざらでもない心から、その歡心を迎えるように、こう追従らしく云つたのであつた。

「これまでも幾度か申しましたとおり……」

と、大弥太は姥におだてられたので、小鼻などをうごめかせて、得意の様子で話をすすめた。

「あの十津川と申します土地は、嶮岨ならびなき地ではあり、郷民と申せば勇猛の者ばかり、力攻めにいたしましたら、五万八万の衆徒をもつてしましても、従えますこと困難にござります。……で、これはどうありましよう、智謀をもつていたしませねば、大塔宮様を討ちとりますること、おぼつかないよう存ぜられます」

「もうその云い条聞き飽いているわい」

こう云つたのは範覚であつた。

彼は姥が自分を袖にし、大弥太へ水を向けているのを、胸わるく思っているところから、ことごとにあたつて行くのであつた。

「智謀智謀と偉そうに云うが、智謀が往みち来にころがつてはいまいし、そうそう目付かるも

のではない。……それともそなたによい智謀があらば、ちやつと披露するがよいわえ」

「あるともよ」

と大弥太は云った。

「利を喰らわせて裏切らせるのよ」

「古い手だの、何が智謀じゃ」

「古い手も新しく用うれば、新しい手になるものよ」

「その新しい手聞きたいものじゃ」

「立て札を辻々に立てるのよ」

「何立て札？ なんの札じゃ！」

「大塔宮様討つたる者へは、莫大の恩賞与うるの立て札！」

「それで裏切り者出ようかの？」

と、姥がいささか心もとなさそうに云った。

「そなたさつきも云われた筈じゃ、十津川郷民は勇猛じゃと。……いやいや勇猛ばかりでなく、利にくらまされず節義を尚ぶと、久しい前から聞いてもいるに」

「何んの」

と大弥太は一人のみ込み、

「おおよその郷民は仁に近い木訥ぼくとつ、融通きかぬ手合いではござるが、中には利さとに敏さとい者もあつて……」

「さようさ、ちようどお前のように」

と早速範覚が横口を出した。

「何を！」

と、大弥太は怒鳴つたが、しかし凶星をさされたので、怒鳴つたとたん、赤面した。

「これこれ」

と、はじめて声をかけたのは話を聞いていた定じようへん遍へんであつた。

「範覚つつしめ、口がすぎるぞ。……大弥太気にかけるな、さてそれから」

「はい」

と、大弥太は一揖ゆうし、

「その立て札を見ましたならば、八莊しやうじ司しはじめ郷民たちは、動揺いたすでござりましよう。そこへつけ込み私はじめ、姥殿にも範覚殿にも、手を分けて裏面から、誘惑いざないの腕ふるいましたら、宮様の御首級みしるし搔かこうとする者、幾人か出るでござりましよう」

「なるほどのう」

と、定遍は云った。

「悪くない手じや、やってみようか……立て札へ書く文面が、そうなると大切なことになる」

「御意で」

と姥が口を合わせた。

「出来るだけ読む人の心持ちを、まどわすような文面を……」

「ひとつとつくりと考えてみよう」

定遍は眼をとじて考え込んだ。

密談に相違なかつたので、襖はことごとく開けはなされていた。午後の中庭が見えていた。

泉水の岸、築山の裾に、盛りを過ぎた桜の花が、それでも枝に群れていて、ひっきりなしに散っていた、老鶯の声もしきりに聞こえた。

四人はしばらく黙っていた。

それにしても姥や範覚は、どうしてこんなところへ来たのであろう？

漢あやごんのかみ権守の居城から、あんな事件で走り出し、飛天夜叉かつらこ桂子の一団を討つべく後を追ったけれど、見失って討つことが出来なかつた。

間もなく赤坂の城が落ち、大塔だいたうのみや宮様や楠くすのきまさしげ木正成が、自害をして果ててしまった。が、慧眼けいがんの鬼火の姥には、詭計に思われてならなかつた。

はたしてその後聞こえて来たのは、大塔宮様一行が山伏姿に身をやつされ、熊野から十津川方面へご潜行あそばされたということであつた。

武家方である鬼火の姥は、そこでこのように考えた。

（大塔宮様こそ関東討伐の、宮方の総帥そうすいにおわします。勿体もったいないけれど御首級頂戴みしるしせねば）と。

で、範覚と連れ立って、十津川へ入り込んで来たのであつた。

しかし、単独では事なしがたい。無二の武家方の熊野の別当、定遍僧都のもとをたずねて、力を合わせて事を行なおうと、熊野に向かつて、さらに進んだ。

その途中で大弥太を助けた。

すると意外にも、その大弥太が、宮家の居場所を知っていて、定遍僧都に密告しようものど、出かけて来たところだということであつた。

そこで、連れ立ってここへ来たのであった。

定遍は三人の来訪により——主として大弥太の口により、大塔宮様一行が、戸野の館におわすことを知り、驚き喜び討ちとるべく計った。

しかしその時にはもう宮家には、竹原入道の館へ移られ、十津川一帯の荘司や郷民が、宮方に附いたと聞き知って、手を出すことを躊躇した。

こうして、今日になったのである。

それから数日の日が経った時、鹿ヶ瀬、芋ヶ瀬、玉置^{たまき}、蕪^{かぶらぎ}坂、その他十八郷の辻々に、一夜にして頑丈な立て札が立ち、人々の眼を驚かせた。

さてその日のことであるが、玉置の辻に立てられてある、その立て札の前に立ち、武士や郷民や旅人が、女もまじえ子供もまじえ、ガヤガヤと罵^{ののし}っていた。

「誰かこいつを読んでくれ」

「お前読みな、遠慮はいらねえ」

「おれ読めぬ、鳥眼でな」

「朝見えない鳥眼なんて、おおよそ世間にあるものでねえ」

すると一人の山伏が、声高く立て札を読み出した。

「——大塔宮ヲ討チ奉リタラン者ニハ、非職凡下ヲイワズ、伊勢ノ車ノ庄ヲ恩賞ニ充テ行
 ナワル可キ由、関東ノ御教書有之、ソノ上ニ定遍先ズ三日ガ中ニ六千貫ヲ与ウベシ、
 御内伺候ノ人、御手ノ人ヲ討チタラン者ニハ五百貫、降人ニ出デタラン輩ニハ三百貫、イ
 ズレモ其日ノ中ニ必ず沙汰シ与ウベシ。——とこう立て札には記してあるのじゃ」

すると群集は喚き出した。

「宮様を討てとは何事だ」

「熊野の定遍の悪巧みだな！」

「こんなものに何んでまどわされるものか！」

「こんな立て札ひき抜いてしまえ！」

「待て待て」

と山伏があわただしく止めた。

「さてさて、とはいえ、悪くないのう、非職凡下というからには、失業している平民ども
 じゃ、それが宮様さえ討ちとつたら、一庄の主になれるのじゃ！ 六千貫貰えるのじゃ！

……乞食が大名になれるというものじゃ！ ……悪くないのう、悪くないのう！」

「黙れ、こやつ、とんでもない奴だ！」

「頬ほおげた張り曲げろ、叩き殺せ！」

群集は怒って騒ぎ出した。

しかしその時にはその山伏は——それは金地院範覚であつたが、もう姿をくらませているた。

芋ヶ瀬の郷の辻に立つた、同じ種類の立て札の前でも、群集がたかつて騒いでいた。

その中に雑まじつて煽せんどう動しているのは、巫女みこすがた姿の鬼火の姥であつた。

「悪くないぞよ、悪くないぞよ、平民から一足とびに大名になれ、一文なしから大金持ちになれるのじゃ。……まだまだ世の中は武家の天下じゃ！ 武家方に忠義をつくすがよいぞよ！」

群集が怒って喚き出した頃には、姥の姿は見えなくなっていた。

中津川の郷の四辻にも、同じような立て札が立っていて、黒木売りや干魚売りや、武士や農夫や、炭焼きが多勢その前に集まって、罵り騒ぎ批評ひびうしていた。

顔を布で包んだ上に、塗り笠でさらに顔をかくした武士が、煽せんどう動的どうてきに喋しゃべ舌しやべつっていた。

「断行！ な、こいつが大事だ！ 思い切った出世をしようと思つたら、思い切った仕事

をやらなければ嘘だ！……な、よいか、わかったか！」

しかし群集は怒鳴り出した。

「とんでもねえサムライだ、ぶち殺せ！」

「勿体ない奴だ、生かして帰すな！」

その武士の方へ押し寄せて行つた。

しかしその武士はもうその時には、どこへか姿をかくしてしまつた。

まだ群集は散ろうとはしないで、立て札の前に集まつて、思うままのことを喋舌しゃべつていた。

そのうちに一種の群集心理で、立て札を抜いて倒そうと、大勢が立て札へ手をかけて、エイエイ声して引き抜きはじめた。

と、向こうから地頭の召使いらしい、横柄な様子をした侍が、息せききつて走つて来たが、二、三人を打擲ちやうちやくして罵つた。

「熊野別当様のたてられたお札を、おのれら抜くとは何事じゃ！ 謀反人じゃぞ謀反人じゃぞ！」

しかしそう叫んだ次の瞬間に、その侍はのけざまに仆たおれ、しばらく手足をバタバタさせ

たが、やがて延びて動かなくなつた。咽喉のどから血を吹き出している。

群集たちは仰天し、その周囲へ集まつたり、その周囲から逃げたりした。

そういう混乱の人の渦から遁がれ、顔の前へ白布を垂らし、嬰兒あかんぼを抱いた姑獲鳥うぶめのような、女乞食に手を引かれ、少し血のついた竹の杖をついた、盲目の乞食がトボトボした足どりで、野の方へ歩いて行くのが見られた。

その時まで男女のその乞食は、群集にまじっていたものらしい。

でも誰もが竹の杖の先の、血粘ちのりに氣のついた者はなかつた。

「兄上参ろうではございませんか」

これも群集にまじりながら、立て札を見ていた一人の武士が、もう一人の武士へこう云つた。

「参ろう」

ともう一人の武士は答え、誰にともなく突き殺された、地頭の召使いの死骸をかこんで、立ち騒いでいる人々から離れ、野路の方へ足を運んだ。

兄弟らしい二人の武士は、きらびやかな風をしていたが、二人ながら深い笠で、その容貌をかくしていた。

やがて二人は芒すすぎの原へ出た。

峻しい山々に囲まれながら、起伏して拡がっている芒の原は、小松を雑えて青味立ち、ちよろちよろ水をとどこどこに流し、鶺鴒せきれいや山鳥の飲むにまかせていた。

ときどき雉子きしの啼き声がきこえた。

「右源次」

と兄らしい方の武士が云った。

「考えなければならぬのう」

「はい。……何んでございますか？」

弟らしい武士は訊き返した。

「何んでございますかといったところで……いや、何んでございますかではないよ。……大塔宮様は我が家におられる。……で、我らどうとも出来る」

「はい。……さようにございます」

「お父上にはあのとおり、……戸野の小父様にもあのとおり、大変もない熱心さをもって、ご奉公申し上げてはいるけれど……」

「それに妹呉服くれはことも……」

「うむ、お仕えいたしているが……」

「……………」

「しかしだのう、しかしだのう……」

「……………」

「熊野の別当 定^{じょう} 遍^{うへん} 殿が、こうも 辛^{しん} 辣^{らつ} に敵対するからは……」

「……………」

「それにわが身の眼から見れば、宮方なんどまことに微力……」

「さようで」

と、弟の右源次は云った。

「承久以来幾度となく、朝権恢復を試みましたが、いつもほとんどひとたまりもなく、武家方によって粉碎されました」

「今回とてもその通りじゃ」

「そのとおりにござります」

「で、わしは思うのじゃ、父上や戸野の小父^{おじ}などと一緒に、宮方にご奉公いたそうものなら、数代つづいた竹原の家が、武家方によって滅ぼされようもしれぬと」

「わたくしにもそれが案じられまする」

「大塔宮様はわが家におわす」

「致そうと思えばどのようなことでも」

「うむ」

「それに……ともかくも致しますれば……車の庄はわが手に入ります」

「六千貫も手にはいる」

兄弟はここで沈黙した。

よしきりが群れて芒の中で、騒がしく啼き立て羽搏はばたきしたが、一斉に立つて晴れた空へ、碁石まを蒔いたように散つて見せ、すぐに一、二町はなれた野面のづらへ、また一斉に落ち込んだ。

「……が、御方おんかたは宮家だからのう」

ややあつて兄の左源太が、心弱そうに呟くように云つた。

「……大逆の身になるのだからのう」

「が、先刻の顔を包んだ武士が、思い切つて出世をしようと思つたら、思い切つた仕事をやらねばと……」

「云つたのう、きやつ云つた。……それにしてもきやつ何者であろう？」

「見覚えあるように思いましたが……」

「おお、お前もそうだったか、わしも見覚えあるように思った。……それにあの男にあいわれたので、わしとしては心を迷わしたのだが……」

この時背後から呼ぶ声が聞こえた。

兄弟の者は振り返った。

顔を包み笠をかぶった、先刻の武士が塵埃ほこりを蹴立て、陽かげろう炎立つ道を走って来ていた。

「わしじゃ、大弥太じゃ、待ったり待ったり！」

それは戸野大弥太であった。

大弥太は笠を取り頭巾を脱ぎ、額の汗をぬぐったが、

「追ったぞ追ったぞ、ずいぶん追ったぞ、でもよかった、追いついてよかった」

「大弥太！」

と、竹原入道の子息、その兄の方の左源太が云った。

「いま貴様いったいどこにいるのじゃ?!」

「熊野にいるのよ、定遍様の館に」

「ふうん」

と、兄弟は顔を見合せた。

「妹から——呉服くれはから聞いたところ、貴様京の地へ長旅ながたびをし、帰つて来たと思つたところ、その夜すぐに飛び出してしまい……」

「しかも」

と、弟の右源次が云つた。

「しかも行きしなに妹呉服の、咽喉のどを締めるといふ悪てんごうをして……」

「氣絶させたといふことではないか！」

「云うな云うな過ぎ去つた事だ」

と、大弥太はさすがに鼻じろみながら、手を振り振り打ち消すように云つた。

「それというのも大塔宮様が、わが家においでと突き止めて、驚喜しての所業だからのう。……つまりわが身はその宮家を……と思うのに呉服にはあべこべに……そこで氣絶させて飛び出したのだからのう。……ところで兄弟そちたちの心は、いったいどっちへ傾く気が？」

「どっちへとは何をよ、何んのことだ？」

左源太はわざと解らないように云つた。

「わが身はすでに定遍様の方へ、隨身をしてしまったのだから、宮家に対する心持ちが、どうあるうか解っておろう。……うちあけて云えばあの立て札を、あんなように辻々に立てて、御首級みしるしいただこうと企らんだのも、わしから定遍様へ建議したからよ」

「悪い奴じゃ！ 逆賊め！」

「アツハツハツ、そうかもしれぬが、国主にはなりたいたいのう」

「六千貫も欲しいからのう」

これは弟の右源次の方で、——兄よりも徹底的に現実主義者だったので、こうズバリと云ったのである。

「そうともよ」

と、大弥太は応じた。

「さて、ああいう立て札を立てて、吉野十八郷の者どもに、御首級みしるし搔きをそそのかし、裏手からわれらがそれを駆り立てる。……今朝からそいつで走り廻っていたら、ひよっこりお主ら二人を見かけた。……そこで追っかけて来たのだが……これ兄弟考えたがよいぞ。……やろうと思えば、お主らこそ絶好！ ……宮家現在はお主たちの館に、御足みあしとどめておられるのだからのう」

「そうともよ」

と、また右源次が云った。

「俺はもう心を決めているのだが、あにじゃひと兄者人がうごさべん右顧左眄、家のことを思ったり、大逆になるのを恐れたりして……」

「お父上のお心を推し計るとのう」

と、やはり左源太は二の足ふむように、

「妹の心こころ根を思いやつてもものう」

「では、最初から云い出さねばよいのじや」

と、弟の右源次ははがゆ齒痒そうに云った。

「来る道々宮家に対し、討とうか討つまいか考えものじやの、宮家方に附いては家が持たぬのと、云い出したのは兄者人じや」

「それもさ家のことを思えばこそじや」

「それぞれ」

と、大弥太はけしかけるように云った。

「うかうか宮方などに附こうものなら、竹原の家は滅びるぞよ」

この時^{すずき}芒の原の小松の蔭から、竹の杖をついた乞食の姿が、音も立てずにあらわれた。それは土岐頼春であった。

首を垂れ肩をちぢめ、竹原兄弟と大弥太との方へ、芒を分けて寄って行った。

盲目の眼の辺りが落ち窪んでいて、そこへ黒い隈^{くま}が出来ていた。

盲目の乞食が近寄るとも知らず、大弥太は二人へそそのかすように云った。

「俺はな、親父の兵衛に反^{そむ}いた、そちたちも親父に反くがいい、由来老人というものは、古いものを好んだり、古いことに執着を持つものじゃ。そこで宮方などというのであるが、若いわれらはそうはいかぬ、現^{いま}在の勢力に眼をつける。そこで俺は武家方よ！ ……そこで宮家を、な、宮家を！」

この時頼春は大弥太の背後へ、すでに近々と迫っていた。

竹の杖が持ち直された。

が、不意に嬰兒^{あかご}の泣き声が、小松の蔭からけたたましく聞こえた。

「や」

と、大弥太は振り返った。

「嬰兒^{あかご}が泣いてる、あの嬰兒の声は？」

瞬間に竹の杖が突出された。

「わッ」

しかし辛く外して、大弥太は横手へ飛び退いた。

「乞食め！ ……竹の杖！ ……あッ竹の杖!!」

いっぞやの晩辻堂の中から、嬰兒の泣き声が聞こえて来たので、狐格子の外から覗いたところ、突然杖を突き出され、それに脇腹をしたたか突かれて、気絶したことを思い出した。

「汝は……汝は……汝は何んだ！」

刀の柄へ手をかけながら、顫え後退りし大弥太は叫んだ。

「乞食の分際で……汝、何んだ!!」

狙いを狂わせ突き損じ、頼春は怒りと恥辱とを、心に深く感じながら、なおジリジリと刻み足で、大弥太の方へ進んで行った。

「俺はなお前達の先達だ。そうだ俺は裏切り者だ！ お前達より先に裏切った者だ！」

「何を馬鹿な、が、汝は……」

「これよく聞け愚か者め！ 日本は神国そのご皇統は、一筋にして神の界より出ている！

……この一事にさえ心づかば、進退あやまりなかるうに、おのれ汝らあやまろうといたしおる！……宮家の御首級みしるしいただこうとなり！……不忠、大逆、極重悪人め！……われ裏切り者には相違ないが、そこまでの悪業はまだまだ！……それ聞いては許すことならぬ！……汝らが討とうとする御方おんかたは、私情から申してもわが身にとっては、かけがえのない御方じゃ！……その御方のお口より、許すとの一言承わろうと、諸方を乞食して巡りおる者じゃ！……汝等に討たれてたまろうや！」

云い云い頼春は大弥太の方へ、足の先にて地面を噛み、ジリリジリりと寄って行つた。大弥太はもちろん竹原兄弟も、幽鬼じみた相手の凄すさまじい様子に、身の毛のよだつ思しいしい、一歩一歩あとじさりしたが、

「なの宣れ！ 汝は、汝は何者だ！」

「日本は神国そのご皇統は、一筋にして神の界くにより出ている——この大真理を見誤つて、宮方より武家方に裏切つた者じゃ！……そうして※悔ざんげと浄罪との旅に、今は出ている憐れな乞食じゃ！」

云い云い頼春は大弥太たちの方へ、盲目とは思われない確かな足どりで、尚つめるように寄って行つた。

斬られてなくなっている左の腕の、肘の辺りから長い袖が、潮垂れたように垂れているのが、歩くにつれてヒラヒラ靡き、小旗でもそこへつけているようであった。

「逃げろ兄弟！ 左源太、右源次！」

不意に大弥太はこう喚くと、野路を一目散に売り出した。

「……………」

「……………」

それに続いて竹原兄弟も、同じ方向へ一散に走った。

「卑怯者」

と頼春は呟き、足を止めて地へ顔を向けた。

「いつかは餌食にしてくれようぞ」

この時芒すすきの原の小松の蔭から、また嬰兒あかんぼの泣き声があったが、やがて早瀬の姑獲鳥うぶめのような姿が、芒を分けて歩いて来るのが見えた。

「あなた」

と早瀬は声をかけた。

「頼春様」

とおずおずと呼んだ。

彼女の姿は頼春の横の、足もとの辺へうづくまつた。

「でも今日は殺^{ひどごろし}人は、一人だけで済みましてござりますのね」

怨むような恐れるような、非難するような声であった。

「あなた様とご一緒になりましたから、あなた様にはまア幾人、人を手にかけて殺しました
ことか」

「誰だ！」

と不意に頼春は云った。

怒りと憎しみを底に持った、表面冷淡な声であった。

「わしに物を云いかける女、いったいそちは何者だ！」

「あなた様の妻、妻の早瀬」

「昔はそういう女房もあつた。……が、その女房は良人^{おっと}を裏切り、良人の大事^{しゅうと}を舅へ告げ、

良人を裏切り者にした筈だ」

「ああまたそれを……それをあなた様には……」

「その女は蝮^{まむし}を良人に嘯ませ、良人を不具者にした筈だ」

「存ぜぬことでござりました。……そうしてそのことはもうこれまでに、幾度お詫びを申しましたことか……」

「その女は良人の良心を、地獄の苛責かしやくに逢わせようと、良人の殺した女の嬰兒あかんぼの、泣き声を不断に聞かせる筈だ」

「この子ばかりは……可哀そうに……もうすっかりわたしになつて……どうぞお許しくださりませ」

「それでも妻か！ 妻といえるか！」

「……………」

「あなた、ないしは頼春様などと、俺を親しそうに呼ぶ女は誰だ！」

「……………」

「漢あやごん権守のかみの恐ろしい居城の、あの騒乱の際において、ゆくりなく互いに手を取った、それが縁となつて二人は逢い、話し合ってみれば、話し合ってみれば……が、わしは云つた筈だ、『漂流人さすらいびと同士、乞食同士となら、ついて来い、一緒に行こう』と。……」

「漂流人さすらいびと同士にござります。乞食同志にござります」

「そうだ、二人は他人同志だ」

「でも……ああ……いつになりましたら？」

「……………」

「良人じゃ妻じゃと……」

早瀬は泣いた。

風が顔の前の垂れ布を靡かせ、涙の伝わっている頤あごのあたりを、白っぽい陽にひとしきり曝さらした。

「わしの罪が許された時に……」

「……………」

「わしの心はのびやかになろう」

「……………」

「人を許す心にもなるだろう」

「その時わたし妾の罪を許して……」

「うむ」

と頼春は頷うなずいた。

茫々と展開ひらけている芒の原には、春の陽がなんどりとあたって、小松が斑しみ点のように

ところどころに生え、小丘が波の蜨りのように、紫ばんだ陰影をもって、芒の上^{すすぎ}に起伏していた。

と、犬の悲鳴が聞こえ、そこから忽然と空へ向かつて、純白な毬^{まり}のような物が飛び上がり、すぐに芒の中へ落ちてしまった。

芒の中に一匹の野犬が、腸^{はらわた}を食い裂かれて斃^{たお}れてい、その傍^{かたわ}らに猩々卯ノ丸が、人間のよう^{はくもつ}にうづくまり、白毛の生えている腕の先を、血で深紅に染めながら、犬の腸を引き出していた。

この獣にとつては遊戯^{あそび}らしかった。

と、卯ノ丸は立ち上がり、野路の方を凝視した。

夫婦とも見える男女の乞食が、野路を歩き出したからである。

竹原館へ入らせられてより、大塔宮は熊野、高野、吉野方面の衆徒の動静や、京都の動静^{みこころ}へ御心を配られ、村上彦四郎以下八人の家臣や、竹原入道の家来をして、その様子をさぐらせられた。

と、ある日山伏姿をした、四条左少将^{たかさだ}隆貞卿が、竹原館へ訪ねて来た。

「おお隆貞か、よく参った」

「宮、ご壮健であらせられ、何よりの御事おんことに存じ上げまする」

二人は館の奥まった部屋で、互いに無事を喜び合った。

隆貞は宮家と終始一貫、笠置かさぎの城へも籠もったのであり、赤坂の城へも籠もったのであるが、熊野落ちの際ひき別れ、一人京の地へ潜人し、この時まで様子を探っていたのであった。

痩せもしたり陽やけもしたりして、殿上人などとは思われない、野武士のような隆貞は、でも勇気は失わず、澁刺としたところを持っていた。

「父帝みかどには？ ……その後いかがか？」

宮家は真つ先にお訊ねになった。

「は」

と、隆貞はお答えしたが、しばらくの間は黙っていた。

甲 胄かっちゆうの擦れ合う音をたてて、宮様ご警護の竹原家の家来が、館の庭を往来ゆきぎしている姿が、簾越すだれごしに見えるのへ、隆貞は視線を投げていた。

「隠岐おきにご巡幸と事定まりまして、御おんいたわしくも三月十七日に……」

と、ややあつて隆貞はポツツリと云った。

「ナニ隠岐へ？ 遠い島へか」

宮家は不意に横を向かれ、両眼をしずかに閉じられた。

出雲いずものあなた、日本海の上に、潮煙しおけむりに巻かれて点在している、孤島の姿が映つて見

えた。

「尊たかなが良親王様におかせられましたは……」

と、隆貞のしめつた声が云った。

「土佐の国へ御流遷おんるせん……尊澄たかすみ法親王様におかせられましたは、讃岐さぬきの国に御流遷……」

「承久の例そつくりじやな！」

両眼を鋭く見ひらかれ、宮家は烈しい御声おんこゑで云われた。

「不届きな北条！ ……陪臣の身をもつて！」

また宮家には御眼おんめをとじられた。

承久三年のことであつた。北条氏の越権をお怒りになり、これを滅ぼして政治の大権を、朝廷に復して常道に帰そうと、こう思しめされた後鳥羽上皇には、仁科盛遠にしなもりとお、三浦胤たねよ義よし、これらの武士を召させられ、北条氏討伐をお計り遊ばされた。

その結果は不幸にも、宮方のいたいたしい敗戦となり、本院には隠岐の島へ、新院には佐渡の島へ、中院には土佐の国へ、この日本に武将あつて以来、もつとも腹黒き逆臣の代表、冷酷苛察かさつの人畜ともいふべき、北条義時の手によつて、それぞれ御配流おんはいりゅうのお身の上になられた。

この一事を卒然と宮家には、今お思い出し遊ばされたのであつた。
隆貞も黙つていた。

で、部屋内はひっそりとなつて、哀愁の氣ばかりが漂つて感じられた。
が、にわかには宮家の御顔おんかおへ、快然とした微笑が産まれ出た。

「隆貞ご覧」

と、仰せられ、背後の方へ御指おんさしをさされた。

見れば背後の床ノ間に、日月を金銀で打ちつけたところの、錦の御旗みはたが一流れ尊嚴そのもののごとく森然と、靈氣を含んで立ててあるではないか。

「……………」

隆貞はただに頭かしらを下げた。

「ね」

と、宮家は仰せられた。

「御旗みはたが我らをお守りくださる。……いや我らが御旗を捧げて、まつろわぬ者どもを折しやっ伏ぶくするのだ」

「靡なびかぬものとはござりますまい」

「日本ばかりか異国さえも靡なびくよ」

吉野へ！

幾日か日が経った。

宮家は令旨を竹原入道に与え、伊勢の国へ兵を出し、平定すべくお命じになった。

竹原入道は仰せかしこみ、その準備にとりかかった。

この頃楠木正成のもとより、

「千早に城を築く以前に、赤坂の城を奪回仕り、關東方の胆を寒からしむる所存」

という、痛快な報知しらせがもたらされた。

さらに吉野の衆徒からも、また高野の衆徒からも、

「宮方へ加担」

という報知が来た。

「着々事が運んで行く」

宮家は悦喜しました。

そうして宮家御自身おんみずからには、一挙に京都へ征め上り、両六波羅を滅ぼそうものと、より軍備あそばされた。

しかし、この頃宮家の御心みこころを、すこしく暗くする出来事が起こった。

熊野の定遍が狡智をもつて立てた、例の立て札が功を奏し、吉野十八郷の莊司のうちに、武家方に加担し宮方を裏切り、この身に害を加えようとする者が、幾人か現われたことであつて、玉置たまぎの莊司しやうじや芋ヶ瀬の莊司は、それに疑がいなさそうであつた。

(油断は出来ない)

と、おぼしめした。

まめまめしく仕えていた竹原入道の息子、左源太、右源次の二人の若者が、この頃ほとんど館にいつかず、どこへ行くのか外出ばかりし、時々帰って来るかと思うと、宮家の御お眼んめを避けるようにするのも、御心みこころにかかつてならなかつた。

そうして、このことは、宮家ばかりでなく、宮家の家臣の誰彼の眼にも、疑がわしく見えるようになってしまい、ある日村上彦四郎が、ひそかに宮家へ言上した。

「竹原入道の二人の息子、この頃の振る舞いちと審しく……」

「それじゃよ」

と、宮家は仰せられた。

「入道の誠忠には疑がないが、左源太、右源次の二人はのう」

「戸野兵衛の息子大弥太は、熊野定遍の部下となり、勿体なくも宮家のご身边を……」

「うむ、過日も蓬生が参つて、泣く泣くそのことを申しておつた」

「彼らこそまことに親の心子知らず……」

「……………」

「表立つて敵対^{てきと}う輩^{やから}には、備うべき手段もござりまするが、内輪にあつて逆意持つ者には

……………」

「備うべき策にも困^{こづ}ずるのう」

「所詮十津川も安泰の地にはおわさず」

「入道や兵衛には気の毒ではあるが、早晚この地も捨てずばなるまい」

「捨ててきて宮家には？」

「吉野へ行こう、要害の吉野へ」

「至極の御事おんと存じまする、……この頃しきりに吉水院よしみずいんのもとより、ご来駕促きやせまがしおりますれば……」

「吉水院は完全に宮方。が、執行しぎようの岩菊丸は、首鼠両端しゅそりょうたんを持しておるとか……」

「宮家吉野へおいで遊ばし、吉水院に御力おんりきを添え、岩菊丸を御抑おんおさえ遊ばすこそ、もつとも肝要かと存ぜられまする」

「いずれにいたしても十津川このちを去るべく、ひそかに用意いたすよう」

「かしこまりましたござります」

また数日の日が経った。

ふと宮家は詩情を催され、お供もつれられずただお一人で、館の裏庭へおでましになり、咲き垂れている藤の花の上に、臙ろおぼろに出ている月を仰ぎながら、朗詠くちやうを口誦くちずさまれ彷徨さまよわれた。

中門の側まで来た時であったが榎つぎの木の太木が立っていて、その裾すそに萩うつきと卯木うつきとの叢くさむらが、

こんもり丘のように繁っていたが、その蔭から男女の声が、ヒソヒソとしてきこえて来た。
 「兄の頼みじや、妹の身として……」

「いかな兄上のお頼みでも、勿体ない、だいそれた……」

右源次と呉服くれはとの声であった。

「はてな」

と宮家はおぼしめし、じつとお耳を澄まされた。

「われらが事を行なわねば、大弥太が事を行なうまでじゃ！ ……きやつに功を奪われてはのう！」

「大弥太めが?! ……憎い憎い大弥太！」

「兄上は優柔不断！ でもとうとう決心されて……玉置、芋ヶ瀬の荘司の方へ、……先刻内通に行かれた筈……」

「ええまア穢けがらわしい、聞けば聞くほど……あそこにもここにも不忠者ばかりが……」

「父上には昨日よりお留守……で、今夜あたりが絶好の機会……呉服たのむ、やってくれ！」

「ええもう聞く耳持ちませぬ！ ……思っただけでも勿体ない……身の毛のよだつ大悪逆、

それをわたしに勧めるとは！ ……ひとでなし、何が兄きょうだい妹い！ ……手助けはおろか改心なされずば、その旨すくにも宮様にお告げし……」

「えい女郎めらう、何を云うぞ、宮様に明かされてたまるものか！ ……むずかしことを頼むのではない、ただお枕もとの御佩刀みはかせを、こっそり持ち出してくれさえすれば……宮家はご武勇でいらせられるからのう……得物をお手にされたひには……それで御佩刀みはかせをまず奪い……後はわれらが、われらがやる！」

「天魔に魅入られたと申そうか、その恐ろしいお心持ち！ ……父上にお恥じなさりませ！ ……宮様の御令旨おんれいしかしこんで、近々伊勢へ打って出ようと、あのご老体で東奔西走、昨日もお留守今日もお出かけ、兵の催促やら、兵糧武器の仕入れやらに、懸命になっておいでなされます。……戸野の小父さまも同じお心で、父上と行動を一つにされ、父上ともども毎日の奔走！ ……それを血気の兄上たちは、目前めまきのわずかな利に迷い……」

「口賢さかしく小女郎こめらうが何を云うぞ！」

「いえいえ云います、云います云います！ ……目前の利に心を眩ませ、順逆の道踏み迷い……」

「うるさい！ 黙れ！ 時刻ときが経つわい！」

「極悪といおうか大逆といおうか、この日本ひのもとの人間として、行なうまじきを行なつて……」

「まだ云うか！ その頬げた！」

「ご先祖を恥ずかしめ家を穢し！」

「愚か者めが、何を云うぞ！ その家を立てるため栄えさせようため、今度の企てたくらんだのじゃ！」

「やがては……すぐにも……兄者人の命も……」

「死なぬの、なかなか、それどころではない、車の庄の主として、長く栄えて冥みようが加得る気じゃ！」

「あくまでご改心なされぬお気なら……」

「よく聞け、見ろ、今夜のありさまを！ ……いつもは篝かがりび火諸所に焚き、宮様警護の家の子ども、槍薙刀をひっさげて、館の内外に充ちているのに、今夜に限つてこの寂しさ！

何故じゃ？ 云おう、明かしてやろう！ みんな俺のやったことよ！ 彼らにしたたか酒くらわせ、遠とおざむらい侍や廊の詰め所に、夢こんこんと結ばせているのじゃ！ ……さてそ

こでこの右源次様が、合図の太鼓をドンと打つ！ と、玉置の莊司から、よこしてくれた

荒くれどもが、伏せてあるところから一斉に立ち、館へこみ入りこみ入って！……が、もしそいつが仕損なったら、戸野の大弥太が熊野定遍の……」

「恐ろしや、それほどまでに……すでに準備が……ではこうしては」

「やらぬ、女郎！ 明かす気じやな！ ……もうこうなつては妹とは思わぬ！ ……秘密を知られた汝は敵じや！」

「どなたか！ 出合え……宮様一大事！」

「黙れ！」

「あッ」

首を締めたらしい。

宮家は思わず前へ出られた。

とたんに、

「わッ」

という男の悲鳴が——右源次の悲鳴が一声きこえ、

「宮様！ 宮様！」

と叫びながら、榎の木を巡り館の方へ走る、呉服の姿が黒く見えた。

(?)

宮家は凝然と足を止められ、

(呉服が……よもや……右源次を?)

——不安をもつて見送られた。

呉服の姿が消えてしまうと、広大の館の庭の中には、一つの人影も見られなかった。

厩舎うまやの方から仕入れ馬でもあろう、板壁を荒々しく蹴る音が聞こえ、榎の木の梢からは

巢ごもつている鳥の、やわらかい啼き声が落ちて来た。

(右源次は?)

と御心みこころにかかり、宮家は萩と卯木との叢くさむらを、向こうの方へ廻って行かれた。

それは右源次の死骸らしく、地にのびて俯向きに倒れていたが、杖をつき首を垂れ、物思わしそうにしよんぼりと、みすぼらしい姿の盲人が、その横に立っていた。

さすがに宮家もギョツとされて、歩みをとどめ見守られた。

盲人は人気が感じた見え、垂れていた首をゆるやかに上げ、宮家の方へ差しよばし、「どなたかおいででござりまするか?」

と云った。

「……………」

相手の何者かを計りかね、宮家は沈黙をつづけておられた。

「どなたかおいででござりましたら、この憐れな盲人を、お情けをもって大塔宮様の、ご前までお案内くださりませ」

(はてな?)

と宮家は意外に思われた。

(わしに逢いたいという、何者であろう?)

「宮様に直々しきしきお眼通り仕り、許すとお言葉いただきたさに、流浪いたすものにござりまする」

(?)

「……返辞がない。……誰もいぬそうな……」

盲人はソロソロと歩き出した。

と、死骸につまずいた。

「大逆者め」

と呟いた。

「竹の杖で咽喉のどをえぐられ、息絶えたは天罰ぞ」

ソロソロと歩き出した。

楓の木の茂りから外れた時、月光が盲人に降りかかり、瘦せた身長たけの高いその躰を、宮家の御眼おんめに強く印した。

憐れにも見え怪しくも見えた。

(訊ねて見ようか？ 何者であろう?)

宮家は二三歩あゆまれた。

と、その足音を聞きつけたらしく、盲人は振り返り首を傾かしげ、

「どなたにかおいででござりまするかな？ おいででござらばお情けをもつて、この哀れな裏切り者を、大塔宮様のご前まで、なにとぞご案内くださりませ。……許すとのお言葉を受けたまわりたさに、比叡山から赤坂から、熊野からこの地へまで、お後慕あとうて参りましたもの。……この館に宮様おわすと知り、お眼通りいたしたく存じながら、日夜にご警護のぞみきびしければ、今日まで希望のぞみとげがたく……しかるに今夜は館の警護、はなはだ手薄く存じましたれば忍び入りましてござります。……お情にご案内くださりませ」

云い云いまたも耳傾けたが、

「ご返辞がない。……誰もいぬそうな」

ソロソロと歩き出した。

宮家はその後を眼で追いながら、

(裏切り者だと云つたようだが。……どういふ意味の裏切り者か？ ……それにしてもわしの後を慕つて、比叡山から赤坂、熊野と、この土地へまで来たとは気の毒、話して事情を訊ねるとしよう)

宮家は声をおかけになろうとした。

しかしその時足音がして、誰か走つて来るようであつた。

で、宮家は振り返り見られた。

村上彦四郎が走つて来ていた。

「宮」

と近寄ると囁くように云つた。

「一大事！ ……なにとぞこちらへ！」

先に立つて引き返した。

盲目の乞食に御心みこころ引かれたが、彦四郎の様子がただならなかつたので、宮家は黙々と

御足おんを返された。

藤の棚の側まで来た時であった、一人の女が立っていたが、宮家のお姿を眼に入れると、地にひざまずいて額をつけた。

「蓬生よもぎゆうではないか」

と宮家は仰せられ、泣いている女をいぶかしそうに見られた。

「蓬生殿」

と彦四郎は云った。

「ただ今の事情を宮家のお耳へ」

すると蓬生は嗚咽おえつしながら言葉せわしく言上した。

「良人おととながらも大弥太こと、天魔に心魅入られましたと見え、熊野の定じょう遍へんの味方につき、家を明けましてござりまするが、父、兵衛のこの頃の不在を、早くも探り知りましてか、定遍の手の者荒くれ武士どもを、今夜大勢ひきつれ参り、家にて評定仕り、勿体なくも宮様を。……立ち聞きしましたわたしの驚き！こは一大事と存じまして、裏口よりかちはだして、走り出でまして駈けつけ参り……」

「さようか」

と宮家は仰せられた。

「そちの誠心まごころうれしく思うぞ」

「は、はい、ただもうその御言葉おん、わたくしこそ妾わたくしこそ……勿体ないやら嬉しいやら……それにいたしても良人大弥太……」

蓬生は土へ食いついて泣いた。

「彦四郎」

と宮家は仰せられた。

「左源太、右源次の逆意の証拠も、たった今しがた確かめた」

「……………」

彦四郎は無言で一揖し——まだ事情を知っていなかったの——いぶかしそうに宮家を見詰めた。

「そのため不愠にも右源次は、不思議な盲人の杖で突かれ、命を奪われ櫛つぎの木の根もとに

……………」

「え!!」

「まあ」

と彦四郎と蓬生とは、胆を奪われたように声をあげた。

「大弥太も逆意をあからさまにし、この館へとり詰めるという。……いよいよ十津川このちを去る期ときとなつたぞ」

「御おんいたわしや、おそれ多や……」

蓬生は声を立てて泣いた。

「叔父様や舅様、せめておいででござりましたら……」

「いやいや」

宮家は微笑さえされ、むしろ朗らかに仰せられた。

「入道や兵衛におられては、気の毒でかえつて去りがたい。……それに大弥太や左源太や、定遍坊の手の者や、玉置荘司の家来など、われら駈け散らす所存ならば、九人だけでも事足りる。……が、それは大人気ない。……彦四郎、出かけようぞ」

ふたたび山伏のお姿になられた大塔宮の御袖おんに縋り、やるまい離れまいと泣きに泣きに泣く、憐れな呉服くれはを気の毒そうに囲み、これも山伏の姿にやつした、四条左少将隆貞や、村上彦四郎ら九人の者が、竹原入道の館の裏木戸に、声なくしばし佇たたずんだのは、それから

間もなくのことであつた。

「……この日頃まめまめしく、よう呉服かしずいてくれた。……その誠心まごころ忘れはせぬ。

……別れじゃ！……が、命さえあれば……縁えにしさえあればまた逢えよう。泣くな！……

呉服、健すこやかにくらせ……」

宮家の御声おんも湿りを帯びておられた。

「宮様！」

と呉服は咽びながら云つた。

「お別れとは！……夢にも！……このような！……おおこのようなお別れとは！」

若い気高い美貌の先達と、そう思つてひたむきに恋した人が、雲の上うへびと人も雲の上人、

尊い宮様であつたとは！

しかるにどうだろう、その宮様に、朝夕お仕えすることが出来、ご寵愛ごうむをさえ蒙つたと

は！

(女の身としてこれ以上の誉れ、これ以上の幸福はありはしない！)

こう思つて呉服は身も心も、捧げつくしてお仕えした。

その宮様と兄達の裏切りや、一族の大弥太の裏切りからして、このようにあわただしく

このように飽気なく、お別れしなければならなくなつたとは！

お別れ申し上げた宮様の前途が、はたして幸福でご安泰であらうか？

いや、いや、いや、そうではない！

行く手には敵や艱難が牙を磨いで待っている。

(どうしてやれよう、どうしてお別れ出来よう！)

どうでもこの地が御身に危険で、お去りにならないければならないのなら、妾もご一緒にお供して行き、いつもお側にお仕えして、その御体をお守りしたい！

「宮様！」

と呉服は御衣の袖を、自分の涙でぬらしながら、

「呉服もお供仕ります。……お連れなされてくださりませ。……どのような艱難に逢いますようと、きつとわたくしは堪えます。……お連れなされてくださりませ！」

御袖を放そうとはしないのであつた。

しかしその時、四条隆貞が、訓すようにしみじみと云つた。

「呉服殿のお心持ち、もつとも千万至極ではござるが、兵部卿大塔宮護良親王様が、関東討伐のご事業のために、吉野入りあそばさるるといふご大切な御旅に、女人をお連れあ

そばされたとあつては、世間へ聞こえいかがであろうか？ この辺おもんぱかりなさらではのう」

それにつづいて村上彦四郎が、

「お別れとはいいい条大塔宮様は、程遠からぬ吉野の御山みやまへわずかに、御住居おんを御移おんしになるばかり、しかもやがては高野も熊野も、御手おんてにお入れあそばさるるご方寸、しかれば十津川は交通の要路、再々お通りあそばさるれば、そのつどお眼にかかれます。……で、むしろ呉服殿におかれては、竹原入道殿のお側におられ、兄や大弥太の濁りに染まず、入道殿や兵衛殿と共々、陰に陽に宮様ご事業を、お助けなさるこそまことの誠忠、また貞節にござりまする」

と、これも訓すようにしみじみと云った。

「は、はい」

と呉服は消えがに答え、面おもてを上げず泣き沈んだ。

「呉服」

と宮家は仰せられた。

「これまでそちに暇あるごとに、修験の大綱を話して聞かせたのう。……さてそこで今度

逢うまでに『三種成仏』の三種の区別けしめを、よくよく考え弁わきまえて置いて、お前からわしに話しておくれ」

袖を払って御足おんを運ばれた。

「三種成仏？ おおあれは？」

呉服はうっとりと考え込んだ。

「即身成仏、即身即仏、即身即身、これだった筈じゃ」

——が気がついて四辺あたりを見た。

と、宮様のご一行は、遙かかなたを歩いておられた。

「あつ」

と呉服は仰天し、飛び起きて後を追おうとした。

後方しりえにいた蓬生が抱き止めた。

「未練な！ 呉服様！ ……でも可哀そうに……」

「お姉様！」

と呉服は咽び、ひしと蓬生を抱きしめた。

「宮様が、宮様が、わたしを見すてて」

「いいえ宮様はあなたお一人だけの、御方様おんかたさまではござりませぬ！ この日本ひのもとのみんなの御方様！」

「おおそうしてわたしには」

と呉服はハタと合掌した。

「神様でござります！ 仏様でござります！」

同じこの夜のことであった、紀州熊野中辺地なかべじ街道の、野長瀬の郷を七人の男女が、不思議な振る舞いをして通っていた。

「今夜大塔だいとうのみやもり宮護良親王様には、十津川とつがわの郷をお出ましになり、明日小原こはらに差しかけられますが、大不忠の者あらわれて、大難にお遭いあそばさる御相おんそう、未然にまざまざ現われたり。……野長瀬の人々は昔より宮方、わけても豪族六郎殿、七郎殿には、現今もつとも誠忠無類の、宮方勤王の士である筈、早々兵をお率いになり、宮様のご難に馳せ参じ、宮様をお迎え奉れや」

と、往來の人に逢えば往來の人に呼びかけ、人家に逢えば人家の戸を叩いて、そう大声に呼びかけていたのであった。

それは嚴重に旅よそおいをした、飛天夜叉の桂子かつらこと浮藻うきもと小次郎と大蔵おおくらヶ谷やつ右衛門と、風見の袈裟太郎と鷄娘とりむすめと、そうして幽霊女とであつた。

桂子の臍なりひらびたけた氣高い姿、浮藻の処女おほこらしい純の美貌、小次郎の男としては類少ない圧倒的な業平美、右衛門の松の老木のような四肢、袈裟太郎の飄乎とした様子、鷄娘の道化た物腰、幽霊女の瘦せて身長せ高く、いかにも幽霊幽霊とした風姿など——特色いちじるしい七人の男女が、そんなことを云つて歩くのであるから、郷民たちは怪しむと共に、動揺せざるを得なかつた。

「これはうっちゃつてはおかれない」

「野長瀬様のお館へ行つて、この旨をお知らせしなければならぬ」

と、注進に走つて行く者があつた。

「事実とすれば一大事、ともかくも合戦の用意をしろ」

と、馬の手入れをし、武器をつくろい、旗指物はたさしものを蔵から出し、家ノ子郎党を集める者も出て来た。

「彼ら七人は何者だろうか？」

「人間ばなれしていたようだが」

「明日起こる事件を今日知るには、とうてい人間業わぎではない」

「熊野権現のお使いかな」

「狐狸のまどわしではあるまいか？」

「それにしても七人ながら立派だった」

「どこへ行ったかな、もう見えないが」

「いや向こうの辻にいるそうだ」

「野長瀬様のお館へ参つて、殿様のご意見を聞こうではないか」

こうして郷士や地侍や、郷民の中での血気の者どもは、得物得物をひっさげて、野長瀬六郎兄弟の城廓さながらの大館へ、続々としてつめかけた。

この夜、野長瀬兄弟は、寝もせず居間で話していた。そこへこの事件の注進が来た。

「兄上」

と舎弟の七郎が云った。

「これは只事ではござりませぬな」

「そうだな」

と六郎は頬髯の濃い、律儀そのもののような赭ら顔へ、疑惑の色を浮べたが、

「その七人の男女という奴が、妖怪でもなく変化でもなく、また世間を騒がして、ドサクサまぎれに盗みしようなどと、姦策を巡らす悪漢でもなく、何らかの理由でそういうことを知り、それを我らの耳に入れ、大塔宮様のご遭難を、我らの手によって避けさせたいと、そう望んでいるというのなら、これはうっちゃってはおかれないな」

「何んとか手段を講じませいで……」

「そうとも」

と六郎は頷いた。

「宮家が十津川へおいでになり、戸野兵衛や竹原入道が、お味方となつてご守護いたしおる旨、ひとづてによつて聞いた時から、わしは竹原入道のもとへお味方の使者でも遣わそうかと、心構えをしたほどじゃ」

「榎野城の上野房聖賢のもとへは、たしか兄上には使者をつかわされ、宮家へお味方いたす所存と申しやりました筈にござりますな」

「さよう、彼の房とは懇意ではあり、彼の房も宮方の一人じゃからの」

道中(一)難

「熊野の定じょうへん遍へんから密使が参り、大塔宮様を討つてとるようにと、兄上へご慥憑なされました時、兄上におかれましては一も二もなく、お断わりなされましてござりますな」

「わしは定遍が嫌いだし、それに仮りにも宮様をのう。……で、わしは産まれてはじめて、あの時本当に腹を立てたよ」

「その宮様が明日小原で、大難にお遭いあそばすという、傍観いたすこと出来ませぬが」

「真まこと実なれば傍観は出来ぬ。……が、竹原入道や、戸野兵衛などが心をこめて、お守りしている宮様じゃ、それが突然十津川を立たれ、小原で大難にお遭いあそばす、しかもそのことが前の日にわかる。……これが合点ゆかぬでの中」

「わたくしにも合点参りませぬ」

「これさえ合点参ればの中」

「けつきよく七人の男女の者が、何者であるかさえわかりましたら……」

「そうじゃそうじゃそれさえわかかったら、行動を起こすことが出来るのじゃが、今のままではちとどうも。……軽々しく動くのは危険じゃからのう」

陣刀、鎧よろい櫃びつ、胡籙やなくいなどを、厳いめしく飾った大床を背にし、脇息にもたれている兄

六郎の、沈思する顔を見守りながら、舎弟の七郎は色白下しもぶく膨れの、穏かな顔を少しひそ聳めて火桶の胴を撫さすっていた。

と、騒がしい物音が、館の周囲から聞こえて来た。

二人はチラリと眼を見合せた。

その時襖があげられて、近習の武士が顔をのぞかせた。

「何か？」

と六郎は声をかけた。

「大塔宮様明日小原にて大難に遭われまする趣きを、郷民ども耳に入れて、いかが致せばよからうか、お館様のご意見ききたしと、二百人三百人続々と、詰めかけましてござります」

「ふうん」

と六郎は驚いたように云った。

「二百人三百人、そも来たというか」

「後続々あとと幾何いくらともなく、詰めかけ参る様子にござります」

「ふうん」

六郎は呻くように云った。

「七郎これは啓示らしいぞ」

「啓示？ 兄上、啓示とは？」

「例の七人の男女の触れ言、悪戯いたずらでもなく姦策でもなく、人をもって云わしめる天啓らしいぞ！ ……でなかうものなら郷民の心を、そうも刺戟しげきし一致させはしない」

「いかさま、兄上、これはごもつともで」

「大門をひらけ！」

と野長瀬六郎は、近習に云って立ち上がった。

「郷民どもを庭へ入れよ！ ……かがり箆を焚き湯づけなど出し、ねぎらってやれ、ねぎらってやれ！」

その翌日の昼となった。

芋ヶ瀬の郷の林の中に、桂子たちの一団がいた。

晩春の悩ましい陽の光が、杉の木立から射し込んで、緑の草や草の間の野花を、質のよい織物のようにかがよ耀わせていた。

「相変わらずよ、あの通りだわ」

頸うなじのあたりを陽に焙あぶらせながら、幽霊女へこう云つて、
とりむすめ 鶏娘は拝殿の方へ頤をしゃくつた。

「そうね」

と幽霊女は細い股の上へ、翅つばさを休めた蝶の姿を、可愛いというように眺めていたが、その眼をあげて拝殿の方を見やり、

「桂子様は桂子様、浮藻様は浮藻様、小次郎様は小次郎様と、バラバラに離れておいでなさるのね」

「ごまつたことでございますのね」

「こればかりはどうも他人の口からはねえ」

「いっそ別れておしまいになったら……」

「それが思い切つて出来るようならねえ」

「三人めいめい苦しみながら、一緒に住んでおいでなさるなんて、これこそ本当に生き地獄ね」

「恐ろしいことでも起こらなければよいが」

二人の女が噂しているように、桂子と浮藻と小次郎は、こんな時にも離れ離れにいて、牽制しあっているのであった。

桂子は芋ヶ瀬の莊司の館が、屋根だけを木の間に見せている、その方角へ眼をやりながら、野宮ののみやの腐ちた拝殿の縁へ、腰をかけているかと思うと、小次郎は野宮の右側に、ぼんやりと地面を見詰めながら、所在なさそうに足踏みをしてい、浮藻はそれとは反対の側の、栗の木の傍らに佇んで、枝に甲かぶとむし虫むしでもいるのであろうか、上向きながら木の幹を、指で叩いているのであった。

風見の袈裟太郎はいなかつたが、大蔵ヶ谷右衛門は例まじかりの鉞つるぎを、例のごとくに提ひっさげて、檻おりに入れられた老いた豹のように、何か口の中で呟つぶやき呟つぶやき、同じ所を往ったり来たりしていた。

でも時々聞こえて来るところの、その右衛門の呟つぶやきなるものは、ずいぶん物騒なものであった。

「これでガツとこれでガツと！ ……そうすると万事かたづくのだからな。 ……きやつどうにも気に食わぬて！ ……浮藻様をたぶらかし、桂子様をたぶらかし！ ……女たらしめが、女たらしめが！」

そうして凄^{あやごんのかみ}い怒りの眼で、小次郎の方を睨みながら、大鉞へ素振りをくれるのであった。漢^{あやごんのかみ}権守の居城において、小次郎と浮藻とを救つて以来、桂子は二人を見放しもならず、三人一緒にくらすことにした。

桂子の心を推量し、小次郎と浮藻とは今日においても、夫婦になつてはいなかつた。

夫婦にお成りと自分の口から、一度は勧めた桂子ではあつたが、一緒に住むようになつてからは、二度と勧めはしなかつた。

小次郎へ執着があるからであつた。

その桂子はあの時から間もなく、赤坂の城が落ちたので、京都の自分たちの住居へ、衆を連れて引き揚げた。

でも、桂子も鬼火の姥うばと同じに、大塔宮様や楠くすのき木正成まさしげが、討ち死にしたものとは思わなかつた。

はたしてその後大塔宮様が、熊野から十津川の方へご潜行なされ、鬼火の姥はその後を追つたと、そういう噂を耳にした。

(ではわたしも出かけて行こう)

と、こうして彼女たちは来たのであつた。

それにしてもどうして桂子は、小原において大塔宮様が、大難にお遭いあそばすことを、その前日に知ったのであろう。

彼女が飛天夜叉であるからである！

飛天夜叉はどんなことでも、洞察することが出来るのである！

眺めている桂子の視野の中へ、風見の袈裟太郎の走って来る姿が、麦畑の緑と一緒にはいった。

芋ヶ瀬の莊司の様子をさぐりに、さつきから出かけていた袈裟太郎は、やがて桂子の前まで来た。

「宮様のご一行参られました」

と、額の汗を拭き拭き云った。

「山伏のお姿でござりまして、お供は八人にござります」

「八人？」

と桂子はいぶかしそうに、

「お供は九人の筈だがねえ」

「村上彦四郎義よして光殿の姿が、見えませんでござります」

「足でも痛めて遅れたのかしら？ ……で、ご一行はどうあそばされたえ？」

「芋ヶ瀬荘司の館をさし、すぐにおかかりでござりました」

「館へお入りなされたのだね」

「はい、さようでございます」

「荘司はお迎えしたろうね」

「いえ家人を附けまして、附近ちかくの堂へご案内申し、そこへお置きにござります」

「そう……さては……芋ヶ瀬の荘司め……やっぱりわたしの察したとおり……」

「わたくしこれだけ見とどけましたので、とりあえずお知らせいたそうものと、馳せ帰りましてござります」

この頃宮家はお堂の中に、八人のお供をしたがえて、不安と期待とをお持ちになり、芋ヶ瀬の荘司の出よういかにと、それをお待ちになつておられた。

びんずる尊者の古い木像には、薄白く塵芥ほこりなどが溜まってい、奥の薄暗い仏壇には、仏具が乏しく飾つてあり、香の煙りなども立っていた。ずいぶん古いお堂なので、黴かびの匂いなども鼻についた。

宮家は仏壇に背を向けられ、庭をご覧になりながら、しゆくぜん 肅然と端坐しておられたのであつた。

「彦四郎はどうしたか？」

かたえ 側の片岡八郎へ、ふと心配そうに仰せられた。

「背後より大弥太の手の者など、追いつかないものでもなし、わたししんがり殿陣仕ると、このように申して彦四郎は、わざとおくれましてござります」

八郎は一揖してお答えした。

しばらく時が経って行つた。

寺庭のあなたの麦畑の中に、芋ヶ瀬の荘司の家臣らしい、かちゆう 甲冑をつけた武士が数人、得物をひっさげて佇んでいて、こつちを見てはささや囁いていた。

堂守りの僧がさつき、おずおずとご挨拶に姿をあらわしたただけで、その後は誰も来なかつた。

(ちとやり口が大胆すぎたかな)

そう宮家は思われた。

芋ヶ瀬の荘司や玉置の荘司が、吉野十八郷八荘司のうちでは、むしろ武家方であること

を、宮家には夙つとにご存知であらせられた。

(間道づたいに遁がれるよりも、正面からぶつかって行き、宮方に従くよう説き伏せた上、堂々と通つて行く方がよからう)

こう宮家はお思いあそばされ、莊司の館へ入らせられたのであった。

虎穴に入らずんば虎児を獲ず——こういうお考えからであると共に、これから吉野まで迎るとして、その道々には少くも二、三、武家方に従う莊司や豪族が、関めいたものを設けている筈、そこをいちいち間道づたいに、怖そうに遁がれて行ったなら、臆病の名が立つであらう、そうあつては将来宮方一統の、士氣に悪く影響する。——このことをお恐れあそばされたからであつた。

が、しかるに芋ヶ瀬の莊司は、宮家を館へ招じようとはせで、このような所へご案内し、いまに伺候しないのであつた。

(討つて取ろうの魂胆かな?)

さすがに、宮家も不安であられた。

九人の山伏殿がお堂へはいられた、どうしたことかといつたように、里の童わらべが二、三人揃つて、そつとお堂を覗きに来たが、にわかになつと云つて逃げて行つた。

その時莊司の家来らしい武士が、五人ほど連れ立ってやって来た。

四人の武士は堂の外に残り、年かきの五十近い武士ばかりが、お堂の中へはいつて来た。芋ヶ瀬の莊司よりの使者であつた。

宮家の前へ膝しつこう行し、おずおずした声で口上を述べた。

「熊野三山の別当じょうへん定遍、関東よりの御教書みぎょうしょなりと申し、大塔宮様にお味方する者は、陰謀与党の輩と認め、関東へいちいち注進いたす趣き、で、今日大塔宮様を、この道より左右そうなくお通し申し上げては、後日の咎めおそろしく、難儀いたす次第にござります。…さりとして、宮様を抑留いたしましたは、臣の身として恐れ多く、主人儀当惑いたしおりまする」

ここで使者は口をつぐみ、おそろおそろ宮家を仰ぎ見た。

宮家は無言で正視され、八人のお供の人々も、固唾かたずを吞んで黙っていた。

「ついでには……」

と、使者は後をつづけた。

「お供のうち、しかるべき名あるお方を、一兩人賜たまわりたく、さすれば、そのお方を、武家の手に渡し……」

宮家は烈しく御咳おんせきをせかれた。

(ならぬ!) という意味の御咳であった。

使者の武士は、ハツとしたようであった。

でも、おずおずと後をつづけた。

「この儀ならぬとのご諛じょうにませば、ご紋の御旗みはたいただきたく、さすればこれを証拠の品とし、関東方へ引き渡し、合戦いたせしと申し陳ちんじまする」

また宮家の御口おんくちから、非難の御咳がほとばしり出られた。

「二つながらお許しない際には、勿体なけれどお供の方々に、矢少々、矢少々……」

「うむ、手向かうと申すのか」

「余儀ない次第にござりまする」

使者の武士はこう云って、肩や膝を小さく固めた。

堂内は、しばらく寂然ひっそりとなった。

と、四条隆貞が、

「お使者大儀」

と、声をかけた。

「とかくの返辞いたすまで、しばらく堂外にてお待ちくださいれ」

「は」

と、使者の武士は一礼したが、やがて堂から外へ出た。

後は堂内は尚しばらく、寂然として静まっていた。

でも、とうとう赤松則祐のりすけが云った。

「危きを見て命を致す！ 臣の道にござります。紀信きしんは詐いつわつて敵に降り、魏豹はとどまつて城を守りました、いずれも主公の命に代わり、名を後世に残しましたもの。……と
てもかくても芋ヶ瀬の荘司が心に、和解の情涌きまして、この地を通すことでもござりませ
ならば、私彼の手に渡り……」

「いやいや」

と、この時平賀三郎が、烈しい声で遮さへぎった。

「その儀無用かと存ぜられます。……と申しまするは我ら九人は、この日頃宮家こしじゆに扈こ
従うし参らせ影の形に添うごとく、艱難辛苦仕りました。……されば、宮家におかせられ
ましても、股肱ここしう耳目ともおぼしめされ、お頼みあそばさるることと存ぜられます。……
その一人が欠けますることいかばかり残念至極！ ……しかるに錦の御旗みはたは、大権の所在

を示すところの、唯一無二の神聖なる標識！で、これとても朝敵同様の、芋ヶ瀬の荘司ごときにお渡しあそばさるること、しかるべからずとは存じますが、しかし古来より合戦の場合、旗指物はたさしものを戦場に遺棄し、敵の手にこれを奪われました例ためし、決して少なからずござりまする。……で、この点宮家には、とくにご勘考あそばされて……」

「いかにも」

と、合槌を打つたのは四条左少将隆貞であった。

「のみならず錦の御旗みはたは、敵に奪われたと申すではこれなく、方便としてただ一時、彼らにお下げ渡し遊ばさるるまで。……しかもこれとても考えようによれば、彼らに朝家のご威徳を、光被させましたことにもなりましようか」

「うむ」

と、はじめて大塔宮には、幽かすかに御声おんこえをもらされた。

「まことにそなたたちはわたしにとつては、手足でもあれば耳目でもあるよ。……一本の手にも取られてはのう。……笈おひの中より御旗を出せ！」

おかれてこの郷へ入り込んで来たのは、村上彦四郎義光よしてゐるであった。

戸野の大弥太の追い縋つて来る、そういう様子も見えなかつたので、宮家ご一行に追いつこうものと、金剛杖を小脇にかかえ、足を早めて歩いて来た。

と、行く手から十数人の武士が、何やら大声に話しながら、その中の一人が錦の御旗を担ぎ、こちらへ向かつて歩いて来るのが見えた。

(はてな)

と、義光は足を止め、錦の御旗をつくづくと見た。

「卒爾ながらお訊ねいたす」

と、彦四郎は声をかけた。

「何んじゃ」

と、武士たちは足を止どめて、怪訝けげんそうに彦四郎を見た。

「失礼ながら貴所方は、この郷の方々にござりまするかな？」

「芋ヶ瀬の荘司殿身内の者よ。……ここにおられるが荘司殿じゃ」

一人の武士がこう云いながら、錦の御旗を捧げ持っている武士の、左側に雄々しげの様子をし、髭そ食い反そらしている中年の武士を、物々しく指さした。

「それにいたしても、その御旗は、錦の御旗と存じまするが」

と、彦四郎はいかにもいぶかしそうに訊いた。

すると得意気に胸を反らせながら、芋ヶ瀬の荘司が領うなずいて云った。

「そうじゃ、山伏、そのとおりじゃ、これこそ錦の御旗なのじゃ。……そちなど生涯見ようと思んでも、容易に見られぬ尊い御旗じゃ。……遠慮はいらぬ、近寄つてよう見い」

「ははあ」

と云うと彦四郎は、御旗の方へ近寄つて行つた。

「その尊い錦の御旗を、荘司殿にはいかがいたして？」

「大塔宮様よりいただいたのじゃ」

「ナニ大塔宮様より？」

「宮様この地をお通りになられた。通してはわれら関東に対して済まぬ。そこで御旗を頂戴し、一合戦仕つたと……」

「勿体なや！ 無礼者！」

叫んだ時には錦の御旗は、彦四郎の手に取り返されてい、旗持ちの武士は十間あまり、道のあなたに投げ出されていた。

「狼藉者！ それこやつを！」

しかしまたもや二人の武士が、左右に数間投げ飛ばされた。

「汝おのれらわれを誰とか思う！ 大塔宮様股肱の郎党、村上彦四郎義光と知らずや！ ……錦の御旗は朝敵討伐の、無上の標識、主上よりの賜物たまもの！ 汝らごとき卑賤の下郎に、手渡さるべき品でない！ これをもつて彦四郎取り返し、宮家にお返し奉る！ ……粗忽そこつに汝らかかってみよ、二つ無き命失うぞよ！」

数町にも響く大音もて叫び、彦四郎は御旗を高くかざし、足踏ん張って睨みつけた。

使者をお堂につかわして、大塔宮様に口上を述べさせ、自身は途中に控えてい、使者が宮家より頂戴いたした、錦の御旗を大得意をもつて、守護して館へ帰る途次にあつた芋ヶ瀬の莊司は、彦四郎のために、御旗を取り返され罵ののられたが、理の当然と相手の豪勇に、胆を奪われ魂を消し、茫然として立つたままでいた。

その間に彦四郎は御旗を肩にし、既にお堂よりご発足あそばされた、宮家の御後みあとを一散に追つた。

芋ヶ瀬の郷で時を費し、小原へはこの日行き着けなかつた。

迂濶うかつには人家にも宿をとれぬ境遇、で宮家ご一行は、街道を反それた樵夫きこりの小屋に、雨露

をしのがせられることになった。

尊げの山伏の一行を見て、老いたる樵夫夫婦の者は、ほた櫓を炉にくべ粟などをかしぎ、まめまめしくおもてなし接待した。

炉の火にお顔をほてらせながら、宮家は快然たるご様子であった。

「彦四郎」

と小声で仰せられた。

「御旗みはた取り返したそちの勇、北宮ほつきゆう黜を想わするぞ」

それから赤松則祐をご覧じ、

「そちの忠は孟施もうししや舎よ」

さらに平賀三郎をご覧じ、

「そちの智は、陳ちんじ丞しょう相を想わするよ。……この三傑われにあり、天下を治むるに足るものがあるぞぞ」

この夜更けた頃樵夫小屋きこりを窺うかがう、二人の男の姿があつた。大弥太と竹原左源太であつた。

粗末な板壁の隙をもれて、内の燈の光が見えていたが、やがて消えて、ひっそりとなつた。

宮家ご一行は寝につかれたらしい。

空には降るように星があり、おそく出た月も照っていた。

どこからか梟の声などが聞こえた。

柴垣の根もとにかがみこんで、様子をうかがっていた二人の者は、やがてそこからそつと離れた。

そうして山道を街道の方へ歩いた。

「お前にとつては弟の敵さ」

と、そそのかすように大弥太は云つた。

「宮様御内人の何者かに、たしかに右源次は殺されたのだからのう」

「云つてくれるな」

と、咽ぶような声で、左源太は云つて鼻をつまらせた。

「可哀そうな弟！……殺されたとは！」

左源太は玉置の莊司のもとへ、弟の右源次に進められて、大塔宮様を討ち奉るについて

の、談合に出かけて行つたのであつた。

そうして今日帰路についた。

と、道で大弥太に逢つた。

その大弥太が云うのであつた。

昨夜弟の右源次が、大塔宮様の御内人みうちびとに、館において突き殺され、宮様一行はその夜発足、今日この地へ遁がれて来たので、わしはその後を追つて来た。――

(弟右源次が殺された！ おのれやれ敵かたきを討たいで置こうか！)

こう思つて左源太は大弥太と一緒に、宮家ご一行の後を追ひ、この小屋まで来たのであつた。

「定じょうへん 遍へん 殿でんより附けられた勢が、三十人あまり街道脇に、わしの合図を待つておる。：

…宮様いかにご勇猛でも、同勢わずか十人じゃ、御首級みしるしいただくにわけはない」

ふてぶてしく胸に腕を組み、鼻を反らせて月を仰ぎ、そう大弥太は昂然と云つた。

「が、まだ時刻は少し早い。……宮様ご一行寝しずまるまでは、手控えした方がいいようじゃ」

この大弥太は妻の蓬生が、自分の巧らみを大塔宮様に、お知らせしたとは気がつかず、

昨夜定遍よりの手の者を率い、宮様を襲うべく竹原館へ、ひそかに寄せて行ったところ、右源次が殺されてい、宮様ご一行は館をぬけ出し、立ち去られた後であった。

大弥太は切齒して口惜しがったが、姦智にたけた男だったので、性急に追いかけて討とうとはしないで、遙かに離れて後をつけた。

芋ヶ瀬の郷での出来事なども、彼は人の噂で知った。

この道へ宮様の反れられたことも、往来の者に聞いて知った。

で、樵夫きこり小屋をつきとめたのである。

「休もうぜ」

と、大弥太は云つて、藁わら鳩におを背にして胡座あぐらをかいた。

「うむ」

と、憂鬱に云いながら、左源太も並んで坐り込んだ。

梟の声がしきりに聞こえ、星が尾を引いてしばしば流れた。

「恩を仇じゃ、な、まるで」

と、大弥太はまたも、けしかけるように云った。

「わしが父や入道殿に、宮家ご一行は養われていたのじゃ。……それなのに右源次を殺し

て去んだとは」

「そうともよ」

と、左源太は云った。

「恩を仇じゃ！ 恩を仇じゃ！」

「どうでも討たずばなるまいがな」

「討つともよ、どうでも討つ！」

「車の庄も手に入るしな」

「六千貫も手に入るわ！」

草には露が下りていて、足に冷たく感じられた。

「玉置たまぎの荘司殿は何んと云われたかな？」

大弥太はふと気づかわしそうに訊いた。

「よもや宮家へご加担などは……」

「云わぬよ」

と、左源太は物憂そうに答えた。

「宮家を討つは以前よりの存念、昔よりわしは武家方じゃとな」

「そうであろうとも、そうなくてはならぬ。……では明日宮家が小原をさして行かれ、玉置をお通りになろうものなら、荘司殿には弓矢をもって……」

「弓矢をもってお敵するとも」

「が、それには及ばぬのう」

「……………」

「われらが今夜やるのじやからな」

「……………」

「われらがやらざれば玉置殿がやる。……どつちみち宮家はご運の尽きよ」

「……………」

「玉置殿に功名されては、車の庄と六千貫とが、われらからファイになってしまふ。……そちにしては弟の敵が討てぬ」

「だがのう」

と、左源太は気弱そうに云った。

「恐ろしいことも恐ろしいぞ」

「また弱気か、臆病な奴め！」

「大逆の心起こしたばかりに、弟は、弟は、非業に死んだ」

「だからよ、敵を討てというのじゃ」

「あべこべにわれら討たれようも知れぬ」

「火をかけるのよ、な、小屋へ！ ……宮家をはじめとして十人の者、周章狼狽して出て来ようわ。 ……そこを討つのじゃ、きつと討てる！」

「怨む！ わしは、お前を怨む！ 十津川の辻で、立て札の前で、お前があんなことさえ云わなかつたら、わしは心など迷わさなかつたものを！ ……父上にそむ反き妹に反き、てんじ天人共に許さぬ所業を！ ……恐ろしくなつたぞ、俺は恐ろしい！ ……殺されるぞよ、われらこそ殺される！」

「臆病者め！ 何が殺される！ ……宮様討ち取り三日のうちに、六千貫の黄金こがねを手に入
れ、車の庄の主となり ……栄耀栄華！ アツハツハツ」

この時わらにお藁鴉の背後から、あかづ嬰兒の泣き声が細々と、悲しそうにひも饑じそうに聞こえて来た。

「あッ」

と、大弥太は飛び上がった。

「あの声だ——ッ、あの嬰兒あかづの ……わッ」

弓のように体を曲げ、星を一掴み掴むかのように、空に向かって腕をのばし、指を苦し
そうに屈のびちぢみ伸させたが、咽喉から血を吹き出して、ドツと仆れて動かなくなった。

「大弥太どうしたあ——ッ」

と、喚きながら、左源太も飛び上がった。

「わッ」

これも同じように悲鳴し、地に仆れて動かなくなった。

咽喉から血を吹き出している。

嬰兒の泣き声がまたきこえ、藁わらにお鳩おが幽かに動きをなした。

と、女の声が聞こえた。

「また人二人をあなた様には、お殺しなされましてござりますねえ」

「……………」

「でも今殺された二人の男は、殺されてもよい者どもでした」

「……………」

「それにしてもあなた様の殺生さは。……わたしは悲しゆうござります」

つづいて泣き声が聞こえて来た。

「早瀬！」

という男の声がした。

「大塔宮様、この附近の樵夫小屋におわすこと確かとなつたぞ。……こやつら二人が申しおつた。……わしの手を引き十津川からここまで、息せき案内をしてくれた早瀬！……頼む、急いでその小屋まで、わしの手を引き案内してくれ！……嬉しや、いよいよこの年月の念願、相叶う期参つたぞ！……頼春、今夜より真人間になれるわ！」

盲目で片腕の頼春が、顔に白布の垂れをかけ、胸に嬰兒を抱えた早瀬に、左の腕の袖を握られ、大弥太と左源太との死骸を分け、露ふかい晩春の草を踏み、朧ろの月光に照されながら、血のついてゐる竹の杖で、行く手の地面をさぐりさぐり、藁鳩の蔭から現われた。「神の界くにに属しまつる御一方おんに——大塔宮護良親王様に、許すとの御言葉うけたまわり、裏切り者の※悔、心を浄めて真人間になろうぞよ！……わしの裏切りから無念に死んだ、土岐十郎頼兼殿も、多治見ノ四郎二郎国長殿も、今夜限り草葉の蔭にて、わしを責むることなくなるであろうぞ！……この年月いかに二人の、怨みと怒りと嘲りと、憐愍とに充ちた死前しぜんの顔が、わしの心眼に見えたことか！……が、それとても今夜限りじゃ！早

瀬！」

と頼春は早瀬の方へ、瘦せた、青褪めた、垢じみた、髭ぼうぼうとした不具の顔を、月光に照らして振り向けた。

笑ったと見えて唇がほころびたが、悪食が祟ったためであろう、上下の前歯がことごとく脱けて、口はうつろな洞ほらのようであった。

「嬉しいぞ早瀬、嬉しいぞ！」

「あなた！」

と早瀬は顔の垂れ布ぎぬを片手でかかげて、頼春の顔を、涙いっぱいの眼で見詰めたが、

「その時こそは妾の罪をも——あなた様を裏切りいたしました、わたしの罪をもあなた様には……」

「おお許すとも、許さで置こうか！」

「では明日からは昔ながらの……」

「また夫婦じゃ！ 愛し合う夫婦じゃ！」

「それでこそ早瀬は救われます！ ……救いの神様へ、宮様御許へ！」

「大塔宮様御許へ！」

「樵夫きこり小屋はあなたでござりまする！ ……今は死んでいる二人の者が、向こうから参りましてござりまする」

「案内頼むぞ！」

と杖を突つ張り、ヒヨロヒヨロ、ヒヨロヒヨロと前へ出た。

とたんに一個の青光る物が、少し離れた木立の蔭から、唸りをなして飛んで来た。

「わッ」

と頼春は叫びを上げ、杖を投げ捨て地に仆れ、左の膝頭を片手で押えた。

「何者！ ……おのれ汝！ ……チ、チ、チッ……左の片足、膝から寸断！ ……切ったわ！

砕いたわ！ ぶち折ったわ！ ……おとおお、血が流れ出る！ ……快よや悪血が流れる！ ……比叡の裏山で片腕斬られた、あの時きながらのこの快感！ ……あッ、あッ、あッ、この快感……おお、さりながら遠くなる心よ！ ……月が見えぬ！ ……早瀬そちも！ ……」

「頼春様ア——ッ、お心たしかに！」

嬰兒あかこを草にかいやり置き、早瀬は頼春に縋りついた。

「罪業深く、おとおお今度も、大塔宮様にはお逢い出来ぬか！ ……無念！ 心遠くなる

わ！……が、死なぬぞ！ 死なぬぞ死なぬぞ！」

大弥太と左源太の二つの死骸の、その間にはさまりながら、頼春は次第に次第に次第に、気を失って行くのであった。

樵夫小屋を遥かのあなたに見て、林の中に桂かつらこ子たちは、焚火たきびをたきながら団欒まどいしていた。

それとなく大塔宮様ご一行の、ご警護をしているのであった。

焚火に照らされて松の木の幹は、巨大な蟒うわばみの胴うすあかがねいろのような姿を、薄銅うすあかがねいろ色いろに光らせていた。

「……という訳でございまして、村上彦四郎殿のお働きは、見事のものでございました」
錦旗を取り返したあの事件を、また物見に行つて見かけたところの、風見の袈裟太郎は
そう語り終え、腰かけていた松の根から下りて、焚火の方へ寄つて行つた。

「今日はお遁がれ遊ばされたが、明日の大難はどうだろうかねえ」

と、焚火から少し遠く離れ、浮藻の方へも顔を向けず、桂子の方へも眼を向けず、所在
なさに焚火を見詰めている、土岐小次郎の端麗な顔を、飽かず眺めながら桂子は云つた。

「芋ヶ瀬の莊司は実のところ、まだ人情味があるのだよ。……それが玉置の莊司となると、非人情で強慾で惨忍だからね」

「しかし野長瀬六郎兄弟が、兵を率いて宮様お迎えに、途中まで出張ることと存じまするが」

と、焚火へ薪をさしくべながら、袈裟太郎はそう云った。

薪は、ひとしきりくすぶって、もくもくと煙りを夜空に立てた。

「わたしたちが、あそこまで刺戟そそつたのだから、きつと兵を出すとは思うけれど、今日の間
に合わなかったところから推して、少しばかり気がかりだよ」

煙りを袖で払いながら、桂子はいくらか心配そうに云った。

「兵を集めるに暇をとったか、寄せて来る道に故障があつたか、その加減でござりましよう」

「そうだねえ、そうかもしれない」

この時焚火の火の光の輪から遠く離れて、月光ばかりがわずかに明るい林の奥の方から、大蔵ヶ谷おおくらやつ右衛門が姿をあらわし、物憂ものうさそうに歩み寄つて来た。

「右衛門や、どこへ行つておいでだ？」

すぐに桂子が声をかけた。

「心持ちがムシヤクシヤいたしますので、悪魔つ払いに風にでも吹かれようと、あちこち歩き廻つて参りました」

小次郎へ憎悪の瞳を向け、舌打ちをしながら右衛門は云い、焚火をへだてて、小次郎と向かい合い、伏し眼をしながら小次郎の様子を、絶えず悲しそうに心配そうに、注意している浮藻うきもの横へ、浮藻を護衛するかのようにならなかつた。

「右衛門！」

と、桂子は不意に鋭く、咎めるような声で云つた。

「血が、まさかり鉞に血がついているね！」

肩をもたれ合わせ手を取り合い、いかにも仲がよきそうに、焚火に近く坐っていた、幽霊女もとりむすめ鶏とり娘も、袈裟太郎も小次郎も浮藻までも、この声に驚いて一斉に、右衛門の方へ顔を向けた。

と、右衛門は草をむしり、大鉞の刃へあてて、附いている血粘ちのりをぬぐつた。

「女をたらす性しょうの悪い若僧を、ぶつた斬ること出来ませぬので、代わりといたしまして、殺人鬼めの足をぶつた斬りましてござりますよ」

「何をお云いだ、殺伐至極な！」

と、桂子は怒りの声で云った。

「事情をお話し、さあ詳しく！」

「林から出かけて行きましたので。……と藁わら鳩にがございました。……男女の乞食がおりましたので……とそこへ二人の武士が、腰を下ろして話し出しました。……すると突然男の乞食こしきが——その乞食はどうやら片腕のない、盲人めくらのようでした。……持っていた杖を突き出したんで。……それも二度でございました。……するとどうでしょう、二人の武士は死んでしまったじゃございませんか！ ……凄あかじい凄あかじい殺人鬼！ ……わたくし思わずカツとなりまして、鉞あかじを投げつけましてござりまする……どうやら足をぶった斬りましたよう。……頭へ白い布をかけ、嬰あかじ児あかじを抱あかじいている女の方の乞食が、気絶したらしい男乞食の体を、ズルズル引あかじつ張あかじって行きましたつけ。……で、わたくしは鉞あかじをひろって帰って参あかじりましたのでござりますが、久しぶりに鉞あかじに血を吸あかじわせ、よい気持ちにござります」

右衛門はここで小次郎の方を睨あかじんだ。

「が、わたくしといたしましては、そんなものよりそこにいる男を……」

「右衛門や」

と桂子は云った。

訓すような声であった。

「年を取つても、艱難を経ても、お前の短気と一本気とは、すこしも治らないと見えるねえ」

「性たちでございませぬ、私の性で」

「小次郎をご覧、浮藻をご覧、年を取つたり艱難を経たら——漢あやごんのかみ権守の城などで、あんな恐ろしい目に逢わされたら、ああも性質が変わつたではないか」

「よい変わりようではございませぬ」

「遠慮深くなり控え目になり、他人の心持ちを推量して、決して我など張ろうとしない、人間らしい人間になつたよ」

「無邪気で、あけつぱなしでよく笑つた、陽気な性質が陰気になり、いつも何かを不安がつておられる、そういう性質になりました」

「人間らしい人間になつたのさ」

「それが人間らしい人間なら、人間らしい人間というもの、厭アな物でございませぬア」
右衛門はここで桂子を見詰めた。

「お姫様、あなたも変わられました」

「そうかねえ、どう変わったかしら？」

「人間らしい人間になりました、女らしい女になりました」

「……………」

「以前のお姫様ときたひには、男やら女やら、人間やら魔物やら、悪魔やら神様やらわけわからずにおりながら、大きな強い神きよらか聖な、不思議なお力で、わたしを心服させておられました。それだのにこの頃のお姫様ときは、煩惱の塊かたまり、嫉妬猜疑の坩堝るつぼ！ そのようなものに成り下がられ、わたしを不安と焦燥とに……のう袈裟太郎、そうではないか？」

「さあ」

と袈裟太郎は当惑したように、桂子の顔を盗み見た。

でも、云いにくそうに曖昧あいまいに云った。

「ただわたくしといたしましては、一本の白布にさえ自由自在に、変身あそばされる霊的お力を、どうぞお姫様には失わぬようにと、それだけが願われるのでござりまする」

桂子は黙っていた。

しかしかなり痛いところを、突かれたような様子であった。
なまあたたかい風に乗って野の花の香が渡って来た。

「右衛門や」

と桂子は云った。

「そういう殺ひところし人をした悪人なら、まさかり鉞を投げて足を斬ったもよいが、でもこれから殺伐なことは、なるべく謹んでしない方がいいねえ。……さて今は何刻かしら？ 夜明けにはまだまだ間があるらしいが、でもこういう物騒な所からは、一刻でも早く宮様ご一行は、ご発足なされた方がいいようだよ。……ねえお前……」

と 鶏とりむすめ娘へ云った。

「お前の持ち芸を出しておくれ」

「はい」

と鶏娘は立ち上がり、気軽く林から出て行つた。

また林はしずかになり、ふくろう梟の啼き声が聞こえて来たりした。

「ああわたしは女になりたい！」

不意に 甲かんだか高く情熱的に、物狂わしく桂子が叫んだ。

「靈的の力、超人間的の力、そんなものわたしは惜しくもない！ ああわたしは女になりたい！ 一度だけでもいい、女になりたい！」

その情慾と人間性とを、焰のように燃え立たせ、桂子は小次郎の顔を貪るむさぼように見た。
「お姉様！」

とその瞬間、浮藻は顔を蒼白く変え、恐怖と怒りと嫉妬と悲哀とを、ないまぜにした声で叫んだ。

「殺されても……わたしは……小次郎様を……お姉様にはやらぬ！ やらぬやらぬ！」
小次郎は石のように固くなった。

この時清朗とした鶏とりの声が、暁を告げて啼き渡った。

鶏娘のあげた鶏の声であった。

樵夫小屋で飼っていた幾羽かの鶏わとりが、その声につれて啼き出した。

と、それから間もなくであったが、大塔宮様ご一行が、樵夫小屋から姿をあらわされ、小原の方へ進んで行かれた。

夜は容易に明けなかった。

(不思議だな)

と思ひながらも、宮家のご一行は道を辿たどられた。

それでもやがて夜があけて、すがすがしい朝となった時、背後うしろから大勢の足音が聞こえた。

で、一同は振り返つて見た。

かっちゅう

甲 冑をつけた二十余人の武士が、息せき走つて来るではないか。

(さては芋ヶ瀬の莊司の手の者、錦旗を取り返された腹癒せに、討手の勢を向けたらしいぞ。何ほどのことがあるう、追い散らせ！)

と、お供の面々は競きおい立つた。

しかし近づいたのをよくよく見れば、芋ヶ瀬の莊司の手の者ではなく、見覚えある竹原入道の家来で、それも日頃から宮家に対し、まめまめしく仕えた者どもであつた。

「これはこれはいかがいたした？」

村上彦四郎が声をかけた。

すると彼らは口々に云つた。

「宮様ご一行竹原館を出られ、吉野へご潜行あそばされましたと、昨日呉服くれは様より承まわりました」

「その呉服様仰せられますには、吉野へまでの道々には、宮家に異心抱く者あって、宮様のご安危心もとなし……」

「ついでにはそちたち後お慕いし、ご安泰の地までお供せよと……」

「で、参りましてござります」

「おお呉服が？　そうであったか」

宮家は御涙おんを催おされた。

「大儀であった。供して参れ」

こうしてご一行は三十四人となり、小原の方へ進まれた。

木戸をしつらえ、逆茂木さかもぎを植え、関を設けた玉置たまぎの荘司の、物々しい館が遥かあなたに、

木立ちの間にすけて見える、そういう地点まで辿りついた時には、昼を少し過ごしていた。

ご一行は一旦元来た道へ帰り、小山の蔭に休息しながら、行動について熟議した。

片岡八郎が進み出て云った。

「承りますれば玉置の荘司は、芋ヶ瀬の荘司よりもひときわすぐれた、武家に加担の荒くれ武士とか、さすれば昨日宮家じきじきに、芋ヶ瀬の荘司がもとへお入りあらせましたように、玉置がもとへお入りありましては、危険至極かと存ぜられます。……つきまし

てはわたくし一人して参り、宮家ご一行をお通しあるや否や、荘司に逢つてあらかじめ尋ね……」

「それよろしい」

と云つたのは、思慮深い四条隆貞であつた。

「が、八郎殿一人では、ちと心もとのう存するよ」

「ではわたくしもご同行」

と、矢田彦七が進み出て云つた。

「同行するでござりましょう」

「……………」

でも宮家には無言でおられた。

(心計られぬ玉置荘司のもとへ、二人ばかりをやるということ、どうであろう？ どうであらう？)

あろう？)

それでご躊躇あそばされたのであつた。

(もしものことがあるうものなら、今日まで艱難を共にして来た、あたら可愛い忠節の家来を……)

このことを不安に覺されたからであつた。

宮家は八郎と彦七との顔を、代わる代わるご覽あそばされたが、

「やむを得ぬ儀……」

とややあつて仰せられた。

「八郎、彦七、では参れ。……しかし、玉置の莊司の態度に、疑がわしい節いささかなりとあらば、卑怯もない、臆病もない、ただ一散に引き返して参れよ」

八郎と彦七とは一揖^{ゆう}し、小山を巡つて姿を消した。

小山を巡つて片岡八郎と、矢田彦七とは歩いて行つた。

玉置の館へ近寄るにつれて、殺伐の氣が感じられ、それが二人には氣にかかった。

木戸まで来ると甲冑をつけた武士が、数人二人を遮^{さえぎ}つた。

「これ山伏、どこへ通る」

「いや」

と片岡八郎は云つた。

「われら事は^{こと}大塔宮様家臣、片岡八郎と申す者、これにあるは矢田彦七、宮家よりの使者として兩人参つた。玉置殿に御意^{ごい}得たい」

すると武士たちは顔を見合わせたが、

「それ来たぞ」

「お知らせしろ」

「いつそこで……」

「いや待て待て」

などと、不穩の言葉を囁き合ったが、やがて一人の武士が館の方へ、金具を鳴らして走って行った。

「これはいけないな」

「ちと不穩だ」

八郎も彦七も不安を感じ、武士たちに警戒されている中で、声を忍ばせて囁き合った。でも間もなく走って行った武士が、また急がしく走り返って来て、

「こなたへ」

と八郎と彦七とへ云い、館の方へ案内するべく、先に立って歩き出した。

二人は後からついて行った。

これ以前からのことであつたが、賄賂わいろや請託せいたくの金や品物で、贅沢ぜいたくにきらびやかに造り飾られてある、田舎の莊司の住居などは、どうにも思われない豪勢な館の、豪奢ごうしゃな部屋で玉置の莊司は、鬼火の姥うばと範覚とを相手に、酒を飲み飲み話していた。

「遁がしはせぬよ、大丈夫じゃ」

玉置の莊司はこう云いながら、さぞ胸毛など多かろうと、そう連想されるほどに、手の甲から指へかけて、黒い長い毛の生えている、熊のような手で胸を打つてみせた。

「わしは芋ヶ瀬の莊司とは違う。わしはあんな意気地なしではない。どうあろうと宮家は討つて取るよ」

「それでこそ武家方でございます」

もうお得意の追従ついで口を、こう利きながら鬼火の姥は、さらにいつそう煽あおるように云つた。

「宮様御首級みしるしさえあげましたら、車の庄と六千貫とは、あなた様のものでござりまする。これまでのご知行と合わせましたら、たいへんもない高になりまする」

「そうともそうとも」

と莊司は云つた。

「が、わしとしてはご恩賞よりも、昔から武家方の武士としての、つくすべきことをつくしたいのでな」

「そうなくてはなりません。……北条家代々のご仁政によって、この日本ひのもとの武士という武士は、安泰にくらすこと出来ました筈で。……ご恩は海山でござりまする」

「いざ事あらば鎌倉へとな、われら日頃から思っていたのじゃ。……範覚殿もそうであるうな」

「さようで」

と範覚は吃驚びっくりしたように云った。

というのとは別のことを考えていたからで。

（姥とのツキアイにも飽き飽きした。年寄りで醜婦で惨忍で、そうして綺麗な男さえ見れば、ベタベタして後ばかり追っかける、好色で度のない浮気者でもある。こんな婆さんと何んの因果で、ツキアツて行かなければならないのだろうか？）

こんなことを考えていたところへ、突然莊司に話しかけられたのであった。

「さようで、私も、いざ鎌倉となれば、代々仏法にご帰依きえなされ、執権の身で入道となられた、北条殿のおために、二つない命を捧げまするつもりで」

(が、本当はそうでない)

心では考えているのであった。

(飛天夜叉の妹の浮藻とかいった女！ ああいう女のためにこそ、俺は命を捧げるんだがなア。……その証拠には一度気絶したっけ)

「それにいたしても宮家一行、そろそろ参ってもよい頃だが」

と、玉置の莊司はいぶかしそうに云った。

「他の道などへ廻りましたのでは？ ……」

と、鬼火の姥は不安そうに云った。

「いやいやどの道へ廻ろうと、われらが手の者要所要所において、警戒おこたりないにより、討ちもらすことはめつたにない」

「戸野の大弥太殿が竹原館で、惜しいところを討ちもらし、芋ヶ瀬の莊司殿が心弱く、お通しをしてしまった以上、ここで玉置殿が討ちとらずば、宮家は吉野へ入らせられましよう」

鬼火の姥と範覚とは、定^{じょうへん}遍^{へん}の附けた討手^{うって}と共に、そうして戸野の大弥太と共に、十津川へ入り込んで来たのであった。

が、わずかな時間ときの相違で、大塔宮ご一行は、竹原館をお出ましになり、吉野へご潜行あそばされた。

そこで姥と範覚とは、大弥太には関係なく先廻りをし、わけても武家方に心を寄せている武士、玉置の莊司のもとへ来て、宮家の御首級みしるしいただくよう、莊司に慫慂しやうようしているのであった。

広大な中庭には池があり、池には島がつくられてあり、橋が左右からかけられてあった。奇巖で蔽われた築山からは、滝が幅ひろく落ちていて、滝壺の岩の上には鷺などがいた。そういう贅沢の庭を見ながら、しばらく三人は黙っていた。

その時あわただしく若侍が、襖を開けてはいつて来た。

「大塔宮様ご使者と申して、片岡八郎と矢田彦七とが……」

「おお参ったか！」

と莊司は云い、

「上げてはならぬ、玄関まで導け！」

——一旦引き下がった若侍が、再度部屋へはいって来た。

「仰せに従い兩人の者を、玄関までつれましてござります」

「よし」

と莊司は立ち上がった。

玉置の莊司の館の玄関に、片岡八郎と矢田彦七とは四辺あたりに心をくばりながら、莊司のあらわれるのを待っていた。

と、毛深い五十男が、太刀をひっさげてあらわれた。

「……………」

それは玉置の莊司であったが、無礼にも無言で睨んだままでいた。

八郎と彦七とは顔を見合わせたが、

「当館のご主人でござるかな？」

と、怒りを忍んで八郎が訊いた。

「さよう」

と莊司は答えたままで、依然後は無言でいた。

「われらは大塔宮様の家臣でござつて、片岡八郎、矢田彦七と申す。……今このたび度宮家には念願にゆうぶござつて、吉野大峯山へご入峯にゆうぶあらせられます。……しかるに当地には新関あつ

て、往来の人々を止どむるとのこと。……勿体なくも我らご先達は、主上の御皇子にましませば、仔細あるべき筈なけれど、しかし一応存意を尋ねんと……」

ここまで八郎は云つて来た。

と、またも何んたる無礼か、玉置の莊司は苦笑いをしたが、一言の挨拶も述べようとはしないで、クルリとばかりに身をひるがえし、足早に奥へはいつて行つた。

部屋へ帰つて来ると玉置の莊司は喚いた。

「やあやあいずれも武器の用意をいたせ！ 大塔宮様網にかかったぞ！ 御首級みしるしいたさうぞ、武器の用意をいたせ！ ……範覚殿のお手並み見たい！ ……手の者の指揮おねがひいたす！」

「変だな？」

「あぶない！」

「いかがいたそう？」

八郎と彦七とは囁き合つた。

片岡八郎と矢田彦七とは、なお玄関に佇たたずんで様子をうかがっているのであった。その二人の耳に聞こえて来るものは、武器の音、甲かっちゅう冑ゆうの音、罵りさわぐ人々の声、右往左往する足音であった。

「矢田行こう」

と八郎は云った。

「宮様仰せられたお言葉がある。……莊司に不穩の挙動があつたら、卑怯もない引つ返せと！ ……莊司の挙動まさに不穩だ」

「行こう！」

と彦七はすぐに応じた。

もう二人は木戸まで来た。

「どこへ？」

「退どけ！」

一散に走った。

が、二町あまり走った時、背後うしろから大勢の喊声が聞こえ、矢が教本耳を掠めた。足を止めて二人は振り返って見た。

五、六十人の玉置の家来が、あるいは騎馬であるいは徒歩で、弓、長柄などをひっさげ、一団となつて追つて来ていた。

宮家のおわす地点へまでは、小山をへだててまだ遠かつた。

「……………」

「……………」

眼を見合わせて頷き合い、二人はさんざしの藪の蔭へかくれた。

それとも知らず玉置の家来どもは、算を乱して走つて来た。

「！」

「！」

同時に飛び出した八郎と彦七——八郎は真つ先に進んで来たところの、騎馬武者の馬の両脚を薙ぎ、馬いなないて棹さおと立ち、乗つたる武士の落ちたるところを、すぐに彦七、躍りかかり、斬り伏せて首をあげた。

叫喚！

討手は一斉に逃げた。

「遠矢やぶすまにかけろ！ 矢やぶすま襖すまにかけろ！」

金剛杖を杖つきながら、背後うしろから範覚が大音に叫んだ。

矢襖！

まこと襖のように、矢が密集して飛んで来た。

一本！

八郎の胸に立った。

「彦七！ そなたは、遁がれて宮家へ！」

「浅傷あざでだ！ 八郎、気を落とすな！ ……死なばもろとも、何んで一人で！」

矢！

またも八郎の股へ！

「行け、彦七！ 宮様御おん大事！ ……お落とし申せ、行け行け行け！」

「今日まで生死を共にして来た二人だ！ ……死なばもろとも！ 生くるももろとも！」

……肩にかかれ、生くるももろとも！」

「一人で防ぐ！ 防いで死ぬ！ ……事情宮家にお知らせせずば、みすみす宮家は、雑兵ばらに！ ……行け遁がれてくれ、落ちてくれ！ ……行かぬか、怨むぞ、汝おのれ、彦七イ—

—ッ」

「……………」

塊かたまつて動かぬ二人を目がけ、束となった篠のように飛んで来る征矢そや！
切り払い切り払い悲痛の声で、

「矢田彦七、汝は汝は、八郎を犬死にさせる気な！ ……二人もろともここで死なば、みすみす宮家は！ ……この理わからぬか！」

「八郎オ——ッ」

と彦七は飛び上がった。

「おさらば！ ……行くぞ！ ……見すてて行くぞオ——ッ」

「それでこそ朋友！ ……礼を云うぞ彦七イ——ッ」

彦七は一散に走り出した。

林の奥の丘の背後の窪地に、一団の男女がいた。

宮家ご一行をそれとなく、護衛して来た桂子たちであった。

と、丘を一散に、走り下りて来る人影があった。

それは風見の袈裟太郎であった。

「お姫様大変でござります」

と、桂子たちの前まで来ると、物見に行っていたその袈裟太郎は、大息つきながら忙がしく語った。

「大塔宮様二人のご家来、片岡八郎殿と矢田彦七殿とが、玉置の荘司の館へ参り、宮様ご通過を申し入れましたところ、荘司無礼にも返辞なく、不穩の挙動ありましたので、お二人のご家来には引き返されましたが、それを追いまして玉置の家来ども、五、六十人馳せ参り、むこうの野原にて矢襖をつくり……のみならずこの様子にて察しますれば、荘司めは別に大兵を出して、宮様を討とうといたすものらしく……」

「一大事！」

と桂子は叫び、裾をひるがえして躍り上がった。

「片岡殿にしても矢田殿にしても、お助けいたしたきは山々ながら、それよりも宮様お命が！ ええそれにしても野長瀬兄弟、何をいたしておることやら！ ……われらは小勢男女を雑まじえて、わずか七人どうにもならぬ！ ……袈裟太郎よ袈裟太郎よ、中津川方面へそち参れ！ ……野長瀬兄弟来るものならば、道の順序そちから来る！ ……物見いたして姿見かけなば、事情を告げて一刻も早く！ ……小次郎よ、いずれもお立ち！ われら

は宮様のご一行を！」

声に応じて風見の袈裟太郎は、草をひらき藪をくぐり、木立ちを分けて一散に、中津川の方へひた走り、桂子、浮藻、小次郎、鶏とりむすめ娘、幽霊女たちは桂子を先に、宮様おわす小山の蔭を差して、足を空に裾ひるがえし、走り走り走り走った。

遙かに落ちのびた矢田彦七は、背後うしろから喊声が起こったので、足をとめて振り返った。一人の武士が太刀の先に首級くびをつらぬいて、高くさし下げ、その周囲を巡って五、六十人の武士が踊りつ笑いつ叫んでいるのが見えた。

「ハ——ッ」

と彦七は大意を吐き、バラバラと熱い涙をこぼした。

「とうとう……八郎は……討たれた討たれた！」

大塔宮様の家臣として、行動をいっにし千辛万苦をした、戦友の過去の出来事が、一瞬間眼前ひろに展開がって見えた。

（八郎よ、死んでくれたか！……彼の忠死を犬死にはしまい！）

で、彦七は身をひるがえすと、奔馬ほんばのように走り出した。

宮家ご一行は小山の背後に、不安をもつて屯たむろしていた。

朋友とも想いの村上彦四郎は、八郎と彦七の身の上のことが、どうにも案じられてならないらしく、小山——と云つても丘ほどの小山を、上がったり下りたりして焦燥いらいらつていた。

小山へ上がった彦四郎の眼へ、小松の間をこつちを目ざして、走つて来る山伏の姿が見えた。

矢田彦七に相違なかつた。

(彦七一人で? ……八郎は?)

ハツと思ひながら大音に呼んだ。

「矢田よ! ……彦七よ! ……いかがいたしたア——ッ」

「彦四郎オ——ッ」

と彦七は叫んだ。

「一大事! ……玉置たまぎの荘司め! ……謀反! 逆意! 宮家に対し! ……討手出したわ! 押し寄せ来るわ! ……無念、八郎は、ウ、討たれたア——ッ」

彦四郎はグラグラと眼が廻つた。その眼を抑え、小山を駈け下り、宮家の前へドツと坐

った。

「一大事！」

絶句した。

宮家をはじめ三十余人は、総立ちとなつて彦四郎を囲んだ。

と、そこへ矢田彦七がよろめきながら、駈けつけて来た。

「矢田が帰つた！」

「彦七どうした!？」

「片岡は？」

「八郎は？」

「彦七へ水を！」

口々に叫ぶ一同を見廻し、彦七は宮家のご前へ寄つたが、グタグタと膝をつき喘ぐ息で、

……

桂子たちの一団が、小山の蔭の林の中へ、息せき走つて来た時には、矢田彦七が玉置の
莊司の、逆意と討手を差し向けたことを、宮家へ言上した後と見え、三十余人のお供の者

が、鉄壁のように宮家を囲み、玉置の討手を逆撃つべく、小山の裾を巡るところであった。

(向こうへやつては一大事！)

そう桂子は咄嗟に思った。

で、小松や満天星や茱萸や、櫛や野茨などで、丘のように盛り上がっている、藪の蔭に身をかくしながら、

「大塔宮様ご一行の、ご難儀の場合と見奉りまする、玉置の莊司不忠不義にも、順逆の道あやまつて兵を出だして、宮様ご一行をお襲い申し上げんと、追いかけて参るに、逆撃べき御模様、勇ましき限りにはござりますが、敵は大勢御味方は小人数、ご尊体にお怪我などあらせられては、回天のご事業も一頓挫か！ ……この際はお怒りをしずめられ、恥じをお忍びあらせられて、御道を変えられ中津川の方へ、ひとまず御落ちあそばしませ！ ……意外のお味方その方面より、あらわれますやも計られませぬ！ ……宮様討たんと玉置の兵ども、この道へ寄せて参りましたならば、かなわぬまでも我々一同にて、欺き防ぎ遮つて、一人もお後追わせますまい！ ……中津川の方へ早々お落ちを！」

と、必死の声で呼ばわった。

千辛万苦を共にして来た、愛臣片岡八郎を討たれ、悲哀と憤怒とを一時に発せられ、憎きは玉置、今は許されぬ、片岡八郎のとむらい葬合戦、逆むかえう撃てや！」
とお下知あそばされ、馳け向かわれた宮家ではあつたが、この声を聞かれると御足おんあしを止められた。

一同も足を止め振り返つた。

「何者？」

「奇怪！」

「女の声だつたぞ！」

口々に怪しんだ。

そういう人々に見えるものと云えば、林、藪、丘、雑草、——それに当っている陽の光、そこを飛んでいる小鳥ばかりであつた。

男の姿も見えなければ、女の姿も見えなかつた。

「玉置の莊司の詭計らしいぞ！」

と、平賀三郎が不安そうに云つた。

「ああ云つてわれわれをあらぬ方へ向かわせ、そこで討ち取る所存らしいぞ！」

「狩り出だせ！」

「討つて取れ！」

バラバラと数人が走り出した。

「お待ち！」

とその時宮家の御声みこえが、静かに厳おごそかに発せられた。

怒りと悲哀とで宮家の御顔は、鋭く険しく変わつておられたが、今は沈着に冷静に、冥想的にさえ戻つておられた。

「芻すうぎよう堯こしよばの詞ことばまでも捨てずという、古語の意味を活かすは今じゃ！……かかる場合にわしをわしと知つて、濁りのない女の声をもつて、妥もつとも当ともの注意を与えてくれた！……詭計ではない天の告げじゃ！……信じてよかろう、中津川の方へ行こうぞ！」

片岡八郎を討つて取り、氣負きおい立つた玉置の莊司の勢が、

「宮家の御首級みしるしいただけや」

と、先を争い算を乱し、小山を巡つて押し寄せて来たのは、それから間もなくのことであつた。

と、小暗おぐらい林の中から、男女の囁ささす声が聞こえて来た。

雨の降る夜の 蝸かたつむり牛

角ふりわけて歩めども

塀がつるり

壁がつるり

つるり、つるり、つるり、つるり、つるり

「アツハツハツ」

「ワツハツハツ」

うらめしや判官殿

わが身とちぎりかわしながら

ほかに愛しき女房を持ち、

今日もご酒宴

あすもご遊山

「アツハツハツ」

「ワツハツハツ」

そうしていかにも楽しそうな、手拍子の音や足拍子の音が、それにつづいて聞こえて来

た。

時が時であり場合が場合であり、そうして場所が場所であった。

玉置の莊司の勢どもは、足を止め一所に集まり、顔を見合わせ沈黙した。不意に数人の者がそつちへ走った。

正体を見あらわそうとしたのである。

しかし暗い林の中には、人っ子一人いなかった。

が、やがて反対の方の、大藪が起伏し連らなっている蔭から、

天王寺の妖霊屋

見たか見たか妖霊屋

「ワツハツハツ」

「アツハツハツ」

相模入道殿もびつくり

大仏陸奥殿もびつくり

長崎次郎殿もびつくり

びつくり、びつくり、びつくり、びつくり

「ワツハツハツ」

「アツハツハツ」

と、同じ男女のうたう声^{こゑ}が聞こえ、踊りつ舞いつしているらしく、手拍手の音や足拍子の音が、同じように陽気に聞こえて来た。

「変だな？」

「何者だろう？」

「樵夫^{そま}か百姓か？」

「狩り出せ！」

とまたも十数人が、そっちへ向かつて走つて行つた。

しかし藪蔭には依然として、人つ子一人いないのであつた。

尊いお方を討つて取ろうと、押し寄せて来た彼らであり、尊いお方の身内人を、一人討ち取つた彼らであつた。恐れ多いという感情と、天罰こそ恐ろしいという感情とが、心の底には流れていた。

そこへこのような奇怪なことが、しかも白昼行なわれたのである。

恐怖が彼らの心をとらえた。

不意に五、六人が元来た方へ、悲鳴をあげて走り出した。と、それに引き続き、玉置の勢一同は、元来た方へ逃げ出した。

この頃大塔宮ご一行は、中津川の郷の方角へ、足をいそがせ辿っておられた。

後から玉置の莊司の勢が、追つて来る様子もなかったので、さては先刻この方面へ落ちよと、声をかけてくれた声の主が、これも先刻云つたように、玉置の莊司の勢を遮り、追い討ちさせないに相違ないと、感謝せざるを得なかった。

こうしてご一行は辿りに辿り、やがて中津川の峠路にかかった。

と、谷一つ越えたあなたの山の頂きに、五、六百騎の 甲かっちゅう 冑たむろ 武者が屯していた。

盾を前にし射手をすぐり、それを左右に分けて並べ、宮家ご一行の姿を見るや、ドツと一斉に鬨をつくり、すぐに矢を射かけて来た。

玉置の莊司が精兵をすぐり、先廻りをして来たのであった。

と見てとられた大塔宮は、むしろ厳かに微笑あそばされ、

「矢種のあらん限りは防ぎ矢を射、心しずかに自害して、名を万代に残そうぞ。ただし相構えて我より先に、腹切ることとはまかりならぬ。尚われ既に自害したと見ば、顔の皮を剥

ぎ耳鼻を切つて、何者の首級くびとも見えわかぬように致せ。いかんとなればもし我が首級くび、巷ちやうなどに曝さらされようものなら、宮方に志を寄せる者、萎靡いび沈滞するであろう、死せる孔明、生ける仲達を走らせた例ためしも唐土にある。死して後までも威を残す！ 将たるものの心掛けじゃ！ ……今は所詮逃がれぬところ、穢きたなき振る舞い行のうて、敵に嘲けられ笑わるな！」

と、大音声に仰せられた。

「仰せごもつとも、何条われら……」

「きたなき振る舞いいたしましょう」

「宮様御前おんに命をおとし……」

「曰ひの本の武士ものの亀鑑かがみとなれや！」

と、お供の面々は異口同音に叫び、宮家と合して三十三人、敵陣めがけて坂を下った。

するとこの時山つづぎの、横手の森から鬨の声が起こり、赤き旗三旒ななれひるがえり、七百あまりの将卒つわものが、騎馬、徒歩かちにて走り出して来た。

「背後にも敵いでたるぞ！」

「玉置の莊司め計りおつたわ！」

と、宮家をはじめお供の面々、切齒して思わず地団太を踏んだ。

と、赤き旗のほとりから、二騎の武士しずしずと歩み出たが、その一人が大音に叫んだ。

「紀伊の国の住人野長瀬六郎、同じく舎弟の七郎にて候、大塔宮様お迎えとして、疾より

ここにて待ち受けたり！……勿体なくも宮家に対し、弓引き楯をつらぬる者は誰ぞや！

玉置の莊司殿と見たは僻目か！……只今ほろぶべき武家に加担し、即時にご運を開か

せ給う宮家に、敵対いたす愚かさよ！……天下の間いずこのところにか、身を置くと

ころあるべきや！ 天罰覲面遠かるまじ！……やあやあ己ら馳せ向かい、朝敵ばらを

追い崩せ！」

声に応じて七百余騎、ふたたびドツと鬨をつくり、一団となって谷を下り、玉置の陣へ駆け込んだ。

野長瀬兄弟の陣から脱けて、桂子たちのいる小松原へ、風見の袈裟太郎が帰って来たのは、それから程経た頃であった。

袈裟太郎の報告を聞いてしまうと、桂子は安心したように頷いた。

「では宮様ご一行は、野長瀬兄弟がお供をして、槇野聖賢の槇野城へ、一旦お入りあそ

ばしたのだね」

「はいさようにござります、玉置の軍を追い散らしました後、野長瀬兄弟にご守護され、槇野城に入りましてござります」

「野長瀬兄弟はもう昨日から、その陣地にいたとか云ったね」

「はいさようにござります。……そこへ私事こと行き合わせましたので、間もなく宮様ご一行が、おさしかかりあそばすと申し上げ、お待ち受けいたしておりましたところへ、はたし
ておいで遊ばしましたので……」

「どつちみちこれからも大塔宮様には、艱難ご辛苦あそばさるるものの、当座の大難をお遁がれあそばして、こんな嬉しいことはないよ」

野兎が木の間を駈けて通り、山蟻が地面を列をなして通り、陽ひが酒のような黄金こがねの光を、
濃こまやかに四方にみなぎらしていた。

やがてこの年の九月となった。

鎌倉の幕府も、京都の朝廷も、動揺せざるを得ない大事件が起こった。

大塔宮だいとうのみやが吉野に城を築き、楠木正成くすのきまさしげが千早に城を築き、前後して兵を挙げたこ

とである。

悪霊殿

この頃桂かつらこ子は浮藻うきもや小次郎と、京都二条の自分の館に、陰惨として住んでいた。一緒にいるとは名目だけで、小次郎とも浮藻ともかけ離れ、別棟の高たか楼どのに一人で住んでいるのであった。

写経をしているという噂でもあれば、秘法を修しているという噂でもあった。

でも鶏とりむすめ娘や幽霊女たちは、ひそひそとこんなように囁き合った。

「小次郎様をご覧になるのが、お姫様には苦痛になられ、それであのようかけ離れて、一人で住んでおいでになるのね」

「浮藻様を見るのが辛いので、それで離れてお住居すまいになるのさ」

築地と木立ちとに囲まれた、古い蒼然としたこの館は、外おもて形がかりこそ廃屋めいていて、寂しくもあれば恐ろしくもあったが、内なかへはいると往そのい昔ぜんは、陽気でもあれば華やかでもあった。

多くの男女の部下たちが、例の道場でいつも楽しそうに泥棒の稽古だの、物真似の練習だのを、賑やかにやっていたからである。

しかし彼らの頭領が、飛天夜叉の桂子が、そんなような生活くらしかたをはじめてからは、部下たちはあまり集まって来ず、集まって来てもだれきって、稽古などやろうとはしなかった。

で、この館はその内部なかみも外見みかけと同じように寂しくなり、蒼然となり恐ろしくさえなつた。「ああわしは一月というもの、お姫様のお姿を見かけない」

それは半欠けの下弦の月が、この館の構内の、大槻の木の梢の上に、傾むきながらかかっている、大分更けた夜のことであつたが、大蔵ヶ谷右衛門はこう呟きながら、例の大おおま鉞さかりをひっさげて、でも大変悲しそうに、首を垂れ肩をちぢめ、庭を忍びやかに歩いていった。

「秋雨が高殿の古い欄干を、涙のようにぬらしていた晩だ。千切れた御簾みすを背後うしろにして、その欄干にもたれかかり、ぼんやりとお庭を見下ろしておられた、お姫様のお姿を見かけたのは、一月前のことだつた。……わしがお姫様と声をかけると、お答えはなくて顔うなずがたが、不意にお袖でお顔を蔽われたつけ。……きつとお泣きなされたのだ」

歩いて行く彼の足もとを横切つて月光に背の毛を薄うすしろがねいろ銀色に光らせ、太い紐のよう

な一匹の※が、遙かむこうの庭の隅にある、老いた榎の洞の中へ、矢のように走り込んだ。「飛天夜叉様がお泣きになるとは！」

不意に右衛門は足を止め、大鉞を地へ突き立て、その柄頭へ両手をのせ、その甲の上へ額をあてた。

肩がこまかく顫え出した。

忠実な朴訥な老いた僕は、女主人の心を推量り、忍びやかに自分も泣き出したのである。

雁の啼き声が聞こえて来た。

月の下辺を、矩形をなして、渡っているその鳥の姿も見えた。

「殺す！」

と烈しく声に出して云い、右衛門は鎌首のように首をもたげた。

「みんな小次郎のさせる業だ！今夜こそ小次郎を殺してやる！」

裏庭に面している部屋の中に、小次郎と浮藻とが坐っていた。

寒れた顔へ涙をかけ、それを細めた燈火に照らし、浮藻は小次郎へ縋るようにしてい

た。

「小次郎様、参りましょうよ」

浮藻の声は咽んでいた。

「どこの山の奥へなりと、どこの海の果てへなりと、二人で参つてくらしみましょうよ」

「……………」

黙つてうつ向いて唇を噛んでいる、蒼白の顔の小次郎も、体は痩せて窶やつれていた。

小次郎は思っているのであった。

（そうだ、二人は行つた方がよい。この館を出た方がよい。……桂子のためでもあれば、浮藻や自分のためでもある）と。

小次郎を獲ようと焦心しながら、妹の心を思いやつて、さし控えている飛天夜叉の桂子。小次郎に添いたいと祈願しながら、姉の心を推おし量はかつて、今に望みをとげない浮藻。桂子には恩と義理とを感じ、浮藻には可憐さを覚えながら、どっちへも行けずに縮すくんでいる小次郎。——この三人の生活は、この館へ歸つて来て、共棲ともすみをするようになって以来、生き地獄の度を烈しくして来た。

そうして現在のありさまとなつた。

すなわち桂子が苦痛に堪えられず、二人から離れて別棟の高殿に、一人で住むようになったのである。

浮藻にとつても小次郎にとつても、高殿に桂子の住んでいることは、これまで一緒に姿を見せて、自分たちと同じ棟に住んでいた時よりも、一層に苦痛でもあれば恐ろしくもあつた。

夜昼となくその高殿から、嫉妬ねたみと猜疑うたがひと呪咀のろひをもつて、妖精のように桂子が、自分たちを看視していることだろう。

で、二人にはその高殿が、悪霊の住んでいる魔殿かのように、凄く肌寒く思われるのであつた。

小次郎はよく思つた。

(自分だけこの館から出て行くのが、一番よいのではあるまいか)と。

しかしすぐに彼は不安を覚えた。

(すると浮藻は死ぬだろう)と。

そう、小次郎が出て行つたならば、恋するの余り慕うの余り、水に入るか木にくびれるか、懐剣で乳の下を刺すかして、浮藻の死ぬことは眼に見えていた。

(いったいどうしたらよいだろうか?)

こうして今日になったのである。

その今夜、はじめて浮藻の口から、思い迫った決死の語調で、

「どこの山の奥へなりと、どこの海の果てへなりと、二人で行ってくらしましょう」

と、涙と共に口説くどかれたのであった。

燈心を引いてわざと細めた紙燭の光が、古びた襖へ、朦朧もうろうとした二つの影法師を、妖ま怪のけのようにうつしている。

庭へ散り落ちる木の葉の生命いのちを、傷いたむかのように聞こえて来るのは、秋深い虫の声々であつた。

「浮藻殿、参りましょう」

ややあつて小次郎は決心したように云つた。

「いつぞや河内の林の中で、桂子様からわたしたち二人は、どこへなりと行ってくらすぐよいと追いやられた身の上でござります。……漢あやごん権のかみ守の居城の事件から、このような境遇とはなりましたが……今こそ出かけて行くべき時……」

「おおそれでは小次郎様、わたしと一緒にここを出て他国よそへ！」

と浮藻は小次郎へ継りついた。

「それでこそ妾は救われます！ ……どのような苦勞がありましたとも、このようなありさまでこのような所に、苦しみながら住んでいるより……」

「忘恩の徒と桂子様には、わたくしたちの立ち去った後、お怒りになるかは知れませぬが、それもこれも一時でござって、わたくしどもの姿が消えましたならば、かえって桂子様に致しましても、心朗らかになりましようよ」

「わたくしどもにいたしましても、二人ばかりでいつまでも一緒に、水いらすにすむこと出来ましたら、知らぬ他国での辛苦のくらしも、何んの恐ろしく何の悲しく……」

そつと立ち上がる二人の姿が、長く襖に影法師となつて写つた。

「声が聞こえぬ、どこへ行きおつたか？」

この部屋の外の落ち葉の庭に、大鍼をひっさげて、大蔵ヶ谷右衛門が佇たたずんだのは、それから間もなくのことであつた。

しかし右衛門がそこへ来た頃には、旅装いさえろくろくにしない、小次郎と浮藻とが館を出て、築地の外を町の方へ、いそぎ足に歩いている時であつた。

(これから新しい生活が始まる)

こう二人には思われた。

わけても浮藻には館を出て、恋いこがれている小次郎と、一緒に広い世間へ出て行って、新生活をするということが、嬉しく思われてならなかった。

(どんな苦勞をするにしても、小次郎様と一緒になら、わたしには苦勞とは思われない)
そう彼女には思われるのであった。

空には銀あまのがわ河が月光に暈ぼかされ、少し光を鈍めてはいたが、しかし巾広く流れてい、七ツ星さえ姿を見せていた。

築地の角を左へ曲がった。

で、館の裏側に添い、二人は足早に歩いて行つた。

と、不意に、

「小次郎！」

と呼ぶ声が、どこからともなく聞こえて来た。

ギョツとして二人は足を止めた。

「小次郎や」

という声がまた聞こえた。

それは頭上から来るようであつた。

振り仰いだ二人に見えたものは、薄白い築地を蔽うようにして、黒く茂っている植え込みを抽^ぬいで、聳^ぬえている高殿の姿であり、その高殿の廊の欄干に、のしかかるように体を寄せて、じつと二人を見下ろしている、絵本で見た玉藻^{たまものまへ}前のような、飛天夜叉桂子の姿であつた。

二人はハ——ツと息を飲み、足を釘づけにしてガタガタ顫えた。

と、桂子の右の手が、高く頭上にかざされて、長い袖が絞れ渦巻いて、車輪のように廻ると見えた。

瞬間、小次郎の体は宙に浮き、築地に添い植え込みに添い、高殿の方へ釣り上げられていた。

「あツ、あツ、あツ」

と云つたかと思うと、浮藻はグラグラと眼が廻つた。

「神様！ おおおお、お助けくださりませ！」

口の中でそう叫び、あまりの恐ろしさに眼を閉じた。

でもその眼をひらいた時には、もつと恐ろしい光景が——高殿の廊で二人の男女が、抱擁している光景が、悪夢のように映つて見えた。

「余りな……お姉様……あんまりな！」

小次郎と桂子とが抱き合つたまま、廊から部屋の中へ消えたのと、浮藻が気絶したのと同時であつた。

この同じ夜のことであつた。

六波羅北の探題邸たんだいやしきを、子を取られた鬼子母神のように、部屋から部屋、廊から廊と、鬼火の姥うばが喚きながら、金地院範覚を探し廻つていた。

「範覚よ、どこへうせた！ お主に去られてはわしやもたぬ！ ……範覚よ、ちよつと来てくれ！」

一つの部屋の襖をあけた。

と、近習の若侍たちが、雑談に花を咲かせていたが、

「色情狂いろきちがひじゃ、それ逃げろ！」

バタバタと逃げてしまった。

「範覚よ、ちよつと来てくれ！ …… 今後はきつと浮気はしない！ …… お前一人ハツキ
 リときめる！ …… 範覚よ帰つて来ておくれ！」

また一つの部屋の襖をあけた。

「化物だ——ッ、それ逃げる！」

稚子たちに雑つて茶童たちが、双六に興を催していたが、一斉に立って逃げてしまった。
 「範覚よ、どこにおいでだ。 …… お前に去られたらわしや駄目じゃ。 …… 根こそぎ力が抜
 けてしまう。 …… ただの婆さんになってしまふ！ 範覚よ、帰つて来ておくれ！ ……」

鬼火の姥は血眼ちまなこになつて、館中探して廻るのであつた。

熊野から十津川、芋ヶ瀬から玉置と、大塔宮様を討ち奉ろうと、鬼火の姥と範覚とは、
 不敵にもお後をつけ廻したが、とうとう目的をとげることが出来ず、宮家には槇野城へお
 はいりになり、その後吉野へ城を構えられ、そこへお籠りこもあそばされ、三千の武士や衆徒
 に守護され、諸方へご令旨を遣わされ、勤王の兵を募られつつ、一方には直ちに京都六波
 羅を、ご討伐あそばさるるご計画と、こういう形勢になつてしまつた。

そこで姥は範覚と連れ立ち、六波羅探題へ帰つて来、北の探題の館に住み、今後の命を
 待つことにした。

ところが金地院範覚であるが、玉置の荘にいた頃から、姥に対して冷淡になり、離れようとする素振りを現わしたが、この館へ来て以来、その傾向が著しくなった。

それに薄々感付いてはいたが、まさかと思つて鬼火の姥は、警戒しようとするでもなく、例によつてこの館に仕えているところの、美貌の若武士わかざむらいや稚児や茶童に、いやらしい様子で働きかけた。

と、不意に今夜になつて、範覚が姿をくらましてしまった。

異性に接することによつて、飛天夜叉の桂子は、超自然力を失うのであつたが、鬼火の姥に至つては、それとは全然反対に、異性に接しないことによつて、超自然力を失うのであつた。

年寄りで醜悪の姥に対しては、範覚以外のどのような男も、怖毛おしげを揮つて近寄らなかつた。

もし範覚を失おうものなら、姥はただのお婆さんとなり、超自然力を失うであろう。

範覚が姿をくらましたことは、彼女にとつては大打撃であつた。

「範覚よ、どこにおいでだ！」

またもや姥はこう呼びながら、部屋部屋の襖を開けはじめた。

この頃範覚は京都の町を、
銀河あまのがわを頭上にいただきながら、朗らかな顔をして歩いて
いた。

(悪魔から離れたというものさ)

金剛杖を軽くつき、浮き立つように歩いていった。

(新しい生活がはじまります)

寝しずまった町はひそやかで、両側の家々は扉とほも葎そしも、門も窓もとぎしてしまつて、火ほ影かげ一筋洩はらしていなかつた。柳の老木おいきが立っていて、しきりに枯れ葉を散らしているのが、月光に針でもこぼれるように見え、その根もとの草むらの中で、虫が声かぎり鳴いているのが、秋の深夜を浄化してみせた。

(あの婆さんとツキアウことによつて、何を俺おいら得とをしたかしら?)

こんなことが考えられた。

(女のいやらしさを知つたばかりさ)

(では今後は)

と考えた。

(女の綺麗さを知らなけりやアならねえ)

(オヤオヤオヤ)

と立ち止まった。

(ここはいつたいたいどこなんだろう?)

寂しい町の外れであつて、築地が側そばに立っていた。

「ほう！」

と驚いて声をあげた。

「若い女が仆れているぞ——ツ……見ろ！　もうこんな好運にぶつかってしまった！」

大藏ヶ谷右衛門は、裏庭から館の裾を巡り、前庭の方へ歩いて来た。

(浮藻様はおいでなされぬ。小次郎めもないようだ)

大おおまさかり 鉞まさかりが薄白く、その刃を月光に光らせていた。

「変だ」

と呟いて門の方を見た。

「潜くぐり戸が開いている」

で右衛門は潜り戸をくぐり、館から外へ歩み出た。

人っ子一人通っていない、森閑と更けた夜の中に、館の築地が延びていた。

その築地を左へ曲がった。

と、行く手に一人の山伏が、女を小脇に抱えながら、向こうへ歩いて行く姿が見えた。何がなしに気にかかり、右衛門は小走りに走り寄ったが、

(あッ、浮藻様だ！ 山伏は範覚！)

「待て範覚！」

と大音に叫び、豹のように躍りかかった。

「誰だ!!」

と浮藻を小脇に抱えた、金地院範覚は振り返ったが、

「や、わりやア右衛門か！」

「おのれ汝が汝が浮藻様を！」

「授かったのだ！ 貰って行く！」

「黙れ！」

鉞を振り込んだ。

「どっこい！」

ひつ外して範覚は、十数間ひた走り、

「右衛門、おさらば、いづれ逢おう！」

「待て！」

ビューツと鉞を投げた。

金剛杖を片手で振り、その鉞を匆ね飛ばし、

「うんにや、俺は待たねえことにした！」

浮藻を抱えたまま範覚は、矢のように走って姿を消し、

「待て、待ってくれ、おとおお範覚！」

と右衛門は喚きながらその後を追った。

それから数日の日が経った雨もよいの寂しい夕暮れであったが、桂子の館の前庭で、幽
霊女ととりむすめ鶏娘とが、鶏頭の葉をむしりながら、しよんぼりとして話していた。

「ああとうとうこのお館も無住の古御所ふるごしよになってしまふのね」

「そう、わたしたちが行ってしまえばねえ」

「小次郎様はどうなされたことやら？」

「あの晩まるで狂^{きちがい}人のように、魔の高殿から駈け下りられ、『戦場へ！ 戦場へ！』ここで働いて討ち死にする』と叫び、館から馳け出して行かれたがねえ……」

「それよりその後から桂子様が、顔にお袖をおあてになり、別人のような様子になられ、やはりお館から出て行かれたが、そのお姿が眼に残っていてならぬ」

「あの時わたしは桂子様へ『飛天夜叉の桂子様、どこへおいででございますか？』って、恐る恐るお訊ねしたところ、『わしはもう飛天夜叉ではなくなったのだよ、ただの女になつてしまったのだよ。……昔の飛天夜叉に立ち返るまでは、お前たちには逢いますまい』と、泣きながら仰せになられたつけ」

「浮藻様は行衛不明、右衛門殿も行衛不明……ご家来衆は寄りつかず……」

この時館の玄関から、影法師のようなものが現われて、二人の女の方へ近寄つて来た。旅装した風見の袈裟太郎であつた。

「袈裟太郎様お出かけか」

「この早い足で日本国中を巡り、桂子様や浮藻様の行衛を、わしはお探するつもりさ」

「さようなら袈裟太郎様」

「さようならお前たち」

袈裟太郎が悄然と立ち去った後、二人の女も館から去った。

雨が蕭々しやうしやうと降つて来た。

廃園の中に廃屋が、悪霊殿を持ちながら、滅亡の相をなして立っている。

吉野の城戦

明くれば元弘三年であつた。

その二月の下旬において、二階堂出羽入道どううん蘊は、六万余騎の勢を率い、大塔宮の籠らせたまえる吉野の城へ押し寄せた。

要害堅固の城だったので、容易に落ちそうにも見えなかつた。

しかし以前から武家方であり、そのため大塔宮のご意見によつて、権勢を剥はがれた吉野の執行しぎよう、岩菊丸が逆怨みをし、寄せ手の勢に内通し、裏山づたいに寄せ手の勢の一部を、城の搦からめ手へ案内し、火を放つて攻撃したので、宮方は守りを失つてしまった。

それは閏二月うるふの一日であつたが、この日宮家には蔵王堂ざうやうの御座ぎよざに、赤地の錦の鎧直よろいひた

垂たれに、巳みの剋こくばかりの緋ひ緘おどしの鎧よろい——あさひの御おん鎧よろいをお召ましになり、竜たつがしら頭あたまの御おん兜かぶとをかぶりたかれ、三尺五寸の小こ薙なぎ刀なたを持もたれ、二十余人の家臣けしんと共に、合戦あつせんのお指さし図ずあそばされおられたが、勝手かちての明神あきみの前まへあたりより、敵大勢かたあつせこみ入いつたるをご覧らんじ、

「今は遁にがれぬところなるぞ。ひとまず逆賊さかを追おい散ちらし、心こころしずかに腹切はられや！」

と、ご自身みづかみ真まつ先さきに乘のり出でしたまえば、家臣けしんの面々おももも一団いっだんとなり、寄せ手よせての真まん中ちゆうへ突つき入いつた。

東西とうせいに払はい南北なんぼくに追おい廻ました。

寄せ手よせては大勢おほせではあつたけれど、二十余人にじゅうよににんに駈かけ散ちらされ、四方しやうほうの谷やへ退ひいた。

「いざこの隙ひまに」

と大塔宮おほたかみやは、蔵王堂くらわうだうのお庭にわへ引ひき返かへし、大幔幕おほまんとくをひき絞しぼらせ、最後さいごのご酒宴しゆえんを催もたせられた。

御おん鎧よろいに立たつところの矢七筋やしちしん、御頬おんほにも二ふたの御腕おんうでにも、お傷おきを受けられて血ち流ながれ出でて、全身ぜんしんを紅くれないにお染ぞめになりながら、敷しき皮かわの上うへにお立たちになり、大盃おほさきを三度さんどまで、さも快たよく傾かたむけさせられれば、木寺相模きでらさうもは敵かたの首級くびを、四尺三寸しやくさんすんの太刀先たちさきに貫つき、お前まへに出て舞まい出でした。

戈鋌かせんけんげき劍戟を降らすこと電光のごとくなり。

盤石岩を飛ばすこと春の雨に相同じ。

この間も大手搦め手での、鬨の声矢叫びは凄まじかった。

「こは何事！　ご酒宴の声とは!?!」

村上彦四郎義光よしてゐるは、大手の勢に加わって、悪戦苦闘をつづけていたが、敵搦め手から

寄せたと聞き、宮家の御事おんこと心もとなく、蔵王堂まで引き返して来た。

と、大庭の中ほどから、謡う声囃す声が、むしろ朗かに聞こえて来た。

(さては?)

と心を感じられた。

(最後のご酒宴と覚ゆるぞ!　……一大事!　……御命おんいのちに代わって!)

幔幕をくぐって駈け込んだ。

「おお彦四郎!　生前に逢えたか!」

「宮!」

と鎧に立つところの矢、十六筋を立てたまま、全身蘇芳すおうの色に染まった彦四郎義光は、

がばと坐り、

「最後のご酒宴と見まいらせましたが、こは余りにもご性急、かつは軽々しゆう存ぜられます。並々のご身分にあらせられることか、宮方一統の運命を、双肩に担になわせらるる重責おんみの御身、尚、この儀は申すまでもなく、金枝玉葉の尊貴のご身分、他將軍とは異りまする！ ……敵の勢いまだ四方へ廻らず、高野口は自由にござりますれば、なにとぞそこよりお落ちあそばしませ！ ただし御跡おんあとに残りとどまつて戦う兵なくば、敵審いぶかしみ、御後追おんあといかけ申すべし。恐れあることには候そうちえども、召おんよろいさせたもう御鎧直垂ひたたれと、御物の具とをたまわつて、御諱おんいみなの字お冒かさせくたさるべし、御命に代わり申すべし！」

死なばもろともと仰せになり、ご承引あそばされぬ大塔宮様を血涙をもつて、苦諫くかんしもらせ、手ずから宮家の物の具を解き、自身にそれを引き纏まとい、無二の宮方であるところの、吉水院真遍に道案内をさせ、高野山を目ざして宮家を落とし、一息ついた彦四郎義光よしては、二の木戸の高楼たかやぐらへ上ろうとした。と、

「父上！」

と背後から呼んで、無数に矢を立てた若武者が、あえぎあえぎ走つて来た。

義光の一子義隆であつた。

「おお父上、その姿は!!」

「よろこべ義隆、人臣の誉れ! 大塔宮様御身代わりとなつて、本日只今討ち死にいたすわ!!」

「御討ち死に!! 宮様に代わり!!」

と義隆はグタグタと膝をついたが、

「この義隆もしからば御供!!」

「ならぬ!!」

と義光は大音に叫んだ。

「宮様高野へお落ちあそばされたわ! ……遮る逆賊あろうもしれぬ! ……汝参つて防ぎ矢仕れ! ……それこそ忠! ……それこそ孝! 今はこれまで! ……生なまの別れ!」

「父上!!」

と継る義隆の前には、閉ざされた櫓口の扉ばかりがあつて、内側から義光のかけたらしい、悶うんぬきの音が聞こえて来た。

櫓に上つた村上義光は、はざまの板切つて落とし、雲霞うんかのごとく寄せて来ている、寄せ

手の眼前へ全身をあらわし、大音声に呼ばわった。

「天照大神の御子孫、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇第一の皇子、一品兵部卿親王護良、逆臣のため亡ぼされ、怨みを泉下に報ぜんために、只今自害するありさま見置きて、汝らが武運忽ちに尽き、腹を切らんとする時の手本にせよ！」
 呼び終わると物具を脱ぎ、敵勢の中へ投げ下ろし、腹一文字に掻き切った。

この日も黄昏になった頃、宮方の落人を搦め取れと、武家方の兵ども、高野への山路を、騎馬徒歩にて走らせていた。

と、林から唸りをなして、矢つぎつぎに射出され、見る見る数騎射落とされた。

一旦討手は退いたが、

「敵は小勢ぞ、一人か二人じゃ、探し出して討って取れ！」

と、林の奥へ馳け込んだ。

と、木蔭から徒歩の若武者が、太刀を振ってあらわれ出たが、真つ先に進んだ敵の一騎の、馬の諸足難いで仆し、落ちるところを討って取り、つづいて十数人を討ちとった。

義光の子息義隆であった。

しかし終日の戦いに、全身十数箇所の傷を受けていた。

(宮様遠く落ちられたであろう。殺生ももうこれまで)

こう思つて林の奥を目ざし、敵と別れて走り込み、馬酔木の大藪を背後にし、ドツカと草に坐つたが、鎧通しを引き抜くと、左の脇腹へ突き立てた。

おりからはしつて来る足音がし、一人の武士があらわれた。

「敵か味方が存ぜねど、われは村上蔵人義隆、敵ならば首級とつて功名にせよ！ 味方ならば介錯たのむ！」

すると走つて来た武士は叫んだ。

「わたくし事は土岐小次郎と申し、土岐十郎頼兼の一族、宮方の者にござりまする。雑兵に姿やつしまして、今日の戦いにも出でましてござるが、死に場所を得ず死に遅れてござる！ ……村上義隆殿にござりますれば、義光殿のご子息の筈、お父上のお見事なるご最期は敵軍の中にまぎれ入り、この眼にてさつき方見申してござる！ ……忠義の亀鑑、武士の手本、感佩いたしましてござりまする！ ……ご子息の貴所様におかれまして、敵の将卒多く討ちとり、ここにてご生害と見申した。 ……不覚者ながら、お望みにまかせ、わたくしご介錯仕りましょう」

土岐小次郎はそう云つて、腰の太刀をしずかに抜いた。

「正中の変に宮方に属し、忠誠の武名あげられましたところの、土岐頼兼殿のご一族とな！ あら嬉しや由緒ある武士に、介錯されて父の後追えるわ！」

義隆は残のこんの夕陽ゆうひの中で、顔をほころばせて笑つたが、

「お頼み申す！ いざ！」

と云うや、鎧通しで腹を引いた。

「……………」

閃めかした小次郎の太刀と共に、若武者の首は地に落ちた。

藪の裾を深く掘つて、その首級くびを埋くずめた小次郎は、立ち去りもせず尚しばらく、愁然として佇たんでいた。

過ぐる夜桂子の高殿で、ほとんど無我の境の中で、桂子と契つた小次郎であつた。

契つた後の後悔ざんき慙き！ 肉親相愛に似たものがあつて、いたたまれないような気持ちがした。

そこで桂子の館を出た。

(穢きたない浮世、醜ひとのよい人生！ ……生き甲斐のないこの身ではある！)

衷心ちゆうしんからそう思われた。

(戦場へ出て討ち死になとしよう)

そこで吉野の宮方に加わり、今日まで働いて来たのであった。

身分まのを宣つて出でたならば、一方の将にも取り立てられたであろうが、出世に望みのない

彼であった。一雑兵として終始して来た。

しかもとうとう死におくれたのである。

(さてこれからどうしたものか?)

大藪の裾に佇んで、もう夕陽が消えたので、藪に搦まっている蔓草つるくさの花が、宵闇よいやみに

ことさら白く見える、そういう寂しい風物の中に、悄然といつまでも動かずにいた。

その時人の気配がし、藪の横手から声がかかった。

「卒爾ながらお訊ねいたします。大塔宮様御行衛おんゆくえ、ご存知なればお知らせくださいませ」

せ

小次郎はギクツとしてそつちを見た。

片腕が肘から切られてい、片足が膝から切られているので、左の脇の下に撞木杖しゅもくづえを挟

み、満足の右の手に竹の杖を持った、盲目の乞食こじきが藪の横に、乱れた髪を顔にかけ、妖ものの

怪けのように立っていた。

小次郎は思わず二、三步さがり、

「誰じゃ?! ……さては、武家方の……」

「大塔宮様にお目にかかり、許すとお言葉承まわりたさに、この年月諸所方々を、お後慕うておりますもの……」

「……………」

「今日の合戦に大塔宮様、ご生害とお噂なれど、何んの何んのそのようなこと! ……このわたくしの一念でなりと、何んの何んのそのようなこと!」

(何者だろう?)

と小次郎は、その乞食をつくづく見た。

それが自分のまた従兄いとこにあたる、土岐藏人頼春であるとは、夢にも小次郎には思われなかつた。あまりに変わり果てているからである。その乞食の——その頼春の左の腕は、比叡の裏山で、小次郎その人が斬り落としたのであつたが、それも小次郎には思い及ばなかつた。でも小次郎にはその乞食が、何がなしにしみじみと同情された。

(何か由緒のある乞食らしい。どっちみち武家方の者ではない)

こう思ったので小次郎は云った。

「乞食よ、安心せ、大塔宮様は、村上義光殿お身代わりになり、御自身おんみずからにはこの道より、高野へお落ち遊ばされたわ。……そちの足もとに死骸むくろとなって、横仆よこたわっている若武者こそ、義光殿のご子息義隆殿じゃ！」

「宮家高野へ!! 宮家高野へ!!」

土岐頼春は呻くように云った。

「ではわしは高野へお後を追い、また辿らねばならぬのか！」

この時小次郎は乞食を見捨て、藪を巡って歩き出していた。

(桂子殿はどうなされたか? 浮藻殿はどうなされたか?)

ふとこのことが思われた。

吉野の軍に加わって、日夜働いている間にも、やはりこのことが気にかかったので、それとなく小次郎は様子を探った。

あの同じ夜に館を出て、桂子は行衛不明となり、浮藻も行衛不明となり、右衛門も行衛不明となり、その後数日経った時、幽霊女もとりむすめ鶏とり娘むすめも、風見の袈裟太郎も館を去り、京都二条のあの館は、無人の廃屋になったという。

(飛天夜叉組の没落か！)

心寂しく思われたが、今もそのことが思われるのであった。

(桂子殿はどうなされたか？ 浮藻殿はどうなされたか？)

小次郎は林をさまよって行った。

もう全くの夜となり、月のない夜は暗黒であった。

と、この時人声がし、甲冑の擦れ合う音を立て、大勢の馳せ来る足音がした。

おちゅうど
落人 探しの武士どもであった。

数十人林へ駆け込んで来た。

「や、ここに死骸があるわ！」

「腹切っているわ！」

「首がないわ！」

「物の具を剥げ！」

「太刀を取れ！」

義隆の死骸へ集まった。

「わッ」

と一人の武士が叫び、朱に染まってぶつ^{たお}仆れた。

その武士の太刀を奪い取り、その武士の首を刎ね落とした、盲目の不具^{かたわ}の乞食の姿が、武士たちの持つて来た松^{たいまつ}明に照らされ、幽鬼のように立っているのが見えた。

「こやつ！」

「何者！」

「斬れ！」

「討ちとれ！」

ムラムラと頼春をおっとり囲んだ。

「大塔宮様の無二の忠臣、義隆殿の死骸を剥ぐ奴、許さぬぞ、一人も許さぬ！」

二、三人バタバタと斬り仆された。

「宮方じゃな！」

「遁がすな漏らすな！」

大勢！ 乱刃！ 悲鳴！ 叫喚！

「もうよい、行け！」

武士たちは去った。

「死なぬぞ！ おのれ！ 何んで死のう！」

のたうち廻る頼春の体には、今までであった右の手と、右の足とがなくなっていた。

こんな際にも人里へ出て、食を求めて帰つて来たらしい、早瀬のうたう子守唄の声が、木立ちの間から聞こえて来た。

泣きそ、な泣きそ

和子よ和子よ

「大塔宮様の御目おんめにかかり、許すとのお言葉うけたまわるまでは、死なぬぞ死なぬぞ！
死なぬぞ死なぬぞ！」

首と胴ばかりになつた頼春は、なおのた打ち叫んでいた。

高燈籠の家

高野山に入らせられた大塔宮は、高野の衆徒、吉野の衆徒、熊野の衆徒、野武士、山伏、宮方にお味方の諸豪族に守護され厳しい関東軍の追捕の眼を眩まし、文字通り草莽そうもうに潜居ひそましまし、しかもご令旨を八方に飛ばし、宮方の武士を募らせられ、千早城に拠よつて関

東の大軍、三十万を相手にし、微動だもしない楠木正成と、よく連絡をお取りになり、全日本の諸将に帰趨するところを、御自身身をもつてお示しあそばされた。

これに感激しご令旨を戴き、勤王の諸将諸国に起こつた。

新田義貞は上野こうずけに、赤松則村のりむらは播磨はりまの国に、結城宗広ゆうぎは陸奥むつの国に、土居、得能とくのうは四国の地に、名和長年は伯耆ほうぎの国に、菊池武時は九州の地に、そうして足利高氏さえ、鎌倉幕府を見限つて宮方にひそかに心を寄せた。

その高氏が京都へ入り、両六波羅を討伐し、この年の五月七日をもつて、全く両六波羅を亡ぼしおえ、新田義貞が鎌倉に討ち入り、同じ月の二十一日に、北条一族を亡ぼして、頼朝以来の武家政治を、百五十余年にして消滅させ、政権を朝廷に帰すことを得た。

主上伯耆より京師にご還幸、明る年正月二十九日、建武と改元あらせられた。
建武の中興成就したのである。

大塔宮護良親王におかせられては、征夷大將軍に拝され給うた。

が、これらも一時であつて、主上の御諱おんいみなを一字賜たまわり、尊氏と改名した足利高氏が、
そういう、恩寵にあまりに狎なれ、北条氏に代わつて己自身、政権をとろうものと策動した。
ご聡明達識の大塔宮には、尊氏の野望を観破あそばされ、未前に剪除せんじょあそばされよう

となされた。

が、誠に不運にも、事御志おんと違ちがいたまい、足利の手に宮家には、お渡りあそばさるる御身おんみの上となられ、遙々鎌倉へ移うつらせられ、苛察かきつ冷酷の典型的悪将、尊氏の舍弟直義ただよしの手にて、二階堂ヶ谷やつ東光寺内の、窟いわやに幽居いあらせられた。

十一月十五日のことである。

その年も暮れ翌年となり、建武二年七月となった。

ある日吉野の山路を、二人の旅人が通っていた。

金地院範覚と浮藻とであった。

「ずいぶん暑いじゃアございませんか」

金剛杖をだるそうに突き、笈おひを重そうに揺りながら、優しい声で範覚は云った。

「そうねえずいぶん暑いねえ。でももう旅には慣れてるから、わたしは苦しいとは思いませんわ」

六部姿にやつしている浮藻は、こう云って笠を傾むけて、笑ましげに範覚の顔を眺め、
「範覚さん疲労つかれたの？」

「アツハハハ、どういたしまして、この範覚という人間は、つかれを知らない人間でして

な、まして旅などにはつかれませぬよ」

「わたしも疲労れを知らない女よ」

「ずいぶんお健たっしや康でございますなあ。はじめはそうとも思いませんでしたが——はじめはナ——こ、こんな娘つ子、体も心もすぐに疲労れて、クタクタになるものと思つていたのでしたが、どういたしまして反対で、お精神こころもお肉体からだも健康なものです。範覚ことごとく参つてしまいましたよ」

「わたしはそれとは反対でしたわ、はじめはわたし範覚さんて人、精神も肉体もとても強く、悪人だと思つたのですが、つきあつて見るとそうではなくて、善良で弱くて親切な人ね」

「へい」

と範覚はひどくテレた。

「案外そうでもないんですが、心も姿もあんまり綺麗で、一点の陰影かげも濁りもない、そういう人間に——それも女に——そうです女に限るんで、特に私には限るんですが——そういう女にぶつかりますと、ついこつちだつて反省してしまって——反省すると損なんですがねえ。——宝の山に入りながら、ついどうにも手を空しくしてしまう——というやつ反

省から来るんですからねえ。……しかしやっぱり反省してしまって、親切になつたり弱くなつたり、阿呆になつたりするんですよ」

あの夜京都の二条の外れの、桂子の館の築地の外で、氣絶していた浮藻を奪つて、金地院範覚は最初のほどは、もちろん浮藻を自分のものとし、情慾の犠牲にする意であつた。

ところが余りにも浮藻の精神が、その容貌や姿と同じに、清淨きよらかであり無邪気だったので、あべこべに感化されてしまった。それはこれまでつきあつて来た、鬼火の姥という例の悪婆が、醜悪そのもののような女だったので、その反動からでもあるのであつたが、それで範覚は、浮藻の体を、情慾の犠牲にするどころか、その浮藻が命にかけて、ひたむきに恋している土岐小次郎を、どうがなして早く探し出し、小次郎の手へ渡してやろうと、浮藻と二人連れ立つて、小次郎を探し廻つていたのであつた。

桂子の館へも行って見たが、無人の廃屋になつていた。

その後小次郎が一雑兵として、吉野の官軍に従つて、働いていたということを目にした。
(今でも吉野辺にいるかも知れない)

こう思つてこの地へ来たのであつた。

日がだんだん暮れて来た。

いつか道に迷ったらしく、どうにも人里へ出られなかった。

「こいつは変だ」

と範覚は云った。

「浮藻様道に迷いましたよ」

でも浮藻は平然としていた。

「では野宿しましょうよ」

「野宿？　へえ、恐かありませんか」

「範覚さんとご一緒ならねえ」

「へい」

涙がこぼれそうであった。

(俺^{おい}らをこんな信じているのだ！)

可愛い妹のように思われるのであった。

(女にも色々あるものだなあ。姥と浮藻殿との相違はどうだ！)

大して悪人でない範覚は、感激しないではいられなかった。

もうすっかり夜になり、山と谷と曠野と森と、谷川との世界が黒^{こく}一色に、漆^{うるし}のように塗

りつぶされた。

と、行く手の空に高く、燈の光が橙黄色だいだいいろに見えた。

「おや、あんなところに燈とも火しびが……」

「変ですねえ……行つて見ましょう」

そこで二人は辿つて行つた。

谷川の岸の竹藪の前に、荒れ古びてはいたけれど、かなり大きな家があり、その前庭の一所に、高燈籠がつくられてあり、そこから燈の光が射している。

「高燈籠を点けているからには、道に迷つた旅の者などに、宿を奉謝する家なのですよ」
 範覚は喜んでこう云つた。

「道に迷うようなこういう山路には、こういう宿があるものと見える」

「早速お宿を願ひましょうよ」

浮藻もさすがに嬉しそうに云い、

「世間つて親切なものですわねえ」

「へい、親切でございますとも」

二人はその家の門かどの戸をあけた。

「ごめんください」

と声かけた。

誰も返辞をしなかった。

暗い土間から見えるものは、古びた板戸としみのある古襖と、鼠の走っている破損こわれた床と、それらをぼんやり照らしている、今にも消えそうな紙し燭しょくとであった。

「うすつ気味の悪い家ですねえ。……といつて夜道を行きもならない。……燈火がともっているからには、住人すみびとがあるには相違ない。……どこかへ用にも行つたのでしょうか。……叱られたら詫びるとして、ともかくも上がつておりましようよ」

こう云つて範覚が上がつたので、浮藻も従ついて上がつて行つた。

燈とも火しびの側へ坐り込み、家内の様子をうかがつたが、蛇が鼠でも追っているらしく、天井裏でたたたましい音が、ひとしきり聞こえて来たばかりで、ほかに物音はしなかった。しかしその時庭の方から、物を磨とぐ音が聞こえて来た。

「気味が悪いや」

と範覚が云つた。

「ありやア刃物を磨ぐ音だ」

「範覚さん」

と浮藻は顫え、

「出かけましょうよ。行きましょうよ」

「ナーニ」

と範覚は立ち上がった。

「それより行つて確かめてやろう」

範覚は庭へ下りた。

一人となつた浮藻の耳へ、刃物を磨ぐ音が聞こえなくなった。

(まあよかつた)

と浮藻は思つて、安心の溜息を一つついた。

が、しかしすぐに刃物を磨ぐ音が、裏の方から聞こえて来、そっちへ走つて行く足音が聞こえた。

(範覚さんが追つて行つたんだよ)

浮藻はそう思つて耳を澄ました。

刃物を磨ぐ音はすぐに止んだが、竹藪のある方角から、やがてまた不気味に聞こえて来、

そつちへ走つて行く範覚の、いらいらした足音も聞こえて来た。

(どうなることか!!)

と思ひながら、浮藻はガチガチ歯を鳴らしながら、なお聞き耳を立てていた。

と、不意に悲鳴が聞こえ、つづいて嘎れた笑ひ声が聞こえ、ザワザワと藪の鳴る音がし、その後はひっそりと静かになった。

(あの悲鳴は？ 範覚さんでは?)

フラフラと浮藻は立ち上がった。

とたんに眼の前の古襖が、風と塵埃を立てて仆れた。

「あつ」

と思わず声を上げ、浮藻はその方へ眼をやった。

仆れた襖の奥の部屋に、三個の女の死骸があつて、その一個が断末魔の足で、襖を蹴つたに相違なく、その足が痙攣を起こしながら、だんだんに延びて行くのが見えた。

浮藻はよろめいて部屋の隅へ行き、そこに立ててある衝立に縋つた。

と、煤けて木目さえ見えない、その古い衝立が仆れ、その背後に若い男が、骨と皮ばかりに痩せ衰え、死の前の昏睡にはいつているのが見えた。

浮藻はベツタリと床へ坐り、這いながら庭へ下りようとした。

と、庭から跣足はだしで歩く、足の音が聞こえて来た。

足音は土間へはいって来た。

白髪しろがをパツと顔へかけ、よごれた白い行衣を着、手に磨ぎ澄ました出刃でばを持った老婆が、

上りかまち框から半身をのぞかせ、口を開けて笑いかけた。

それは鬼火の姥であった。

「浮藻殿オ——ッ」

と姥は云い、ノシノシと部屋へはいって来た。

「ようわせられた、わせられたのう」

たくし上げた裾から洩れて見えるのは、垢じみ穢よごれ瘦せながら、筋逞しく現われている、

男のような足であった。

その足で姥はノシノシと近寄り、捲くり上げたこれも筋だらけの、陽やけして赭黒い手
によつて持たれた、出刃庖丁を振りかざし、

「高燈籠の燈で釣つて、道に迷つた旅の者を、この一つ家へおびき寄せ、女は他愛なく料
つて殺し、男は生かして衰えるまで、わしの精力ちからの犠牲にえにしていたが、汝うぬら二人も同じ燈

に釣られ、わせられたそうな、ようわせられた！ ……竹藪にかけてある罨わなにかけて、金地院範覚は生け捕った！ 汝を料理した血だらけの手で、今夜から範覚は以前むかしどおり、わしがねんごろに介抱してやる！ どんな男もきやつには及ばぬ！ きやつがわしから飛んで行つて以来、わしは神通力ちからを失つてのう。……が、有難や戻つて来た！ ……明日からはまた昔通りの鬼火の姥殿になれるのじゃ！ ……憎うぬいは汝！ 汝浮藻！」

又ツと片手を差し出した。

「ヒ——ツ」

と浮藻は悲鳴を上げ、遁がれようとしたが及ばなかった。

姥の手に髪を掴まれた。

「どうだア——ツ」

「ヒ——ツ」

仆れた浮藻の、背の上に姥は片膝を載せ、

「ずいぶん丁寧ていねいに料つてやろう！ ……姥が想いをかけていた、小次郎という若侍と、汝うぬは乳くり合っているそうじゃの！ この怨うらみが一つある！ わしの情夫おとこの範覚を、よくも汝おのれは横取つたの！ この怨うらみが一つある！ ……一つの怨うらみには左の乳房を、もう一つの

怨みには右の乳房を、ずいぶん丁寧にくり抜いてやる！ ……まずこうだア——ッ」

と腕に捲いた髪を、グーッと姥は釣り上げた。

連れて釣り上がった浮藻の半身の、乳の下を目がけて出刃でばでガバと！

しかしその時戸外そとの方から、鶏とりの鳴き声が聞こえて来た。

「や？」

と姥は躊躇ちゆうちよした。

「まだ夜の明ける筈はないが？」

その瞬間に唸りをなして、白光る物が投げ込まれた。

「わ、わ、わ、わ、わーッ」

斗とのような血！

「助けて——ッ」

と悲鳴し姥の手から遁がれ、土間へ駆け下りた浮藻の体を、強く抱きしめた腕があった。

「浮藻殿オ——ッ」

「コ、小次郎様ア——ッ」

浮藻を抱いて立っている、小次郎の背後うしろにいる者は、鉞まさかりを投げて姥の体を、胴から二つ

に切り割つた右衛門と、幽霊女ととりむすめ 鶏娘と、そうしてそれらの人々を、速い足で探しあて、失つた通力ちからを取戻そうとして、吉野大峰のどこにか、難行苦行をしていると、噂に聞いた桂子のもとへ、連れて行こうと旅をして来、道々浮藻をも探し求め、ここへ来て道に踏み迷い、高燈籠の燈につられ、入り込んで来た風見かざみの袈裟けさたろう太郎——それらの人々が立つていた。

尊い犠牲

畏から助けた範覚をして、——あやごんのかみ 漢権守あやごんのかみ そのものでもあり、鬼火の姥でもある姥の死骸をていねい 丁寧に埋葬させた後、小次郎や浮藻の一行は、姥の墓と範覚とに別れを告げ、桂子のいるという大峰の方へ、その翌日旅立つて行つた。

同じ月の二十二日、相州鎌倉は大騒動であつた。

滅ぼされた北条高時の遺子、北条次郎時行が、諏訪頼重父子に奉ぜられ、信濃において兵をあげ、鎌倉へ攻めのぼつて来たからである。

あしかがただよし
足利直義は狼狽し、女影原めかげがはらや小手指原こてさしがはらなどで、時行の兵と戦ったが、戦い利あらず敗北し、鎌倉の地にとどまることさえ出来ず、西をさして落ちることになった。

二十三日の深い夜、山内村やまのうちむらまで落ちて来た。

と、直義は馬を止め、傍そばを駈けていた家臣の一人、淵部伊賀守義博ふちべを呼んだ。

「義博」

と直義は声を忍ばせ、

「われらが宿願成就にあたり、最大の障害を与うるもの、前征夷大將軍大塔宮様じゃ。…時行などの手にお渡りあつては、後難計るべからざるものがある。…まことにおいたわしい限りではあるが……」

「……………」

義博は無言で唾を呑んだ。

「そち二階堂ヶ谷に引つ返し……」

「……………」

「宮家の御首級みしるし……」

「それは余りに」

「行け！ 主命じゃ！ 躊躇は許さぬ！」

「……………」

やがて軍からひき離れ、郎党六騎をひきつれて、二階堂ヶ谷へ引つ返して行く、淵部義博の甲冑姿が、星月夜の下に認められた。

幽かにともされた燈火の下に、この夜宮家には経机に倚られ、お経をはずかに読誦ましまし、寂然と端坐おわされた。

御髪延びて肩にかかり、御口髭も御頤髯も、まばらに生えた御顔は、二百日に余るご幽居によつて、蒼白の御色に眺められた。

藤原保藤卿の御女、南の方お一人だけが御傍らに侍っていた。

お世話申し上げているのである。

朝権恢復、建武の中興、それは完全にご遂行あそばされた。

宮方の柱石は申すも愚か、日本全体の柱石として、最近まで宮家はおわしたのである。しかるに尊氏、直義、二個の奸臣の憎むべき陰謀によつて、土牢の中へご幽閉という、凄惨たる境遇にお落ちあそばされた。

その御思おんいは？

宮家の御心は？

説明するにも及ぶまい。

土牢の中は湿気に充ち、御呼吸さえお苦しそうであった。

暁のほのかな薄明りが、紫陽花色あじさいいろに格子づくりの、出入り口のあなたに隙けて見えたが、読経に余念のない宮家には、まだお気づきにならないようであった。

と、その格子戸が外から開いて、甲冑武者が一人はいつて来た。

宮家は屹きつとご覧になられた。

直義の家臣、逆臣の走狗、淵部伊賀守義博であった。

宮家は一切をお悟りになられた。

「この身失わんのお使いであろうな！ 心得たり！」

と仰せになり、宮家はスツクとお立ちになられた。

が、いかんせん長い日日の、土牢ご幽居の御体は、勇猛の御力を消耗しおられた。

宮家の御首級みしるしを両手に捧げ、淵部義博が土牢から出た時、まだ暁は紫陽花色であった。

木立ち、藪、石燈籠、それらのものも朦朧もうろうとしていた。

藪の裾まで来た時である。義博は御首級みしるしを空にかかげ、その御面おんおもてを凝視した。

口を結び、眼まなこを見開き、逆賊の行為を怒られるがように、義博の顔をひたと見詰め、御首級みしるしは生き身さながらであり、今にも叱咤おんの御声ごこゑが、迸りほとばし出るかに拝された。

義博は顫え上がった。

恐怖は慚愧ざんきと罰ばちへの不安とで、彼は身の縮む思いがした。

眼を閉じ佇み思索したが、やがて藪の裾へかがみこむと、御首級みしるしをそつと草の上に安置し、後も振り返らず走り去った。

で、その後はひっそりとなり、梢から露の藪へ落ちる音が、あるかなしかに聞こえるばかりであった。

その時人の足音が聞こえ、走って来る女の姿が見えた。木立ちをくぐり藪の裾を巡り、宮家の御首級みしるしの御前おんまえまで来た。

「あ」

と、微かすかに声を上げ、女はその御前にひざまずき、両の袖で御首級を捧げ持った。土牢から駈け出して来た南の方であった。

嗚咽おえつの聲が糸のように、長く細く洩れて続いた。

土牢の中で行なわれた大逆の光景が、南の方の脳裡に、この時一瞬間ひらめいた。

義博の太刀を奪おうと、奮然と宮家にはおかかり遊ばされたが！ ……土牢ご幽居でお力の脱けた御体！ 義博の太刀先を御前おんまえ歯をもつて、グツとお噛み止め遊ばされたが！

……そのため太刀先が折れて砕けたが！ ……差し添えを抜いた逆賊の走狗の、その差し添えで御胸おんむなもと元を二太刀！ ……

「御傷おんいたわしや！ 皇子みこ様の御身おんみが！ ……前征夷大將軍、兵部卿様の宮様が！」
ひしと、御首みしるし級を胸に抱いた。

この時、地を踏む木履ほくりの音と、咳しわぶきの音とを立てながら、一人の老僧が近寄って来た。

「おお……これは……南の方様！」

驚いたように老僧は云った。

「御座所ござしよより……何しに……このようなどころへ！」

それは長老理智光院であった。

南の方は立ち上がり、胸に袖をもつて蔽うていた、御首みしるし級を無言で差しつけた。

理智光院は最初は解らないかのように、審いぶかしそうに眺めたが、急に地上へひざまずいた。

一切を認め識つたのである。

「ハ——ツ」

と深い溜息をもらした。

「勿体なや……何者が」

「左馬頭の家臣澗部義博が」

「墮地獄の輩！ やがて天罰が！」

「長老様！ ……ご供養を！」

「……………」

長老は力なげに立ち上がり、宮家の御首級を衣の袖で受けた。

二人は静かに藪を巡り、本堂の方へ歩み出した。

と、キリキリと小車輪おぐるまの軋る、錐を揉むような幽かな音が、木立ちの間から聞こえて来、紫陽花色あじさいいろの暁の微光の中へ、片手に五歳いつつばかりの女の童この手をひき、片手に不具車かたわぐるまの手た綱づなをひいた、女乞食の姿があらわれた。

顔しろぬのに白布をかけている。

不具車の中うちにいるものは、両手と両足とを切断たちきられ、首と胴ばかりになった男であった。

土岐藏人頼春であった。

その顔もその胴も、骨と皮ばかりに痩せていた。

盲目の眼を前方に向け、歯のない口をポツカリと開け、破損やぶれた笙しょうのような嗄れた声で、
「大塔宮様ご幽居あそばさるる窟いわやまでご案内くださりませ」

と云った。

理智光院も南の方も足を止め、妖怪さながらの不具かたわの乞食を、驚きの眼をもつて凝視した。

「神くの界にに属くしまつる御一方おん——大塔宮様にお眼にかゝり、許すとの御言葉承みことばまわりたさに、御後みあとを慕あうて諸国をさまよい、この地にご幽閉と承まわり参りましたものにござりま
する」

そう頼春は云いつづけた。

「誰じゃ？」

ようやく理智光院は云った。

「姓名は？ 身分は？」

「昔は由緒ありましたもの、今は非人にござります。……裏切り者にござります」

「裏切り者？ 裏切り者というか？」

「※悔の罪人のござりまする！ 浄罪の巡礼にござりまする」

「……………」

「殺人の鬼にござりまする」

「……………」

「裏切りをし、※悔をし、浄罪の旅に出でながら、人を殺し、自身おのれも斬られ、後悔し、※悔をし、しかもその後も人を殺し、月日を経ましたものにござりまする」

「……………」

「大塔宮様にお目にかかり、許すとの御言葉承みことばまわり、真人間となる願望だけを唯一の目標といたしまして、いまに生存ながらえおりまする生ける死骸にござりまする」

「……………」

理智光院は眼を返し、南の方を見やつたが、その眼を返すと頼春を見、

「深い理由のある身の上と察し、あからさまに事情知らせて進ぜる。……大塔宮様におかせられては、逆臣左馬頭直義の家来、澗部義博の毒刃にかかられ、勿体なくも只今ご最期……………ここに捧げたはその御首級みしるし！」

「……………」

頼春はしかししばらくの間は、そう云われた意味が解らないらしく、少しずつ光を増して来た、暁の色と光との中に、髑髏どくろのような顔を曝さらし、見えぬ眼を声の方へ向けたままで、じつと沈黙をつづけていた。

「ナ、何？」

とやがて云った。

「大塔宮様ご薨去こうきよとな　　大塔宮様ご昇天とな　　」

しかし気味悪くニタリと笑った。

「何を、ばかな、そのようなことが！　……土岐頼春の執念だけでも、宮家ご薨去などあられようや！」

「いいえ……………」

と顔の垂れ布きぬをかかげ、宮家の御首級みしるしを凝然と、見詰めていた早瀬が嗚咽しながら云った。

「宮様おかくれにござりまする！　……御首級が御首級が！」

「誠か！」

と頼春は洞然と云った。

「御首級が？ 宮家の御首級が？」

「坊様持たれましたござりまする！」

「ハ——ツ」

と頼春は五臓を絞った、苦しい重い息を吐いた。

「未来永劫土岐頼春、裏切り者の罪許されぬそうな！」

しかしその時、南の方が、歓喜の声で叫ぶように云った。

「お喜びなされ頼春殿とやら、宮様まさしくそなたの罪を、今こそお許しなされましたぞ
！ ……怒りの眼まなこを見ひらかれ、猛々しくおわした宮様の御顔おんかおが、ご覧なされ、御眼おんめを

閉じられ、一切の罪も悪業も、許すぞとばかりの慈悲円満の、ご相好になられました！」

「おおいかさまお言葉どおりじゃ」

と、宮家の御首級みしるしを胸に抱き、両手に捧げていた理智光院も云った。

「このご相好、さながら御神みかみじゃ！ ……いやさながら御仏みほとけじゃ！ ……罪障消滅、無

差別絶体！ 自他の罪ことごとく許された御顔おん……笑っていられます、微笑ほほえんでいられます！

す！」

まことこの時東の空が、薔薇色ばらの光を産み出したが、その光に照らされた、大塔宮様の御顔は、依然として生き身さながらであったが、見ひらかれておわした御眼は閉ざされ、食いしばつていられた御唇は、優しく穏やかにむすばれていた。

「早瀬！」

と喜びあふれた声が、頼春の口からほとばしった。

「裏切り者の極重罪惡、許されて頼春、真人間になったぞ！」

「あなた！」

と早瀬は顔を蔽うた布を、かなぐり捨てて頼春に縫った。

「それではあなた様には妾の罪をも！」

「許すぞ早瀬！ 許さで置こうか！」

「おおそれでは今日からは……」

「妻じゃ！ 良人じゃ！ 愛し合う夫婦じゃ！」

「救われました！ おおおお妾こそ！」

新しい夫婦を後に残し、理智光院と南の方は、本堂の方へ歩み去った。

「新しい生活が、我らに今日から！」

頼春の瞥いた両眼から、喜びの涙が降るようにこぼれた。

「太陽ひが出ました！」

と早瀬は叫んだ。

射し出た朝日に、木の葉や草や、石や藪につづついていた白露が、輝き出して宝玉のよう
に見え、小鳥が四方でさえずり出した。

「明るい！」

と頼春は歌うように云った。

「心も体も何も彼も明るい！ ……平和だ！ おおも何も彼も平和だ！ ……この平和が永
久消えない世界で！」

頼春は首を前へ垂れた。

全身が傾むいた。

何かへ感謝を捧げているようであった。

「あなた！」

と早瀬は助け起こした。

「……………」

頼春は死んでいた。

「……………」

早瀬はいつまでも見詰めていた。

でも泣きはしなかった。

「これこそ平和の消えない世界！ ……そう、それではこの妾も……………」

一旦立ち去った理智光院が、夫婦の非人の身の上を案じ、ふたたび藪蔭を訪れた時、体をもたせ合つて夫婦の非人が、息を引き取っているその傍らに、女の童が泣いているのが見られた。

草の中にまむし蝮が動かずにいた。

女仙

理智光院は涙をこぼしながら、その二つの屍骸へ云つた。

「有縁の人達と思うによつて、ここの墓地へ葬ほうむつてあげましょう。…………女の童はわたしが

育ててあげます」

こうして長老が女の童の手を引き、庫裡くりの方へ帰って行った後は、しばらく寂然と人氣がなかった。

しかしその時杉の梢から、白猩猩が飛び下りて来て、頼春の死骸から不具車の中へ落ちた、古び汚れた巻軸を搦んだ。

そうしてまたも梢へかけ上がり、枝から枝を伝わって、どこへともなく行ってしまった。それから幾日かの日が経った。

吉野大峰の大岩石層に、昼の陽がまぶしく当たっていて、少しへだたった岩の間から帯のように垂れている滝の周囲まわりへ、虹の輪を綺麗にかけていた。

数十枚の畳でも敷いたような、偏平な大岩の中央に、雪のような塊かたまりが二つあった。白衣をつけた桂子と、猩々卯ノ丸の姿であった。

「まあこれは連判状だね。わたしに必要があるかと思って、どこからかお前持って来たのね。志は有難うよ。そうねえ、これがもつと前にあったら、いくらか役にはたったろうが、北条氏が滅び幕府がつぶれ、政権が朝廷へお帰りになった今は、不用のものになってしま

つたのだよ」

こう卯ノ丸に云いながら、今日その卯ノ丸が不意にここへ来て、桂子へ捧げた連判状を膝の上で繰りひろげた。

「正中の頃に日野資朝卿が、山伏姿に身をやつされ、諸国を巡って豪族を説いて、宮方へ加担を懲憑し、連判状をつくつたと噂に聞いたが、その連判状がこれなんだね」

(でも)

と桂子はしみじみと思つた。

(宮方へご加担した人々のうち、誰が最後まで宮方として、忠義の誠心を尽くすやら?)
足利尊氏兄弟が、異心の鋒鋦をあらわしたことや、一般の武士たちが宮方に対し、何ん
となく不平を抱いている様子が、よく桂子には感じられたので、不安に思われてならない
のであつた。

(反覆常ない人の心! 栄枯盛衰する浮世の相! 人界つてももの厭だ厭だ!)
猩々卯ノ丸は谷の方を、ただ黙然と眺めていた。

「さて」

と呟いて桂子は立ち、卯ノ丸に向かって声をかけた。

「これまで時々あらわれて、わたしをどこかへ連れて行こうとしたねえ。今度こそお前の云うとおりになるよ。お前たちの世界で住むことにするよ。……何んてまアお山は清浄なんだらう！」

赫々とした夏の真昼陽に、樹々は濃い緑から汗を流し、草花は芳香を強く立て、溪流は軽快な笑声を上げ、兎や鹿は木の間に匆ね、一切万象は自由に大胆に、その生命を営んでいた。

でも数十丈もあるらしい、鉄壁のような大岩が、湾のように開けている巨谿の一部と、この岩石層とを遮って聳え、絶佳の眺望を遮っていた。

それに向かつて、桂子は立った。

（わたしは飛天夜叉に帰った筈だ！ 飛天夜叉の力を験してみよう！）

生き肌断ち、生食物断ち、塩断ち、火断ちして長い月日を、この大峰の大岩石層で、難行苦行した桂子であった。一旦失った超自然力が、復活して来ない筈はなかった。わけても今日は彼女の身心に、靈力と精力とが感じられた。桂子は大岩の前に立った。しかしその時大岩石層の下の、道のない断崖を六人の男女が、こなたを目ざして喘ぎ喘ぎ、蟻のように小さく登って来るのが見えた。

(まア)と桂子は眼を見張った。それが浮藻と小次郎と、袈裟太郎と右衛門と、幽霊女ととりむすめ鶏娘との——なつかしい一団であるからであつた。

そう、それはその人達であつた。桂子の居場所をさがし求め、いまようやくつきとめたのであつた。大岩石層の裾まで来た。しかしその上へは登れなかつた。数十丈高く聳えていて、まったく足場がないからである。

「お姉様！」 「桂子様！」 「お姫様」と口々に呼び、六人は岩上を仰ぎ見た。桂子の姿がこころこころ神々しく見え、猩々卯ノ丸の姿も見える。

と、桂子の喜びに充ちた、澄みきつた声が聞こえて来た。

「おおお前たちかえ、よく来てくれたねえ。でもいよいよお別れだよ。さて浮藻や小次郎や、昔のことは忘れておくれ。そうして今度こそ本当に、夫婦くわらになって生活しておくれ！

……お前たちどうぞ喜んでおくれ、また妾は飛天夜叉になつたのだから！」

奇蹟が続いて行なわれた。

六人の方へ背中を向け、谷に向かつて聳えている、大岩の方へ顔を向け、片手を桂子が振りあげたとたんに、全山を顛わせる大音響がして、大岩が谷底へ崩れ落ち、谷底から白雲が渦巻き上り、大岩石層と桂子と、猩々卯ノ丸とを蔽い隠したが、それが大岩石層から

徐々に離れ、葛城山かつらぎの方へ谷を越え、悠々と渡って行ったことである。

白雲の中から嬉々として叫ぶ、猩々卯ノ丸の声が聞こえ、歌うような桂子の声とが聞こえた。

「さようならお前達！ またわたしは飛天夜叉になったよ。……わたしは今是不死なのだよ。……山や川や草や木や、お月様やお星様や、お太陽様てんとうと同じなのだよ。……でもお前達とは逢えないでしょうよ。……別の世界に住むのだから。……何んてここは幸福なんだろう！ ……おお一切の羈絆きはんがない！」

白雲は谷を渡って行く。六人の者は茫然として、その行衛を見守った。

「お姉様は仙人におなりなされたのねえ」と、浮藻はそつと小次郎へ云った。

「そうです」と小次郎も云いながら、優しく浮藻の手を取った。「女仙人になったのです」

この時右衛門は大鉞を、谷底目がけて投げ下ろした。

「こういう得物を持っていることは、俺には必要なくなってしまった。お守りする人がなくなつたのだからなあ」

「俺もこの足に用がなくなつた」こう云つて袈裟太郎は早走りを自慢の、二本の足を両手で撫でた。

「でも」と鶏娘が咎めるように云った、「小次郎様と浮藻様とが、結婚してご夫婦におなりなされれば、わたしたちにとつてはやはりご主人、お守りしなければなりません」「ナーニ」と右衛門は安心したように、しかしいくらか寂しそうに、「若いお方達には若いお方たちの、若い世界や時代があるもので、またそれがよろしいので。老人の出る幕じやアございません」

「もう雲が消えてしまいます」と、幽霊女が叫ぶように云った。

桂子と卯ノ丸とを乗せた雲が、遙かの遙かの空の果てに、今は一点の白帆かのように、小さくなつて消えかかっていた。

合掌したいような心持ちで、六人の者はそれを見送った。

青空文庫情報

底本：「あさひの鎧（上）」国枝史郎伝奇文庫、講談社

1976（昭和51）年9月20日第1刷発行

「あさひの鎧（下）」国枝史郎伝奇文庫、講談社

1976（昭和51）年9月20日第1刷発行

初出：「時事新報」

1934（昭和9）年8月25日～1935（昭和10）年3月16日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「痴」と「癡」、「揺」と「搖」、「※」#「火十稻のつくり」、第4水準2-79-88]」
と「焰」、「遙」と「遙」、「稚子」と「稚児」、「淵部」と「渕部」の混在は、底本通りです。

入力：阿和泉拓

校正：酒井裕二

2018年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あさひの鎧

国枝史郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>